
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 破滅大戦 ~

Blue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜破滅大戦〜

【Nコード】

N5215R

【作者名】

Blue

【あらすじ】

この小説は損長さん、ライムズさん、天道さんから許可を頂き、お三方の小説「魔法少女リリカルなのは」を受け継がれる大空〜「魔法少女リリカルなのはStrikers〜the god of death〜」「仮面ライダーStrikers」の設定、展開、小ネタなどを参考に書いたものです。オリジナル設定等あるので、苦手な人はBackして下さい。
次元世界を滅ぼそうとする謎の組織「カタストロフ破滅」。彼らを倒そうとする1人の少女がいた。しかし、少女1人の力では彼らには敵わなかつ

た。少女は救いを求め、あらゆる次元世界から戦士を探し出した。そして、少女に導かれた『黒崎一護』『ナツ・ドラグニル』『沢田綱吉』の3人は、戦いの地『ミッドチルダ』でなのは達と出逢い、彼女達と共に破滅の運命に立ち向かう。

Prologue (前書き)

初めまして、Blueと申します。

この小説はこのサイトで小説を読んでもる内に”書いてみようかな？”
”と思って書き始めたものです。

その時に読んでたのが最初にあつたお三方の小説だったんですよ。

•
それでお三方に許可を頂き、連載して行こうと思ってるんですが・・

実はまだ構想中だったりします(笑)

でも一応プロローグだけでもと思って載せました。

では、ごきげん

Prologue

予言……それは未来に起こる事象、それに関する物事を言い当てる事。

そしてココにも1つの予言がある。

「破滅降臨せし時、法の塔の許、魔導の理、漆黒の刃、竜の魂、覚悟の炎集い、大いなる戦の火蓋が切られる。地の深淵より邪は解き放たれ、戦火は次元を穿ち、魔は魂を砕く。滅びの光が空を覆いし時、世界は脆くも崩れ去る。」

魔導の理とは？

漆黒の刃とは？

竜の魂とは？

覚悟の炎とは？

そして破滅とは一体何なのか？

この予言が持つ意味は誰にも解らない・・・

来たるべきその時まで誰にも・・・

そして運命は廻り出す・・・

- t o b e c o n t i n u e d -

Prologue (後書き)

カッコつけてみました(笑)

私に文才が無いのでグダグダになるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守って下さい(土下座)

どうぞ末永くよろしく願います。

Profile) 追記更新、ネタバレあり)(前書き)

続いて主人公3人の設定です。

若干無理矢理なモノとかもあるけど、そこは勘弁してほしいかな？
かな？

オリ技、ネタバレも結構含んでおります。

“大丈夫だよ！”と言う方のみお進み下さい。

それでは、ご容赦を

Profile) 追記更新、ネタバレあり)

名前

【黒崎一護】

年齢

【17歳】

身長

【179cm】

体重

【65kg】

誕生日

【7月15日】

血液型

【A型】

髪の色

【オレンジ色】

斬魄刀

始解【斬月】

卍解【天鎖斬月】

能力

【死神化】

【虚化】

【最後の月牙天衝】

オリ技

【フレイルムクラッドVer.】

ナツの“竜の炎”と、ツナの“大空の炎”を纏った状態の手カラ。容姿に変化が起こり、具体的に言うと、オレンジ色の髪に赤いメッシュが入り、天鎖斬月を持つ腕の袖が無くなり、その腕から天鎖斬月の刃先に架けて、橙と紅蓮の2色の炎を纏う。“無月”を除けば最強の能力。

概要

本作の主人公の1人。元々靈感が強く、見える・触れる・喋れるうえに超A級霊媒体質の四重苦である以外は普通の高校生だった。しかしある日、死神・朽木ルキアと出会った事で、死神の能力に目覚める。その後、幾多の戦いを経て、1年程前に死神の最大の敵・藍染惣右介を倒し、死神の能力を失うが、エレアの能力によって一時的に取り戻した。その時に最後の月牙天衝『無月』の“死神の能力を失う”という代償は無くなったが、その使用後、数日の間は始解状態での戦闘も満足に出来なくなる。外見から勘違いされがちだが、

基本的に優しく、異性から好意を寄せられる事も多いが、その言つ感情には疎い。

名前

【ナツ・ドラゲニル】

年齢

【17歳】

身長

【175cm】

体重

【68kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【桜色】

能力

【火の滅竜魔法】

オリ技

【火竜の炎刃】

長さ30cm程の炎の刃を形成する。

【火竜の炎壁】

炎の壁を作る。

【火竜の剣戟】

“炎刃”の派生技。巨大な炎の刃を相手に叩き付ける。コントロールが難しい。

【火竜の弾丸】

10〜30個ほどの炎の魔力弾を撃ち出す。

【火竜の旋尾】

炎を鞭のように操る。相手を捕縛する事も出来る。

【火竜の特攻】

炎をブーストのみに集中させ、生身のまま突進する。

【紅蓮星光劍】

ナツの『紅蓮鳳凰劍』と、なのはの『スターライトブレイカー』の合体魔法^{コンビンレイド}。ナツの全身を包む炎が強烈な耀きを放ち、そのまま相手に突進攻撃を繰り出す。その破壊力は2人の持つ魔法の中でも随一のもの。

【大炎竜モード】

ツナの高純度の“大空の炎”を食べた状態。ラクサスの雷を食べた状態の『雷炎竜モード』同様、過度に使用した場合、その直後に倒れてしまう。

【火竜の超咆哮】

『大炎竜モード』で放つ大火のプレス。

【紅蓮煌竜牙】

『大炎竜モード』で放つ滅竜奥義・改。両腕を前に突き出し、纏っていた炎を放つ。その際、放たれた炎は竜の顔を模した形となる。

概要

本作の主人公の1人。フィオーレ王国のマグノリアと言う街にある魔導士ギルド『妖精の尻尾^{フェアリーテイル}』の魔導士で、通称『火竜のナツ』。竜を倒す為の魔法、滅竜魔法を使う『滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}』で、それを竜であり育ての父である火竜・イグニールから教わる。炎攻撃によるダメージを受けず、逆にそれを食べる事で力に変える。エレアの能力により、ミッドチルダの魔力に順応出来るゆうになり、火属性じゃない魔力を食べてもある程度力が出るようになった。乗りものが苦手に乗るとすぐにダウンしてしまう。楽観的で物事をあまり深く考えないが、戦場では頭の回転が速い。とても仲間想いで、何よりも仲間を大切にしているため、仲間を傷つけられると激怒する。ナツの炎はその感情によって温度が左右され、激昂すればほどその温

度は上昇する。そんな性格から異性に好意を寄せられる事もあるが、
そう言う感情には疎い。

名前

【沢田綱吉】

年齢

【17歳】

身長

【174cm】

体重

【61kg】

誕生日

【10月14日】

血液型

【A型】

髪の色

【茶色】

能力

【超死ぬ気化】

武器

【大空のリングVer.？】

匣アニマル

【天空ライオンVer.？】

形態変化

【？世のガントレット】

【？世のマント】

ボンゴレギア
【VG】

オリ技

アンドウラッツィイオーネ・チエーリ
【大空の超波動】

高純度の“大空の炎”を練成、圧縮し、前方、もしくは周囲に放つ事で、相手の炎を無効化する。他の能力にもある程度有効。

イクス
【？ブレイズ】

？カノンの派生技。敢えて炎を撃たず、纏ったまま相手に攻撃し、

その瞬間に炎を放つ。打撃＋炎の2連撃。

【? ショット】
イクス

?カノンの派生技。凝縮した炎を高速で撃ち出す。優れた貫通性を持つ。

【? プラスト】
イクス

?カノンの派生技。掌から中型の火球を撃ち出す。スピードは“カノン”に劣るが、威力はこの技の方が遥かに大きい。

【? BURNER 超爆竜】
イクス バナー ハイバードドラゴンフォース

ナツの“ドラゴンの炎”を吸収した状態で放つ『? BURNER』の強化技。

【? BURNER 超爆竜】
ダブルイクスバナー ハイバードドラゴンフォース

ナツの“ドラゴンの炎”を吸収した状態で放つ『? BURNER』の強化技。放たれた際、炎は竜の顔を模した形となる。

【氷結の桎梏】
カテーナ・デル・キアツチャール

零地点突破・初代エディションによって相手の四肢を凍結させ、身を拘束する技。

概要

本作の主人公の1人。イタリア最強のマフィア・ボンゴレファミリー10代目ボス。3年程前のシモンファミリーとの騒動の後に正式にボスの座に就いた。リボンによる厳しい修行の成果で死ぬ気弾死ぬ気丸無しで超死ぬ気化することが出来るようになった。物語の序盤は自身のVGに特殊なリミッターをかけることにより力をセーブしていた（それにより以前の形態変化を使っていた）が、今で

は強敵達との激戦に備え、常にリミッターを外した状態にいる。体
にかなりの負荷が掛かるが、幾多の戦いを潜り抜けてきたツナにと
ってはあまり苦ではないらしい。想い人であった笹川京子への気持
ちは時間と共に昇華してしまいただの憧れ（“かわいいな”くらい
の感覚）になってしまっている。中学卒業辺りから背が伸び始めた
が、顔が童顔なために実年齢より幼く見られることが多い。それで
も顔が整っているので結構モテるが、異性からの好意には疎い。

Profile) 追記更新、ネタバレあり)(後書き)

いかがでしたでしょうか？

一応は一護がメイン主人公でナツとツナはサブ主人公です。まあとあるラノベの一方〇行と浜〇みたいなものかな？それでもちゃんと主人公です！！

でもナツとツナ・・・

うん(´・`・´)

この唸りの理由、分かって頂けると幸いです。

新情報が出る度に更新します。

Original? (追記更新、ネタバレあり) (前書き)

今回は本編に登場するオリキャラ (主要なモノのみ) の設定の説明です。

かなりのネタバレを含んでおりますので、最新話まで読んだ方、もしくはネタバレを気にしない方のみお進み下さい。

では、どうぞ

Original? (追記更新、ネタバレあり)

名前

【エレア・サンライト】

年齢

【17歳】

身長

【163cm】

体重

【??kg】

誕生日

【7月11日】

血液型

【AB型】

髪の色

【青色】

能力・技

【時空移動魔法】

時間、空間を飛び越える魔法

【不都合除去】

対象に降り掛かるあらゆる“不都合”を一定期間無効化する魔法

【喪失回復】

対象が失った能力を一定期間取り戻させる魔法

初登場

容姿【第1話】

名前【第2話】

名前の由来

当初は“空間”や“領域”を意味する『エリア』だったが、エリオと少し被るので1文字変えた

容姿のイメージ

『けんぷファー』の『瀬能ナツル』

概要

一護達をミッドチルダへと送り込んだ張本人。その正体は元・破滅のメンバー。しかし、それは破滅を壊滅させるための言わば潜入である。だが一緒に潜入していた主が殺されたため1人で逃亡。そし

て一護達に希望を見出し、その願いを託す。『時空移動魔法』によつて“過去”や“未来”、“平行世界”への移動が可能。ただし、膨大な魔力と精神力を消費するため連続使用は出来ず、時間転移は技術が足りないため、過去や未来と言ってもたった数日、長くとも2週間程度ではない。

名前

【魔閻のユークス】

二つ名

【魔閻將軍】

年齢

【不明】

身長

【180cm】

体重

【70kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【黒色】

能力・技

【ダークネス・レイド】

相手に邪悪な闇の波動を放つ技

【ダークフリーズ】

相手を黒い氷柱の中に閉じ込める技

初登場

容姿【第19話】

名前【第27話】

名前の由来

ギリシア神話の夜の神『ニクス』から

容姿のイメージ

『ハヤテのごとく!』の『マキナ』を少し大人っぽくした感じ

概要

カタストロフ 破滅の最高戦力 『ディストワール 十滅将』の1人で“闇”を司るメンバー。いつも黒い服に身を包み、物静かな雰囲気醸し出すが、その性格はかなり残虐で、邪魔だと思ったモノはすべて破壊する。エレアの主を殺した張本人でもある。“ディストワール 闇の魔法”を使うと言われているが詳細は不明。エイオスと共にディストワール 十滅将を率いるリーダー的存在でもあるがその正体は……。

名前

【極光のエイオス】

二つ名

【極光將軍】

年齢

【不明】

身長

【180cm】

体重

【70kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【白色】

能力・技

【光魔法？】

初登場

容姿【第19話】

名前【第27話】

名前の由来

ギリシア神話の曙の女神『エオス』から

容姿のイメージ
『メルヘヴン』の『ファントム』

概要

カタストロフ破滅の最高戦力『ディストワール十滅将』の1人で“光”を司るメンバー。ユークスとは真逆で白い服に身を包んでいる。冷静、冷酷な性格で、必要無いと判断したモノを容赦無く破壊する。カタストロフ破滅の参謀でもある。光の魔法”を使うと言われているが詳細は不明。ユークスと共にディ十滅将を率いるリーダー的存在でもあるがその正体は……。

名前

【水禍のアクエール】

二つ名

【水禍將軍】

年齢

【14歳】

身長

【155cm】

体重

【???kg】

誕生日

【2月2日】

血液型

【A型】

髪の色

【藍色】

能力・技

【水を操る能力?】

初登場

容姿【第34話】

名前【第34話】

名前の由来

みずがめ座のラテン語名『アクエリアス』から

容姿のイメージ

『遊戯王デュエルモンスターズGX』の『早乙女レイ』

概要

カタストロフ破滅の最高戦力『ディストウレ十滅将』の1人で“水”を司るメンバー。とても純粋で無邪気な性格だが、それ故に、破壊行為も“ただ遊んでいるだけ”と言っ感覚を持っている。

名前

【木精のローゼ】

二つ名

【木精将軍】

年齢

【19歳】

身長

【168cm】

体重

【??kg】

誕生日

【4月1日】

血液型

【A型】

髪の色

【深緑色】

能力・技

【植物を操る能力?】

初登場

容姿【第34話】

名前【第34話】

名前の由来

薔薇^{はつばい}の英語名『ローズ』から

容姿のイメージ

『アスラクライン』の『橘高冬琉』

概要

カタストロフ
破滅の最高戦力『ディストワール十滅将』の1人で“木”を司るメンバー。冷静沈着で礼儀正しく、誰に対しても常に敬語。破壊行為や殺戮行為を好まず、あまり好戦的ではないが、目的を遂行するために邪魔なものは徹底的に排除する傾向がある。

名前

【雷迅のボルグ】

二つ名

【雷迅將軍】

年齢

【25歳】

身長

【190cm】

体重

【80kg】

誕生日

【7月24日】

血液型

【B型】

髪の色

【金色】

能力・技

【雷を操る能力？】

初登場

容姿【第34話】

名前【第34話】

名前の由来

遊戯王の効果モンスター『雷帝ザボルグ』から

容姿のイメージ

『エデンの檻』の『矢頼光一』

概要

カクタストロフ
破滅の最高戦力『十滅将』^{ディストウレ}の1人で“雷”を司るメンバー。十滅将^{ディストウレ}の中でも寡黙な存在で、あまり言葉を発しない。体術を得意とし、能力を使わずとも十分に戦う事が出来る。

Original? (追記更新、ネタバレあり) (後書き)

リア友である種地響介に“キャラがわからないからイメージできない”と言われたんですが、そこは“ググッて下さい”としか言いようがありません。

すみません(一一)m

後、イメージが違うと言う人のために一言……

イメージはあくまでイメージです。

私もそのキャラをイメージして作ったのではなく、ただ容姿の…特に髪型のイメージをしただけなのです。

ややこしくてすみません……。

最後に、新しいキャラが出る度に更新します。

では、本編で……。

Original? (追記更新、ネタバレあり) (前書き)

こちらネタバレを存分に含んでおります。

最新話を読んでからご覧ください。

Original? (追記更新、ネタバレあり)

名前

【獣王フェンリル】

二つ名

【牙獣の王】

年齢

【不明】

身長

【190cm】

体重

【95kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【くすんだ白色】

能力・技

【ギルティ・ブラスト】

フェンリルの放つ砲撃。正確にはフェンリルが使用する攻撃魔法の総称だが、基本的に砲撃として用いている。

【狂戦獣】
ハイサイカー

フェンリルの真のチカラを発動させる能力。姿が獣人っぽくなり、全体的な魔力、身体能力が向上する。

【黄金の鎧】

正確な名称は無し。フェンリルの戦闘装束のようなもの。

【牙獣戦斧】

フェンリルが持つ戦斧。通常時はフェンリルの半分くらいの長さだが、自在に長さを変えられる。魔力を纏っている時の強度はかなりのもの。

【ブラスター × 4】
カルト

砲撃を分裂させ、それぞれを操る能力。

【天狼獣牙特攻】

フェンリルの切り札。高密度の魔力を全身に纏い、相手に強烈な突進攻撃を繰り出す。

初登場

容姿【第41話】

名前【第41話】

名前の由来

神羅万象チヨコ第1章に登場する皇魔族四天王の1人『獣王フェンリル』

容姿のイメージ

通常形態『獣牙院バルバトス』

戦闘形態『獣王フェンリル』

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。最早神話の存在だと思われていたが、実際はその罪故に『第0管理世界クロノス』の神殿の地下に封印されていた。その封印をユークスが解いた事によって、再びミッドチルダの地に降り立つ。驚異的な俊敏さと圧倒的なパワーを併せ持ち、それに砲撃などの魔法攻撃を加えて戦う万能戦士。所謂戦闘狂^{バトルマニア}で、強者と戦う事を目的とし、“全力を出せなければ戦う意味が無い”と言うほどストイックな性格。最初に六課へと攻め込んだ七戦鬼で、スターズ分隊を圧倒するが、ナツとなのはの合体魔法^{ユニゾンレイド}に敗れ、再び永い眠りについた。

名前

【機王アルテマ】

二つ名

【戦機之王】

年齢

【不明】

身長

【165cm】

体重

【50kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【水色】

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、再びミッドチルダの地に降り立つ。冷静で冷徹な性格。古代人ながら六課のシステムを制圧するなどの業を見せるが、その正体は現代より遙かに発展していた古代文明によって作り出された世界最古の人造魔導師で、その存在自体がロス・トロギアに相当する。フェイトと1対1で戦うも、フェイトが一護の霊圧と自身の魔力を融合させて放った『雷牙絶空』によって敗北し、完全に消滅した。

名前

【鳳王フルベルク】

二つ名

【魔鳳の王】

年齢

【不明】

身長

【180cm】

体重

【60kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【茶色】

能力・技

【フェニックスブレード】

フルベルクが愛用する剣。真紅の刀身から炎を放つ事が出来る。

【メギド・フレイム】

剣から紅蓮の斬撃を放つ。

【コロナ・ストーム】

翼から炎の竜巻を放つ。

【コロナ・ブラスト】

剣の鋒から火球を放つ。

【コロナ・ハリケーン】

自分の周囲に突風を巻き起こし、巨大な炎の竜巻を発生させる。

【コロナ・テンペスト】

コロナ・ブラストの強化技。巨大な火球を放つ。

初登場

容姿【第46話】

名前【第47話】

名前の由来

神羅万象チヨコ第1章に登場する皇魔族四天王の1人『鳳王フルスベルグ』

容姿のイメージ

『神羅万象』の『飛天院メルキオール』

髪の毛の長さは半分くらい

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、再びミッドチルダの地に降り立つ。陽気で飄々とした性格。興奮すると少々残酷にもなるが、根はあまり変わらない。紅い翼と真紅の剣を持ち、空中を舞いながら戦う魔法剣士。虚化した一護を圧倒する程の力を持つが、長い剣戟の末、虚化した一護の斬撃を受けて敗北する。しかし、本人はあまり苦しがる事も無く、穏やかな表情で消えていった。

名前

【蟲王アラケネ】

二つ名

【怪蟲の王】

年齢

【不明】

身長

【173cm】

体重

【59kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【赤紫色】

能力・技

インセクター

【妖蟲師】

妖蟲、怪蟲、魔蟲を召喚し、操る能力。

【ワーム】

アラクネの操る蟲の一種。胴が長く、眼が無いのが特徴。

【妖蟲融合】

召喚した蟲を融合させる能力。

【キング・ワーム】

複数のワームが融合して生まれた巨大なワーム。

【土蜘蛛】

アラクネの操る最強の妖蟲。その巨体はかなりの強度を誇り、はやての衝撃波や砲撃を受けても倒れなかった。

【戦闘蟲】

アラクネの操る蟲の一種。中型で人の形に近い姿をしている。

【ドラゴンフライ】

蜻蛉の姿をした戦闘蟲。高速移動からの奇襲が得意。

【デビルドージャー】

アラクネの操る巨大な蜈蚣の上級妖蟲。

ボイスン・テンタクルス
【猛毒の触手】

半身の蜘蛛の体内で精製した猛毒が塗られた触手による攻撃。

【自爆】

文字通りの技。

初登場

容姿【第50話】

名前【第50話】

名前の由来

ギリシア神話に登場する女性「アラクネー」

容姿のイメージ

遊戯王のシンクロモンスター「地底のアラクネー」

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、再びミッドチルダの地に降り立つ。狡猾で残忍な性格。負の感情に侵された人間を喰らうのが趣味で、その時になると興奮のあまりに発狂してしまう事もある。その謀略に嵌ったはやてを喰らおうとするが、既の所で駆けつけたツナに邪魔される。その後、ツナと戦うも敗北。苦し紛れに赦しを乞うが、その本心をツナに看破され、最終手段として自爆を試みるが、ツナダブルイクスバーナーのXXX BURNERによって、自爆する前に消滅した。

名前

【死王リッチー】

二つ名

【不死の王】

年齢

【不明】

身長

【177cm】

体重

【44kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【白色】

能力・技

【冥府の大鎌】

リッチーの持つ大鎌。その能力で斬った相手の魂を刈り取る。

【黒影の鎌】

シャドウ・シッケル

影から複数の鎌を出現させ、相手を斬り裂く。

【魂域】

ソウル・ドーム

一定範囲を外界から隔絶する特殊な結界。魔法ではなく、霊的能力。

【黒月の鎌】

漆黒の斬撃を放つ。

【御魂削り】

冥府の大鎌の能力の一つ。相手の魂そのものにダメージを与えるか、魂そのものを刈り取る技。

【疾風の鎌】

ウィンド・サイス

周囲の風を鎌のように操り、相手を斬り裂く。

【炎魔の鎌】

炎を纏った鎌による斬撃。

【雷霆の鎌】

雷を纏った鎌による斬撃。相手の体を麻痺させる能力がある。

【斬魂無葬】

鎌で斬り裂いた相手の魂を消し去る技。並大抵の魂なら一撃で消えてしまう。

【超速再生】

傷ついた部分を瞬時に再生させる能力。

【氷結の鎌】

冷気を纏った鎌による斬撃。斬った部分を凍結させる能力がある。

【死神の大鎌】
ネクロ・デスサイズ
シャドウ・シツケル

黒影の鎌の強化技。自身の影から無数の巨大な鎌を出現させ、相手を斬り裂く。

初登場

容姿【第54話】

名前【第54話】

名前の由来

遊戯王の効果モンスター『不死王リッチー』

容姿のイメージ

同上

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、再びミッドの地に降り立つ。陽気な一面があったり、行いが残忍だったり、冷静に行動したりと掴み所の無い性格。七戦鬼の中で最も老いた存在で、最早生ける屍と化している。その容姿は人間と言うよりは寧ろ髑髏に近い。ミッドのネオン街で魂を刈ると言う事件を起こし、さらにはその捜査へとやって来たノーヴェとウエンディの魂も刈り取った。それに怒りを抱いたチンク、デイエチと戦うが、2人を圧倒。その後、チンク達を助けに来た一護と戦う。最初は、超速再生などで一護を追い込むが、途中で割り込んだギンガによって逆に追い込まれてしまう。最後は一護、ギンガ、チンク、デイエチの総攻撃を受け、超速再生する前に、完全に消滅した。

名前

【竜王ファフニール】

二つ名

【暴竜の王】

年齢

【不明】

身長

【183cm】

体重

【75kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【紺色】

能力・技

【サイクロン・フィールド】

周囲に巨大な竜巻を発生させ、自分と相手を外に出られないようにする。ファフニール曰くバトルフィールド。

【暴風壁】

自身の周囲に小さな竜巻を発生させ、相手の攻撃を防ぐ防御技。

【エア・ブラスト】

空気の塊を放つ技。

【暴風拳】

風を纏った拳撃。

【黄金の鎧】

正確な名称は不明。ファフニールの戦闘装束。

【サンダー・トルネード】

雷を伴った竜巻を発生させる技。

【レイン・ストーム】

雨や水を伴った竜巻を発生させる技。

【ブリザード・ハリケーン】

冷気や雪を伴った竜巻を発生させる技。

【ギガ・ディザスター】

相手の足元に魔法陣を展開し、そこから巨大な竜巻を発生させる技。

【暴風牙】

自身の腕に竜巻を纏わせ、その回転で相手の体を貫く。風のドリル。

【ルドラ・サイクロン】

ファフニールの最強魔法。周囲の風を操り、巨大な風の竜を作り出す。

初登場

容姿【第56話】

名前【第56話】

名前の由来

神羅万象チヨコ第1章に登場する皇魔族四天王の1人『竜王ファフニール』

容姿のイメージ

神羅万象チヨコ王我羅旋の章に登場する『ベルゼビユート』
戦闘形態は『竜王ファフニール』

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、再びミッドの地に降り立つ。典型的な俺様系の性格。しかし、実力は七戦鬼の中でも上位。リッチーの襲撃から数十時間後に突然六課隊舎の前に現れ、迎撃に出たナツ・ツナの2人と戦う。序盤は2人を圧倒するも、互いの炎を自身の力に加えた2人に押され、自分も力を解放する。そして、双方の最強技の激突の末、2人に敗北した。

名前

【蛇王ニーズホッグ】

二つ名

【凶蛇の王】

年齢

【不明】

身長

【200cm】

体重

【107kg】

誕生日

【不明】

血液型

【不明】

髪の色

【不明】

能力・技

【黄金の鎧】

正式な名称は無し。ニーズホッグの戦闘装束。

【サイレント】

自分の気配を消す技。ツナの超直感を持ってしても完全に読み切るのとは不可能。

【右の剣・オロチ】

ニーズホッグの分身たる大剣の1つ。

【ゲイン】

ニーズホッグの大剣『オロチ』の持つ能力。斬った相手の魔力や能力を奪い、自分の物とする技。その際に、相手に裂傷を与える事はできないが、大抵の相手はその力を吸収される事で気絶してしまう。

【左の剣・ナーガ】

ニーズホッグの分身たる大剣の1つ。

【アブゾーブ】

ニーズホッグの大剣『ナーガ』の持つ能力。その刃で受けた攻撃（主に遠距離攻撃）を吸収する技。

【リバース】

『ナーガ』で吸収した攻撃に自身の魔力を上乗せし、威力を増幅させて撃ち返す技。

初登場

容姿【第57話】

名前【第58話】

名前の由来

神羅万象チヨコ第1章に登場する皇魔族四天王の1人『蛇王ニーズホツグ』

容姿のイメージ

同上

概要

遙か昔、ミッドチルダを蹂躪していた7人の大魔導『七戦鬼』の1人。ユークスに封印を解かれ、その封印の地『第0管理世界クロノス』にて一護たちと対峙した。物静かであり饒舌ではないが、興奮すると口数が多くなる。その恐るべき能力と圧倒的な力で一護たちを圧倒し、さらには一護、ナツ、ツナを除く仲間全員の能力を吸収し、それらの技を使用して3人を窮地に立たせる。しかし、ナツとツナから炎を託された一護（フレイムクラッドVer.）に逆に圧倒され、そんな一護に対して恐怖を抱き、戦闘不能寸前まで追い詰められる。しかしそれでも倒れる事はなく、持てるすべての魔力を解放し、“最後の月牙天衝”を発動した一護と激突する。

Original? (追記更新、ネタバレあり) (後書き)

このキャラ達はオリキャラであってオリキャラではありません。

わかりますよね。

すみませんm | | m

では、本編で

第1話『BLEACH』（前書き）

とりあえず第1話投稿。

最初に言っておく、今回はか〜なり短い！

（仮面ライダーゼ〇ノス風）

では、ごんげ

第1話『BLEACH』

【3人称side】

東京都・空座町……ここに1人の高校生がいた。

彼の名は黒崎一護。

身長は177cm程、髪の色はオレンジ……幽霊は見えない。

何故こんなことを言うかというと、1年程前までは幽霊が見えていたのだ。

しかも『見える』だけではなく『触れる』『喋れる』うえに超A級霊媒体質だったのだ。

彼がそれを失ったのは、彼が『死神』だったからである。

彼は死神・朽木ルキアと出会い、死神の能力に目覚め、仲間と共に死神の最大の敵である藍染惣右介と戦い、自身の斬魄刀『斬月』と一体となって放つ最後の月牙、『無月』によって彼は勝利した。

しかし、その代償として彼は死神の能力も含め、全ての霊力を失ってしまった。

それにより、仲間の死神達のことも見えなくなってしまい、彼は元の生活に戻り、友人達と普通に暮らしていた。

そして1年程経ったある日、事件は起きた。

尚、この約5カ月後に一護は死神の能力を取り戻すことになるが、それはまた別の話。

【一護side】

一護

「やべえ、遅くなっちゃったな。　たくあのクソ親父、醤油くらい買っとけよな(怒)」

そんな愚痴をこぼしながら俺は自宅を目指して歩いていた。

ちなみに何故醤油かというと、今日の晩飯に家で寿司を作ったのだが、醤油が切れていたのだから俺が買いに出たというわけだ。

一護

「それにしても腹減ったな。ちゃっちゃと帰」………
「!?」

俺が独り言を呟いた時、何処からともなく声が聞こえてきた。

何て言ってるのかわからないが、確かに聞こえる。

そう思った次の瞬間、

一護

「っ!?!?何だ!?!」

突然目の前が眩い光に包まれ、そのまま俺は気を失ってしまった。

その後のことは全く覚えていない。

一護

「うっ……ここは何処だ？一体何が起こったんだ？」

俺が目を覚ますと、そこは見るからに元の世界ではなかった。

何も無い、全く何も無い、正に無の世界とでも言っべき真っ白な空間にいた。

一護

「何なんだよ？一体……」

俺は状況が飲み込めず、独り混乱していた。

すると、

?????

「やっと繋がりましたね」

一護

「!？」

俺は声の主の方を見た。

そこには青髪で白いワンピースを着た女性と、桜色の髪で薄着に白いマフラーといった服装の男が立っていた。

t o b e c o n t i n u e d

第1話『BLEACH』（後書き）

寿司は散らす寿司じゃなくて握る寿司です。

普通の家じゃあんまりやらないと思っけど、あのヒゲダルマならやるかも（笑）

次回もなるべく早く載せたいと思ってます。

次回『FAIRY』

第2話『FAIRY』（前書き）

と、言う訳で第2話です。

小説って難しいね（<―>）

当たり前だけど……

でもなんとかやって行きたい！って作者は作者は決意表明してみたり！

（打ち〇め風）

これ毎回やるつもりはナイデスヨ……

では、どうぞ

第2話『FAIRY』

【3人称side】

フィオーレ王国……永世中立国であるこの国にはギルドと呼ばれる大小様々な会社のような集まりがある。

そしてここ、マグノリアという町にある魔導士ギルド『フェアリーテイル妖精の尻尾』が今話の舞台。

魔導士とは、魔法を使って戦う者、働く者のことをいい、そんな者達が集まるのが魔導士ギルドである。

そして、

???

「ルーシィ、仕事行こうぜー!」

彼の名はナツ・ドラグニル。

今話の主人公で魔導士ギルド『妖精の尻尾』の一員だ。

『滅竜魔法』という竜迎撃魔法を使う魔導士で、火竜・イグニールに育てられた。

しかし、7年前の7月7日にイグニールは彼の前からいなくなってしまう、以降ずっとイグニールを探している。

???

「それはコッチの台詞でしょ!?!?あんたが食べ終わるのずっと待ってたのよ!?!?」

彼女の名はルーシィ・ハートフィリア。

65

元大金持ちのお嬢様（家出して『妖精の尻尾』に入った）。

星霊魔導士で、鍵を使って門を開き、^{ゲート}星霊界から星霊を呼び出すことが出来る。

ナツとはチームを組んでいる。

???

「あい。ルーシィ怒らないで・・・魚あげるから」

ルーシィ

「私は猫か!？」

????

「おいらは猫だよ?」

この猫の名はハッピー。

・・・猫だ。

ナツが拾ってきた卵から孵った。

その正体は『エドラス』と呼ばれる別の世界からきた『エクシード』
という生き物だ。

だが、『エドラス』や『エクシード』のことはよく知らない。

ナツ

「悪かったって・・・だから仕事行こうぜ!」

ルーシィ

「ハイハイ……で、何の仕事行くの？」

ルーシイがナツに尋ねると、ナツが“コレだ!!”と言って依頼書を出した。

そこには「美女とデートがしたい!!報酬50万シユエル」と書かれていた。

ルーシイ

「……………」

ナツ

「ん?どうしたルーシイ？」

ハツピー

「?」

ルーシイが…………

ルーシイ

「何よ」「レ……?」

叫んだ……（世界ウルン風）

ナツ

「なっ何だよ!？」

ルーシイ

「何だよ?じゃないでしょ!？」

2人+1匹が揉めていると異変が起こった。

ナツ・ルーシイ・ハッピー

「!!!?」「」「」

突然ナツの体が光出し、目の前から消えてしまったのだ。

ギルドは騒然となった。

仲間が、家族が消えたのだから当たり前だ。

ハッピー

「ナツ!？」

ルーシイ

「どうなってるの!?!」

1人+1匹はただただそこに立ち尽くしていた。

【ナツside】

ナツ

「痛ってえ、何だっただよ」

オレは今の状況がよくわからず、ただ呆然としていた。

するど、

?????

「オレにそのくらいじゃいました」

ナツ
「!?!」

声のする方へ振り向くと、1人の女が立っていた。

ナツ

「誰だ?」

?????

「少しお待ち下さい。もうすぐ来ますので……」

すると、反対側から物音がした。

振り返ると1人の男が倒れていた。

歳は19……いや、20くらいか? だけど少し変な感じがする。

すると、男が目を覚ました。

男も知らない間にここに来たのか少し混乱している様だ。

そんな男に女が話かけた。

【3人称side】

???

「やっと繋がりましたね」

一護

「!?!」

一護は驚いて女とナツを見た。

一護

「あんたら誰だ?ここは何処なんだ?」

ナツ

「オレはナツ・ドラグニル。お前と同じで、訳もわからずここに連れてこられた」

一護

「お前も!？」

ナツ

「ああ。つー訳で説明してもらおうか？」

????

「わかりました」

ナツがそう言うと女は静かに頷き、説明を始めた。

????

「私の名前はエレア。我が主の命によりあなた達をこの次元の狭間に呼び寄せました」

数分後、とりあえずこの場所の説明を受けた2人は互いの事を話した。

一護は死神の事、ソウル・ソサエティ尸魂界の事、今の自分の事を、ナツは魔導士の事、フェアリーテイル妖精の尻尾の事、自分の生い立ちの事を話した。

一護

「なんか、スゲエな」

ナツ

「お前の方がよっぽどスゲエじゃねえか。死神なんてよ」

互いの事に驚きつつも、話を元に戻した。

ナツ

「そんで？ここの事やオレ達の事はわかったけどよ」

一護

「俺達と呼ばれた理由ってのは何なんだ？」

エレア

「それは次元の崩壊を止めてもらおう為です」

一護・ナツ

「「次元の崩壊？」」

エレア

「はい。先程説明した通り、あなた達の世界は互いに平行世界として存在しています。そしてパラレルワールドは無数に存在します。そのパラレルワールドを崩壊させようとする者達が現われたのです。奴らの名は『破滅カタストロフの使徒』。そして、奴らが狙っているのがあなた達の世界です」

一護・ナツ

「「!?!?」」

二人はエレアの言葉に絶句した。

自分の世界が滅ぼされようとしているのだから当たり前だ。

エレア

「正確にはあなた達の世界を含む4つの世界が最初の標的なのです」

一護

「4つ!?!?」

ナツ

「んで?オレ達は何をすればいいんだ?」

ナツがそう言うと、エレアが再び口を開いた。

エレア

「あなた達には最初の標的の1つである『ミッドチルダ』という世界に行ってもらいます」

t o b e c o n t i n u e d

第2話『FAIRY』（後書き）

と、言う訳で第2話でした。

1話、2話と掲載しましたがこれから更新スピードが落ちます。

理由は次話以降の調整が終わってないから！

すみません（土下座）

次回『In ミッドチルダ』

第3話『エロ ミッドチルダ』（前書き）

今回は（も？）グダグダです（笑）

だいはしよった部分も・・・

後、フラグも立ちます

では、どうぞ

第3話『I n ミッドチルダ』

【3人称side】

ナツ

「痛つてえ、何かさっきもこのシチュあつたな」

そんな事を考えながら立ち上がるナツ。

ちなみに一護はいない。

どうやら別の場所に出たみたいだ。

少し前の時間……

エレア

「あなた達には最初の標的の1つである『ミッドチルダ』という世界に行ってもらいます」

一護

「『ミッドチルダ』？」

エレア

「簡単に言つとナツさんの世界と同じで、魔法が存在する世界です。ただ、少し勝手が違いますが・・・」

ナツ

「？」

一護

「そう言えば4つの世界って言ってたけど、もう1つの世界はどうすんだ？」

一護がふと頭に浮かんだ疑問を言った。

ナツも確かにという顔をしている。

エレア

「残り1つの世界からも人を呼んだのですが・・・」

一護

「ですが？」

エレア

「間違えて直接ミッドチルダに飛ばしちゃいました（笑）」

一護

「はあ？」

ナツ

「（笑）じゃねえだろ」

エレアの失態に呆れる一護とツッコむナツ。

エレア

「一応その方にも事情とあなた達の事は話してあります」

ナツのツッコミを無視して、エレアは話を続ける。

エレア

「後でその方の情報をあなた達の頭に直接送りますのであしからず」

エリアからその人物の情報を受け取り、ミッドチルダに送り込まれ、そして今に至る。

ナツ

「にしてもここは何処だ？」

ナツが悩んでいると、1人の女性が声をかけて来た。

?????

「ここで何をしているのですか？」

ナツ

「ん？ああ、ちょっとな。ところでここは何処なんだ？」

?????

「ここは聖王教会ですが？」

ナツ

「せいおうきょうかい？何だそれ？」

?????

「（もしかして次元漂流者か？）申し訳ありませんがご同行願えますか？」

ナツ

「まあ、いいぜ」

ナツはこれに応じる。

別に逃げる必要もないからだ。

ナツ

「ところであんたの名前は？」

????

「シャツハ・ヌエラです。あなたは？」

ナツ

「オレはナツ・ドラグニルだ。ナツでいいぜ」

シャツハ

「そうですか。ではナツさん、一緒に来て下さい」

別の場所

????

「失礼します」

????

「おっ！来たか、はやて部隊長」

部屋の中にははやてと呼ばれる女性と40代くらいの男がいる。

はやて

「別に部隊長はいりませんよ？ゲンヤ隊長」

ゲンヤ

「俺の方もいらねえよ。まあどっちでもいいか」

はやて

「そうですね。それで用件はなんですか？」

ゲンヤ

「ああ、実はな・・・」

????

「失礼します」

そう言っつて1人の男が部屋に入っつて来た。

見た目は中学生くらいの少年だ。

はやて

「この子は？」

はやては入っつて来た少年の事をゲンヤに尋ねる。

ゲンヤ

「こいつは今朝道に倒れてたんだが、どうやら次元漂流者らしくてな」

はやて

「次元漂流者？つて事は用件てもしかして・・・」

ゲンヤ

「ああ。こいつを六課で預かってほしいんだ」

次元漂流者は基本的に管理局で保護することになっている。

故にはやての答えは、

はやて

「構いませんよ」

ゲンヤ

「悪いな」

はやて

「いえいえ。それじゃ君、名前教えてくれるかな？」

????

「オレは沢田綱吉です。ツナで結構です」

はやて

「私は八神はやてや。はやてでええよ。後、敬語もいらんから」

ツナ

「わかった。よろしくね、はやて」

はやて

「いちらんそ」

2人は握手をする。

ツナはニッコリとはやてに微笑む。

すると、はやての顔が少し赤くなった。

はやて

「そ、それじゃあ失礼します。ほなツナ君行こか……／＼／」

ツナ

「うん」

そう言うと2人は部屋から出て行った。

ゲンヤ

「あいつも女だって事か……」

その後2人は聖王教会に向かい、そこでカリム、シャツハ、ナツと出会った。

カリムからナツも次元漂流者だと聞かされ、それならとナツも六課で保護することにした。

ナツとツナは互いにこの世界に呼ばれた仲間だとわかり、自己紹介と握手をした。

そして3人で六課へと向かった。

機動六課

はやて

「今日からうちで保護することになったナツ君とツナ君や」

ナツ・ツナ

「「よろしく」「」

???

「ああ、よろしく。ライトニング副隊長のシグナムだ。シグナムで構わん」

???

「スターズ副隊長のヴィータだ。アタシもヴィータでいいぞ」

背が高く、桃色の髪をポニーテールにしている女性・シグナムと、背が低く、赤色の髪を三つ編みにしている少女・ヴィータとの挨拶を済ませた時、警告音のような音が六課内に響き渡った。

部屋にあったモニターに映像が映し出された。

そこには数十機の機械と、それと戦っている黒い着物を着たオレンジ色の髪の青年の姿があった。

t o b e c o n t i n u e d

第3話『エロ ミッドチルダ』（後書き）

ツナ

「フラグ立ったの？」

作者

「立ちましたよ。（あなたの……）」

ツナ

「？」

作者

「次話も連続投稿しますので……」

ツナ

「よろしくお願いします」

次回『集結』

第4話『集結』（前書き）

と言う訳で連続投稿です。

今回で全員集合です。

後、設定が超無理矢理ですが許してね（笑）

では、どうぞ

第4話『集結』

【3人称side】

一護

「・・・何処だ、ここ？」

そんな事を疑問に思いながら青年(?) 黒崎一護は1人森の中に立っていた。

ちょうどその頃ナツはツナ、はやてと共に六課に到着していた。

が、それを一護が知るよしもない。

一護

「ハア、しゃあねえな。歩くか」

一護が歩きだそうとした時、明らかに危なそうな機械が一護を取り囲んだ。

一護

「!?!?何だコイツら!?!?」

そう思ったのも束の間、その内の1機が一護にレーザーを放った。

その威力で地面が抉れた。

……が、そこに一護の姿は無く、刹那、レーザーを放った機械が真っ二つに割れた。

……いや斬り裂かれた。

死神代行・黒崎一護によって。

少し前の時間……

一護

「あのよお……」

エレア

「何でしょう?」

一護が口を開き、エレアが返事をする。

一護

「その敵つてのがどんくらい強いのか知らねえけどさ、俺は戦う能力を失ってんだぞ?」

それを聞いてナツも確かにと頷く。

さっきの話を聞いた限りでは一護は死神の能力を失っている。

つまり戦えないという事だ。

エレア

「その点は大丈夫です!」

やけにテンション高く答えるエレア。

エレア

「この戦いの間のみですが、一護さんはもう一度死神の能力が使える

るようになります。」

一護・ナツ

「「!!!??」」

エレア

「プ・ラ・ス、一護さんは“最後の月牙”を使用しても死神の能力を失いません。その代わり数日の間は始解での戦闘も満足に出来ません。ナツさんはミッドチルダの魔力に順応出来るようになります」

一護

「あなた・・・本当に何者なんだ？」

一護は正直混乱していた。

一度使用すれば絶対的な破壊力を手にする代わりに全ての能力を失うという“最後の月牙”をリスクはあるが何度も使用出来る。

そして、それを可能にする謎の女・エレア。

全てに対して混乱していた。

しかし、

一護

「ハア、また何かの為に力を手にするとはな・・・」

一護の内には混乱と同時に確かな覚悟が宿っていた。

そしてもう1人、

ナツ

「ヘッ！やってやるぜ！」

エレア

「フフツ・・・」

ナツも同じであった。

そんな2人を見てエレアは微笑んでいた。

エレア

「それでは頼みましたよ。破滅を食い止める為に・・・」

一護・ナツ

「「おう!!」」

そして2人はミッドチルダへ送られた。

しかし、2人を見送ったエレアの表情が一変した。

エレア

「ごめんなさい・・・」

エレアは小さく呟いた。

その頬に一筋の涙を流しながら・・・

時は戻って一護 vs 危なそうな機械達（一護の見た感じ）

一護

「うらあー!」

死神の服『死覇装』を身に纏い、身の丈程の斬魄刀『斬月』を操り、周囲の機械を次々と斬り裂いていく。

しかし、数が一向に減らない。

一護

「クソツ！何体いやがんだ!?!」

その時、機械が再びレーザーを放とうとしていた。

一護は気付いていない。

しかし、レーザーが放たれる事はなく、爆発音と共にその機械が粉々に砕け散った。

そして、一護の下へ2人の女性が駆け寄った。

1人は栗色の髪をツインテールにして白いドレスのような服を着た女性と、同じくツインテールだが、金髪で軍服調の黒い服を着た女性だった。

???

「大丈夫ですか!？」

白い服を着た女性・高町なのはが一護に話しかけた。

死神と魔導師の邂逅だった。

【なのはside】

???

《こちらロングアーチ。震源地付近でガジェットの反応多数、その数およそ70!》

なのは

「了解!フェイトちゃん!」

フェイト

「うん、急ごう！」

シャーリーから連絡を受けた私とフェイトちゃんはレリックの反応があった場所へと向かっていた。

その時、

ドオオオオン！！！！

その場所の近くで大きな爆発音がした。

シャーリー

《っ！？民間人がガジェットに襲われています！！》

フェイト

「なのは！！！」

なのは

「うん！！！」

私達はその場所へと急いだ。

反応があつた場所に着くと、黒い着物を着た20代くらいの青年が大きな出刃包丁のような刀を持ってガジェットと戦っていた。

青年の周囲には既に数十機のガジェットが鉄屑となつて転がっていた。

フエイト

「すごい。あの人、アンチ・マギング・フィルターAMFをもつてない！」

なのは

「うん、すごい！」

私達は青年の強さに感心していた。

その時、1機のガジェットが青年にレーザーを放とうとしていた。

青年はそれに気付いていない。

フエイト「まずい！！」

なのは「まかせて！アクセルシューター……」

私は魔力弾を展開してガジェットに攻撃を仕掛ける。

なのは

「シユート!!!!」

私が放った攻撃はガジェット数機を粉碎した。

そして私達は青年に駆け寄った。

なのは

「大丈夫ですか!？」

一護

「ああ、大丈夫だ。お前らは?」

私は青年の体を心配したが、青年の言葉通り目立った外傷もなくて私はホッとした。

フェイト

「機動六課です。後でお話訊かせてもらいます」

一護

「わかった。こっちも訊きてえ事とかあるし、とっとと片付けるぜ
!!」

そう言うと青年は刀を大きく振り上げた。

私は“何をするんだろう?” 思ったけど、その答えはとても単純なものだった。

・・・攻撃だ。

一護

「行くぜ! 月牙・・・」

その瞬間、青年からとてつもない程の力を感じた。

一護

「天衝!!!!」

その言葉と共に刀を振り下ろすと、刃先から衝撃波のようなものが放たれ、目の前にいた数十機のガジェットは一瞬にして塵となった。

なのは・フェイト

「す、すごい……！」

一護

「うっし！終わったな！」

私達は青年の強さに改めて驚かされた。

すると青年が、

一護

「で、ここは何処なんだ？さっきの機械は？」

なのは

「フェイトちゃん、この人……」

フェイト

「うん、多分……」

青年の言動から私達は1つの結論に至った。

フェイト

「あなたは次元漂流者です」

【3人称side】

一護

「次元漂流者？」

一護は言葉の意味が解らず復唱する。

フェイト

「詳しくは六課で話すので一緒に来て下さい」

一護

「わかった。えっと・・・」

フェイト

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

なのは

「高町なのはです」

一護

「そつか。俺は黒崎一護だ。よろしくな、なのは、フェイト」

なのは・フェイト

「「ハイ！」」

一護はなのは達と共に六課へと向かった。

しかし、一護達は知らなかった。

この戦いを見ている者がいた事を……

???

「クッククック、とても面白そうな玩具が見つかったな。フッフッフッ、ハッハッハハハハ！」

男は……次元犯罪者・ジェイル・スカリエッティは不気味に笑った。

機動六課

六課に着いた一護はナツと再会し、ツナとも顔合わせを済ませた。

はやて

「ほんなら改めて挨拶しよか。私はこの部隊長をやつとる八神はやてや、よろしくな！ほんで、こっちの2人は私の家族のシグナムとヴィータや」

シグナム

「シグナムだ。よろしく頼む」

ヴィータ

「ヴィータだ。よろしくな」

なのは

「じゃあ改めて、スターズ隊長・高町なのはです」

フェイト

「ライトニング隊長・フェイト・T・ハラオウンです」

六課の面々の挨拶が終わり、漂流者組の番となった。

ナツ

「ナツ・ドラグニルだ。よろしく頼むぜ！」

ツナ

「沢田綱吉です。よろしくお願ひします」

一護

「黒崎一護だ。よろしくな」

「挨拶終了」

はやて

「じゃあナツ君とツナ君に質問。2人も一護君みたいに戦う力持ってるん？」

ツナ

「まあ・・・」

ナツ
「ああ、あるぜ」

はやて

「そっか、そっか・・・じゃあ3人には模擬戦やってもらおうか！」

t o b e c o n t i n u e d

第4話『集結』（後書き）

作者

「キャラの口調あってるかな？」

一護

「連載してて言うセリフかよ？」

作者

「なのは観たこと無いし……」

一護

「キャラくらいわかるだろ？」

作者

「皆さん、“このキャラこんな口調じゃない”とか、“ここオカシイ”とかいう指摘があれば遠慮なく言っして下さい」

一護

「出来る限り直させるからよ」

作者

「よろしくお願いします」

次回『模擬戦』

第5話『模擬戦』（前書き）

毎回書いてて思うんですけど、ちょっと短いかな？

ただの独り言ですが・・・

では、ごきげん

第5話『模擬戦』

【3人称side】

一護・ナツ・ツナ

「「模擬戦???」「」

3人は声を揃えて言った。

そして、はやてが答える。

はやて

「そつや、うちにも強い奴はイッパイおるけど戦力は多い方がええ。せやから戦う力を持つとるんやったら手伝ってほしいんや。どつちみちここにおる事になると思っし、それでその能力についてのデータを取るう思てな！」

正直3人は“これ強制か？”とも思ったが、元々戦う為にこの世界に来た3人は、

一護

「いいぜ！世話になるんだし」

ナツ

「それぐらいはな」

ツナ

「オレも」

快諾した。

はやて

「そうか、ありがとうな！じゃあ早速メンバーを「主はやて！！」
！？」

はやてがメンバー決めを行おうとした時、突然1人の女性が名乗り
を上げた。

シグナムだ。

シグナム

「私にやらせて下さいー！」

はやて

「う、うん。ええよ」

一護達は“何だ!?”と驚いていたが、はやてはシグナムの申し出を了承した。

彼女は所謂バトルマニア戦闘狂なのだ。

恐らくモニターで見た一護の強さに血が騒いだのだろう。

こうなったら彼女は手がつけられない。

故にはやては了承せざるを得なかった。

シグナム

「ありがとうございます。では黒崎、明日と言わず今からやらないか?見た所あまり疲労は無いようだしな・・・」

はやて

「ハハハ、どないやる一護君?」

一護

「別に構わねえよ」

シグナムの急な要求を一護は承諾した。

彼の世界にもバトルマニア（更木剣八）がいたが、そいつよりは幾分マシだろうと思ったからだ。

なのは

「そう言えば、一護君とツナ君って地球出身なの？」

一護 vs シグナムの話をしていた時になのはが言った。

ツナ

「そつだよ。日本の並盛町って場所」

一護

「俺は空座町だ。でも何でだ？」

なのは

「名前の響きが似てるから……でも私の知ってる日本には並盛町も空座町も無かったと思うけど……」

それを聞いた一護は内心“やっぱりパラレルワールドか……”と再認識する。

はやて

「ほんならー護君らはパラレルワールドの人間って事なんか（いくら管理局でもパラレルワールドへの干渉は出来んからなあ・・・）。ナツ君も地球出身なん？」

ナツ

「オレは生まれた場所は覚えてねえんだ。でもここが異世界だって事はわかる」

はやての質問にナツが答えた。

はやて

「そっか。ほんならやっぱりちょっと間ここにおってもらわなあかな。じゃあー護君の模擬戦の前にご飯でもどうやる？」

時計を見るとデジタルでp m 1 2 : 3 4と表示されていた。

フェイト

「そうだね、ちょうど良い時間だし」

その時、ドアが開いて体長20cmくらいの女性が飛んで入ってきた。

それにいち早く反応したのは一護だった。

一護

「うおっ！？何だこのちっこいの！？」

一護の言葉にちっこいのが反論した。

????

「むう、ちっこいのじゃないですう。私ははやてちゃんのユニゾンデバイスのリインフォースソウアイ？ですう」

一護

「お、おお悪い。・・・ん？デバイスって何だ？」

一護は謝りながら、ふと頭に浮かんだ聞き慣れない単語について聞く。

はやて

「その子のことは“リイン”って呼んだってな！デバイスについては後で詳しく話すけど、まあ私らの武器みたいなもんかな？」

一護は色々と気になる事があつたが、後で話してくれると言つのでその場は黙っておくことにした。

その時、不意にフェイトが口を開いて、

フェイト

「ねえ、一護達って歳はいくつなの？」

フェイトの何気ない質問に一同は頷いたが、この質問が嵐を呼んだ。
・・・

一護

「17だ」

ナツ

「オレも17だ」

ツナ

「オレもだけど？」

六課一同

「・・・・・・・・・・」

ヴィータ

「嘘だろ!?!」

リイン

「嘘ですう〜!?!」

一護・ナツ・ツナ

「「嘘じゃねえよ」ないよ!?!?!?!」

こんなやり取りが数分続いたらしい……

そして数分後、

はやて

「ハア、まあええわ。ほな食堂行こか!」

六課の面々はあまり納得していなかったが、これ以上は無意味だと悟って食堂へと向かった。

そして食事を済ませた一同は模擬戦を行う為に訓練場へと足を運んだ。

その模擬戦で一護の圧倒的な力を目にする事になるとは知らずに・・・

t o b e c o n t i n u e d

第5話『模擬戦』（後書き）

ナツ・ツナ

「名前が似過ぎている！！」「

一護

「いきなりどうした？」

ツナ

「オレとナツさんの名前ってただ逆にしただけじゃん！」

一護

「確かにな。作者も言ってたけど・・・ちょっとめんどくせえ」

ナツ

「でもなんか親近感があっついていいかもな！」

ツナ

「えっ!?!」

ナツ

「つー訳でこれからもよろしくな!!--」

ツナ

「ハ、ハイ！こちらこそ！」

ガツチリ握手

一護

「一件落着か……て言うかどうでもいいけど模擬戦やってなくね？」

作者

「模擬戦は次回という事で……」

次回『刀』vs『剣』

第6話『刀 vs 剣』（前書き）

予告通り模擬戦やります。

戦闘描写はムズカシイ（←→）

断言します！超短いです！

では、どうぞ

第6話『刀 vs 剣』

【シグナムside】

私は今とても興奮している。

その理由は眼前の男にある。

彼は次元漂流者らしいのだがただのそれではなくパラレルワールドの人間だそうだ。

だが私が興奮している理由はそこではなく、彼の『強さ』にある。

魔導師でさえ苦戦を強いられるガジェットと戦い、数十機ものそれをたった一撃で殲滅した。

モニター越しでも感じた彼の能力の強大さに私の中には様々な感情が生まれた。

彼に対する畏怖、嫉妬、期待・・・色々あったが最も大きかったのは純粹に“戦ってみたい”という気持ちだった。

そして謀らずも彼と模擬戦を行う事になった。

まあ半ば強引にそうしたようなものだが・・・。

彼は大剣を使う。

私は騎士として彼と刃を交える事が楽しみで仕方がない。

【3人称side】

一護 vs シグナムの模擬戦を行う為、一同は訓練場へと集まっていた。

模擬戦の噂を聞きつけて一般局員が観覧に来ている。

勿論なのは達隊長陣や、彼女達の教え子で新人魔導師のFWフォワードの面々もいる。

なのは曰く、“見る事も学ぶ事”らしい。

そして、はやてから大まかなルールが伝えられた。

はやて

「ほんならルール説明するで！まあルール言っても勝利条件やけどな！」

まあ具体的なルールは存在しないという事だ。

はやて

「相手を気絶させるか、相手に参ったって言わせるかや！ええか？人とも？」

一護

「いいぜ」

シグナム

「構いません」

そう言っつて準備を始めた。

一護は死神化し、シグナムはバリアジャケットを身に着ける。

そして準備が整った2人は共に武器を構える。

はやて

「模擬戦開始!!」

はやての一言で始まった模擬戦。

先に動いたのは、

シグナム

「ハアアアア!!」

愛用のデバイス『レヴァンティン』を振り上げたシグナムだった。

シグナムは勢いのまま、振り上げた愛剣を一護に向かって振り下ろす。

一護

「くっ!!」

いきなりで少し反応が遅れたが何とか斬撃を食い止める一護。

そしてシグナムの剣を払い退けて斬月を振り上げる。

一護

「今度はこっちの番だ!!」

一護は斬月に自身の霊力を込め、

一護

「月牙天衝!!」

シグナム

「ぐっ!!やはりモニターで見た通り凄まじい威力だ、だが!!」

シグナムは再び一護に斬撃を仕掛ける。

シグナム

「当たらなければ意味は無い!!」

そう、シグナムは月牙を躲していたのだ。

確かに一護の『月牙天衝』は威力こそ大きいスピードは並である。

その為躲す事は比較的容易い。

ただし、これは『始解』の時に限ってだが……

一護

「くっ!! だったら……」

シュン!!

シグナム

「!?!」

一護は『瞬歩』で斬撃を躲し、シグナムから距離を取り、

一護

「本気でいくぜ!!!」

斬月を持った右手を突き出し左手を添えて叫ぶ。

一護

「卍、解！！！」

赤黒い霊圧が目視出来る程に膨れ上がり、その中から先程とは違う死覇装を纏い、漆黒の日本刀を持った一護が現われた。

これが彼の卍解・・・・・・・・その名は・・・・・・・・

一護

「『天鎖斬月』！！」

【シグナムside】

目の前にいる漆黒の戦士。

私にはわかる、奴は強い。

そしてさっきの変化でその強さはより強大なものとなった。

これは少しまずいかもしれんな。

【3人称side】

一護

「卑怯だったか？」

シグナム

「まさか。本気を出してもらわねば困る」

二人は再び向かい合う。

一護

「そうか。だったらいくぜ!」

シグナム

「レヴァンティン、カートリッジロード！！」

2人は互いの技を繰り出す。

一護

「月牙天衝！！」

シグナム

「紫電一閃！！」

2つの技がぶつかり合い、その衝撃で2人は吹き飛んだ。

シグナム

「くっ！！（技の威力が上がっている！？それに速い！！）ならば
！！！」

今度はシグナムが本気を出す。

シグナム

「レヴァンティン、シュランゲフォーム！！」

一護

「なっ!？」

シグナムの掛け声でレヴァンティンは連結刃となり一護を襲う。

一護はそれをギリギリの所で躲す。

本当にギリギリだった為、少し掠っている。

シグナム

「ほう、アレを躲すとは・・・流石だな」

一護

「知り合いに似た様な武器使ってる奴がいたんで・・・」

一護が言っているのは阿散井恋次の斬魄刀『蛇尾丸』の事だが、速さも正確さも恋次のそれより上である。

シグナム

「そろそろ決着をつけようか、黒崎」

一護

「ああ、そうだな・・・」

2人は三度向かい合う。

そして、

シグナム

「いくぞ黒崎!!」

一護

「来い!!」

シグナム

「飛竜一閃!!」

一護

「月牙天衝!!」

互いの技が再びぶつかり合う。

ドゴオオオオン！！！！

凄まじい爆音と共に煙が上がる。

そして煙が晴れると、

シグナム

「フツ、限界だな……」

一護

「俺もだ……」

シグナムは地面に倒れ、一護は片膝を着いている。

2人共肩で息をしている。

シグナム

「どうやら私の負けのようだな……」

一護

「いいのかよ？あんたまだ本気じゃねえだろ？」

シグナム

「ああ。だがそれはお前も同じだろう？それに徐々にスッキリしたからな」

こうして一護 vs シグナムの模擬戦は一護の勝利で幕を閉じた。

t o b e c o n t i n u e d

第6話『刀 vs 剣』（後書き）

一護

「死神化って俺の体どうなるんだ？その辺に置いとくのかよ？」

作者

「プロフィールにも書いて無いけど、設定としては肉体から霊体が出るんじゃないかって、肉体を霊体に変化させるようになってます」

一護

「ご都合主義だな」

作者

「細かい事は気にしない気にしない」

次回『大空の炎 vs 火竜の炎』

第7話 『大空の炎』 vs 『火竜の炎』（前書き）

バトルみじか〜い!!

ただそれだけ・・・

BLEACHとFAIRY TAILって4月からOP変わるの
かな？

ただの独り言・・・

では、どうぞ

第7話 『大空の炎』 vs 『火竜の炎』

【なのはside】

今、私達の目の前でナツ君とツナ君が模擬戦の準備をしている。

それにしてもさっきの一護君の戦いはすごかった。

リミッター付きとはいえ、あのシグナムさんに勝っちゃったんだから。

あの一護君と同じくらい強い……ん、だよな……多分……

140

【3人称side】

なのはが何故そんな心配をしているかというところ、一護の模擬戦から今に至るまでの3人の様子である。

一護やナツは雰囲気から見ても強さが伝わってくる。

しかし、問題はツナにあった。

ツナの雰囲気は戦士というよりむしろ被害者の方がまだしっくりくる感じがするのだ。

これによりなのはだけでなく、六課の面々の心にそんな不安（？）が生まれたという事だ。

だが、そんな不安も一瞬で吹き飛ぶ事になる。

ナツ

「つーか何でオレらが戦う事になったんだ？」

ツナ

「何かはやてが“戦い方が似とるんやったら2人で戦ったらどうや？”とか言ってたから・・・」

そう、ナツとツナは名前だけではなく戦闘方法まで似ているのだ。

それを知ったはやてが“じゃあ2人で！”と言ったのがこの模擬戦の理由だ。

はやて

「ルールはさっきと一緒や！2人共準備は？」

ナツ

「バツチリだ！」

ツナ

「こっちも！」

はやて

「ほないくで、模擬戦開始！！」

ナツ

「本気でいくぜー！！」

ナツがそう言って拳を合わせる。

そしてツナも、

ツナ

「うん……」

ボウ……

超ツナ

「オレもそのつもりだ」

一同

「!!!!????」

その額と拳につけたグローブに炎を燈した。

その姿、雰囲気を見て全員が驚いた。

なのは

「えっ!?あれツナ君!？」

フェイト

「何だろう、何か大きな力を感じる」

そんな驚きを余所に2人は戦闘を始めた。

ナツ

「うおおおお!!」

超ツナ

「ハアアアア!!」

共に炎を纏った拳を連続でふるつ。

そして、2人はバトルステージを空中に変える。

ヴィータ

「何!？」

はやて

「2人共飛んだ!？」

ナツは足から炎を出し、その推進力で空を飛んでいる。

ツナはそれを掌から出す炎でやっている。

そして再び炎の拳が連続でぶつかり合う。

そこでナツが攻撃方法を変えた。

ナツ

「火竜の鉤爪かぎづめ!!」

超ツナ

「がつ!?!」

ナツはツナに向かって炎を纏った蹴りを浴びせた。

ツナはそれをモロに食らい、地面に叩きつけられた。

ナツ

「どうした? 終わりかよ?」

ナツが軽い挑発をすると、

超ツナ

「カンピオ・フォルマ・モード・アタック
形態変化・攻撃モード」

ナツ

「!?!」

ツナが立ち上がった。

その手には重厚な手甲が装備されていた。

それは「すべてに染まりつつすべてを包容する大空」と謳われたボ
ンゴレ? ブリーモ 世の武器……

超ツナ

「『ミディーナ・デイ・ボンゴレ・ブリーモ?』世のガントレット!?!」

ガントレットを装備したツナを見たナツは、

ナツ

「おもしれえ!?!」

自分も炎を全開にしてツナと対峙する。

ナツ

「いくぜ！！火竜の鉄拳てっけん！！」

超ツナ「ビッグバンアクセル！！」

互いの炎の拳がぶつかり合い、火花を散らす。

はやて

「なんちゅう戦いや・・・」

誰もがはやての言葉に心の中で頷いた。

“目の前で繰り広げられている戦いは人間の範疇を超えている”。

それが全員の気持ちだった。

超ツナ

「（予想以上に強い！なら・・・）」

おもむろにガントレットを解除し、右手を前に、左手を後ろに突き出した。

超ツナ
「オペレーションX^{イクス}!!!」

ナツ
「何だ？」

すると、ツナの掛け声を合図にツナの掌の炎圧が上昇していく。

そして、

超ツナ
「X^{イクス} BURNER!!!」

ツナの右手からとてつもない威力の炎が発射された。

ツナの必殺技、X^{イクス} BURNERだ。

その威力は同じ大空の7属性の1つ、『雷属性』の炎が持つ特性、『硬化』によって極限まで硬くなったビルに大穴をあける程である。

本来ならば受け止める事も難しい・・・が、

ナツ

「へッ!!」

一同

「!!!??」

全員がナツの行動に驚愕した。

何故ならX^{イクス}バーナー BURNERを受け止め、更に、

ナツ

「(ゴクン!!)」

超ツナ

「X^{イクス}バーナー BURNERを・・・」

はやて

「食べたやと!?!」

ナツ

「これが異世界の炎か、何か変な感じだな・・・じゃあ・・・お返

しだ！」

超ツナ

「!?!」

ナツ

「火竜の咆哮ほいつう!!!」

超ツナ

「くっ!!!」

ツナの炎を食べたナツは口からイクス BURNERバーナーと同等の炎を吐き出した。

しかしツナはそれを直前で回避した。

彼が持つブラッド・オブ・ボンゴレ『超直感』によるものだ。

彼はこの能力で相手の行動をある程度予測する事が出来る。

超ツナ

「やるな・・・」

ナツ

「お前もな！」

そして再びツナが構えをとる。

ナツも口を大きく膨らます。

超ツナ

「オペレーションX」イクス

ナツ

「火竜の・・・」

2人は互いの力のすべてをそれに込め、技を放つ。

超ツナ

「X」イクス BURNER!!バーナー!!」

ナツ

「咆哮!!!」

2人の全力がぶつかり、2つの異なる炎が大爆発を起こす。

その大爆発によって訓練場が半壊となった為、2人の激闘は呆気なく幕を閉じた。

t o b e c o n t i n u e d

第7話 『大空の炎』 VS 『火竜の炎』（後書き）

作者

「筆が進まない・・・」

一護

「早すぎるだろ!？」

作者

「わかってますよ?まだたったの7話しか投稿してないのは・・・」

一護

「だったら・・・」

作者

「でも春休みの課題が・・・」

一護

「・・・頑張り」

作者

「あいさー」

次回「騒動再び」・・・

第8話『騒動再び…』（前書き）

何気にアクセスを確認してみたらPV20000突破してた！！

ちょっと驚きました（、〇ー”）

お気に入りも22件・・・

いや〜嬉しいかぎりデス（*^| ^*）

皆さんありがとうございます！！

さて今回は模擬戦後です。

では、ごっご

第8話『騒動再び…』

【はやてside】

はやて

「シャーリー、3人の能力はどうやった？」

模擬戦終了後、私はシャーリーに3人の能力解析の結果を訊く。

シャーリー

「3人も能力がバラバラな上にこの世界の魔法とはまた違う能力なので詳しくは解りませんが、魔導師ランクに置き換えると一護さんの最初の時でAAA+、服が変わった時でS+、ナツさんとツナさんは2人とも常にS-でした」

はやて

「なっ、何やて!？」

私は驚愕した。

なのはちゃんとフェイトちゃんみたいな隊長クラスでさえSランク、それに近い戦闘力を持った人が3人もここにおる事に。

シャーリー

「更に、一護さんがシグナム副隊長を倒した技と、ナツさんとツナさんが最後に放った技はどれもオーバースでした」

はやて

「マジか？（これは柵ボタもんや！これだけの戦力があつたら『あの予言』も何とかなるかもしれん！そう言えば予言にあつた『刃』とか『炎』つてもしかして・・・）」

【なのはside】

なのは

「明日の訓練出来るかな？」

ナツ君とツナ君の模擬戦で半壊してしまった訓練場を見ながらそんな事を考える。

すると、

???

「なのはさん……」

フォワードの1人で私の教え子のティアナが話しかけて来た。

なのは

「どうしたの、ティアナ？」

親しい人は彼女の事をティアと呼ぶ。

それはいいとして、どうしたんだろう？

ティアナ

「あの人達は……その……次元漂流者なんですよね？」

どうやら次元漂流者なのにあれだけの能力を持っている事に驚いているらしい。

私もそうだもん。

なのは

「そつだよ。でも自分達の世界でも戦つてみたいなの」

ティアナ

「そうですか・・・失礼しました」

そう言つてティアナは去つて行く。

これがあの子達にとって良い刺激になるといいな。

【3人称side】

医務室

模擬戦をやつた一護、ナツ、ツナ、シグナムの4人は医務室でシグナム、ヴィータと同じ『ヴォルケンリッター』の1人であるシャマルの治療を受けていた。

シャマル

「ハイ、これでいいわ!」

一護・ナツ・ツナ

「「「おお〜」」「」

3人はシャマルの治療の速さに感心。

シグナム

「相変わらず良い腕をしているな」

シャマル

「いえいえ!」

シグナムが賞賛を送り、シャマルが謙遜する。

はやて

「いや〜、それにしても3人ともすごかったな!」

今度ははやてが3人に賞賛を送る。

シグナム

「それが主はやて、黒崎はまだ全力ではないようです」

六課一同

「えっ!?!」

シグナムの発言に医務室が凍りつく。

なのは

「それって本当なの一護君!?!」

はやて

「どっちなんや!?!」

なのはとはやてが一護に詰め寄る。

一護

「あ、ああ。でもあれでもかなり力出した方だぜ?」

はやて

「そりゃあれで“まだ全然力出してない”とかやったら引くで!」
つてかS+で全力じゃない時点でドン引きや!」

一護の答えにはやてが騒ぐ。

ナツとツナも一護の能力の高さに内心引いていた。

一護

「ところでフェイト、そいつらは？」

一護が話題を変えて、フェイトの近くにいたフォワードの方を見て訊く。

フェイト

「この子達はフォワードって言って、私となのはが教導してる新人魔導師だよ」

そう言われフォワードの1人、赤髪の少年・エリオが前に出て挨拶をした。

エリオ

「ライトニング03、エリオ・モンディアルです！よろしくお願ひします！ー！」

一護

「ああ、よろしくな」

ナツ

「おう！」

ツナ

「こちらこそ！」

エリオの挨拶に3人が応える。

フェイト

「模擬戦中ずつとはしゃいでたんだよ。“カツコイイ！！”って」

フェイトが微笑みながら言うと、エリオの顔が赤くなる。

エリオ

「フェ、フェイトさん！？・・・／／／」

フェイト

「フフツ・・・」

エリオの慌てっぷりを見てフェイトはまた微笑む。

そんなエリオを尻目に他のフォワードも挨拶をする。

????

「スターズ03、スバル・ナカジマです!!」

青い短髪の少女・スバルが元気よく、

ティアナ

「スターズ04、ティアナ・ランスターです」

オレンジ色の髪をツインテールにした少女・ティアナが静かに、

????

「ライトニング04、キャロル・ルシエです!」

ピンク色の髪の少女・キャロが精一杯、

三者三様の挨拶をする。

更に、

「???」

「キユクル〜!」

「???」

「(コクッ)」

キャラの使役竜・フリードリヒと青い犬(狼?)のザフィーラも挨拶をするように頭を下げる。

フリードを見て漂流者組は“竜だ!”と驚いていたが、その中でも大きく反応したのは、

ナツ

「竜だ〜!〜!〜!」

フリード

「キユクル〜!〜!〜!」

キャラ

「フ、フリード!」

ナツはフリードに飛び掛かり、キャラはナツの行動にビックリする。

その後、フリードは暫くナツに近づかなかったか……

なのは

「スバルとティアは訓練校の同期生で、今もタッグを組んでるの」

ティアナ

「ただの腐れ縁ですよ。しかたなく組んでるだけです」

スバル

「ひ、ひどいよティア〜」（泣）

エリオ・キャロ

「ハハハ……」

“しかたなく”をやけに強調するティアナの態度に涙目になるスバル。

それを見て苦笑するエリオとキャロ。

ツナ

「明るい人達だね」

一護

「そつだな」

六課の面々のやり取りを見て一護とツナは微笑む。

ティアナ

「そう言えば皆さん歳はいくつなんですか？」

ピシッ！！

ティアナの何気ない質問に再び場が凍りつく。

ティアナ

「えつと・・・」

事情を知らないフォワードのメンバーは戸惑い、事情を知っている隊長陣は笑いを必死で堪える。

そして、

一護・ナツ・ツナ

「だから嘘じゃねえって（ないって）！！！！」

一護

「って言うかさっきもやっただろ、コレ！？」

そして遂にそのやり取りに堪え切れなくなった者が、

はやて

「クツクツ、アツハハハハハ！！も、もうアカン、アツハハハ！！」

はやてが大笑いしていると、漂流者3人が静かにはやてへと歩み寄り、

一護・ナツ・ツナ

「は～や～て～」（怒）「！！」

はやて

「じよ、冗談や冗談！てへっ（笑）！」

一護・ナツ・ツナ

「てへっ（笑）！じゃねええええ（怒）！！！！」

はやて

「ギャアアアアアア！！！！」

集団リンチ（してませんよ）開始。

数分後、

はやて

「ゴメンなさいでした！！！！！」

一護

「ったく！」

なのは

「あ、あははは（苦笑）。はやてちゃん、この後はどうするの？」

全力土下座中のはやてになのはが苦笑しながら尋ねる。

はやて

「色々訊きたい事はあるけど今日は疲れたやろ？せやから今日はこれで解散！話は明日の昼食を時にでも訊かせてもらっわ！」

こつして色々あった（本当に色々あった） 1日は幕を閉じた。

t o b e c o n t i n u e d

第8話『騒動再び…』(後書き)

作者

「ライムズさん作の小説の小ネタ、『外見と実年齢の不一致』使わせて頂きました(笑)」

ナツ

「オレは原作だと年齢不詳だけど、ここじゃルーシィや変態グレイと同年代なんだろう？ だったら不一致じゃなくねえか？」

作者

「一護やツナとの比較で驚かれたんだよ」

ナツ

「巻き添えか・・・」

ツナ

「ドンマイ・・・」

ピンポンパンポーン！

一護

「何だ？」

作者

「お知らせです！この小説では皆さんの感想をお待ちしています！」

ツナ

「何の知らせ!?!」

作者

「いや、あんまり感想来ないから言ってみようかと……」

一護

「何だそりゃ」

作者

「まあ自分もあんまり感想とか書かないし、いっぱい来過ぎても返信出来るかわからないので無理には言いません。」

ナツ

「我儘野郎か……」

ツナ

「読んでもらってるんだからそこは返そうよ」

作者

「善処します」

一護

「俺の経験上“善処します”ってのは最初からやる気の無い奴のセリフだけだな」

作者

「どっかで聞いたようなセリフ……。まあ取りあえず差し支え無ければ感想下さい！」

次回『説明会』

第9話『説明会』（前書き）

文体変えてみました。

見づらかったら言って下さい。

あと、今回は説明会なのですが、だいぶはしょりました。

すみません。

では、どうぞ

第9話『説明会』

【3人称side】

激戦(?)の翌日、一護とツナははやくに用意された部屋で寝ていたが、慣れない環境の所為か目覚めが早かった。

ナツも同じく用意された部屋で寝ているのだが、こちらは環境関係無しに爆睡である。

その後、ナツは一護とツナに起こされ、寝ぼけ眼ではやく達の下へと向かう。

その途中、なのはとフォワード達の早朝訓練を見かけ、少しの間見学していた。

その感想は3人揃って“エ、エグイ・・・”という若干引き気味のものだった。

そして、訓練を終えて疲れきった様子のフォワードと六課の隊長陣を交えて、遅めの朝食(兼昼食)と共に漂流者組の説明会が始まった。

はやて

「よっしや！じゃあ3人の事訊かせてもらおか！」

一護

「わかった。それじゃあ俺から話すか」

まずは一護の説明から……

はやて

「それじゃあまずこの格好と刀について訊かせてんか？」

はやては自身の後ろにあるモニターを指しながら言う。

モニターには死覇装を纏って斬月を担いだ一護の姿が映っている。

一護

「ああ、この服は『死覇装』って言う死神の服で、こっちの刀は『斬魄刀』って言う死神の刀だ」

はやて

「し、死神？」

フェイト

「ね、ねえ一護……一護ってもしかして……」

一護

「ああ、俺は死神代行だ」

なのは

「し、死神って事は……た、魂とか取っちゃうの……かな……」

「

死神と言うワードに六課の面々は若干怯えている。

一護

「いや、そんなんじゃないわ……えっと、魂のバランスで……」

「

）一護説明中（必死）

はやて

「なるほど……つまり一護君の世界の死神っていうのは、この世とあの世の魂を管理する仕事って事なんやな？」

一護

「まあ、そんなとこだ」

一護の説明で死神のイメージが変わったのかさっきまでの怯えの空気が無くなっていった。

はやて

「そっか。じゃあ今度はこの刀……『斬魄刀』やったっけ？それについて話してくれるか？」

一護

「斬魄刀は最初は普通の刀の形をしてんだ。そんでその斬魄刀の名前を呼んで解放したら形が変わったりするんだよ」

スバル

「でも一護さんの刀……普通の形じゃないんですけど……」

一護

「ああ、俺の斬月は『常時解放型』って言ってな、一回解放したらずっとそのまんまなんだ」

一護が自身の斬魄刀特有の能力を語る。

シグナム

「では黒崎、あの服が変わったあれは何なんだ？」

シグナムの質問にシャーリーが反応し、モニターにその映像を出す。

一護

「実は斬魄刀は二段階の解放が出来るんだ。で、さっき説明したのが『始解』って言って、こっちの解放を『卍解』って言うんだ」

エリオ・キャロ

「『卍解』??」「」

エリオとキャロが声を揃えて言う。

その他も首を傾げる。

一護

「卍解は斬魄刀の全能力を解放する事で、中にはその影響で刀の原型をとどめてないやつもあるけど・・・基本的な戦闘能力は始解の5倍〜10倍くらいだったか？」

六課一同

「!!!!!!？」

六課の面々はその上昇率に驚愕した。

一護も最初はそんな感じだったが・・・

はやて

「す、すごいんやな・・・死神って・・・」

一護

「そうか？」

フエイト

「うん、すごいよ。だってさっき一護が説明してくれた戸魂界ソウル・ソサエティって所にはその卍解が使える人がいっぱいいるんでしょ？」

他のメンバーもその戦力を想像してゾツとする。

一護

「いっぱい」って言うても10人くらいだぜ？」

はやて

「そんだけおれば充分やろ・・・」

“10人くらい”という一護の発言に驚きを通り越して呆れるはやて。

一護

「俺が話すのはこれくらいだ」

はやて

「うん、ありがとな一護君」

一護の説明終了。

ナツ

「じゃあ次はオレの番でいいか？」

続いてナツの説明……

はやて

「それじゃあナツ君にはこの『炎』の事から話してもらおうか？」

モニターには先程の一護の時と同じく、ナツの戦闘シーンが映っている。

ナツ

「ああ、この『炎』は『滅竜魔法』って言って、ドラゴンの炎だ」

なのは

「ドラゴン？っていうか『滅竜魔法』って……ナツ君魔法使えるの？」

なのはがナツの魔法というワードに反応した。

ナツ

「使えるぜ！オレは妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士だからな！」

六課一同

「フェアリーテイル？」

今度は全員が聞き慣れないワードに反応する。

ナツ

「フェアリーテイル妖精の尻尾っていうのはオレの世界にある……」

（ナツ説明中）

はやて

「なるほど」。魔導士ギルドか……会社みたいなもんか？」

はやてが自身の推測を述べる。

ナツ

「まああなたがち間違いじゃねえな」

ナツはその推測に対して肯定の意を述べる。

はやて

「そつか。ほんならナツ君の魔法・・・滅竜魔法について話してくれるか？」

ナツ

「滅竜魔法っていうのは簡単に言つとドラゴンを倒す為の魔法で、それを使う魔導士を『ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士』って言つんだ」

キャラ

「ドラゴンを倒す・・・」

フリード

「キユク・・・」

そう呟くとキャラはフリードを庇つみづに自身の後ろへと隠す。

フリードも少し怯えている。

ナツ

「大丈夫だ。オレは仲間は傷つけねえ・・・それに、別にドラゴンが嫌いな訳じゃねえしな」

エリオ

「そんなんですか？じゃあなんでドラゴンを倒す為の魔法なんて・・・」

エリオの疑問はもつともである。

ドラゴンが嫌いじゃないのならば、何故ドラゴンを倒す為の魔法を使っているのかという矛盾が生じる。

ナツ

「それは父ちゃんに教えてもらったからな」

はやて

「ナツ君のお父さん？お父さんがドラゴン嫌いやったとか？」

話題はナツの父親へ・・・

ナツ

「いや、オレの父ちゃんドラゴンだから・・・」

六課一同

「は？？？？」

へんな間が場を支配する。

ナツ

「火竜・イグニールって言うんだ！」

はやて

「イヤイヤイヤ火竜とかイグニールとかじゃなくて……ドラゴンがお父さん？」

ナツ

「ああ、そつだぜ！」

再びへんな間。

はやて

「（え？ドラゴンの息子？ナツ君でドラゴン？イヤイヤどっからどう見ても人間やんか！アレか？変身か？変身しとるんか？人間に変身して一体何を（）」

シグナム

「主はやて、しっかりして下さい」

ヴィータ

「戻って来い、はやて」

長考（混乱？）するはやてを、シグナムとヴィータが現実に取り戻す。

はやて

「ハッ！アカンアカン！しっかりしろ、私！！」

頬を叩いて自分を奮い立たす。

はやて

「ンン！話を戻すわ。ナツ君のお父さんがドラゴンて事は、ナツ君もドラゴンなんか？」

いきなり話の核心を突く。

誰もがその雰囲気緊張していた。

が……

ナツ

「いや、オレは人間だぜ？イグニールは育ての親ってところかな」

その答えはあっさりとしたものだった。

はやて

「なんや、そうやったんか・・・焦って損したわ」

“勝手に焦ったんじゃねえか”と言うつツツコミが有ったとか無かったとか・・・

シグナム

「さっき『火竜』と言っていたが、それで炎を使うのか？」

話は再び滅竜魔法へ・・・

ナツ

「ああ。火を食べばもつと力が出るぜ」

その言葉で一同の頭に浮かんだのは、ツナのX イクス BURNER バーナーを食べるナツの姿だった。

はやて

「ふうん（すごいな・・・デバイス無しであれだけ高威力の魔法を

連発出来るんか・・・(。ありがとう、ナツ君

ナツ

「おう！」

ナツの説明終了。

はやて

「じゃあ最後は・・・」

ツナ

「オレだね」

最後にツナの番。

はやて

「ほんならまずはこの『炎』について・・・これも魔法なんか？」

ツナ

「ううん、この『炎』は『死ぬ気の炎』って言うんだ」

六課一同

「『死ぬ気の炎』???」

ツナ「うん。文字通り死ぬ気になった時に出る炎で……」

（ツナさらに説明中）

ヴィータ

「死んで、生き返って、パワーアップって……デタラメつつうかもはや超人だな」

シグナム

「では沢田、この雰囲気が変わったのは何だ？」

ツナ

「これは死ぬ気化より上の『超死^{ハイパー}死ぬ気モード』って言うんだ」

はやて

「『^{ハイパー}超死ぬ気モード』?」

何やらすごいような名前にはやてが興味を持つ。

ツナ

「これは普通の死ぬ気化と違って内に秘める才能を目覚めさせる事が出来るんだ。オレの場合は『超直感』がそれ」

なのは

「『超直感』?」

ツナ

「そう。それのお陰で相手の考えがある程度読めたりするんだよ」

フェイト

「なるほど・・・だからナツが攻撃を出す前に回避出来たんだね」

フェイトはツナがナツの攻撃を回避出来た理由について納得した。

はやて

「それじゃあ次、このガントレットはツナ君の武器か?」

モニターには重厚な手甲を装備したツナの姿が映し出される。

ツナ

「これは『ボックス匣アニマル』を『カンピオ・フォルマ形態変化』させた姿だよ」

はやて

「ちょい待ち！1個ずつ訊いてくぞ？『ボックス匣アニマル』って何や？」

はやてはまず1つめのワードについて訊く。

ツナ

「それはこれだよ」

そう言っつてツナは自身の指に嵌めている『大空のリングVer・X』を見せる。

リイン

「ライオンさん・・・ですか？」

そう言っつてリインがリングに近付くと、

???

「GAO!！」

リン

「うひゃあ!？」

ツナ

「こらナッツ!！ごめんごめん・・・えっと、これはV^{ボム}G^{レキマ}って言うて、匣^{ボックス}アニマルとリングが融合したもんだ。それでこいつが・・・」

そう言うてツナがリングに炎を燈すと、

ツナ

「オレの相棒、『天空ライオン』のナッツだよ」

ナッツ

「GAO!！」

炎の鬣^{たてがみ}を生やした1匹のライオンが現われた。

六課一同

「・・・・・・・・」

ツナ

「どうしたの、みんな？」

ナッツ

「ガウ？」

六課一同

「か・・・」

ツナ

「か？」

六課一同

「かわいい〜〜〜!!!!!!」

ツナ

「へ？あつ、フェイト！」

ツナが気を抜いた一瞬のスキを突いて、フェイトがナッツを奪い去った。

六課一のスピードを持つ彼女にとっては造作も無い事だが・・・使

い所が・・・ねえ。

数分後・・・

ツナ

「もう！みんなやり過ぎだよ！」

炎が消えるまでナッツを揉みくちやにした一同は、ツナから説教を受けていた。

はやて

「ごめんごめん・・・でもあの子があのかントレットになるんか？」

一同は説教と同時に『カンピオ・フォルマ形態変化』の説明を受けていた。

はやて

「じゃあ最後の質問・・・ツナ君は何者なんや？」

ツナ

「オレは・・・イタリア最強のマフィア・ボンゴレファミリーのボスだ」

六課一同

「・・・・・・・・・・」

少し間が空いた後・・・・・・・・

はやて

「そっか。じゃあこれで終わりや。ありがとつなツナ君」

ツナ

「恐くは・・・・ないの？」

予想外の反応にツナは躊躇いながら訊く。

エリオ

「マファイアって言うのは少し驚いたけど・・・・」

キャロ

「ツナさんを見てると、そんな恐い人のような気がしませんから」

みんながツナに笑いかける。

ツナ

「みんな・・・ありがとう」

ツナは思わず涙ぐむ。

はやて

「フフツ。それじゃあ最後に、3人は何でこの世界に来たかわかるか？」

一護

「俺達は次元の崩壊を止める為にこの世界に呼ばれたんだ」

t o b e c o n t i n u e d

第9話『説明会』（後書き）

作者

「授業が本格的に始まったので、更新遅れます」

一護

「まあ勉強なら仕方ねえよな」

ツナ

「そうだね」

作者

「気持ちとしては4月中にもう1話・・・とっております」

ナツ

「頑張れよ」

作者

「あいさ〜」

次回『日常？』

第10話『日常?』(前書き)

何とか4月中に更新出来ました

でもやっぱりグダグダ(泣)

では、ごきげん

第10話『日常?』

【一護side】

一護

「ふああゝゝ、やっぱりまだ慣れねえな」

朝・・・と言ってもその前に“早”が付くぐらいの時間に目が覚めた俺は大きな欠伸をしてベッドから降りる。

一護

「今日は確か服買いに行くんだっただな」

昨日の説明会の時の事・・・

はやて

「次元の崩壊やて!？」

俺の言葉に驚くはやて。

そりゃそうだ、次元の崩壊って言う言葉に驚かねえ奴はそうそういねえだろ。

一護

「ああ、何でもこの世界と俺達の世界を破壊しようとしてる奴らがいるらしいんだ。俺達はそいつらと戦う為にこの世界に送られたんだ」

なのは

「送られた”って誰に？」

一護

「エレアって言う女なんだけど・・・俺達も詳しい事は知らねえ」

今思えばエレア自身の事はあんまり訊いてなかった。

本当に何者なんだ。

はやて

「・・・実はな、こっちにも似たような『予言』があるんや」

俺が少し考えていると、はやてが話を始めた。

一護

「『予言』?」

はやて

「うん。他の2人は会ってると思うけど、聖王教会って所にカリム・グラシアって人がおるんや」

ツナ

「ああ、あの人?」

ナツ

「あの人がどうかしたのか?」

どうやら2人は知ってるみたいだな。

そのカリムって人の事。

はやて

「カリムには『プロフェーティン・シユリフデイン予言者の著書』って言う能力があつてな、その能力で予言を出したりするんやけど・・・その予言で世界の崩壊っての

があつたんや」

一護・ナツ・ツナ

「「「!!!?」「」

崩壊が既に予言されていた事に俺達は驚いた。

はやて

「その予言の内容には多分やけど一護君らの事もあった。これがもし偶然やないんやったら・・・」

一護

「ああ。俺達は協力すべきだって事だな」

はやての考えは正しい。

ここは協力する以外に選択肢は無い。

はやて

「よし！じゃあ話し合いはこれで終わりや！3人共ありがとうな」

どうやら話は終わったみたいだ。

さて、これからどうすっかな……

はやて

「あ！そつやもつ1つ……3人共着替えどうするん？」

一護・ツナ

「「あ……」」

そつだ。

着替えと言っても俺達が持つてるのは今着てる普段着と配給された隊服くらいしか無い。

フェイト

「それじゃあ明日買いに行かない？車の燃料が切れそつだからそのついでに」

一護

「つつても俺達そんな金ねえし……」

はやて

「それは大丈夫や！昨日のうちに次元漂流者の申請しといたから服
買つくらいのお金はあるで」

“お金の心配はしなくていい！”とはやてが胸を張って言う。

一護

「サンキューな、はやて」

ツナ

「ありがとう」

俺とツナの2人は礼を言うが、

ナツ

「オレはこれ1着ありゃいいから別に気にしなくてもいいぜ！」

ナツは服はいらないと言う。

年がら年中その服つてのもどうなんだと思ったが口にはしない。

はやて

「じゃあ明日は一護君とツナ君の服買いに行こか！フェイトちゃん

1人に任せるんも悪いから私も一緒に行くわ！」

一護

「悪いな、フェイト、はやて」

フェイト

「別にいいよ、全然」

そんなこんなで俺達の服の調達が決定した。

時は戻って現在……

一護

「買物まで結構時間あんな」

買物は昼からだだがそれより7時間程早く起きちまった為に時間潰しを考える。

一護

「じゃあねえな、ちょっとブラブラするか・・・」

そう言っつて俺は普段着に着替え、部屋の外に出た。

【3人称side】

一護

「さすがに人が少なえな」

一護は自分の部屋を出てから食堂、訓練場の順に散策していたが、その間に見掛けた、もしくははすれ違った人は指を折って数えられる程度しかいない。

まだ早朝・・・正確には午前5時16分なのでおかしいかと言えはそうでもない。

一護

「おーやってんな」

訓練場ではフォワードが朝早くから（早過ぎる？）戦技教導官であるのはに扱かれている。

一護はそれを観覧している人物に話しかける。

シグナム

「おはよう。随分早いな黒崎」

一護

「慣れねえとぐっすりっつー訳にはいかねえな。お前も早いけど、アレ手伝わねえのか？」

一護はフォワード達の訓練を指差す。

シグナム

「私は教導とか言う柄ではないからな。教えると言っても近付いて斬れとしか言えん」

一護

「そりやまたザックリした教導だな。斬るだけに」

一護は内心うまい事を言っただつもりだ。

シグナム

「あまりつまいとは思わんぞ」

シグナムから手厳しい評価を得た。

一護

「すまねえ」

一護は何と無しに謝る。

するとそこへツナがやって来た。

ツナ

「おはよう。早いね2人共」

一護

「おはよう。お前もやっぱりまだ慣れねえか？」

ツナ

「そうだね。2日、3日じゃちょっと無理っぽいよ……でも……」

シグナム

「もう1人はぐっすりか？」

ツナ

「多分・・・」

一護

「スゲーなアイツ」

アイツとはここにいないもう1人の漂流者・・・ナツの事だ。

前日もそうだったが慣れない場所での睡眠で早起きの一護とツナに
対してナツは爆睡・・・そして今日も爆睡である。

211

一護

「まあ、朝飯の時には起きてるだろ」

ツナ

「そつだね」

その後、朝食の前にはナツは起きており、訓練が終わって息が上が
っているフォワード達の回復を待ってから食事を取る。

そして昼前……正確には午前11時02分、買物に行く一護とツナは隊舎の前で待っていた。

ツナ

「2人共遅いね」

一護

「仕事あるって言ってたし、有給の申請とかもあるだろうからな。まあ待つてりゃ来るだろ」

ツナ

「あ！噂をすれば……」

2人がなんだかんだ言っているとフェイトが用事を済ませて車を回して来た。

はやても乗っている。

フェイト

「お待たせ」

はやて

「2人共ゴメンな」

ツナ

「別に」

一護

「気にすんな。つかフェイト、本当に車乗ってたんだな」

フェイト

「もしかして信じてなかったの？」

一護

「そつ言う訳じゃねえけど・・・スゲーなって事だ」

フェイト

「ありがとう」

はやて

「ほな行こか」

4人はそのまま車に乗り込み、街へと向かった。

街に着いた4人は手っ取り早く買物を済ませる為に二手に別れて行動する事にした。

組合せは一護・フェイト組とツナ・はやて組である。

この組合せを発案したはやての真意にはツナと2人になりたいと言う目論見があったが、別に異論も無いので誰も反対しなかった。

はやて

「ほな終わったら駐車場集合な」

フェイト

「わかった。じゃあ後でね」

はやて

「うん。後で」

そう言ってツナとはやてはその場から去った。

フェイト

「私達も行くっか」

一護

「ああ。案内よろしく頼むぜ」

フェイト

「任せて！」

一護とフェイトも買物へと向かう。

買物と言っか……俗に言うデート入。

フェイト

「一護はどんな服着るの？」

一護

「特にこだわりはねーよ。どっちかつーと動きやすい方がいいけどな」

フェイト

「ならこっちのお店がいいかな……それじゃあ行くっか」

フェイトは簡単なガイドを見ながら、一護の意見を踏まえて行く店を決定する。

一護

「おっ」

2人は目的の店へと向かった。

買物を済ませた2人は遅めの昼食を取る為にファミレスにいた。

一護

「・・・どうした、フェイト？顔赤いけど・・・具合悪いのか？」

フェイト

「へ！？あ、えっと・・・大丈夫、大丈夫。何でもないよ・・・
／／」

フェイトが何故こんな状態になっているかと言うと、その理由はこ

うである。

まず、一護が買った服をすぐ着ているのだが、それがとてもカッコよく（作者はファッションとか詳しくないので、皆さんのご想像にお任せします）、フェイトがそれに見とれている所に先程と同じ様なツッコミが一護から入る……コレが1つ目。

次に、その一護と並んで歩いているとどうしてもカップルに見られるようで、周りから色々と聞こえてくる……コレが2つ目。

最後に、ファミレスに入ってから色々聞こえてくる……以上3つの理由があったりする。

一護

「じゃあそろそろ行くか」

フェイト

「そ、そつだね」

2人は食事を終わると、少し休憩してから店を後にする。

一護

「そつだ。悪いフェイト、先に駐車場戻っててくんねーか？」

少し歩いたくらいの時に一護が言った。

フェイト

「いいけど・・・どうしたの？」

一護

「ちよっとな・・・すぐ終わっから」

そう言って一護は走り去って行く。

フェイト

「一護遅いな。はやて達もまだだし・・・」

フェイトは1人駐車場で他のメンバーを待っていた。

すると・・・

男 A

「ねえお姉さん、今ヒマ？」

明らかにチャライと言うか、不良と言うかそんな奴らがフェイトに話かける。

男 B

「オレらと遊びに行かない？」

フェイト

「いえ、人を待っているので……」

フェイトは男達の誘いをやんわりと断る。

男 C

「いーじゃん別に……オレらと遊ぼうよ」

フェイト

「だから、結構です」

その後も男達は何度もフェイトを誘う。

フェイト

「しつこいですよ！私はあなた達と遊んだりする気はありません！」

男A

「つべこべ言わずに来い！」

フェイト

「きゃっ！」

男の1人がフェイトの腕を掴み、強引に引っ張る。

フェイト

「離して下さい！」

フェイトは男の腕を振りほどこうとするが、力が強くてそれが出来ない。

男B

「改めて見るとスタイルいいな〜」

男C

「ああ。それにおっぱいもデケ〜」

男A

「言っとくけどオレが最初だからな」

そう言つて男達はゲラゲラ笑う。

フェイト

「（くっ！一般人相手に魔法を使う訳にはいかない・・・でも、こんな奴らにやられるなんて絶対イヤ！誰か助けて・・・助けて、一護！！）」

フェイトは今日1日一緒に過ごした人物に助けを求める。

その時・・・

男B

「痛てててててて！！！」

男の1人が急に痛がり始めた。

全員がその方向に顔を向けると・・・

一護

「はいワン、ツー、スリー……」

フェイトが助けを求めた人物……黒崎一護が男に関節技をかけていた。

男C

「な、何だてめえ!?!」

一護

「イレブン、トゥエルブ、サーテ……」

男C

「てめえ無視してんじぐふう!?!?!」

男の1人が一護に殴りかかるが、一護は瞬時に立ち上がって男に回し蹴りを食らわせる。

男A

「てめえ調子乗ってんじゃねえぞ!?!」

もう1人の男が懐からナイフを取り出し、一護目掛けて突き出す。

フェイト

「一護、危ない!!!」

フェイトが一護の身を案じて叫ぶ。

しかし……

ガシッ!

男A

「!?!?ぐはあっ!!!」

一護は男の攻撃を受け止めて、そのまま男を殴り飛ばす。

一護

「失せる!!!」

男A・B・C

「ひ、ひいい〜」

一護が一喝すると、男達は一目散に逃げ出した。

一護

「ったく。大丈夫か、フェイト？」

フェイト

「う、うん。私は大丈夫・・・一護は？」

一護

「俺も大丈夫だ」

2人はお互いの事を心配するがどちらも大丈夫なようだ。

フェイト

「もう・・・遅かったじゃない」

一護

「悪い悪い。ホイこれ」

一護は謝りながら1つの紙袋をフェイトに渡す。

フェイト

「これは？」

一護

「開けてみるよ」

そう言われてフェイトは紙袋を開ける。

すると、その中には可愛らしいピンクのウサギの時計が入っていた。

フェイト

「じ、これって・・・」

一護

「俺が服選んでる時チラチラ見てただろ？だからそう言うのが好きなかと思って、さっき買って来たんだ。今日のお礼にな・・・気にいらなかったか？」

フェイト

「一護・・・ううん、ありがとう。嬉しいよ・・・／＼／」

一護からのプレゼントを抱き締め、頬を赤く染めながら、フェイトは笑みを浮かべる。

その後、ツナとはやてが戻って来て、4人は六課へと帰った。

t o b e c o n t i n u e d

第10話『日常?』（後書き）

作者

「何とか書けた〜」

一護

「取りあえずお疲れ」

作者

「でもこれでストック無くなったから次の更新はゴールデンウィーク明けかもしれない」

一護

「ならゴールデンウィークに頑張ってストック貯めるよ」

作者

「ラジャー!」

次回『日常?』

第11話『日常?』(前書き)

何とか書けました(疲)

何も言う事はありません……

では、さようなら

第11話『日常?』

【3人称side】

はやて

「ホンマよう似合ってるわ〜」

一護、フェイトと別れたツナ、はやては一護達と時を同じくしてファミレスにいた。

ツナ

「からかわないでよ・・・／＼／」

はやて

「からかってへんよ。ホンマの事やもん」

はやてがツナの服装を褒める。

ツナも一護同様買った服をすぐに着ていて、それがとても似合っている（こちららも皆さんのご想像にお任せします）。

はやてがそれをひたすら褒めるので、ツナも段々恥ずかしくなって

きたのか、少し顔が赤い。

ツナ

「それならはやてだって私服似合ってるよ」

ツナもお返しとばかりにはやての服装を褒める攻撃。

はやて

「そらそうや！私は何を着ても似合うからな！」

効果は今一つのようにだ。

そんなはやての様子を見てツナは肩を落とす。

だが、はやての内心は……

はやて

「（ツ、ツナ君に褒められた！頑張って服選んだ甲斐があったわ・
・／／／）」

“効果は抜群だ”だった。

心臓もバクバクだろう。

だが、はやてはそれを表情に出さない。

これが恋する乙女の駆け引きだろうか（作者もよくわからないけど）。

はやて

「ほんで、この後はどうする？まだ結構時間あるけど」

ツナ

「そうだね・・・もっと街を見て回りたいかな」

はやて

「よっしゃー！じゃあちょっとブラブラしよか！」

そう言って2人は店を後にする。

はやて

「どっか行きたい所とかある？」

ツナ

「うーん・・・本屋とか行きたいかな。どんな本があるのか興味あるし・・・」

ツナが自分の意見を述べる。

はやて

「ツナ君、本とか読むんや・・・」

はやてが多少驚き混じりで発言する。

ツナ

「はやて・・・今ちょっとオレの事バカにしたでしょ？」

はやて

「そ、そんな事あらへんよ。ア、アハハハ・・・」

ツナの言葉を笑って誤魔化すはやて。

はやて

「そ、そやなあ、この辺で本屋やったら・・・アッ」やな

はやては自分の知る本屋へ行くと言ひ。

はやて

「よし、行くうー！すぐ行くうー！」

ツナ

「う、うん」

はやての妙なテンションにツナが若干惑う。

その後、本屋に寄った2人は一通り中を見てから店を出る。

はやて

「何も買わんでよかったん？」

ツナ

「うん。別に今すぐ読みたいのは無かったし、まだこの世界の文字が完璧に読める訳じゃないしね」

一護、ナツ、ツナの3人はミッドチルダの文字をフェイトから教わっている。

3人共ある程度読めるようにはなったが、まだ完璧ではない。

はやて

「まあ、みんな覚えるの早いつてフェイトちゃん言つてたし、完璧に読めるようになる日もそう遠くないやろ」

ツナ

「だと良いけどね」

ツナがこう思うのは自分の過去の事があるからだろう。

今となつては鬼家庭教師のお陰かてきよ（所為？）でその心配も殆ど無くなつたが……

はやて

「じゃあそろそろ戻るか？」

はやてが腕時計を見ながら言つ。

時間は午後6時15分。

ツナ

「うん、そうしようか」

はやて

「えっと駐車場は・・・っ!？」

駐車場までの道順を思い出そうとした時、はやての体に何かがぶつかった時のような衝撃が走る。

何かと思いはやてが前を見ると男が1人走っていた。

はやてのバッグを持って・・・

ツナ

「んな!？」

はやて

「ひ、ひったくり〜!？」

男はひったくりだった。

今時珍しい（そうでもないかな？）。

はやて

「ちょ、ちょっと待て〜!!!!」

ツナ

「え!?! ちょ、はやて!?!」

はやてがダッシュでひったくり犯を追いかける。

はやて

「女の子のバッグを狙うとは……ええ度胸や!!」

速い! そう表すに相応しい程の猛ダッシュで男を追いかけて、その差がどんどん縮まる。

はやて

「待って……言うてるやろが!!!!」

男

「ぐあっ!」

はやての伸ばした手が男の服の襟を掴み、男がこける。

はやて

「ふう。まったく・・・」

はやてが男からバッグを取り戻す。

すると男が立ち上がる。

男

「くそっ!」

はやて

「きゃっ!」

立ち上がった男ははやてを突き飛ばす。

そして懐からナイフを取り出した。

男
「そいつをよこせ!!」

はやて

「な、何を・・・っ!!」

はやての足に痛みが走る。

さっき突き飛ばされた時に足を挫いたようだ。

はやて

「(あかん!こんな時に!)」

男

「よこせっつってんだろ!!」

男の凶刃がはやてに迫る。

・・・が、その刃がはやてに届く事は無かった。

男

「ぐっ!?!」

はやて

「ツ、ツナ君？」

男の伸ばした腕をツナが横から掴んでいる。

ツナ

「フン！」

男

「痛てっ!？」

ツナが男の手首に手刀を放ち、ナイフを落とさせる。

ツナ

「丸腰の女の子相手にナイフなんて・・・物騒だと思っけど?」

男

「な、何だとして「物騒だと思っけど?」!？」

ツナが少しドスの利いた声で男を威嚇する。

ツナ

「どっつするの?」

男

「く、くそっ!」

男がツナにビビって逃げ出す。

ツナ

「はやて、大丈夫?」

はやて

「大丈夫や。ありがとうな、ツナ君」

ツナ

「そう。じゃあ、ハイ」

そう言っておもむろにツナがしゃがむ。

はやて

「??何や?」

ツナ

「はやて、足挫いてるんでしょ？」

どつちらツナははやてが足を痛めているのに気づき、自分が背負つ
と言っているようだ。

はやて

「え、ええよ別に。ツナ君に悪いし・・・」

ツナ

「いいから！」

悪いからとははやては遠慮するが、ツナは構わないと言つ。

はやて

「ゴメンな、ツナ君」

結局はやてが折れて、ツナに負ぶってもらっている形となった。

ツナ

「いいよ別に。はやてはさ、機動六課の部隊長で充分強いかもしれないけど、同時に1人の女の子でもあるんだから・・・誰かに頼るって事をしてもいいんだよ」

はやて

「!?!?!?!?!」

ツナの言葉に顔が真っ赤になるはやて。

はやて

「(・・・最初はちょっとかわいくなっと思ってただけやったけど・・・助けてくれた時はカッコよかったし、ホンマに・・・優しいんやな)」

はやてはツナの人柄に改めて惹かれるものを感じた。

はやて

「ホンマ、ええ人を見つけたわ」

ツナ

「?」

ツナがはやてのその言葉の意味を知る事は無かった。

その後、ツナ達は一護達の待つ駐車場へと着いた。

フェイトがはやての足の怪我を心配していたが、はやては大丈夫だと言ってフェイトを宥める。

4人は車に乗って六課へと戻るが、車内でのフェイトの一護に対する様子を見たはやては……

はやて

「(ツナ君と2人になる為の作戦やったけど……なんやフェイトちゃんにもええようになっただみたいやな」

フェイトの心境の変化を感じ取っていた。

六課隊舎

一護

「・・・何があったんだ、2人共？」

ナツ

「いや、別に・・・」

シグナム

「何があったと言う訳では・・・」

一護の目の前にはやけに服や体が汚れたナツとシグナムがいる。

ヴィータ

「2人共バカだって事だよ」

ヴィータも何故か呆れている。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第11話『日常?』（後書き）

一護

「何とか書けたな」

作者

「ハイ。でもGWの課題に追われてストック1つしか作れなかった・
」

ツナ

「まあ、焦らずにやって行こうよ」

作者

「ハイ。次は日常ナツ編で、その次から本編に入る予定です」

ナツ

「次回はオレが大暴れだぜ!」

次回『日常?』

第12話『日常?』（前書き）

2週間ぶりの更新。

少し遅くなってしまったorz

今回はナツ vs シグナムです。

ナツにオリ技使わせました（笑）

では、どうぞ

第12話『日常?』

【3人称side】

なのは

「はい、じゃあこれで今日の訓練は終了!お疲れ様」

フォワード

「「「「ありがとうございます!」「「「「」

なのはから訓練の終了を言われ、フォワードの4人は礼をする。

ナツ

「スゲーな、アイツら」

ナツが改めて訓練の厳しさと、それをこなすフォワード達に驚嘆する。

ヴィータ

「まあ・・・確かにキツいかもしんねーけどな、今のアイツらにはコレくらいが丁度いいんだよ」

シグナム

「ああ。厳しい訓練をこなせばこなす程に強くなれる。奴らはその可能性を持っているんだ」

ヴィータとシグナムも4人に期待しているようだ。

ナツ

「それにしても、これからどうすっかな」

ナツは何もすることが無い様で、暇そうに呟く。

内心自分も買物に行けば良かったかもと思っている。

シグナム

「丁度いい。暇ならば私と戦え、ドラグニル！」

ナツ・ヴィータ

「「は？」」

ナツの呟きを聞いたシグナムが自分との模擬戦を提案する。

その提案にナツとヴィータがすっ頓狂な声を上げた。

ヴィータ

「お前、何言ってるんだ？」

シグナム

「黒崎と戦って異世界の力に興味湧いてな。他の2人も戦ってみたいと思っていただけだが、その内の1人が暇だと言っただけなら戦おうと思ったただけだが？」

ヴィータ

「……………」

呆れる程シグナムらしい理由にヴィータはそれ以上何も言わなかった。

否、言えなかった。

ナツ

「おもしれえ。やってやるっじゃねえか!!!」

ナツもやる気モードへと突入した。

なのは

「もう。そう言う事は勝手に決めちゃダメだよ」

話を聞いていたなのはが会話に入ってきた。

シグナム

「いいではないか高町。私はドラグニルと戦いたただけだ！」

ナツ

「そうだぜ、なのは。別にいいじゃねえか」

当の本人達はすっかりやる気満々となっている。

ヴィータ

「どーすんだ？なのは・・・」

なのは

「・・・仕方ないなあ。後ではやてちゃんに言っというてあげるけど、やり過ぎはダメだよ？」

シグナム

「感謝するぞ高町。では早速始めようかドラグニル！」

ナツ

「オウ!!」

模擬戦を行うナツとシグナムは訓練場に立ち、それ以外の者は見学スペースへと移動する。

見学スペースにいるのは、なのは・ヴィータ・スバル・ティアナ・エリオ・キャロ・フリードの6人と1匹。

ティアナ

「これから何が始まるんですか？」

なのは

「ナツ君とシグナムさんの模擬戦だよ」

エリオ

「2人が戦うんですか？」

ヴィータ

「まあコレも勉強だからな・・・しっかり見とけよ」

フォワード

「ハアッ！」「ハアッ！」

6人の会話を余所に、ナツとシグナムが模擬戦を始める。

シグナム

「行くぞ、ドラグニル！！」

ナツ

「来いやあ！！」

一護との模擬戦同様、先に動いたのはシグナムだった。

シグナム

「ハアッ！！」

上段に構えた愛剣を振り下ろす。

ナツ

「おらああ!!」

ナツもそれに応戦する為に拳を突き出す。

ガッ!!!

炎の魔剣と炎の拳がぶつかる。

シグナム

「フッ、私の剣を拳で止めた奴はお前が初めてだ」

ナツ

「へへッ、そりゃどー・・・もっ!!!」

シグナム

「くっ!?!」

ナツがレヴァンティンを拳で弾き返し、次いで攻撃に転じる。

ナツ

「火竜の鉤爪!!!」

ナツは炎を纏った蹴りを浴びせる……が、

ガキイイイン!!!

ナツ

「!!!?」

シグナム

「甘いぞ、ドラグニル!!!」

シグナムはレヴァンティンでナツの蹴りを防いだ。

ナツ

「チツ!!!」

ナツは一度シグナムから距離を取る。

シグナム

「（何とか防いだが、蹴りだけであの威力とは……。まともに食らえばマズいな……。）」

ナツ

「よーし！！新技行くぜー！！」

シグナム

「なつ、新技だと！？」

ナツの突然の発言にシグナムは驚愕する。

……が、同時に内心それに対する興味も有る。

ナツ

「火竜の……炎刃^{えんじん}！！！！」

シグナム

「！！！？」

ナツが技名を叫ぶと、その腕から炎が噴き出し、その炎が徐々に刃を形成する。

ナツ

「おっしやー！！成功だ！！」

ナツは技の成功に歓喜する。

シグナム

「フツ、私に剣で勝負を挑むのか？」

ナツ

「色々とおもしれーモン思いついたんだ。悪りいけど付き合ってもらうぜ」

ナツはまだ何かを隠しているような口振りをする。

シグナム

「・・・いいだろう。烈火の将、剣の騎士シグナム・・・参る！！」

ナツ

「行くぜ、おらああああ！！！！」

ガキイイイイン！！！！！！！！！！

ガキイイイン！！！！

ガキイイイイン！！！！！！

2つの刃が何度も交わり、何度もぶつかる。

しかし、この状況も長くは続かないようだ。

その理由はナツの刃……………

シグナム

「どうした？お前の刃……………欠けてきているぞ」

ナツ

「くそっ！！」

ナツの刃……………『火竜の炎刃』は実はまだ不完全なのである。

その刃の形を維持する為にはかなりの魔力と集中力が必要なのだ。

ナツにとって魔力量は問題無い。

だが、この技は“新技”……………つまり“集中し続ける”と言う

経験値が足りないのだ。

さらに、シグナムのような強者との戦いでは尚更それが難しい。

故に形状の維持が続かないのだ。

ナツ

「うわああ、めっちゃ小っちゃくなつたあああ（焦）」

などと説明している間にナツの刃は最初の半分以下の長さとなっていた。

シグナム

「これで・・・どうだっ！！！！」

バアアアアン！！！！

ナツ

「なっ！？」

シグナムの放った斬撃がナツの刃を砕いた。

シグナム

「レヴァンティン、カートリッジロード……」

ナツ

「やべえ……！」

あせるナツに構わず、シグナムが己の技をぶつける。

シグナム

「紫電一閃……！」

……が、ナツがその斬撃を受ける事は無かった。

ナツ

「火竜の……炎壁……！」
えんぺき

ガキイイイン……！！

シグナム

「なっ……？」

シグナムの斬撃を防いだのは、ナツの掌から噴き出す炎が形成した炎の壁だった。

この炎の壁……『火竜の炎壁』はさっきの『火竜の炎刃』と同じく、その形の形成にかなりの魔力と集中力が必要である。

魔力量の件に関しては言わずもがな、集中力の件も今回はクリアした。

何故なら“攻撃を防ぐ”と言う事は“その攻撃に集中する”と言う事だからだ。

更に刃の形状を維持する時のような永続的集中ではなく、攻撃を防ぐ為の瞬間的集中である為、咄嗟の攻防時にもその集中力を発揮する事ができる。

歴戦の魔導士であるナツならば尚更それが可能だろう。

ナツ

「こつちもまあまあ成功かな……じゃあ次だ!」

シグナムの斬撃を防いだナツは再び攻撃に転じる。

その腕にも再び炎の刃が形成される。

シグナム

「お前も懲りない奴だな」

ナツの一本調子な攻め方に、シグナムは呆気に取られる。

しかし、その呆気が次第に焦りと驚きに変わる。

シグナム

「おい、ちょっと待て。何だか・・・大きく・・・ないか？」

ナツの腕に形成されている刃の大きさがおかしい。

どう見てもさっきの比ではない。

優に10倍はある。

ナツ

「行くぜ。火竜の・・・」

シグナム

「殺す気か!!!!」

ナツの冷静(?)な分析に、シグナムは怒りを顕にする。

ナツ

「悪かったって」

その怒りに対して、ナツは軽く謝る。

シグナム

「・・・まあいい。それより続きと行こうか」

シグナムはナツを許し、模擬戦の続きをやるうと言っ。

ナツ

「オレとしちゃあ、そろそろ決着つけようかと思ってんだけどな」

対してナツは決着をつけると言っ。

シグナム

「・・・面白い。やってみせろ、ドラグニル!!!」

ナツ

「行くぜ!!!」

シグナム

「レヴァンティン、シュランゲフォルム!!!」

決着をつけようとするナツを、シグナムは連結刃シュランゲフォルムで迎え撃つ。

ナツ

「うおおおおお!!!!!!」

シグナム

「飛竜一閃!!!」

シグナムの刃がナツに向かう。

ナツ

「滅竜魔法、紅蓮火竜拳ぐれんかりゆほうけん!!!」

ナツはその攻撃に対し、炎の拳の連撃を放つ。

火竜と飛竜がぶつかり合い、小さな爆発が起こる。

その爆発で起こった黒煙が両者の視界を奪う。

シグナム

「くっ！どこだ！」

シグナムは必死にナツの姿を探す。

ナツ

「終わらせるぜ」

シグナム

「っ！？」

シグナムが不意に後ろから聞いた声に振り返ると、そこにはナツがいた。

その両手は猛々しい炎を纏っている。

ナツ

「行くぜ!! 右手の炎と左手の炎を・・・合わせて!!!」

ナツは自身の発言通りに両手の炎を合わせる。

そして、そうやって作り出した巨大な炎を、

ナツ

「火竜の・・・こうえん煌炎!!!」

一気に放つ。

シグナム

「ぐあああああ!!!」

放たれた巨大な火球は、シグナムをいとも簡単に飲み込んだ。

火球が起こした煙が晴れると、そこには肩で息をするシグナムの姿があった。

ナツ

「・・・しぶといな」

シグナム

「ハア、ハア、それ程でもないさ」

ナツも息切れこそしていないが、魔力的にはそろそろ限界である。

ナツ

「どうするんだ？」

なのは

「そこまでだよ」

ナツ・シグナム

「「!？」」

模擬戦の決着をつけたのは、なのはの終了宣告だった。

なのは

「そろそろはやてちゃん達が帰ってくるみたいだから、模擬戦はお
終いだよ」

どつちら買物組が帰ってくるらしい。

シグナム

「そうか……。勝負はお預けだな」

ナツ

「ああ」

ナツとシグナムは互いに微笑む。

見学スペース

エリオ

「ふ、2人ともすごい……」

スバル

「いやー、すっごくはらはらしたよー」

ヴィータ

「お前らもアイツらに追いつけるように頑張るんだぞ」

キャロ

「あの2人に追いつくのはちょっと・・・」

フリード

「きゅく〜」

フォワードのメンバーも模擬戦を行った2人の強さに驚き、感激していた。

ただ1人を除いて・・・

ティアナ

「・・・・・・・・」

六課隊舎

一護

「・・・何があったんだ、2人共？」

ナツ

「いや、別に・・・」

シグナム

「何があったと言う訳では・・・」

ヴィータ

「2人共バカだって事だよ」

はやて

「へへ、模擬戦したんか。どっちが勝ったんや」

なのは

「はやてちゃん達がそろそろ帰るって言うから途中で止めたの。やり過ぎないようについて言ったのに・・・」

ツナ

「あの様って事・・・」

フエイト

「あ、あははは・・・」

はやて

「まあええわ。今日はみんな疲れたやろ？せやから早よ寝や。明日からまたお仕事が待つとるで！」

六課一同

「「「えええ〜〜」」」

一護

「ハハハ・・・」

平和だった。

仲間がいてみんなが笑う。

ただただ平和だった。

この時は誰も知らないだろう。

もうすぐ・・・

運命の歯車が動き出すのを・・・

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第12話『日常?』（後書き）

作者

「予定通り、次回から本編に絡んでいきます。そこで、それぞれの時間軸の説明を・・・」

BLEACH 藍染撃破から1年後

FAIRY TAIL グリモア・ハート 悪魔の心臓撃破後

REBORN! デimon D・スピード撃破から3年後

作者

「です。それにしても、バトルってムズカシイ・・・」

一護

「そう言う小説だろうが」

作者

「この後書きでも特に喋る事無いしな」

ツナ

「急に話題変更!？」

作者

「厚かましいんですが、この小説の感想、誤字・脱字の指摘、本編・後書き等であってほしい事を皆さん・・・」

作者・一護・ツナ・ナツ

「「「「よろしく願います!!!!!」」」」

次回『ホテル・アグスタ』

第13話『ホテル・アグスタ』（前書き）

今回は損長さん、天道さんの小説をほぼパクッタ（？）だけです。

では、ごんぞ

第13話『ホテル・アグスタ』

【3人称side】

部隊長室

一護

「ホテル・アグスタ？」

ツナ

「そこで一体何があるの？」

部隊長室ではやてが一護達漂流者組にある依頼をしていた。

部屋には他になのは・フェイト・ヴィータ・シグナム・リイン・ザ
フィーラの5人と1匹(?)がいる。

はやて

「実はな、ホテル・アグスタで大規模なオークションがあるんやけどな、そのオークションの出品物を『レリック』と勘違いしてガジェットが襲って来る可能性があるんや」

はやては依頼内容を説明する。

ナツ

「『レリック』って何だ？」

ナツが聞きなれない単語について質問する。

なのは

「レリックは『ロストロギア』の一種なの。『ロストロギア』って言うのはね、過去に何らかの原因で消失した、または滅んでしまった古代文明の遺産の事なの」

フェイト

「その殆どが今の技術じゃ造り出す事が出来なくて、使い方を間違えると世界を1つ崩壊させてしまう恐れがあるんだ。それを確保・管理するのが時空管理局の任務の1つでもあるんだよ」

なのはとフェイトがその質問に答える。

ナツ

「ふん」

一護

「なるほどな……。で、俺達に何をしろってんだ？」

はやて

「おお、そやそや。それでそのオークションの警備を機動六課がする事になってな、3人にもその警備に協力して欲しいんやけど、どないやる？」

はやては改めて3人に警備の協力を依頼する。

一護

「俺は別に構わねえぜ」

ナツ

「オレもやってやるぜ」

ツナ

「オレもいいよ」

3人は快くそれを引き受ける。

はやて

「そっか、ありがとうな3人共。それじゃあ早速準備と行こか！」

こうして一護達はホテル・アグスタの警備を協力する事になった。

ホテル・アグスタ 地下駐車場

シャマル

「ハイ、これ」

ホテル・アグスタの地下駐車場で一護とツナはシャマルから2つのケースを渡された。

ツナ

「これは？」

シャマル

「2人の今日の仕事着よ。今日のオークションには地位の高い人達が来てるから、ちゃんとした格好じゃないとね。あと・・・これ、2人の身分証明書。これ失くすと色々大変だから、落とさないでね」

2人はそれを受け取る。

一護

「つーか、ナツはどこ行ったんだ？」

一護はこの場にいないナツの所在を訊ねる。

シヤマル

「ナツ君は外で他の人達と警備をするみたい」

まあ理由は考えるまでもない。

ナツの正装……ありえない。

仮に着たとしても我慢できないだろう。

一護

「んじゃまあ、着替えるとするか」

ツナ

「うん。それじゃあシヤマル、また後でね」

そう言つて2人は渡された仕事着に着替える事にした。

ホテル・アグスタ ロビー

ホテルのロビーではドレスを着たなのは・フェイト・はやての3人が一護とツナの2人を待っていた。

なのは

「2人はどんな格好で来るんだろ？」

フェイト

「2人の事だからきつと似合ってるよ」

はやて

「そつやな。フェイトちゃんとしては、すつごく楽しみやもんな」

はやてがフェイトをからかう。

フェイト

「は、はやて……／＼／」

途端、フェイトの顔が一気に赤くなる。

フェイト

「そ、それならはやてだって楽しみなんですよ？」

フェイトが反撃に出た。

はやて

「っ!?!?……／＼／」

今度ははやての顔が一気に赤くなる。

なのは

「?」

2人の事情をよく知らないのはは会話について行けず、戸惑っている。

そこへ、

一護

「お前ら何やってんだ？」

なのは・フェイト・はやて

「「「！！！！？」」「」

着替え終わった一護とツナがやって来た。

2人共黒いスーツをバッチリ着こなしている。

フェイト・はやて

「「「・・・／／／」」

フェイトとはやては、一護達が醸し出すいつもとは違った雰囲気に見蕩れていた。

一護

「どっした？やっぱ似合ってたか？」

一護はフェイトの顔を覗き込む。

フェイト

「い、いや、何でもないよ。大丈夫、とっても似合ってるよ……
／／／」

一護

「そうか、ありがとな。フェイトも似合ってるぜ」

フェイト

「っ!?!?……／／／」

一護のその言葉で、フェイトはノックアウト寸前まで追いやられた。

しかし、

フェイト

「……あ、あり……がと……／／／」

何とか正気を保つ事に成功した。

ツナ

「はやても似合ってるよ」

はやて

「ありがとうな、ツナ君・・・／＼／」

はやても同じように正気を保っていた。

なのは

「ねえ、わたしはどうかかな？」

なのはも感想が欲しいのか、その場でクルッとターンする。

ツナ

「もちろん似合ってるよ」

一護

「ああ、スゲー綺麗だぜ」

なのは

「にやははは、ありがとう・・・／＼／」

なのはも少し顔が赤い。

が、他の2人は嬉しさ半分、恥ずかしさ半分なのに対して、なのは嬉しさ100%なのだ。

一護

「じゃあ、行くか」

一護がそう言うと、5人はホテルの中に入っていった。

【ティアナside】

ホテル・アグスタ周辺

ティアナ

《ねえスバル》

ホテルの周辺を警備している私はスバルに念話を繋ぐ。

スバル

《ん？何、ティア？》

ティアナ

《あんたって八神部隊長とか副隊長達の事……結構詳しいわよね？》

スバル

《うーん、父さんやギン姉から聞いた事くらいだけど、八神部隊長が使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が『夜天の書』って言う事。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力だった事。で、それにリイン曹長を合わせて6人揃えば『無敵の戦力』って事。ま、八神部隊長達の詳しい出自と能力の詳細は特秘事項だから私もそれ以上は知らないけど……》

ティアナ

《レアスキル持ちの人はみんなそうよね……》

スバル

《ティア、何か気になるの？》

ティアナ

《別に……》

スバル

《そう。じゃあ、また後でね。》

ティアナ

《うん・・・》

スバルとの念話を切る。

ティアナ

「・・・」

念話を切った後、私は改めて機動六課の戦力について考える。

六課の戦力は“無敵”を通り越して明らかに“異常”だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのかはわからないけど、隊長格全員がオーバース、副隊長達でさえニアSランク。

他のメンバーだって、前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。

あの歳でもうBランクを取ってるエリオと、稀少で強力な竜召喚士

のキャロの2人はフェイト隊長の秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

ティアナ

「それに・・・」

特に異常なのは一護さん達・・・

一護さんとナツさんはあのシグナム副隊長と互角に戦った。

そして、ツナさんはそのナツさんと互角。

さらに、後で訊いたら3人共オーバーSランクだったと言う。

結局、何の取柄も無いのは私だけ・・・

けど、そんなの関係ない！！

ティアナ

「（証明するんだ・・・ランスターの弾丸の力を、兄さんの力を！）

私は自身のデバイス、『クロスミラージュ』をグッと握り締めた。

【3人称side】

ホテル・アグスタ内

ホテル内にいる5人は二組に別れて警備を行っている。

一組目は一護・なのは・フェイト。

なのは

「ねえ一護君、死神って普段どんなお仕事してるの？」

なのはは警備のついでに一護に色々と質問する。

一護

「前にも言ったけど、現世……つまりこの世を彷徨つ未成仏の霊魂を尸魂界ソウル・ソサエティに送る『魂葬』ってやつと……後は、『虚ホロウ』退治か？」

なのは・フェイト

「『虚ホロウ』??」「」

なのはとフェイトは、聞き慣れない単語に首を傾げた。

一護

「虚ホロウつーのは……所謂悪霊だ」

なのは・フェイト

「『あ、悪霊!?!?!』」「」

一護

「ああ。一般的に幽霊ゴーストって言われるのが整フラスつって、悪霊とか怨霊オンレイって言われるのが虚ホロウつーんだ」

フェイト

「一言に幽霊ゴーストって言っても色々あるんだね」

一護

「まあ、そう言う事だ」

一護達は、こんな他愛もない会話を繰り広げていた。

二組目はツナ・はやて。

ツナ

「こんな格好するの久しぶりだな」

はやて

「ん？前にもこんな服着た事あるんか？」

ツナ

「うん。3年くらい前にね・・・」

はやて

「へえ〜。どんな理由で着たん？」

はやてがツナに理由を訊ねる。

ツナ

「ごめん、それは言えないんだ」

ツナは理由を話す事を拒んだ。

はやて

「え、何でなん？」

ツナ

「それも言えないんだ……。でも、いつか必ず話すからそれまで待ってて欲しいんだ」

ツナが少々真剣な顔をはやてに向ける。

はやて

「ツナ君……。うん、わかった。待つといたげるわ……。／＼／＼」

はやての顔が赤いのは言うまでもない。

ホテル・アグスタ周辺の森

ホテル・アグスタから数百メートル離れた森の中にフードを被った男と紫色の髪をした少女がいた。

少女の周りには不思議な姿をした小さな虫が蠢いている。

そして、その先には無数のガジェットもいる。

???

「・・・あそこか」

???

「うん・・・」

男の問いに少女が頷く。

その時、1匹の虫が少女の指に止まり、何かを訴えるように体を動かす。

???

「・・・ドクターの玩具が近づいて来てるって」

ホテル・アグスタ 屋上

キュイイイイイン!!!

ホテル屋上で近辺の監視と敵の警戒を行っていたシャマルに異変が起こった。

シャマル

「っ!? クラールヴィントのセンサーに反応! シャーリー!」

シャマルはすぐにロングアーチの回線とクラールヴィントのデータを繋ぎ、敵の情報を詳しく解析してもらう。

ホテル・アグスタ 地下駐車場

ここではシグナム・エリオ・キャロ・ザフィーラが警備を行っていた。

シグナム

「エリオ、キャロ、お前たちは上へあがれ。ティアナの指示でホテル前に防衛ラインを設置しろ」

エリオ・キャロ

「「ハイ!!」」

シグナムはエリオとキャロに指示を出し、2人はそれに従う。

シグナム

「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ」

ザフィーラ

「心得た」

エリオ・キャロ

「「ひゃっ!!?!?」」

ザフィーラが声を出した事に、エリオとキャロの2人は驚いた。

ザフィーラは常に寡黙なので、話せる事を知っている者と知らない者がいる。

2人は後者なのだ。

ザフィーラ

「守りの要はお前達だ。頼むぞ・・・」

エリオ

「う、うん！」

キャロ

「がんばる！」

ホテル・アグスタ 屋上

シヤマル

「前線各員へ！状況は広域防御戦です！ロングアーチ1の総合回線と合わせて私、シヤマルが現場指揮を行います！」

スバル

「スターズ03、了解！」

エリオ

「ライトニング03、了解！」

キヤロ

「ライトニング04、了解！」

ティアナ

「スターズ04、了解！」

各々がシヤマルの指揮に従って外へと向かって行く中、最初から外にいたティアナは、魔力によるアンカーを使ってシヤマルの近くまで行き、前線のモニターをもらって戦闘に備える。

シヤマルが戦闘準備に入ったのをきっかけに、ヴィータとシグナムもバリアジャケットを纏う。

そして、自身の相棒であるデバイスと共に出陣する。

ヴィータ

「新人共の防衛ラインまで1機たりとも通さねえ！速攻でブツ潰す
！！」

シグナム

「お前も案外過保護だな」

ヴィータ

「うるせえよ！！そう言うお前はどつなんだ？」

シグナム

「無論、同じだ。先日のドラグニルとの一戦以来戦えなくてウズウズしているんだ。他の奴等に渡すものか！」

シグナムとヴィータの2人はそのまま空を、ザフィーラは地を奔りながら敵陣へと突入していく。

t o b e c o n t i n u e d

第13話『ホテル・アグスタ』（後書き）

作者

「パラレルワールドバラエティ!!!!」

パチパチパチパチ~~~~!!!

一護

「……一応訊くぞ？何だ？」

作者

「いや、後書きで何しようか迷ってたじゃん？だから簡単にバラエティでしようかとね（笑）」

一護

「読者のみんなから募集してたんじゃないのかよ」

作者

「と、言う事で、第1回目のゲストは朽木ルキアさんです!!」

ルキア

「ど、ど、ど」

一護

「ル、ルキア！？何でお前がここに！？」

ルキア

「いや、この者にゲストで来てくれと頼まれてな。その時に布袋屋の最高級白玉餡蜜を沢山もらったのだ。ここまでされたら来ない訳には行くまい」

一護

「（こいつ物で釣られやがった！？）」

ルキア

「で、何をすればよいのだ？」

作者

「特にまだ何も……」

ルキア

「そうか。では一護、私はこの白玉餡蜜を食べなければならぬので後は頼んだぞ」

一護

「結局俺かよ……。ええ、この小説では、皆様の感想、誤字・

脱字の指摘等をお待ちしてます」

作者

「このバラエティでやることも募集してるので・・・」

作者・一護

「「よろしくお願いします!!」」

ルキア

「（パクッ）」

次回『焦燥と過失』

第14話『焦燥と過失』（前書き）

今回もほぼパクリ(?)です。

すみません、御三方(土下座)

では、ごんご

第14話『焦燥と過失』

【3人称side】

ホテル・アグスタ周辺に大量のガジェットが出現し、外で警備をしていたシグナム・ヴィータ・ザフィーラなどのメンバーを中心に戦闘を開始する。

ヴィータの鉄球がガジェットを貫き、ザフィーラの鋭い攻撃がガジェットに行く手を阻み、シグナムの斬撃がガジェットを押し伏せる。

その戦闘を見ていたフォワード達の心には様々な感情が生じていた。

それは“感心”であり、“驚嘆”であり、“尊敬”である。

しかし、その中に他とは違った感情が存在した。

ティアナ

「これで・・・能力リミッター付き・・・」

“焦燥”。

それがティアナ・ランスターの心を支配した感情だった。

前々から目の前で戦っている者達と自分に力量の差を感じていた。

だが今回の一件でそれが一気に膨れ上がり、焦燥となってティアナを襲う。

そんなティアナの手は無意識に強く握られていた。

ホテル・アグスタ周辺の森

ブウン・・・・・・・・

先ほどからこの戦闘を傍観している男と少女の前に空間モニターが現れる。

?????

《ごきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア》

モニターには1人の男が映っている。

男はこのガジェット関連の事件を起こしている張本人で、以前に一護とガジエットの戦闘を見て不気味に笑っていた次元犯罪者、ジェイル・スカリエツティだった。

ルーテシア

「・・・ごきげんよう」

ゼスト

「・・・何の用だ」

ルーテシアと呼ばれる少女は無表情なまま返事をするが、ゼストと呼ばれる男はあからさまに嫌な顔をする。

その声にも同じ感情が籠もっている。

ジェイル

《冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？あのホテルにレリックは無さそうだが、実験材料としては興味深い骨董があるんだ。少し協力してはくれないか？君達なら実に造作も無いと思うが・・・》

ジェイルは2人に協力を依頼する。

だが、

ゼスト

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ゼストがそれを拒否する。

ジェイル

《……ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないか？》

ルーテシア

「……いいよ」

ゼストと違い、ルーテシアはジェイルの依頼を引き受ける。

ジェイル

《優しいなあ……、ありがとう》

ゼスト

「……………」

ゼストは正直苛立っていた。

目の前のモニターに映る男の飄々とした態度に……………

だがそれを言葉にはしない。

ジェイル

《君のデバイス、『アスケレピオス』に私の欲する物のデータを送
っておいた》

ジェイルはルーテシアが両の手に嵌めている紫色の宝玉がついたグ
ローブを一瞥し、再び彼女に眼を向ける。

ルーテシア

「……………うん。じゃあ、ごきげんよう、ドクター」

ジェイル

《ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ》

ピッッ！

モニターが消え、ルーテシアは準備を始める。

ゼスト

「・・・いいのか？」

ルーテシア

「・・・うん。・・・ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターの事・・・そんなに嫌いじゃないから」

ゼスト

「・・・そうか」

ゼストとの会話を終えると、ルーテシアは魔法を行使し始める。

デバイスの宝玉が輝き、ルーテシアの足元に魔法陣が展開される。

ルーテシア

「我は乞う・・・」

そしてルーテシアは呪文を詠唱する。

キュイイイイイン！！

キャラロ

「!？」

キャラロは自身のデバイス、『ケリュケイオン』を介して自分と同じ召喚士が近くにいる事を察知した。

そしてもう1人……

エリオ

「（何だ？何か嫌な予感がする……）」

エリオも何かを感じ取っていた。

何か、この戦況が一気に不利な方へと向かってしまうような……

そんな何かを……

ルーテシアの魔法陣から奇妙な触手が出現する。

ルーテシア

「小さきモノ 羽撃くモノ 言の葉に応え 我が命を果たせ……。
召喚、インゼクトツーク」

詠唱が終わると同時に触手は破裂し、その中から例の不思議な姿をした羽虫が大量に出現する。

ルーテシア

「ミッション、オブジェクトコントロール。……いつてらっしやい。気をつけてね」

ルーテシアの言葉に反応した虫達はガジェットの方へ飛んで行き、その装甲を傷つける事なく内部に侵入した。

ティアナ
「・・・ん？」

モニターを見ていたティアナが何かに引つかかった。

ティアナ
「（何？ガジェット達の動きが・・・！？）」

そしてある事に気づいた。

ティアナ
「（まずい！動きがよくなってる！！）」

ガジェットの動きがよくなっている。

本来ガジェットは自律稼働なのだが、それが今はシグナム達の攻撃を避けたり防いだりしている。

自律稼働ではそれは不可能なはず……

つまり有人操作に切り替わった……

それにティアナは気づいたのだ。

ティアナ

「全員、警戒態勢に入って!!」

ティアナの指示を聞いた全員が気を引き締める。

その時、

キャロ

「っ!?!遠隔召喚、来ます!!」

キャロの叫びと共に、前方に魔法陣が展開され、そこから大量のガジェット?型と1機の?型が出現する。

エリオ

「あれって召喚魔法陣!？」

スバル

「召喚魔法ってこんな事も出来るの!？」

キャラ

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです!」

ティアナ

「何でもいいわ!迎撃行くわよ!!!」

スバル・エリオ・キャラ

「うん(はい)!!!!」

ティアナの指示で、フォワード部隊が迎撃に出る。

スバルとエリオが先陣を切り、それぞれのデバイス、『リボルバーナックル』と『ストライダー』でガジェットを破壊して行く。

ティアナとキャラもそれぞれの力で2人を援護しながら戦う。

しかし、ティアナが思い切った行動に出る。

ティアナ

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全機落とします！」

シヤマル

《ちょ！ティアナ、大丈夫！？無茶しないで！もうすぐヴィータちやんがそっちに着くから！》

その行動に対してシヤマルから制止が掛かる。

ティアナ

「大丈夫です！毎日朝晩練習してましたから！エリオ、センターまで下がって！」

エリオ

「えっ!?!」

ティアナ

「私とスバルの2トップで行く!!」

エリオ

「あ、はい!!」

シヤマルの制止を振り切ったティアナは、エリオを下がらせて前に出る。

ティアナ

「スバル！クロスシフトA、行くわよ！」

スバル

「うん！！」

ティアナが作戦名を指示すると、スバルがそれに呼応する。

スバル

「いづくぞおおおお！！！！」

スバルが先天性の魔法、『ウイングロード』を発動し、その上を縦横無尽に走り回り、ガジェット達の注意を引く。

所謂囿役だ。

そして、その間にティアナが両手のクロスミラージュのハンマーを2つずつ、計4発のカートリッジをロードして無数の魔力弾を生成する。

ティアナ

「（証明するんだ……。特別な才能やすごい魔力が無くたって、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって……。私は、ランスターの弾丸は……。ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！）」

シヤマル

《ティアナ！？4発ロードなんて無茶よ！それじゃあティアナもクロスミラージユも！》

ティアナ

「撃てます！！！」

そう言ってティアナはその両手に握られた白き双銃を構える。

そして、

ティアナ

「クロスファイヤー……」

生成した魔力弾を一気に撃ち出す。

ティアナ

「シューーーーーーッ！……！！！」

ティアナが撃ち出した魔力弾は次々とがジェットを破壊していく。

その時、事態が急変した。

スバル

「えっ！？」

ティアナ

「っ！！！！？」

1発の魔力弾の軌道が逸れて、それがスバルへと向かう。

これにスバルの思考が停止した。

ティアナ

「スバルーーーーー！！！！！！！」

バアアアアアーン！！！！

ティアナの悲痛な叫びが木霊し、大きな爆発が起こる。

【ヴィータ side】

ヴィータ

「アイツ、無茶しやがって！」

アタシはシャマルからの連絡を受けて、新人達の許へと向かっていった。

その時、1発の魔力弾の軌道が逸れて、それがスバルへと向かって
いるのが見えた。

ヴィータ

「くそっ！！！」

アタシは急いでスバルの許へと向かう。

だがどんなに速度を上げても間に合わない。

ヴィータ

「ちくしょう……」

アタシは自分を呪った……

ヴィータ

「ちくしょう……」

仲間を……大切な教え子を護れない自分を……

ヴィータ

「ちくしょおおおお!!!!」

バアアアアン!!!!

アタシはその爆発をただ見ている事しか出来なかった。

【3人称side】

一護

「これは・・・」

一護は外で起こっている非常事態を感じ取っていた。

が、慌てる様子もなく、ただ静かに佇んでいた。

ツナ

「一護!！」

そこへ一護とは対照的に、慌てた様子のツナがやって来た。

一護

「どうした？」

一護はツナに疑問を投げ掛ける。

ツナ

「どうしたって……。何か胸騒ぎがするんだ。だから早く外へ」

一護

「今から行っても遅えよ」

ツナ

「!?!?」

ツナは一護の発言に驚愕する。

一護

「もう“アイツ”が行ってるからな」

そう言って一護はフツと笑い、外へと眼をやった。

スバル

「……ナツ……さん？」

爆発で起きた煙が晴れると、そこにはスバルを庇い、ティアナの魔力弾を背中で受け止めたナツがいた。

ナツ

「ギリギリセーフだな」

ナツはニカツと笑う。

ヴィータ

「……！お、おいナツ！お前今までどこ行ってたんだ！」

さっきまで呆然としていたヴィータがナツに怒鳴る。

ナツ

「ああ、悪い。寝てた」

ヴィータ

「ね、寝てたって……お前なあ」

ナツ

「なはははは」

ナツは笑ってちやかす。

ヴィータ

「まあいい、取りあえず助かった。ありがとうな」

スバル

「あ、ありがとうございます！」

助けられたスバルと、自分の代わりに教え子を護ってもらったヴィータはナツに礼を言う。

ヴィータ

「それより……ティアナ!!!!」

ティアナ

「!!!!?」

先ほどとは一変、ヴィータの表情が険しくなり、声にも怒りが籠もる。

ヴィータ

「このバカ！！無茶やった上に味方撃つてどうすんだ！！！」

成功する……いや、成功させると誓っていたティアナに、ヴィータの叱咤が重く押し掛かる。

スバル

「あの、ヴィータ副隊長……今のも、その、コンビネーションの一つで……」

スバルがティアナのフォローに入る。

ヴィータ

「ふざける、タコ！！仲間を撃つてコンビネーションがあんのかよ！！それに今のは直撃コースだ！！！」

ヴィータの叱咤がスバルにも飛ぶ。

スバル

「違うんです！今のは私が」

ヴィータ

「うるせえ、バカ共！！……もういい、後はアタシが……！！！」

ヴィータが2人を下がらせようとした時、1機のがジェットがレーザーを放った。

ヴィータ

「しまっ……!!」

反応が遅れたヴィータが防御を試みるが、間に合わない。

その時、

ナツ

「火竜の咆哮!!!!」

ナツの吐く炎がレーザーを飲み込み、そのままガジェットをも焼き尽くす。

ナツ

「説教は後だ……。さっさと片付けようぜ、ヴィータ」

ヴィータ

「ああ、悪い……。後はアタシとナツの2人でやるから、お前ら

はすっこんでるー!」

そう言ってヴェータは、ナツと共に残りのガジェットの破壊に向かった。

ルーテシア

「・・・うん、ガリユー、ミッションクリア。いい子だよ」

森の中でルーテシアはアスクレピオスを介して誰かに話しかけている。

言葉からして、目的の物を手に入れたのだろう。

ルーテシア

「・・・じゃあ、そのままドクターに届けてあげて」

その指示を最後に通信は切れ、足元の魔法陣も消えた。

ゼスト

「・・・品物は何だったんだ？」

ルーテシア

「・・・わかんない。・・・オークションの出品物じゃなくて、密輸品だったみたい」

ゼスト

「・・・そうか」

ゼストはこんな質問をしたが、正直ジェイルがなにを欲しがったかなど興味が無い。

329

ゼスト

「・・・戦いももう終わりだ。前線の騎士達が中々良い戦いをした」

ゼストが今回の戦いの感想を述べる。

ゼスト

「・・・さて、お前の探し物に戻るとしよう」

ルーテシア

「・・・うん」

その後2人は森の奥へと消えていった。

t o b e c o n t i n u e d

第14話『焦燥と過失』（後書き）

作者

「この小説一護メインのつもりなのに、なんかナツの方が活躍する気がする」

一護

「お前がそうしてんだろ？」

作者

「まあ一護の『最後の月牙』に勝てるやつはいねえか（笑）」

一護

「できれば使う時が来て欲しくねえけどな」

作者

「例のバラエティは不定期開催ですので今回は無しです」

一護

「引き続き感想、指摘、要望、質問も受け付けているので・・・」

作者・一護

「」「よろしくお願ひします！」「」

次回『すれ違つ心』

第15話『すれ違う心』(前書き)

最近筆の進みがいいので連続投稿です。

でもその分、質が・・・

と、とりあえず、どうぞ

第15話『すれ違ふ心』

【ティアナside】

防衛戦から数時間後、敵の再襲撃に備えて私達は再度警備を行っていたけど、結局敵は現れなかった。

スバル

「ティア・・・向こう、終わったみたいだよ？」

ティアナ

「・・・私はここで警備してる。あんたはあっちに行きなさいよ」

スバルが私に声を掛けてきた。

けど私はスバルの方を向かなかった。

・・・いや、向けなかった。

誰にも、今の私の顔を見られなくなかったから・・・

スバル

「あのね、ティア……」

ティアナ

「いいから行って……」

スバル

「ティア、全然悪くないよ。私がもつとちゃんと」

ティアナ

「行けつつつてんでしょ!!」

私は……最低だ。

スバルはただ、私を励まそうとしてくれるだけなのに……

私の所為で危険な目に遭ったのに……

スバル

「ごめんね……。また後でね、ティア」

やめて!

あんたがそんな事言わないで！

謝らなきゃならないのは……私なのに……

そう言ってスバルは離れていった。

私は自分のやった事を反省している。

無茶をしてしまった事や、今のスバルに対する態度の事を……

相棒を助けてくれたナツさんや、叱ってくれたヴィータ副隊長にも感謝してる。

だけど……

それよりも……私は……

証明できなかった！

あんなに努力したのに!!

あの時、誓ったはずなのに!!!!

ティアナ

「私は・・・私は・・・」

今の私には、自分の中で溢れる悔しさを抑える術がなかった。

溢れた悔しさは数滴の雫となり、私の頬を伝って地面に落ちる。

ティアナ

「兄・・・さん・・・」

【3人称side】

今回の事件の事後処理が始まり、今はみんなその事件の現場で寛いで(?)いる。

ティアナはと言えば、なのはと共に散歩をしている。

一護

「ナツ」

ナツ

「ん？おう、一護。どうした？」

一護がナツに話し掛ける。

一護

「外で何があったか教えてくれねえか？」

ナツ

「・・・ああ」

ナツは戦いの最中に起こった事を一護に話した。

一護

「・・・そうか。そんな事が・・・」

ナツ

「ああ。アイツが何で焦ってんのかはわかんねえけどな・・・」

一護

「そうか。まあ、さっきなのはティアナと話してたから、多分大丈夫だろ」

一護はなのはならティアナの焦りをわかり、もしかしたら取り除く事が出来るんじゃないかと考えていた。

一護

「ありがとな、ナツ。じゃあな」

ナツ

「おっ」

一護はナツの許から去った。

ツナもまた、ホテル周辺を散策していた。

すると、その眼に2人の男女が映った。

1人は先ほど一護が“焦りを持つ少女を何とかしてくれるだろう”と考えた女性、高町なのは。

もう1人は一見すると女性に見えるハニーブロンドの髪青年。

その2人が楽しそうに会話していた。

ツナ

「誰だろう?」

フェイト

「彼はユーノ・スクライア。なのはの世界を変えた人で、無限書庫の司書長だよ」

ツナの隣にはいつの間にかフェイトが立っていた。

ツナ

「フェイト……」

フェイト

「ユーノは、なのはやはやてと同じで10年来の友人なんだ。私達4人は幼馴染ってとこかな？」

ツナ

「へえ……」

ツナは暫くなのはとユーノの様子を見ていた。

ツナ

「ねえ、フェイト……」

するとツナの口がゆっくりと開かれた。

ツナ

「あの2人って……付き合ってるの？」

フェイト

「……」

ツナの質問にフェイトの表情が暗くなる。

ツナ

「フエ、フエイト？」

フエイト

「・・・多分2人とも両思いなんだろうけど・・・なのは鈍感だし、ユーノは“自分なんか”って身を引いてるの。しかも2人共ワーカホリックだから・・・」

ツナ

「な、なるほど・・・」

ツナは何となく納得する。

その後、事後処理を終えた六課は隊舎に戻ってきた。

流石にその日の訓練は無しとなり、全員休息を取っていた。

ただ1人を除いて……

ティアナ

「ハア、ハア、ハア……」

ティアナは1人必死に訓練をしていた。

体中から流れる汗が自主練の凄まじさを物語っている。

ティアナ

「（こんなんじゃないダメだ！こんなんじゃない……）」

その時、

ナツ

「お前……何やってんだよ」

ティアナ

「っ!?!?」

ナツがやって来た。

ティアナ

「ナツさんこそ・・・何してるんですか？」

ティアナは一瞬驚いたが、平静を装って質問を返す。

ナツ

「・・・お前の事が気になったんだよ」

ティアナ

「!？」

ナツの意外な答えにティアナは再度驚いた。

ナツ

「お前、何焦ってたんだよ？」

ナツは質問を続ける。

ティアナ

「・・・あなたにはわからないわよ。強さを持ったあなたには・・・」

ナツ

「!?!」

今までナツに対して敬語だったティアナの口調が一変した。

ティアナ

「私みたいな凡人は、これくらい・・・うっん、これ以上の事をしないと強くなれないのよ!」

ティアナの口調がさらに強くなる。

ナツ

「バツカみてえ」

ティアナ

「なっ!?!」

ナツ

「才能だなんだってほざいてるやつが、強くなれる訳ねえだろ」

ナツがティアナの考え方を否定する。

ティアナ

「な、なんですって!!」

ティアナの声に怒りが籠もる。

ナツ

「努力する事は悪いことじゃねえ。けどな、それで体を壊したら元も子もねえだろ！」

ティアナ

「っ!？」

ナツ

「そうだったら、ティアナ……。泣くのはお前だけ？」

ティアナ

「……………」

ナツ

「お前だけじゃねえ。スバルや、他のみんなだって悲しむことになんだぞ！」

ナツの口調も自然と強くなる。

ティアナ

「……といて……」

ナツ

「あ？」

ティアナ

「もうほっといて……！」

そう言ってティアナは走り去っていく。

ナツ

「ティアナ……」

ナツはただその遠ざかっていく背中を見つめていた。

一護

「・・・眠れねえな」

一護もまた、ティアナの事が気になって眠れなかった。

そして夜風に当たろうと思い、部屋を出る。

外を目指して歩いていると、明かりの点いた部屋を見つけた。

一護

「こんな時間に・・・誰だ？」

そう思った一護は部屋の中を覗く。

そこには、

一護

「・・・なのは？」

事件後にも関わらず、デスクワークをこなすなのはの姿があった。

なのは

「ん？一護君？どうしたの、こんな時間に・・・」

一護

「それはこっちの台詞だ。お前こそ何やってんだよ」

一護は質問を質問で返す。

なのは

「明日の訓練のメニューを考えてたの。今までの訓練や今日の戦いを参考にしてね」

なのははフォワード達に課せる練習メニューを練っていた。

なのは

「一護君はどうしたの？」

一護

「ティアナの事で、ちょっとな・・・」

なのは

「・・・」

一護の答えになのはは無言で返す。

一護

「なあ、なのは。ティアナに何があったか……教えてくれねえか？」

なのは

「え？」

一護

「本当は本人に直接訊いた方がいいんだろうけど……多分、教えてもらえねえだろうからな」

一護はティアナ本人に訊いても無駄だろうと考え、なのはから訊くことにした。

なのは

「……実はね、原因はティアナのお兄さんにあるんだ」

なのはがティアナの事情を話し始めた。

一護

「ティアナの兄貴？」

なのは

「うん。ティアのお兄さん、ティーダ・ランスターさんは優秀な魔導師で執務官を目指していたの」

一護

「……………」

一護は黙ってなのはの話を聴く。

なのは

「けれど6年前、ティアがまだ10歳の時、任務中に……………」

一護

「亡くなったのか……………」

なのは

「うん。その時に、ティーダさんの上司がティアの前で酷い事言っちゃったの」

一護

「……………訊いてもいいか？」

なのは

「・・・『犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師として有るまじき失態だ。たとえ死んでも取り押さえるべきだった』って。もつと直球に、『役立たず』とか・・・」

一護

「・・・」

一護は何も言わないが、内心憤慨している。

ただでさえ言うべき事ではない上に、それを親族、それもまだ10歳の少女の前で言うなんて、人間のクズ以外の何者でもない。

一護は考えた。

ティアナは兄の事を慕っていただろう。

その兄に対する侮辱、暴言を10歳にして聞いた時、どんなに辛く、苦しかっただろうか。

考えても考え付かない。

……いや、考えたくもない。

そんな思いが一護の心を埋め尽くした。

一護

「……そうか。なのは、ティアナの事……」

なのは

「うん。大丈夫」

一護

「……ああ。おやすみ」

なのは

「うん、おやすみ」

そう言って一護は部屋に戻り、床に就いた。

だが未だ一護の心には蟠りが溢れていた。

そんな状態で眠れる筈もなく、結局一護が眼を瞑る事はなかった。

それから早くも1週間が経った。

一護はなのはが話してくれた事を既に他の2人にも話していた。

ツナも一護と同じく憤慨し、ナツに至っては今にも暴れ出しそうな程だった。

そんな気持ちを1週間経った今も抱えたままだったが、スバルとテイアナがなのはと模擬戦をしようだったので、3人は訓練場に向かった。

ヴィータ

「ん？何だ？遅かったな」

一護

「まあな。今どんな感じだ？」

訓練場の擬似フィールドの1つである『廃墟街』の中のビルの屋上で、ヴィータに今の状況を訊く。

屋上には他にフェイト・エリオ・キャロのライティング分隊がいる。

ヴィータ

「さっき始めたばかりだからな、デケー動きはまだねえよ」

ヴィータが一護の問いに答える。

戦況を見ると、丁度スバルがなのはを攪乱し、その隙にティアナが魔力弾を撃ち出しているところだった。

なのはがリミッター付きとは言え、2人共それに引けを取っていない。

ツナ

「それより・・・何かなのは、無理してない？」

ツナはなのはに何か違和感を感じていた。

それは他の2人も同じだった。

ヴィータ

「最近アイツのスケジュールキツイからな。休めつつっても休まねえし」

フエイト

「それに仕事以外でも訓練メニュー考えたり、ビデオでみんなの陣形チェックしたりしてるから充分に休めてないんだよ」

一護

「なのはらしいな・・・」

一護は1週間前の夜の出来事を思い出す。

エリオ

「なのはさん、訓練中もいつも僕達の事見ててくれるんですね」

キャロ

「ほんとに、ずっと・・・」

なのはは慕われている。

一護は純粹にそう思った。

ナツ

「何かおかしくねえか？」

ナツが何かに気づいたように言う。

目線の先ではティアナが数個の魔力弾を放っている。

ヴィータ

「いつもよりキレがねえな」

フェイト

「コントロールは良いみたいだけど・・・」

戦っているなのは何か気にかかったのか、怪訝な表情を浮かべている。

そんななのはにスバルが真正面から攻め入る。

いつもの2人の戦法ならフェイクを使う。

それを打ち消す為になのはも魔法球を4つ生成する。

しかしそれはいつもの戦法の場合で、今回は違った。

なのは

「っ！？フェイクじゃない！？本物！？」

なのはは少し驚いたが、構わずに生成した4つの魔法球をスバルに放つ。

スバルは歯を食い縛りながら全てをバリアで防ぐ。

そして、そのまま拳をなのはに叩き込む。

スバル

「うおりゃあああああああ！！！」

なのは

「くっ！？」

ガキイイイイン！！！！

なのははスバルの攻撃を間一髪シールドで防いだ。

スバル

「うわっ！？あああああああ！！！」

スバルはなのはに吹き飛ばされ、自身が発動していたウインググロ―ドの上に着地した。

なのは

「こら、スバル！ダメだよ、そんな危ない軌道」

スバル

「うわっ、とお。すみません！でもちゃんと防ぎますから！」

なのは
「？ティアナは？」

なのははスバルに注意しながら、ティアナを探していた。

ナツ
「いた！あそこだ！」

ナツは2〜300m離れたビルの屋上にティアナの姿を見つけた。

ツナ
「あんな所に!？」

フェイト
「砲撃!？ティアナが!？」

ティアナが砲撃を放とうとしている。

しかし、そのティアナの姿が消えた。

エリオ
「あつちのティアさんは幻影!？」

ツナ

「本物は!？」

一護

「!?!?上だ!?!」

その場所とはなのは達の上空。

ウイングロードを利用してなのは達の上まで移動し、銃身から生えた魔力の刃をなのはに向けながら落下して行く。

スバルも同時に攻撃を仕掛ける。

一護

「(なんて無茶な!?!危な過ぎるだろ、ティアナ!?!)」

その時、

ゾクッ!?!!

一護・ナツ・ツナ
「「「!!!?」」」

一護達はとんでもない寒気を感じた。

そして、それを放っているのがなのはだと言う事に気づいた。

ティアナ

「一撃必殺!!!でええええええい!!!」

なのは

「レイジングハート、モードリリース・・・」

なのはとティアナの激突と同時に衝撃と煙が起こった。

ヴィータ

「うおっ!?!」

フェイト

「なのは!?!」

全員がその衝撃に耐えながら、状況を確認する為に眼を睜る。

煙が晴れると、そこには驚愕の光景があった。

なのは

「おかしいな……。2人共……。どうしちゃったのかな……」

なのはは左手でスバルの拳を受け止め、右手でティアナの魔力の刃の刀身を掴んでいた。

両手共素手で……

刀身を掴むその手からは鮮血が流れている。

しかし、一護達が驚愕したのはそれだけではない。

なのはの雰囲気だ。

何も感じられない。

喜びも、怒りも、悲しみも、何も。

なのは

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？練習の時だけ言う事聞くフリして、本番でこんな危険な無茶するんなら・・・練習の意味、無いじゃない・・・」

周りに構わず、なのはは淡々と言葉を連ねる。

なのは

「ちゃんとさ、練習通りにやろうよ。ねえ・・・」

スバル

「あ、あの・・・」

なのはの言葉はとても無機質で、言葉と言うよりも何かの信号のようだ。

感情と言うものが宿っていない。

なのは

「私の言ってる事、私の訓練・・・そんなに間違ってる？」

ティアナ

「・・・くっ!!」

ティアナは後ろに下がって再度攻撃を仕掛けようとしている。

一護

「なっ!?!」

ツナ

「ダメだ!ティアナ!」

一護とツナはティアナの行動に驚愕した。

ティアナ

「私は!もう、誰も傷つけないから!失いたくないから!」

この場にいる全ての者がティアナを知っている。

だから彼女の心の叫びを理解できる。

ティアナ

「強く・・・なりたいんです!!!」

ティアナの眼からは大量の心の雫が零れ落ちる。

なのは

「・・・少し、頭冷やそうか・・・」

なのはは右手の人差し指をティアナに向け、魔法陣を展開する。

そこから先の展開を、誰も信じたくはなかった。

なのは

「クロスファイヤー・・・」

ティアナ

「うわあああああ！！！！ファントムブレイ」

なのは

「シユート・・・」

ドオオオオオン！！！！

ティアナ

「かはっ!!」

なのはが放った6つの魔法球は、惨くも全弾命中した。

スバル

「ティア!!」

ガッ!!!

スバル

「っ!!? バインド!?!」

ティアナの許へ向かおうとするスバルの体にはバインドが掛けられていた。

なのは

「じつとして。よく見てなさい・・・」

なのはは再びティアナに眼を向ける。

ティアナはもはや立っているのも限界のようで、その顔にも生気が感じられない。

とても危険な状態なのがある。

そして、なのははそんなティアナに対して非情にもさらに魔法球を叩き込もうとする。

一護

「くそっ!!」

一護が死神化して飛び出そうとする。

ツナも同じく死ぬ気化して。

しかし、そんな2人の頭に制止が掛かる。

共にある光景を眼にして……

なのは

「クロスファイヤー……シュート」

なのはのが再び魔法球を放つ。

スバル

「ティアアアアアア！！！！」

スバルが悲痛な叫びを上げる。

その時、

ナツ

「火竜の・・・咆哮！！！！！！！」

ゴオオオオオツ！！！！

なのは達の下から強烈な炎が噴き上がり、なのはの魔法球を飲み込む。

なのは

「・・・どう言うことかな、ナツ君？」

なのはは炎の噴出源であるナツに視線を落とす。

ナツは無言のまま上にあがって、ウイングロードに立つ。

スバル

「ナツ・・・さん？」

ナツはまた無言のままスバルを見る。

そして、その視線をティアナへと移す。

ティアナ

「・・・ナ・・・ツ・・・」

今にも消えそうな声でナツを呼ぶティアナ。

ナツはそれを一瞥して、視線をなのはに戻す。

その拳を強く握り締め・・・

なのは

「!？」

その瞳の奥に確かな怒りを宿しながら……

ナツ

「なのはあああ
」

“魔導士”と“魔導師”がここに対峙した。

t o b e c o n t i n u e d

第15話『すれ違つ心』（後書き）

作者

「パラレルワールドバラエティ!!!!」

一護

「またかよ」

作者

「このバラエティは、私が書こうかな?と思った時のみに、好きなようにテキストに書くバラエティです」

一護

「そんなバラエティ見たくねえよ」

作者

「では早速今回のゲスト、グレイ・フルバスターさんの登場です
!!!」

グレイ

「・・・どこだ、ここ?」

ナツ

「ん？何でここにグレイがいたよ？」

グレイ

「ああ？てめえになんか迷惑がかんのかよ？」

ナツ

「ああ、迷惑だね。うぜエー！！」

グレイ

「てめえ今うぜエつつたか！！？このクソ炎！！！」

ナツ

「超うぜエよ、変態野郎！！！」

ケンカ開始……

一護

「どつすんだよ、コレ」

作者

「感想、指摘、要望、質問まっています。よろしくおねがいします」

一護

「（無視しやがった！？しかも最後の方言えてねえ！？）」

よろしくお願いします……

次回『怒りの爆炎！ナツ vs なのは』

第16話『怒りの爆炎！ナツ vs なのは』（前書き）

ついにナツ vs なのはです。

でも結構短いです。

最近自分が書く一護がなんか大人な感じがする。

（ - - ; ）

修行後一護を意識してるかも・・・

それとツナの台詞が少ない・・・

これもどうしたものか・・・

取りあえず、どうぞ

第16話 『怒りの爆炎！ナツ vs なのは』

【ナツside】

オレは信じていた。

信じてたなんておこがましいかもしれないが、それでも思ってた。た。

こいつなら、なのはなら、ティアナの悲しみを、焦りを拭い去ってくれと。

一護もそんな事言ってたっけ……

でもそれは間違いだった。

拭い去るところか、その焦りを加速させちまった。

これに関してはオレ達も同罪だろう。

だがアイツはやっちゃいけねえ事をやっちゃった。

ティアナの撃隊。

何でだよ……

何で傷つけられるんだよ！

仲間じゃねえのかよ!!

オレはムカついた。

オレは腹が立った。

オレは……怒りが溢れた。

目の前の女……

高町なのはに対して……

【3人称side】

なのは

「もう一度訊くけど・・・どう言う事かな、ナツ君？」

なのはは再度ナツに問いかける。

ナツ

「・・・スバル」

スバル

「!？」

ナツは口を開く。

だがそれはなのはの問いに対してではなく、スバルに対してだった。

ナツ

「ティアナを医務室に連れて行け」

スバル

「でも……」

ナツ

「行け」

スバル

「っ!?!?……うん、わかった」

ナツの静かな口調が、スバルは逆に怖かった。

スバルは素直に従い、ティアナを連れて訓練場を出る。

なのは

「ねえ……私の言葉、聞いてる?どう言う事「なあ」?」

なのはの再三の問いを遮り、ナツがなのはに対して口を開く。

ナツ

「何……やってんだよ」

なのは

「何って・・・教導じゃない」

ナツ

「教導・・・だと・・・」

ナツの拳は再び強く握られる。

ナツ

「オレは正しい教導がどんなもんかしらねえ・・・。けどな、お前のそれが正しいとは思わねえ！こんなもんは教導じゃねえ！！ただの暴力だ！！！」

ナツが口調を荒げる。

なのは

「ナツ君がどう思おうと関係ないよ・・・。これが、私のやり方・・・」

ナツ

「アイツも相当なバカだけど・・・お前はもつとバカだ！！」

言葉だけを聴くと子供のケンカだ。

だがこの場にそんな幼稚なモノは存在しない。

あるのは……

なのは

「どうしても邪魔するなら……ナツ君も、頭冷やそうか？」

互いの持つ……

ナツ

「冷やせるモンなら冷やしてみる……悪りいが火竜の炎は、ちよつとやそつとじゃ消えねえぞ！」

意地と意地のぶつかり合い。

ガシャン!!!

なのははナツに自身のデバイス、『レイジングハート・エクセリオ』を向ける。

ナツも同時に拳を構える。

しかし、どちらも動かない。

すると、発動者がその場を離れた事により、ウインググロードが徐々に消え始めた。

そしてそれが完全に消えた時、2人が動く。

ナツ

「おおおおおおお！……！！！」

足場が無くなったナツは、足の炎のブーストで空を飛び、なのはに拳を叩き込む。

なのは

「くっ！？」

ガキイイイイン！！！！

なのはは咄嗟に張ったバリアでナツの攻撃を防ぐ。

だが、

ナツ

「火竜の炎肘えんちゆう！！！」

バリイイイイン！！！！

なのは

「っ！？」

ナツは肘の炎のブーストで打撃力を上げ、なのはのバリアを砕く。

なのは

「っ！！」

なのははナツと距離を取る為に後方へ下がる。

なのは

「じれで……びび……」

なのははナツにバインドを掛けようとする

が、

ナツ

「火竜の・・・けんかく剣角！！！」

ナツは足の炎のブーストの出力を上げてそれを躲し、全身に炎を纏ってなのはに突撃する。

なのは

「くっ！！！」

なのはは間一髪でそれを躲す。

そして再びナツから距離を取る。

なのは

「クロスファイヤー・・・」

なのははティアナの時のように魔法球を生成する。

だがその数はティアナの時より遙かに多い。

なのは

「シユート!!」

なのはは生成した魔法球をナツに放つ。

数十個の魔法球がナツに迫る。

ナツ

「紅蓮火竜拳!!!!!!」

バババアアアアン!!!

ナツはその魔法球全てに炎の拳を叩き込み、爆発させる。

なのは

「っ!?!これもダメなの!?!」

なのははナツの強さを知っているつもりだったが、その攻撃力、機動力、手数之多さ、全てがなのはの予想の範疇を超えていた。

なのはが掛けたバインドによって。

なのは

「捕まえた……」

ナツ

「くっ!!」

なのはは一気にナツに近づき、再びレイジングハートに4つの環状魔法陣を展開させる。

なのは

「デイベイン……バスタアアアア!!」

ドカアアアアア!!

ナツに砲撃が命中する。

しかも、たった数メートルの距離から。

なのは考えていた。

“いくらナツでもこれは耐えられないだろう”と。

しかし、その考えは間違っていた。

なのは

「!？」

ナツ

「へへっ！ぜんっぜん、効かねえなあ！」

なのはの目の前には、未だ足の炎のブーストで宙に浮くナツの姿があった。

しかし、効かないとは言っているが、その言葉の半分は嘘だ。

なのは

「いつまで……」

ナツ

「ああ？」

なのは

「いつまでそうやって邪魔するつもりなの!？」

ナツ

「何度だって邪魔してやるよ。お前が間違いを犯し続ける限りなあ
!！」

ナツは自分の意思をなのはにぶつける。

なのは

「・・・ないくせに・・・」

ナツ

「？」

なのは

「何も知らないくせに、私の邪魔しないで!！」

ナツ

「なのは・・・」

なのはの心が段々と表に出てくる。

さらさら、

ヴィータ

「そっだー!!」

ナツ

「!?!」

ヴィータも自分の心そのままに叫ぶ。

【ヴィータ side】

ツナ

「スバル！ティアナ！」

傷だらけのスバルとティアナがアタシ達の許へと戻ってきた。

一護

「ツナ！2人を早く医務室に！」

ツナ

「わかった！」

エリオ

「僕も行きます！」

キャロ

「私も！」

ツナ・エリオ・キャロの3人が傷ついた2人を医務室へ運ぶ。

フェイト

「ダメ！なのはに念話を送っても、無視して戦ってる！」

フェイトはなのはに念話を繋ごうとするが、なのはがそれを無視していて繋ぐことが出来ないらしい。

ヴィータ

「ナツのやるつ、何考えてやがんだ!」

アタシは勝手に飛び出していったナツの行動がわからなかった。

その時、

なのは

「いつまでそうやって邪魔するつもりなの!？」

なのはの叫びが聞こえた。

ナツ

「何度だって邪魔してやるよ。お前が間違いを犯し続ける限りなあ
!!!」

次にナツの叫びが聞こえた時、アタシの心が微かに騒めいた。

さらに、

なのは

「何も知らないくせに、私の邪魔しないで!!!」

再びなのはの叫びが聞こえた。

より心の奥底に近い叫びが……

アタシはなのはの心を知っている。

だからなのはの気持ちが痛いほどわかる。

その瞬間、アタシの心に、なのはと対峙するナツに対する怒りの感情が芽生えた。

ヴィータ

「そっだー!!」

ナツ・一護・フェイト

「「「「!!!!」」」」

気づいたらアタシは心そのままに叫んでいた。

【3人称side】

ヴィータの叫びが訓練場全体に響く。

ヴィータ

「お前になのはの何がわかるんだ！お前がなのはの何を知ってるんだよ！！！」

ヴィータの叫びは続く。

ヴィータ

「何も知らねえテメエが、つべこべ言ってるじゃねえ！！！」

ナツ

「うるせえええええ！！！」

なのは・ヴィータ

「！！！！？」

突然ナツが叫びを上げ、なのはとヴィータが少し怯む。

ナツ

「何でもわかってなきゃ仲間じゃねえのか？」

ナツは思い出していた。

以前、同じ台詞を吐いていたバカな仲間を。

だから、その時と同じ言葉を連ねる。

ナツ

「知らねえから互いに手を伸ばすんだろオ！！！！！！」

なのは・ヴィータ

「っつ！！！！？」

ナツ

「オレはお前らの事なんか知らねえ。だったら聞かせろよ！お前らの事！！聞けよ！オレの事を！！」

ナツは叫ぶ。

ナツ

「オレ達は・・・仲間だろうか!!!」

なのは・ヴィータ

「!!!?」

ナツ

「一護も、ツナも、スバルも、ティアナも、フェイトも、エリオも、キャロも、フリードも、はやくも、シグナムも、リインも、他のやつも・・・みんな大事な仲間だろうかああああ!!!」

その叫びでヴィータの怒りは消え去り、なのはの心が穏やかになり始めた。

ナツ

「来い!!!なのは!!!お前の全力を、お前の思い全部を、オレにぶつける!!!」

なのは

「なっ!?!」

ナツ

「お前の怒りも、悲しみも、苦しみも・・・オレが全部受け止めて

やる!!!!!!!!!!!」

なのは

「ナツ君……」

なのはレイジングハートをナツに向ける。

その顔は涙で溢れている。

なのは

「全力全開……スタールイト……」

なのはは放つ……

自身の最大の砲撃を……

なのは

「ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

だがそれはナツを倒す為ではなく、自分の思いを伝える為。

「ハア、なの……は、ハア、ハア、お前の……気持ち、ハア、ハア、しつかりと……受け取った……ぜ……」

そのままナツは気絶し、地面へと落下した。

なのは

「ナツ……君……」

なのはも同様に気絶し、落下する。

ヴィータ

「ナツ！なのは！」

フェイト

「早く2人も医務室に！」

ヴィータとフェイトが2人に駆け寄る。

一護

「（カッコよかったぜ、ナツ……）」

一護はナツに賞賛を送り、フェイト達に続いた。

こうしてナツ vs なのはの戦いは終わった。

六課 医務室

なのは

「ん、うん」

激戦から数時間後、なのはがベッドの上で眼を覚ました。

なのは

「ここ・・・は」

シャマル

「眼が覚めた？」

シャマルがなのはに声をかける。

なのは

「シヤマル・・・さん」

シヤマル

「よく眠ってたわね。もう夕方よ？まあ、いつも夜遅くまで起きてたからちようどよかったんじゃない？」

なのは

「わ、私そんなに寝てたんですか!？」

なのははその事実には驚いた。

シヤマル

「シィーッ！あんまり大きな声出さないで。横にティアナがいるしね」

なのはが横を見ると、隣のベッドでティアナが眠っていた。

なのは

「っ！ごめんなさい！それじゃあ私は・・・」

そう言ってなのはがベッドから起きようとする。

シヤマル

「まだ寝てなきゃダメよ！疲労が溜まってるのに……」

シヤマルがそれを止めようとする。

なのは

「大丈夫ですよ。それに、ここにはい辛いし……」

なのはは横目でティアナを見る。

冷静になった事で自分の犯した過ちの大きさをなのはは痛感していた。

一護

「いいから、そのまま寝てろよ」

そこへ一護がやって来た。

なのは

「一護君……」

一護

「……………」

一護は無言のままなのはのっぴきらない。

なのは

「私、間違ってたのかな？」

なのはは一護に問いかける。

一護

「ああ、間違ってたな」

なのは

「っ!!」

一護

「お前はティアナの心を知ってた。なのにお前はそのティアナの心を否定したんだ」

なのは

「……………」

なのはは一護の話を黙って聞く。

一護

「ティアナと話をする事も出来たのに、お前はそれもしなかった」

一護は淡々と語る。

一護

「確かにティアナのやり方は間違ってたかもしれない。でも、だからってそれを真っ向から否定するのも間違ってる。俺は思っぜ？」

なのは

「・・・そっだよな」

なのははもう一度ティアナを見る。

一護

「まあ、それを教えてくれたナツに感謝するんだな」

なのは

「・・・うん」

なのは自分の心を受け止めてくれた人物を思い出す。

なのは

「私、ナツ君に酷い事言っちゃったね・・・」何も知らないくせに
つて・・・」

なのはは自分の失言を深く反省する。

なのは

「ナツ君・・・怒ってるかな？」

一護

「アイツはもう怒ってねえよ」

なのは

「え？」

一護

「アイツ言ってたろ？」お前の気持ち、しっかりと受け取った』っ
てな」

なのは

「・・・うん。そうだね」

なのははその時の事を思い出し、少し微笑む。

なのは

「ナツ君は？」

一護

「アイツの回復早くてな、今はお前と戦った事をはやてにこってり絞られてるよ」

なのは

「・・・その件も謝らないと・・・」

一護

「そんなに気にする事ないと思うぜ？」

なのは

「どっしして？」

なのはは一護の言葉の意味がわからず首を傾げる。

一護

「アイツ、さっきはやてに説教されてる時……」

ナツ

『オレはティアナを、なのはを救いたかったただけだ。2人共オレの大事な仲間だからな。これでアイツらがちよつとでも救われんなら、怒られようが叱られようが後悔はねえよ』

一護

「って言ってたからな」

なのは

「……そっか」

なのはは再び微笑む。

一護

「まあ、お前の気持ちの整理がいたら、お前の事訊かせてくれよ。じゃあな」

そう言って一護はその場から立ち去るつとす。

なのは

「ねえ、一護君……」

一護

「……」

なのはが一護を呼び止め、一護は振り向く。

なのは

「私の話……聞いてくれる？」

一護

「……ああ」

なのはは自分の過去を明かし始めた。

昔、無茶をし過ぎて重傷を負った事や、それが原因で生死の境を彷徨った事を。

なのは

「これが私の過去……」

一護

「……そうか、ありがとな。その話、他のやつにも話してやれよ。もちろん……」

そう言っつて一護はティアナを見る。

一護

「ティアナと……ナツにもな」

なのは

「……うん」

一護

「じゃあな」

一護は医務室を出ていった。

なのは

「ふう……」

シヤマル

「なのはちゃん、何か肩の荷がおりたって顔してるわよ」

なのは
「そう・・・ですか？」

なのはは思い出していた。

ナツ

『オレ達は・・・仲間だろうが!!!』

ナツ

『お前の怒りも、悲しみも、苦しみも・・・オレが全部受け止めてやる!!!』

自分の心を救ってくれたナツの言葉を・・・

なのは

「（ありがとう・・・ナツ君）」

なのはは心の中でナツに感謝した。

その頬を朱色に染めながら・・・

ティアナ

「ん、うん」

ティアナも医務室のベッドで眼を覚ました。

その隣のベッドにいたなのはは数十分前に医務室を出ていた。

シャマル

「あ、おはよう、ティアナ。よく眠れた？」

ティアナ

「え・・・あ、はい」

シャマル

「普段から無理してたみたいね。もう夜よ」

ティアナ

「えっ！？わ、私そんなに眠ってたんですか！？」

ティアナもまた、なのは同様に驚く。

シャマル

「何があつたか覚えてる？」

ティアナ

「あ……はい」

ティアナは今日の出来事を思い出す。

ティアナ

「あの、シャマル先生……あの後、どうなつたんですか？」

シャマルはナツとなのはが戦ったことを話した。

ティアナ

「そんな事が……」

ティアナは深く反省した。

シャマル

「ちゃんと2人に謝ろうね」

ティアナ

「・・・はい」

ティアナは静かに頷き、医務室から出ようとする。

その時、

ウ~~~~~~~~!!!

スクランブル
緊急出動のサイレンが六課内に響き渡った。

t o b e c o n t i n u e d

第16話『怒りの爆炎！ナツ vs なのは』（後書き）

作者

「前書きの事について……どっと思っっ？」

ツナ

「まあ、できれば台詞欲しいけど……」

作者

「一護の性格は？」

一護

「どっでもいい……」

作者

「じゃあ頑張って台詞作ろっ！」

ツナ

「……お願いします」

作者

「次回はナツがすごい事になります」

ナツ

「オレどうなるんだよ……」

作者

「まあ、気にするな（笑）」

ナツ

「……」

作者

「感想、指摘、要望、質問も待ってます」

作者・一護・ナツ・ツナ

「「「「よろしくお願いします……」」」」

次回『ふれ合っ心』

第17話『ふれ合う心』（前書き）

予定通りナツが大変な事に……。

残念ながらこの件に関しては文句は受け付けません（笑）

では、ごきげん

第17話『ふれ合う心』

【3人称side】

六課 ヘリポート

現在、ヘリポートには緊急出動を受けた六課メンバーと漂流者3人が集合していた。
スクランブル

はやて

「東部海上にガジェットドローン？型が12機飛行中。レリック反応が付近に無いからその目的は不明。増援の様子は見られへんけど、油断は禁物。さらに前回より速度が上がつとる事から苦戦を強いられるかもしれへん」

はやてが出動内容を説明する。

なのは

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人」

フェイト

「一護達はもしもの時の為にフォワード達と一緒にロビーで待機ね」

一護

「わかった」

ナツ

「チエツ！つまんねーの」

ツナ

「数時間前までボロボロだった人が何言ってるの!？」

一護は了承、ナツは落胆、ツナはツッコミをそれぞれ見せる。

ヴィータ

「そっちの指揮はシグナムだ。留守は頼んだぞ」

エリオ・キャロ

「「ハイ!！」」

スバル・ティアナ

「「はい・・・」」

ライトニングの2人は返事に声を張るが、スターズの2人はそれを

しなかった。

……いや、出来なかった。

1人は相棒を心配して。

1人はその場にいるのが気まずくて。

なのはそんな少女達の心境を察してある命令を下す。

その言葉が少女の心を再び掻き立てる事になるとは知らず……

420

なのは

「ああ、それからティアナ……。ティアナは出動待機から外れと
こうか」

ティアナ

「っ!?!」

スバル・エリオ・キャロ

「っ!?!?!?!?!」

一護

「……………」

新人の4人はなのはの言葉に耳を疑った。

そんな中、一護が何かを感じ取り、1人静かにへりへと近づくと。

????

「ん？どうした、一護？」

へりの近くにいた男性がそれに気づき、一護に声をかける。

一護

「ヴァイスさん、俺の頼み……聞いてくれねえか？」

一護が自分の考えを話す。

ヴァイス

「わかった。いいぜ、それくらい」

ヴァイスと呼ばれる男性は一護の提案を聞き入れる。

一護

「悪いな……」

一護とヴァイスが何かを画策しているのを余所に、事態はさらに悪化の一途を辿っていた。

ヴィータ

「その方がいいな。そうしとけ」

フェイト

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうしね」

ヴィータとフェイトもなのはの提案に賛成する。

ティアナ

「言う事聞かないや奴は……使えないって事ですか？」

ティアナはいかにも納得できないと言うような雰囲気を見せる。

なのは

「自分で言っていてわからない？当たり前的事だよ、それ」

なのははティアナの事を思い、心を鬼にして言う。

だがこれが間違いだった。

ティアナ

「現場での命令や指示は聞いてます！訓練だつてちゃんとサボらずにやっています！それ以外の場所での努力まで教えられた通りじゃないとダメなんですか！？」

なのはの言葉を受け、少女の思いは爆発した。

ティアナ

「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルも無い！一護さん達みたいな強さも、力も無い！！！」

その勢いは氾濫する河川の如く、止まる所を知らない。

一護

「・・・ヴァイスさん」

ヴァイス

「・・・あいよ」

一護はそんなティアナを横目に捉えながら1人へりに乗り込む。

ヴィータ

「お前・・・!!」

ティアナを黙らせようと前に出るヴィータに、なのはが無言で手を翳す。

ティアナ

「少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんなれないじゃないですか!!!」

その言葉にとうとうシグナムがキレた。

その口を黙らせようと拳を振り翳す。

そして、その拳をティアナに向かって振るう。

が、

ガシッ！！！！

シグナム

「っ！？」

シグナムの拳を受け止める者がいた。

シグナム

「何をする、ドラグニル！！」

ナツだ。

ナツ

「言っただろ、オレは仲間が傷つけられるのが嫌いだってな」

バッ！！！！

シグナムが自分の拳を掴むナツの手を振り払う。

シグナム

「貴様がどう思おうが勝手だが、わからない奴は殴ってでもわからせるのが私のやり方だ!!」

ナツ

「そいつが間違っただけなら、オレだって力尽くでそいつを黙らせるさ。でも、先ずはそいつの心を聞くのが先だろ!!」

六課一同

「!!!!!!?」

ナツ

「それで、自分の気持ちを伝えんのが先だろ!!」

六課一同

「.....」

その場にいる者はナツの言葉を黙って聞いていた。

その時、

バタバタバタバタ.....

一同

「!!!!!!」

ヘリコプターが今にも飛び立とうとしていた。

シグナム

「ヴァイス！お前何をやっている！！」

シグナムがヘリのパイロット、ヴァイスに怒鳴る。

その時、ヘリの窓が開き、そこから一護が顔を出す。

ヴィータ

「一護！！テメエどう言ってる！！」

今度はヴィータが一護に怒鳴る。

一護

「そんな状態で出勤しても、つまんねえミスするだけだ」

一護は自分を見る全員に吐き捨てる。

一護

「なのは!?!」

なのは

「!?!?」

なのはは一護の呼びかけに一瞬ビクッとする。

一護

「ガジェットは俺が片付けるから、お前はお前の問題を片付ける」

なのは

「……うん」

なのはは静かに頷く。

そう言う一護を乗せて、ヘリは六課を飛び立った。

フェイト

「……それじゃあみんな、ロビーに行こうか」

シグナム

「いいのが、テストロッサ？」

フェイト

「うん。せつかく一護が気を使ってくれたんだから、それに甘えてみよう」

フェイトの視線の先には1人立ち尽くすティアナと、この事態に困惑する他の3人の新人達がいる。

そんな4人を見て何かを決意したようになのはが切り出す。

なのは

「みんな、話があるの・・・」

東部海上

一護を乗せたへりは現場付近に到着した。

ヴァイス

「行けるか、一護？」

ヴァイスは一護に問いかける。

一護

「ああ・・・準備完了だ」

一護は既に死神化しており、いつでも出撃できるようになっていた。

ヴァイス

「おし！じゃあ行って来い！」

一護

「ああ、行ってくるぜ！」

一護は勢いよくヘリから飛び出し、斬月を振り上げる。

一護

「月牙・・・天衝！！！」

ズバアアアアン!!!!

一護の放った斬撃は空を飛行する2機のガジェットを切り裂いた。

それに反応した1機のガジェットが一護に突進する。

ガキイイイイン!!!!

突進してきたガジェットを斬月で受け止める。

一護

「ハアアッ!!」

ザアアアアアン!!!!

一護は受け止めたガジェットを押し退け、切り捨てる。

次に2機のガジェットが一護にレーザーを放つ。

シュン!!!!

一護はそれを瞬歩で躲す。

一護

「遅え！！！！」

ズザアアアアン！！！！

その2機のガジェットも一護の斬撃で切り裂かれた。

一護

「とつとと終わらせるぜ！！！」

そう言って一護は斬月を持った右手を突き出し、左手を添える。

一護

「卍解！！！！！」

赤黒い霊圧が一護を包み、その姿を変化させる。

一護

「天鎖斬月！！！！！」

一護は変化した自分の大刀・・・もとい漆黒の日本刀を構える。

一護

「月牙・・・天衝！！！！！！」

一護は刀を横薙ぎに振り抜き、斬撃を飛ばす。

ズザアアアアアアン！！！！！！！！

先程よりも黒く、大きく、速い斬撃が残り7機のガジェットを呑み込む。

斬撃の通った後にガジェットの姿は無かった。

一護は卍解を解き、へりに戻る。

ヴァイス

「お疲れさん！」

一護

「おう」

仕事を終えた2人は六課へと戻っていく。

一護

「(なのは・・・しっかりやれよ・・・)」

一護は重い過去を背負った女性を思っていた。

ロビーで語られる1人の少女の話。

映像もあつた事でその少女が誰かは全員がすぐにわかった。

その少女はただの一般人だった。

何も知らず、仲の良い友達がいて、優しい家族がいる普通に幸せな少女。

だがその少女の人生を、運命を変える出来事が起こる。

少女は“魔法”と出会ってしまった。

そして少女にも魔法の才能があった。

その所為で少女は命懸けの戦いに身を投じなければならなくなってしまう。

『ブレシア・テストロッサ
PT事件』と『闇の書事件』。

ミッドチルダでも有名なその事件に少女は巻き込まれた。

この事件で少女は今の親友達と知り合った。

1人は愛する母のために少女と戦ったフェイト・T・ハラオウン。

1人は大切な家族に守られ、その家族を救うために少女と共に戦った八神はやて。

少女は戦った。

守るために。

救うために。

勝つために。

みんなが笑顔でいられるために。

しかし、少女の笑顔はその輝きを失う事になってしまう。

少女は無理をした。

無理をし続けた。

その所為で少女は怪我を負った。

命を落としかねない怪我を。

魔法を失いかねない怪我を。

それでも少女は見事な回復を見せた。

そして、見事管理局の『エースオブエース』へと振り返り咲いた。

しかし、その心にはさらに深い傷が残った。

【ティアナside】

六課 ロビー

なのは

「これが私の過去・・・私の心の闇・・・」

なのはさんは自分の全てを私達に話してくれた。

事情を知らなかった私達フォワードとナツさん、ツナさんは啞然と

していた。

なのは

「ねえ、ティア。頑張る事も、強くなるうとする事も悪い事じゃないんだよ。良い事ではあるんだけど、まだ退き際をわかってない。だから教導官がいるの」

ティアナ

「……………」

私はなのはさんの言葉を黙って聞く。

なのは

「無理をしすぎて今後に支障が出る事が無いように教え導く。これが教導官として一番大事な事」

なのはさんの言葉は私の心の奥底にまで響く。

なのは

「話そうとは思ってたんだけど、正直この話をするのが怖かった。それで先送りになっていた結果がこれ……………」

私の心は震えていた。

なのは

「導いていくはずの立場なのに……生徒を傷つけて、自分勝手に決め付けて……。ナツ君の言う通り、あれは暴力だった。こんなんじゃない私、教導官失格だよね……」

ティアナ

「そんな事ありません!!!」

気づいたら私は立ち上がり、なのはさんの言葉を否定していた。

ティアナ

「なのはさんは悪くありません!!私が勝手に焦って、勝手に転んで、勝手に癩癩を起こして……。なのはさんが私達の事を思ってくれてるのはみんな知ってます!だから、だからもうそんな事言わないで下さい……」

私は泣いていた。

多分、顔もグシャグシャだったと思う。

なのは

「ありがとう、ティア。でも、ティアの気持ちに気づけなかった事

には謝らせてね?」

ティアナ

「・・・なのはさんの気が済むのなら、どつぞ」

なのは

「うん。ごめんね、苦しい思いさせちゃって。でもティアナが最後にやるうとしてたこと、強ち間違いないんだよ」

ティアナ

「え?」

私はなのはさんの言ってる意味がよくわからなかった。

なのは

「ちよつとクロスミラージュ借りていい?」

ティアナ

「あ、はい」

私はなのはさんに自分のデバイスを渡す。

なのは

「システムリミッター、テストモードリリース」

そう言った後、デバイスを私に返す。

なのは

「命令してみて。モード2って」

ティアナ

「・・・モード2」

私は言われた通りにクロスミラーージュに命令する。

するとその言葉がキーワードとなり、銃口から50cmくらいの魔力の刃が現れ、手を保護するための魔力が銃身からグリップの下部に接続された。

ティアナ

「これって・・・」

なのは

「ティアは執務官志望だもんね。ココを出て執務官を目指すようになったらどうしても個人戦が多くなるから、将来を考えて用意はし

てたんだ」

ティアナ

「っ！！」

なのは

「だけど使いこなすのがちょっと難しいから、ちゃんと基礎を固めて、もう少ししたら教えようと思ってたの」

私は何も言わずになのはさんの言葉を、思いを聞く。

なのは

「でも、こんな事になるんだったら・・・ちゃんと、教えてあげればよかったんだよね・・・ごめんね」

なのはさんは私に笑顔を向けながら謝る。

その笑顔に、私はもう耐えられなくなった。

ティアナ

「う、うわああああああ！……！！……！！」

私はなのはさんに泣きついた。

なのはさんは私を優しく抱きしめてくれた。

ティアナ

「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

なのは

「うん・・・うん・・・」

私はその後も泣き続けた。

【3人称side】

数分後、ティアナはやっと泣き止んだ。

ロビーにはなのはとティアナの2人しかいない。

ティアナに気を使ったフェイトがみんなを他の場所へ移動させたのだ。

ティアナ

「もう・・・大丈夫です。ありがとうございました」

なのは

「そう・・・。はあ、私って本当にバカだな。知らないから手を伸ばすのに、伸ばした手を掴もうとしないなんて・・・」

ティアナ

「え？」

なのは

「ナツ君に言われたんだ・・・」

ナツ

『知らねえから互いにてを伸ばすんだろオ!!!!!!!!!!』

なのは

「って・・・。でも、私はティアアの手を取る事ができなかった・・・
ううん、元々私が手を伸ばしてなかったのかもしれない」

なのはは俯きながら話す。

ティアナ

「それは私も同じです。なのはさんの手を取らなかつた……。ナツさんも、あんなに私の事気にしてくれてたのに、私は拒んでしまつた……」

ティアナはホテル・アグスタでの事件の後、自主練をしていた時の事を思い出す。

ティアナ

「私は、謝りたい……。ナツさんに……。私のために怒ってくれたナツさんに……。私を助けてくれたナツさんに……」

今度は自分がなのはに撃墜されようとしている時を思い出す。

その時、

なのは

「!？」

なのはは気づいた。

ティアナの頬が少し赤い事を……

なのは

「……ねえ、ティア」

ティアナ

「はい？」

なのはは思い切って訊いた。

なのは

「もしかしてティアって……ナツ君の事、好きなの？」

ティアナ

「……え？」

ティアナの思考は停止した。

ティアナ

「……なのはさんは……どうなんですか？」

が、すぐに立て直し、なのはに問い返す。

なのは

「・・・うん。好きだよ、ナツ君の事が・・・私の心を救ってくれた、ナツ君の事が・・・／＼／」

なのはは自分の気持ちを正直に明かす。

それを聞いたティアナも自分の気持ちを整理する。

そして、

ティアナ

「私も・・・ナツさんの事が、好きです！・・・／＼／」

自分の気持ちを明かす。

なのは

「・・・そっか。やっと本当の仲間になれたのに、今度はライバルになっちゃったね」

ティアナ

「そうですね・・・」

2人は苦笑する。

なのは

「でも、負けないよ、ティア」

ティアナ

「私も負けません！」

2人は笑顔を交わす。

ティアナ

「じゃあ私、ナツさんに謝ってきます」

なのは

「うん。でも、抜け駆けはなしだよ？」

ティアナ

「善処します！」

そう言つてティアナはナツの許へ向かった。

なのはもティアナも始終笑顔だった。

ティアナ

「ナツさん!!」

ティアナは廊下を歩いていたらナツを見つけ、呼び止めた。

ナツ

「ん?おお、ティアナ。話はもういいのか?」

ティアナ

「はい!なのはさんともちゃんと話し合いましたから!」

ナツ

「そっか!よかったな、ティアナ!」

そう言ってナツはティアナにニカツと笑いかける。

ティアナ

「!?!?!?!?!」

ティアナの顔が一気に赤くなる。

さっきの今でこの笑顔……………

破壊力はかなり大きいだろう。

ティアナ

「あ、あの……ナツさん……その、ごめんなさい!!」

ティアナは深く頭を下げる。

ナツ

「ど、どうした?」

ナツはそんなティアナの態度に困惑する。

ティアナ

「だって・・・私、ナツさんに酷い事言っちゃったし、私の所為で・・・なのはさんと・・・。だからっ
！！！」

謝るティアナにナツが手を翳す。

ナツ

「はやてにも言ったんだけどさ、オレはお前となのはを救いたかっただけだ。だからお前らを恨んじやいねえし、後悔もしてねえ。だから謝る必要なんてねえよ」

ティアナ

「でもっ！！！」

ナツ

「しつげえなあ。なら謝んなくていいから、笑ってるよ」

ティアナ

「!?!」

ナツ

「オレはお前らにいつものお前らでいて欲しかったから戦ったんだ。だからお前は笑ってるよ。笑ってる方が似合ってるぜ！」

ティアナ

「っ!?!?・・・//」

ナツのその言葉はティアナのライフポイントを一気に削った。

ナツ

「じゃあな!」

ナツはその場を立ち去ろうとする。

ティアナ

「じゃ、じゃあ!・・・//」

ナツ

「?」

ティアナ

「私からも・・・1つお願いしてもいいですか?・・・//」

ナツ

「あ、ああ」

ティアナ

「ティ、ティアって……／＼／」

ティアナは顔を赤らめたまま言う。

ティアナ

「私の事……ティアって呼んで下さい！……／＼／」

ナツ

「……オ、オウ。じゃあな、ティア！」

そう言うってナツはその場から去る。

ティアナは少しの間その場に立っていたが、すぐに我を取り戻し、自分の部屋へと戻った。

ティアナ

「ただいま」

スバル

「ティア、もう大丈夫なの？」

スバルは戻ってきた相棒を心配する。

ティアナ

「うん。もう大丈夫！心配かけてごめん」

スバル

「そっか、よかった」

スバルはホッとした顔をしている。

それを見たティアナもホッとした顔をする。

しかし、その表情がもうすぐ驚きに変わる事になる。

スバル

「ところで、ティア……。ナツさんの事、どう思うっ？」

ティアナ

「え？ど、どうって？」

ティアナはスバルの意外な質問に驚いた。

スバル

「最初に会った時は元気な人だなあって思ったんだ。あの模擬戦の時は正直ちよつと怖かったけど、それもティアのための事で、私を助けてくれた時も、今日のシグナム副隊長の拳を止めた時の言葉も・・・ちよつとカツコよかったなあって・・・」

ティアナは少し嫌な予感がしたが、その予感が見事に的中する。

スバル

「私、ナツさんの事好きになっちゃった！・・・／＼／」

頬を染めながら言うスバルのに、ティアナは呆然としていた。

スバル

「じゃあ、ティア、私先に寝るね。おやすみ」

そしてスバルは寝てしまった。

ティアナはと言つと、

ティアナ

「そ、そんな〜」

ライバルがさらに増えてしまった事に、しかもそれが相棒である事に未だ呆然としていた。

ティアナは焦った。

“これ以上ライバルが増えてしまう前に何とかせねば”と。

「……いや、もしかしたら他にもまだライバルがいるかもしれない……」

ヴィータ

「ハックション！」

シグナム

「どうした？風邪か？」

ヴィータ

「ちげーよ」

シグナム

「・・・顔が赤いが・・・」

ヴィータ

「な、何でもねえよ・・・／／／」

ヴィータはシグナムの許から走っていった。

ヴィータ

「（くそっ！何でアイツの事が頭から離れねーんだよ！・・・／／／）
／」

アイツと言うのはモチのロン、ナツの事だ。

ヴィータ

「ハア・・・夜風にも当たるか・・・」

こうしてナツのフラグが急激に増えた（増やした？）

t o b e c o n t i n u e d

第17話『ふれ合う心』(後書き)

次回『機動六課のある休日』

第18話『機動六課のある休日』（前書き）

何とかツナの出番を増やさねば!!--!!

とか考えていてもセリフを少し増やすだけで精一杯（- - ;）

まずい.....

ツナファンの皆さん、すみません。

では、ごきげん

第18話 『機動六課のある休日』

【3人称side】

六課 訓練場

なのはとティアナの和解、そして恋のライバル宣言からはや数日・・・。

今日も新人魔導師陣ことフォワード達は訓練を受けていた。

しかも訓練内容はフォワード vs なのは・フェイト・ヴィータの3人と言う中々ハードなモノだった。

なのは

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様」

どうやらとてもハードなソレも終了したようだ。

なのは

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階の見極めテストだったんだけど・・・」

フォワード一同

「『『『えっ!?!』』』」

なのはが告げた模擬戦の裏事情にフォワード達は驚く。

なのは

「大丈夫。心配しなくても、みんな合格だよ」

フォワード一同

「『『『ハア』』』』」

なのはが告げたテストの結果にフォワード達は安堵する。

なのは

「フツツ・・・デバイスリミッターも一段階解除するから、後でシヤリーの所に行って来てね」

フォワード一同

「『『『はい!?!』』』」

ヴィータ

「明日からはセカンドモードを基本にして訓練すつからな」

エリオ

「えっ？明日からって・・・」

エリオがヴィータの言葉の中の「ワード」に反応する。

ヴィータ

「ああ、訓練再開は明日からだ」

フェイト

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし・・・」

なのは

「みんな入隊から今までずっと訓練漬けだったしね」

それから少し間を空けてからなのはが口を開く。

なのは

「今日はみんな1日お休みです！」

フォワード一同

「「「「「やったあああ!」「」「」」」」

なのはが告げた訓練休止の知らせにフォワード達は歓喜する。

六課 食堂

一護

「毎回思うけど、アイツらって努力家だよな?」

ツナ

「そつだね。オレだったらとっくにへばってるよ」

ナツ

「ふおへはなんほかひへる・・・ぜ!」

オレはなんとかイケるぜ!

ヴェータ

「何語だよ……。つーかちゃんと食べきってから喋れよ」

はやて

「ナツ君？それは行儀悪いで？」

フエイト

「まあ、あの子達は私達以上の努力家なのは確かだよね」

なのは

「うん。今から将来が楽しみだよ」

シグナム

「うむ。良い模擬戦相手になりそうだ」

一護

「結局ソレかよ……」

六課の食堂で上記の8人が遅めの朝食を取っている。

その時、

?????

『魔法と技術の進歩と進化は素晴らしいものである。が、しかし！それが故に我々を襲う危機や災害も10年前とは比べものにならない程に危険度を増している！！』

食堂のテレビに映る男の声が聞こえてきた。

ナツ

「誰だ？あのオッサン・・・」

ナツがテレビに映る男について訊ねる。

なのは

「彼はレジアス・ゲイズ中将。時空管理局地上本部の総司令官なの」

その問いになのはが答える。

一護

「お偉いさんって訳か・・・」

ヴィータ

「まあな・・・でもこのオッサンまだこんな事言ってるのかよ」

ヴィータが少し呆れ気味に言う。

シグナム

「レジアス中將は古くからの武闘派だからな」

ヴィータの言葉にシグナムが補足する。

ツナ

「あの隣の3人は？」

ツナがレジアスの隣にいる3人の老人を指差して訊ねる。

フェイト

「あの方達は『伝説の三提督』って言つて、右からミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役。3人共現在の管理局の形を造った偉大な方達なんだ」

ツナ

「ふん。？一護、どうしたの？」

フェイトの説明を聞いていたツナがふと顔を横へやると、一護が少し険しい表情をしているのが見えた。

その目線の先にはテレビに映るレジアスの姿があった。

一護

「いや……。ちよつと……。な……」

一護は再び食事を始める。

はやて

「そや！3人もどつか出かけたらどうや？」

急にはやてがそう提案した。

ツナ

「……どつ言ひ事？」

ツナだけではなく、一護とナツもそう思っている。

はやて

「いやな、3人にも何やかんや手伝ってもらてるし、新人達も休み
やから一緒に街にでも行つてきたらええと思つたんや！」

ナツ

「いいのか!？」

はやての提案を真つ先に呑んだのはナツだった。

以前一護とツナが街へ買物に行った時、内心自分も行けばよかった
と想っていた事から街へ行ってみたいと思っていたのだ。

はやて

「ええよ!丁度3人の給料もあるからな！」

そう言っではやては3つの封筒を取り出す。

それは今日までに一護達が働いて稼いだお金だ。

ナツ

「サンキュー!早速行こっぜー！」

ナツは外へとダッシュユする。

一護

「気が早えよ・・・」

ツナ

「あははは・・・」

2人共呆れていた。

しかしナツは知らなかった。

この後、恒例の苦難が待ち受けている事を。

六課 正面玄関

ヴァイスからバイクを借りたスバルとティアナがバイクに跨る。

ティアナが運転し、スバルはその後ろに乗る。

そこへ一護達がやって来た。

一護

「よう。お前らも今から行くのか？」

ティアナ

「はい。一護さん達は？」

一護

「俺達も休暇をもらったんだ」

ツナ

「だからオレ達も街に行こうと思ったんだけど、まだ地理に詳しくないから」

スバル

「じゃあ一緒に行きませんか？いいよね、ティアナ？」

ティアナ

「私はいいわよ」

一護

「悪いな・・・」

ツナ

「ありがとう」

こうして一護達はスバル・ティアナと一緒に街へ行く事になった。

ちなみにツナはスバル達と同じタイプのバイクで、一護はなぜかそれのサイドカー付き。

ティアナ

「ところで・・・それは・・・」

ティアナが一護のバイクのサイドカーを指差す。

そこには、

ナツ

「うぶ・・・」

様子のみで“気持ち悪い”とガンガン主張しているナツがいた。

スバル

「どつ言つ経緯でそうなたんですか？」

スバルがナツの異常な不良について訊ねる。

一護

「……こいつ乗り物酔いが激しいみたいでな……。乗って5秒もせずにコレだ」

スバル・ティアナ

「「はやっ!!」」

ツナ

「やっぱりそうツッコむよね……」

誰でもそうツッコむだろう。

事実、一護とツナもさっきそうツッコんだ。

一護

「まあ、取りあえず行くこつぜ」

そういつて5人は街へと繰り出した。

その移動中、一護の隣でナツは延々唸っていた。

クラナガン

5人は最初にスバル一押しのアイス屋へとやって来た。

スバル

「このアイス、すっごく美味しいんだよ」

そう言うスバルの手には異様なモノが握られていた。

7段重ねの特盛アイスが……。

一護

「……ツナ、お前アレ食えるか？」

ツナ

「ソレ訊く意味ある?」

一護

「・・・ないな」

一護とツナの間でそんな会話があった。

ナツ

「美味えな、これ」

サイドカーから降りた事でナツは回復していた。

ナツも基本的に大食漢なのでスバルのソレがおかしいとは特に思わない。

ティアナ

「私はスバルと来るたびに食べさせられるけどね」

ティアナはこう言うが、美味しいとは思っている。

ナツ

「ティアのも美味そうだな。ちょっとくれよ」

ティアナ

「えっ！？・・・／／／」

ナツはただアイスに分けて欲しいだけだが、ティアナにとってそれは中々のチャンスで、中々のピンチだった。

ティアナ

「（こ、これは・・・チャンス到来？で、でも何か意識すると・・・恥ずかしい・・・／／／）」

ティアナが悶々としていると、スバルが2人の許へやって来た。

スバル

「ナツさん、私の食べる？」

そう言ってスバルは2つ程残っている自分のアイスをナツに手渡す。

ナツ

「オッ！サンキュー！」

ナツは遠慮なく受け取って食べる。

スバル

「エへへッ……／＼／」

スバルの顔は赤い。

ティアナ

「（あのスバルが食べ物譲るなんて……。それだけ本気って事なんだ……。私だって！）」

ティアナは相棒であり、ライバルでもあるスバルの気持ちに驚きつつも自分の心を奮い立たせる。

この場にいる男3人はそんな事を知る由もない。

ツナ

「そう言えば後の2人はどうしてるの？」

ツナは後の2人……。エリオとキャロの所在を訊ねる。

スバル

「2人もどっかで遊んでると思うけど・・・」

スバルの答えはやや曖昧だが、遊んでる事は確かだろう。

折角の休日だし・・・。。。

クラナガン地区 とある公園

エリオ

「大体こなせたね」

キャラ

「うん」

エリオとキャラもスバル達同様休日を満喫していた。

“こなせた”とはシャーリーからもらったプランの事だ。

シャーリーが2人のために今日のプランを考えたのだ。

シャーリーは“デートプラン”を考えたとつもりなのだが、2人にまだ早いものだったようだ。

その時、

エリオ

「ん？通信かな？」

ストラードに緊急通信が入る。

エリオ

「・・・えっ！？・・・わかりました」

エリオは通信を切る。

キャラ

「どっしたの？」

キャラはエリオに通信の内容を訊く。

エリオ

「この近辺にレリックの反応があるから捜査してくれって」

通信はロングアーチからのレリック捜査の指令だった。

キャロ

「エリオ君・・・」

エリオ

「うん。折角の休日だけど仕方ないね・・・」

2人は休日を返上してレリック捜査を開始する。

交通事故現場

とある場所で起こったトラックの交通事故。

その現場にどことなくスバルに似た女性がやって来た。

???

「陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝いに参りました」

ギンガと名乗るその女性は名前、容姿からも想像できるようにスバルの身内、姉だ。

現場で調査をしていた局員だけでは判断しにくい件がいくつか拳がり、陸士108部隊に応援の要請が入った。

そこで選ばれたのがギンガだったと言う訳だ。

ギンガ

「横転事故と聞きましたが・・・」

局員

「ええ。ただ、事故の状況が少し奇妙でして……。運転手も混乱しているんですが、どうも何かに攻撃を受けたようなんです。その時に荷物が勝手に爆発したと言うのですが・・・」

それを聞いたギンガはトラックの積荷を確認する。

ギンガ

「運んでいた荷物は缶詰やペットボトル……。爆発するようなモノじゃありませんね」

同員

「それと、下の方に妙な遺留品がありまして……」

ギンガ

「妙な遺留品？」

同員はギンガを遺留品の場所へと案内する。

そこにはガジェット？型の残骸と中身の無い生体ポッドがあった。

とある路地裏

エリオ

「この辺りだと思っけど・・・」

エリオとキャラロの2人はレリッククの反応がしている路地裏にやってきていた。

キャラロ

「！？エリオ君、アレ！」

キャラロが何かを見つけて叫ぶ。

エリオ

「どうしたの、キャラ・・・ロ・・・」

キャラロに呼ばれたエリオが振り返ると、その目線の先にマンホールから出て来る少女がいた。

その傍らにはレリッククが入っていると思われるケースがある。

エリオキャラロが呆然としていると、

バタン・・・

エリオ・キャラ

「！！！？」

突然その少女が倒れた。

エリオとキャラが少女に駆け寄る。

エリオ

「・・・大丈夫、気絶してるだけだ。キャラ、スバルさん達に連絡して」

キャラ

「わかった！」

キャラはケリユケイオンを介してもう一方の休暇チームに連絡を取った。

十数分後、連絡を受けた一護達が2人と合流する。

一護

「エリオ！」

エリオ

「一護さん！一護さん達も一緒だったんですか？」

ツナ

「オレ達も休暇中だったんだ。けど、それもお預けみただけだね」

ツナはエリオとキャラロが保護した少女を一瞥する。

一護

「それがレリックか？」

一護はケースの方を見て言う。

エリオ

「はい、おそらく……。一応、キャラロに封印処理をしてもらってあります」

そこへなのは・フェイト・シャマルの3人が救援にやって来た。

なのは

「遅くなってゴメンね」

エリオ

「いえ」

シャマルがすぐさま少女の状態を確認する。

シャマル

「うん。バイタルも安定してるから、命に別状はないわ。なのはちゃん、この子をへりに運んでくれる?」

なのは

「わかりました」

なのはは少女を抱きかかえ、へりの方へ向かう。

エリオ

「フェイトさん・・・」

フェイト

「ん？どうしたの？」

エリオがフェイトに話しかける。

エリオ

「実は・・・これ」

そう言ってエリオが持って来たのはレリックのケースだった。

そのケースには鎖がついており、その先には小さな輪ができている。

487

一護

「フェイト・・・これは・・・」

フェイト

「うん。ケースはもう一つあるかもしれない」

その結論に至るのは容易だった。

フェイト

「一護、ツナ。エリオ達と一緒にもう一つのケースの搜索、お願い

「できる?」

一護

「わかった」

ツナ

「協力するよ」

フェイト

「ありがとう。じゃあお願いするね」

一護・ツナ

「「おう(うん)!!」

フォワード一同

「「「はい!!」」」

6人はケースの搜索を開始する。

ティアナ

「そう言えば、ナツさんは?」

みんな今気づいたが、ナツがこの場にいない。

ツナ

「本当だ、どこいったんだろ？」

一護

「仕方ねえな、俺らだけで捜査するか」

フォワード一同

「『はい！』『』『』」

ナツの事を一旦置いておいて、6人は少女が通ったと思われるマンホールの中に入っていく。

地下水道

超ツナ

「ハアアアアアッ！！！！」

ガアアアアン！！！！

一護

「はああああ！！！！」

ザアアアアン！！！！

地下水道で一護達は向かってくるガジェットを破壊しながら先へ進む。

その時、

ドカアアアアン！！！！

一護

「なんだ！？」

突然地下水道の壁が爆発し、そこから1人の女性が出てきた。

スバル

「ギン姉！」

ギンガ

「スバル！」

スバルの姉、ギンガ・ナカジマだ。

ギンガは交通事故の現場検証で付近にいたことから捜査協力を志願し、はやての指令で一護達と合流した。

一護

「ティアナ、アイツは？」

一護が目の前の女性についてティアナに訊く。

ティアナ

「彼女はギンガ・ナカジマ陸曹です」

ツナ

「ナカジマ？って事は・・・」

^{ハイパー}
超死ぬ気化を解いたツナも会話に加わる。

ティアナ

「スバルの實の姉ですよ」

そんな会話を交わしていると、

ギンガ

「スバル、あの人達は？」

一護・ツナと初対面のギンガはスバルに訊ねる。

スバル

「あの人達は一護さんとツナさん。六課が保護してる次元漂流者なんだ」

スバルが説明すると、ギンガが2人に近づく。

ギンガ

「陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹です。ギンガで構いません」

一護

「黒崎一護だ。俺も名前でいいぜ」

ツナ

「沢田綱吉です。ツナって呼んで下さい」

ギンガ

「はい。よろしく申し上げます。一護さん、ツナさん」

自己紹介を済ませた双方、及びその他の者は捜査に戻った。

北西部海上

海上ではなのは・フェイトがガジェットと交戦していた。

なのは

「アクセルシューター!!」

フェイト

「フォトンランサー!!」

ダアアアアアーン!!!

2人の放つ魔力弾はガジェットを次々に破壊していく。

しかし如何せん数が多いため、ガジェット達の勢いが止まらない。

なのは

「これじゃあキリがない!」

その時、

シャーリー

《ロングアーチからスターズ01、ライティング01へ。これより遠距離広域魔法を行います。至急、安全域まで避難してください》

なのは・フェイト

「了解!」

ロングアーチからの通信を受け、2人は急いで退避する。

シャーリー

《ロングアーチ01、シャリオからロングアーチ00、八神部隊長へ。シュベルトクロイツとのシンクロ、無事完了しました》

はやて

「了解！ゴメンな、シャーリー。こつ言う細かい作業はラインがおりんと苦手だな」

シャーリー

《いえ、大丈夫ですよ！》

はやて

「ほな行こか」

はやては自身のデバイス、『シュベルトクロイツ』を構え、もう1つのデバイス、『夜天の書』を開き、呪文詠唱を開始する。

はやて

「来よ 白銀の風 天より注ぐ矢羽となれ！」

はやての前に巨大な魔法陣と、その四隅にそれぞれ1つつ魔法陣が展開された。

シャーリー

《八神部隊長！スターズ01、ライトニング01の退避が完了しました！》

はやて

「了解！ほな、いくよお！！」

はやてが遠距離砲撃を放つ。

はやて

「フリースヴェルグ！！！！！！」

はやての言葉に呼应し、四隅の魔法陣から1発ずつ、最後に中央の巨大な魔法陣から1発の砲撃が放たれた。

はやては今回の交戦に何かを感じたのか、自身のリミッターを、本局にいるフェイトの義兄、クロノ・ハラウンに限定解除許可をもらって外していた。

つまり今のはやては全力全開。

故に、

地下水道

一護達が地下水道を進んで行くと、無数の柱がある広い空間に出た。

キャロ

「あ！ありました！」

キャロが指差す先にレリックの入ったケースがあった。

キャロがそれを拾い、みんなの許へと戻ろうとする。

その時、

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

何かが柱に連続でぶつかる音がした。

それが何か確認する暇もなく、高速で移動してキャロに4つの魔法球を放つ。

ドオオオオン！！！！

キヤロ

「きゃあああああ！！！！」

魔法球はキヤロに当たる事はなかったが、地面に直撃し、爆発で煙が起こる。

その衝撃でキヤロが吹き飛ばされ、ケースを落としてしまう。

エリオ

「このおおっ！！！！」

エリオがその何かに向かって切りかかる。

ガキイイイイン！！！！

ストラダがその何かに僅かなダメージを与えた。

しかし、

エリオ

「ぐっ！！」

同時にエリオも攻撃を受け、ダメージを負う。

キャラ

「エリオ君　　っ！！」

キャラはエリオに駆け寄る。

エリオは手を横に伸ばし、キャラを後ろに庇う形になっている。

すると突然、眼前に人型の怪物が現れた。

どうやら光学迷彩ステルスを施していたようだが、さっきのダメージが原因でそれが解けたらしい。

同時に2人の後ろでホテル・アグスタにいた召喚士、ルーテシアがレリックのケースを拾った。

キャラ

「あ！それ……！」

キャラロが思わず駆け出す。

ルーテシア

「……邪魔」

ルーテシアはキャラロに向かって砲撃を放つ。

キャラロ

「っ！？」

ギイイイイン！！！！

キャラロがバリアで砲撃を防ぐ。

が、

キャラロ

「きゃああああ……！」

防御力が足らず、吹き飛ばされる。

エリオ

「キャロ！！ぐあっ！！」

吹き飛ばされたキャロがエリオを巻き込んで壁にぶつかる。

そこへ怪物が追撃をかける。

それを見たスバルとギンガが飛び出す。

スバル

「でりゃああああ！！！！」

ギンガ

「はああああ！！！！」

2人は怪物に攻撃するが、簡単に躲す。

しかし、

超ツナ

「はあああああっ！！！！」

回避を見事に読んだツナが怪物に拳を叩き込む。

拳は怪物にヒットし、その体を吹き飛ばした。

スバル

「こらー！その女の子！それ危険なモノなんだよ！？触っちゃダメ！こっちに渡して！」

ルーテシア

「……………」

ルーテシアはスバルの言葉を見殺して去ろうとする。

ルーテシア

「……………っ!？」

ルーテシアがその場を去ろうとした時、彼女の行動が止まった。

……………いや、止められた。

ティアナ

「ゴメンね、乱暴で。でもね、コレ本当に危ないモノなのよ」

幻術で姿を消していたティアナが魔力の刃をルーテシアの喉元に突きつけていた。

その時、

???

《ルールー、いいか？1、2、3で眼瞑れ》

何者かがルーテシアに念話を繋ぎ、そう指示する。

ルーテシアもそれに同意する。

???

「1、2、3！スターレンジホイール！」

ドカアアアアン！！！！

何者かが放った魔法が途轍もない轟音と衝撃波を起こす。

ティアナ

「っ!？」

ティアナは思わずその場にしゃがみ込む。

ルーテシア

「……………」

ルーテシアはその隙に再び歩き出す。

ティアナ

「っ!！」

ティアナがそれに気づき、銃口をルーテシアに向ける。

が、

ダンッ!

ティアナ

「うわあああああ！！！！」

怪物がティアナに飛び蹴りを入れ、ティアナは吹き飛ばされる。

ティアナ

「くっ！！！」

ティアナはすぐに体勢を立て直し、再び銃口をルーテシアに向け、今度はすぐさま魔力弾を放つ。

ダアアアアアン！！！！

ティアナ

「っ！？」

怪物がルーテシアを庇い、魔力弾を受ける。

????

「まったくもう、私達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ。ルールーもガリユーも・・・本当に心配したんだからな！」

ルーテシアとガリユーと呼ばれる怪物の上からリインと同じような生物が降りてきた。

????

「まあ、もう大丈夫だぞ、ルールー。何しろこのアタシ、烈火の剣精、アギト様が来たからな！」

アギトと名乗るその生き物は空中で胡坐をかく。

その背後に無数の花火が見えたとか見えなかったとか……。

アギト

「オラオラあ、お前ら纏めてかかって来いやあ！」

アギトは眼の前にいる6人を挑発する。

ここで問題だ。

最初に地下水道に入ったのは6人。

その後、ギンガと合流して7人。

今、アギトの眼前にいるのは6人。

後1人はどこだろう？

答えは……

一護

「月牙……天衝!!!!」

アギト

「なっ!?!」

ルーテシア

「っ!?!」

ルーテシアとアギトは予想だにしない一護の奇襲に一瞬思考、行動が停止した。

しかし、

ザアアアアン!!!!

ルーテシア

「ガリユー!!!」

ガリユーがルーテシア達を庇って一護の斬撃を受ける。

さっきのティアナの魔力弾よりも威力が大きいため、ガリユーは深いダメージを負う。

一護

「悪いな、仲間を傷つけられた以上、手加減はしてやれねえぜ」

一護はルーテシア達に斬月の切っ先を向ける。

t o b e c o n t i n u e d

第18話『機動六課のある休日』（後書き）

今回はトークもバラエティも無しで、アンケートをやるつもりです。

アンケートの内容は

『ヴィヴィオの保護者について』
です。

ヴィヴィオの保護者はどのペアが良いでしょうか？

以下から1つお選び下さい。

- ? 一護&フェイト
- ? ナツ&なのは
- ? ツナ&はやて

締切りは6/12までの1週間です。

よろしくお願いします！

次回『ナンバーズ』

第19話『ナンバーズ』（前書き）

今回はナンバーズ初登場です！

前半は原作通り、後半はオリ展開です。

あと、ツナも少し活躍します。

ホントに少しですけど……。

取りあえず、どうぞ

第19話『ナンバーズ』

【3人称side】

一護

「月牙天衝!!!」

ガアアアアン!!!

ルーテシア

「くっ!」

一護の放った斬撃をルーテシアがバリアで防ぐ。

しかし、さっきのキャロの時のように防御力が足らず、全てを防ぎきる事ができない。

アギト

「このっ!!!喰らええええ!!!」

アギトが特大の火の玉を一護に放つ。

一護

「……………」

ズザアアアアン！！！！

一護は無言のまま火球を斬り裂く。

アギト

「……嘘……だろ？」

アギトは自身の上級技がいと簡単に打ち破られた事が信じられないようだ。

一護

「こんなもんかよ？」

一護はアギトを睨む。

アギト

「くそっ！！！！」

アギトは少し後退する。

ギンガ

「すごい……」

一護の力を初めて見るギンガは驚いていた。

ギンガ

「スバル……。あの人は何者なの？」

ギンガは妹であるスバルに訊ねる。

スバル

「あの人は六課で保護してる次元漂流者の1人なんだけど、自分のいた世界でも戦ってたんだって。あのシグナム副隊長と互角なんだよ」

ギンガ

「!?!」

ギンガはさらに驚く。

ギンガもシグナムの事は知っている。

自分より遥かに強い魔導師だと思っている。

そのシグナムと互角と言うところにギンガは驚いた。

ルーテシア

「アギト、少し時間を稼いで・・・」

ルーテシアがアギトに時間稼ぎを頼む。

アギト

「オツケ〜！」

ルーテシアの依頼を実行するためにアギトが動く。

アギト

「オラアアアアア！！！！」

アギトは大量の炎弾を飛ばす。

一護
「ちっ!！」

一護は舌打ちをして、瞬歩でそれを躲し、ツナ達の許へと移動する。

ティアナ

「一護さん、もうすぐヴィータ副隊長とリイン曹長がここに来るそうです!！」

一護

「そうか。じゃあもう少しアイツら足留めするぜ」

一同

「「「「はい!！」」」」」

そこへ、

ヴィータ

《頼んだぞ、お前ら》

スバル

「副隊長!？」

スバルがヴィータからの念話をキャッチした。

ヴィータ

《もうすぐ着くから、ちゃんと足留めしとけよ》

スバル

「了解！」

念話を切ったスバルがアギトへと向かう。

しかし、

アギト

「はあああああ！！！！」

アギトが手を翳すと地面から大量の火柱が上がる。

スバル

「うわっと！！！」

スバルは既のところでもソレを躲す。

しかし、躲しただけでは相手に近づけない。

アギト

「！？ルールー、何か来る！魔力反応・・・デケエ！！」

その時、

ドゴオオオオン！！！！

一護達とルーテシア達の間天井が崩れ落ち、そこから小さな人影が出てきた。

スバル

「リイン曹長！」

人影の正体は一護達の救援にやって来たリインだった。

リイン

「捕らえよ 凍てつく足枷！」

「っ！！でりゃあああああ！！！！！！」

ガリユー

「！！！？」

しかしヴィータがさらに力を込めた事と、さっきの月牙のダメージが祟ってガリユーは吹き飛ばされる。

ヴィータ

「ふう、待たせたな」

自身のデバイス、『グラーフアイゼン』を『ギガントフォルム』から通常サイズの『ハンマーフォルム』に戻し、一護達の方へ振り返る。

リン

「みんな無事でよかったです！」

リンも一護達の方へと近づく。

さっきの轟音でエリオとキャロが眼を覚ます。

ヴィータはそれを横目で確認しながら、もう一つの方を確認する。

ヴィータ

「ちっ！逃げられたか」

しかしヴィータの視線の先には何も無かった。

リン

「コッチもです」

リンも自身の魔法によって閉じ込めた敵の状態を確認しようとしたが、氷塊の中は蛻もめけの殻だった。

そして目的のケースも見当たらない。

最悪だった。

ケースを奪取された上に、正体もわからないまま逃がしてしまったのだから……。

しかし、この後さらにまずい状況になる事になる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

頭上から地響きが起こり、天井が崩れ始めた。

ヴィータ

「まずい！お前ら！！速く逃げろ！！！」

速く逃げなければまずい。

そんな事は誰でも容易に想像できた。

超ツナ

「スバル！ウイングロードだ！」

スバル

「え？？」

超ツナ

「お前のウイングロードを地上に向かって展開しろ！！！」

スバル

「あ！は、はい！！」

ツナの指示を受け、地上へとウイングロードを繋げる。

みんなはそれを使って地上へ上がる。

地上

空間転移で地上に退避していたルーテシアは、深手を負ったガリユ
ーを引っ込め、新たな召喚獣、『地雷王』を召喚した。

その力で地下水道ごと一護達を葬るためだ。

しかし、

地雷王

「……………」

地雷王にバインドが掛けられた。

キャラが掛けたモノだ。

そして地下から脱出した全員がルーテシアとアギトを取り囲む。

その時、

???

《はあゝい ルーお嬢様》

ルーテシアの頭に女性の声が響いた。

廃墟ビル 屋上

一護達が下水道からの脱出を試みていた頃、廃ビルの屋上で2人の女性が遙か遠くの空に眼を向けていた。

????

「デイエチちゃん、ちゃんと見えてる」

眼鏡をかけ、ファー付きの白いマントを着た女性、クアットロがもう一人の女性に話しかける。

????

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える」

茶色のマントを羽織り、布で覆われた何かを持った女性、デイエチが答える。

デイエチの眼は遙か遠くを飛行するへりを正確に捉えていた。

エリオ達が保護した少女の乗った六課のへりだ。

デイエチ

「でもいいのか、クアットロ？撃っちゃって……。ケースは残るだろうけど、『マテリアル』の方は……」

クアットロ

「んふふふ……。ドクターとウーノ姉さま曰く、あの『マテリアル』が“当たり”なら……。本当に『聖王の器』なら、砲撃ぐらいじゃ死なないから大丈夫だそうよ」

デイエチ

「ふ〜ん」

デイエチはその問答に興味が無くなったのか空返事を返す。

そして自身の持つ“何か”から布を取る。

それは巨大な銃砲だった。

デイエチが黙々と準備をしていると、クアットロの前に空間モニターが現れた。

そこには1人の女性が映っている。

???

《クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ》

スーツを着たどことなくジェイル・スカリエツティに似た女性、ウ

ーノはルーテシアが一護達に包囲された事を知らせる。

クアットロ

「ああ、そう言えば例のチビ騎士に捕まってましたね。」

クアットロは飄々と語る。

ウーノ

《今はセインが様子を窺っているけど・・・》

クアットロ

「フォローします?」

ウーノ

《お願い・・・》

クアットロはすぐにセインと呼ばれる人物に通信を入れる。

クアットロ

《セインちゃん?》

セイン

《はいよゝ、クア姉》

セインも実に軽そうに返事をする。

クアットロ

《コッチから指示をだすわ……。お姉様の言う通りに動いてね》

セイン

《ふふゝん、了解》

次にクアットロはルーテシアに通信を繋ぐ。

クアットロ

《はあゝい ルーお嬢様》

ルーテシアの頭にクアットロの音が響く。

ルーテシア

《クアットロ……》

ルーテシアがそれに応答する。

クアットロ

《何やらピンチのようで……。邪魔でなければクアットロがお手伝いいたします》

クアットロと呼ばれる女性は軽い口調で話す。

ルーテシア

《……お願い》

ルーテシアが協力を要請する。

クアットロ

《はい》ではお嬢様、クアットロの言う通りの言葉を、その赤い騎士に……》

赤い騎士とはルーテシアの目の前にいるヴェータの事だ。

そしてクアットロは残酷な言葉を告げる。

なのはとフェイトがへりをギリギリ目視できるくらい距離まで近づいた。

フェイト

「よかった。へりは無事みたい」

なのは

「うん・・・っ!？」

突然なのはが何かを察知した。

それはロングアーチも同じく。

シャーリー

《市街地でエネルギー反応!っ!?!?大きい!?!?》

ルキノ

《そんな、まさか!?!?》

はやて

「はっ!?!?」

はやてもまた、その反応を察知した。

その反応の正体はデイエチだった。

デイエチは廃ビルの上で砲撃のためのチャージを行っていた。

シャーリー

《砲撃のチャージを確認！物理破壊型、推定Sランク！！》

Sランクの砲撃とは、なのはのスターライトブレイカーと同程度と
言う事だ。

デイエチ

『インビュールントスキル
「ISS」へヴィバレル』、発動』

そしてクアットロの残酷な口撃も始まる。

クアットロ・ルーテシア

「「逮捕はいいけど・・・」」

ヴィータ
「？」

クアットロ・ルーテシア

「「大事なへりは、放っておいていいの？」」

一同

「「「なっ!？」」」

ルーテシアの（クアットロの）言葉に「護達は耳を疑う。

そしてルーテシアはヴィータをまっすぐ見る。

ヴィータ
「ん？」

クアットロ・ルーテシア

「「あなたはまた、守れないかもね」」

ヴィータ

「っ!?!?!?」

ルーテシアを通してヴィータの耳へ届いたクアットロの言葉は、ヴィータの心を容赦なく抉った。

ディエチ

「発射！」

バアアアアン！！！！

同時にディエチの砲撃もへり目掛けて放たれた。

はやて

「っ！？」

ロングアーチー同

「「「ああっ！！！！」「」」

フェイト

「（くっ！間に合わない！）」

なのは

「ダメええええええええええ！！！！！！！！！！」

ドカアアアアン！！！！

デイエチの砲撃は命中した。

シャーリー

《砲撃・・・へりに直撃？・・・そんなはずない！状況確認！！》

ルキノ

《ダメです！ジャミングが酷い・・・。データ利きません！》

ロングアーチもへりの状況を確認できないでいた。

その会話はヴィータ達にも聞こえていた。

エリオ

「そんな・・・」

ティアナ

「ヴァイス陸曹と・・・シャルル先生が・・・」

フォワード達はその事に絶望していた。

しかし、ヴィータの心にはも1つの感情が宿っていた・・・。

怒りだ・・・。

ヴィータ

「テメエ!!!」

ヴィータがルーテシアに掴みかかる。

スバル

「ふ、副隊長!落ち着いて!」

ヴィータ

「うるせえ!!!」

スバルがそれを止めようとするが、ヴィータに一喝される。

ヴィータ

「おい！！仲間がいんのか！？どこにいるんだ！！言え！！」

ヴィータはルーテシアに怒鳴り散らす。

その時、

超ツナ

「！？エリオ！！足元だ！！」

エリオ

「え！？」

ツナが超直感で何かを感じ取り、エリオに呼びかける。

しかしその呼びかけも空しく、エリオの足元から飛び出したセイインにケースを奪われる。

エリオ

「あっ！！」

セイイン

「頂きい!!」

ティアナ

「くっ!!」

ティアナは咄嗟に魔力弾を放つが、セインが自身のインヒューレントスキル『ディープ
ダイバー』で地面に潜ってしまい、すべて外れてしまう。

そして再びルーテシアの頭に声が響く。

セイン

《ルーお嬢様、ナンバーズ6のセインです。今から私のディープ
ダイバーでお助けいたします》

そう言っつて再びセインが地上に現れ、ルーテシアを抱えると、また
地面に潜った。

リイン

「反応、ロストです」

ヴィータ

「くそっ!!」

ヴィータが地面を強く叩く。

ヴィータ

「ロングアーチ……。ヘリは無事だよな……。？アイツら……。落ちてねえよな!？」

ヴィータは必死に問いかける。

そんな中、一護とツナの2人は物静かに佇んでいた。

超ツナ

「……。一護、この感じ……」

一護

「ああ……。あの時”と同じだ」

一護はある事件を思い出していた。

一護

「やっぱり“アイツ”……。カッコいいぜ」

クアットロ

「うふふのふ。どう？この完璧な計画」

デイエチ

「黙って。今、命中確認中・・・」

デイエチは眼を凝らしてへりの方を見る。

デイエチ

「あれ？まだ飛んでる？・・・っ!？」

煙が完全に晴れると、そこには、

ナツ

「ハアッ、今回もギリギリセーフだな」

砲撃を体で受け止めたナツがいた。

体中傷だらけだが割と平気そうだ。

なのは

「ナツ・・・君・・・」

なのはとフェイトがナツに近づく。

ナツ

「なのは、コレ頼んだぜ」

なのは

「・・・うん」

なのはは力強く頷く。

そしてナツは1本の廃ビルを睨む。

クアットロ

「あらあ〜」

デイエチ

「こっちもフルパワーじゃないとは言え、マジでっ」

クアットロとディエチが驚いていると、

ヒュウウウウウ・・・

2人にフェイトの魔力弾が放たれる。

ダダダダアアアアーン!!!

魔力弾が2人のいる廃ビルを破壊した。

しかし2人は既にその廃ビルにはおらず、別のビルに移動していた。

だがそれを逃すフェイトではない。

フェイト

「見つけた!」

フェイトはクアットロとディエチの背後に降り立つ。

クアットロ

「こっちも!？」

デイエチ

「速い!！」

さらっ、

ナツ

「火竜の・・・炎弾えんだん!!!！」

ナツもフェイトのように数個の火の魔力弾を放つ。

クアットロ・デイエチ

「っ!!!！」

しかしクアットロとデイエチはそれを回避し、そのまま逃走を図る。

それをフェイトとナツが追いかける。

フェイト

「止まりなさい!市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯

で逮捕します！」

クアットロ

「今日は遠慮しときます」

ナツ

「ふざけんな、コラああああ！！！！」

クアットロ

「IS発動、『シルバーカーテン』！！！」

フェイト・ナツ

「！！！！？」

クアットロのISシルバーカーテンの能力で2人の姿が消える。

だが、

ナツ

「そこだああああ！！！！」

ナツが大通りの一箇所に向かって拳を叩き込む。

クアットロ

「え？きやああああ！！！」

ドオオオン！！

クアットロは間一髪でナツの攻撃を避ける。

デイエチ

「コイツ、何で私達の場所が・・・！」

ナツ

「へッ！悪りいけど、オレは鼻が利くんだよ！」

デイエチ

「犬か・・・」

フェイト

「ナツ！そこから退避して！！」

フェイトが上空からナツに呼びかける。

それを聞いたナツがフェイトのところまで飛び上がる。

クアットロ

「何？」

フェイト

「はやて！！！」

フェイトは次にはやてに呼びかける。

はやて

「了解！」

フェイトとナツはその場から離れる。

デイエチ

「離れた！？何で！？」

クアットロ

「まさか！？」

2人は嫌な予感がして空を見上げる。

そこには何やら黒い球体が浮かんでいた。

デイエチ

「広域空間攻撃!？」

クアットロ

「うっそ〜ん」

そう言っている間にもはやてが呪文を詠唱する。

はやて

「遠き地にて 闇に沈め!デアボリックエミッション!」

その瞬間、空に浮かぶ黒い球体は一瞬圧縮され、すぐさま巨大になり、辺り一帯を一気に破壊する。

クアットロ・デイエチ

「「うわあああああああ!……!……!」」

クアットロとデイエチは一瞬球体に吞まれるが、ギリギリで脱出す

る。

しかしダメージがない訳ではなく、肩を損傷している。

さらにそこをなのはとフェイト、ナツが取り囲む。

フェイト

「おとなしく投降しなさい！」

クアットロ

「くっっ!!！」

どう見ても彼女達2人の負けだ。

だが、

?????

「ディエチ、クアットロ、じっとしてろ!!！」

クアットロ・ディエチ

「!!!!!!?!!」

2人と同じボディスーツを着たがたいのいい女性、トーレが空中に立っていた。

トーレ

「IS発動、『ライドインパルス』!!」

フェイト

「トライデント・・・スマッシャー!!!!」

なのは

「エクセリオン・・・バスター!!!!」

ナツ

「火竜の・・・咆哮!!!!」

ドカアアアアアン!!!!!!!!

3つの砲撃がぶつかる。

アルト

《《ビンゴ!!!!》》

なのは

「違う！・・・避けられた！」

ロングアーチ一同

《えっ！！！？》

なのはの言葉にロングアーチが少し揺れた。

フェイト

「直前で救援が入ったみたい」

煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

少し離れた場所

トーレは抱えていたクアットロとディエチを降ろす。

クアットロ

「はあ、トーレ姉様、助かりました」

デイエチ

「感謝・・・」

2人はトーレに感謝する。

トーレがいなかったらおそらく重傷、最悪死が待っていた。

トーレ

「ったく、セインは既に任務を完遂している。さっさと合流して戻るぞ」

一護

「行かせると思っつか？」

トーレ・クアットロ・デイエチ

「「「!!!?」」」

トーレ達の前には一護とツナが立っていた。

超ツナ

「悪いが、一緒に来てもらおう」

トーレ

「くっ!!」

双方が戦闘態勢に入ったその時、

ズウウウウン……

一護

「!?!」

一護は何かを感じ取り、空を見上げる。

すると突然空間が裂けて、黒く、巨大な何かが現れた。

一護はそれを知っている。

他の者はそれを知らないが、顔がある事から生物だと予測する。

その顔はまるで仮面を被ったような容貌で、色は白く、鼻は高く、双眸は冷たく、赤い。

唯一その存在を知っている一護が、その名を口にす。

一護

「……『メノスグランデ大虚』……!!」

キュウウウウン……

ミッドに現れた大虚メノスの口元に赤い光が集まって行く。

一護

「っ!!いきなり虚閃セロだと!？」

一護は危険を察知して力を解放する。

一護

「卍解!!天鎖斬月!!!」

漆黒の卍解を纏った一護は大虚メノスと対峙する。

一護

「来い！！！！」

ブオオオオオオン！！！！！！

大虚はその言葉に呼応するように虚閃を放つ。

一護

「月牙天衝！！！！！！」

ズザアアアアアアン！！！！！！

一護の放った斬撃は虚閃ごと大虚を斬り裂いた。

その時、一護は気づいた。

大虚の胸の孔に小さく揺らめく“紫色の炎”に……………。

一護

「っ！？」

一護の斬撃は確かに大虚^{メノス}を斬り裂いた。

しかしその存在が消滅する事はなく、あろう事が、

一護

「・・・分裂した・・・だと!？」

その数が2体が増えた。

一護は少し困惑していた。

大虚^{メノス}には分裂などと言う能力は無い。

上級の大虚^{メノス}ならばそう言った能力も使えるかもしれないが、一護の
眼の前にいる大虚^{メノス}の階級は『ギリアン』。

それは大虚^{メノス}の階級の中でも最下級のモノ。

人間に喩えれば“雑兵”と言ったところだ。

そんな能力があるはずも無い。

だから一護は困惑していた。

もう1人も困惑していた。

しかしそれは分裂した事ではなく、その巨体の中心に揺らめく炎に対してだ。

超ツナ

「あれは・・・！？まさか!？」

ツナはその炎の正体を知っていた。

それは大空の7属性の1つ、

超ツナ

「『雲属性』の炎!？」

ツナの世界の人間が体内に宿す炎にはそれぞれ特性がある。

『大空属性』は『調和』

『嵐属性』は『分解』

『雨属性』は『鎮静』

『晴属性』は『活性』

『雷属性』は『硬化』

『霧属性』は『構築』

そして、『雲属性』の炎の特性は『増殖』。

これが大虚^{メソス}が分裂した理由だ。

一護

「くそっ！！何だよあの炎！！」

一護が再び天鎖斬月を振り上げる。

超ツナ

「!?!? 待て、一護!?!」

ツナがそれを制止する。

一護

「どうした!?!」

超ツナ

「あの炎はオレの世界の炎だ!?!」

一護

「何!?!」

ツナは炎の説明をする。

戦闘中と言う事もあって手短に。

一護

「増殖!?! じゃああの炎がある限りアイツを倒すのは無理だったのか!?!」

超ツナ

「普通なら……。でもオレの炎ならできる」

一護

「!?!」

超ツナ

「オレの『大空属性』の炎の特性は『調和』。その能力でアイツらの炎の特性を“無効化”できる」

ツナは自身の炎の特性を説明した上で、作戦を話す。

超ツナ

「オレがアイツらに炎をぶつけて特性を無効化するから、その瞬間にさっきの斬撃を撃つてくれ」

一護

「わかった」

2人の作戦会議が終了した頃、大虚が再び虚閃セロを放とうとする。

しかも2体同時に。

ブオオオオオオン!!!!!!

2つの赤い閃光が一護とツナを襲う。

一護・ツナ

「「っ!!」」

一護は瞬歩でそれを躲し、ツナは躲した上で単独大虚メノスに向かう。

超ツナ

「行くぞ!!」

ツナは掌の炎のブーストで加速し、大虚メノスの上を取る。

超ツナ

アンドウラツツイオーネ・チエーリ
「大空の超波動!!!!」

ツナは上空から2体の大虚メノスの全身に大空の炎を放つ。

この技はツナが3年間の間で編み出した技の1つで、大空の炎の特

性“調和”をさらに強化して相手に放つ事で、その能力を完全に打ち消す事ができる。

効果範囲は炎の噴出領域すべて。

対象は噴出領域内の敵すべて。

前方に放つ事は勿論、自身を中心として周囲全体に放つ事も可能だ。

その波動を受けた2体の大虚メソスの胸の炎が消えた。

超ツナ

「一護！今だ！！」

一護

「おう！！」

ツナの合図を受け、一護が天鎖斬月を振り上げる。

一護

「月牙天衝！！！！！！！！」

ザアアアアアン!!!!!!!!!!

一護の斬撃が2体の大虚を真っ二つに斬り裂く。

2体の大虚は塵となって消える。

一護

「……………」

一護がそれを確認していると、ツナが戻って来た。

一護

「やったな……………」

超ツナ

「ああ。だがアイツらには逃げられたみたいだ」

アイツらとはトールレ達の事だ。

トールレ達は一護が大虚と交戦している隙を突いて逃走していた。

一護

「そうか……。一旦戻ろう」

超ツナ

「ああ」

2人はヴィータ達の許へ戻っていった。

とある路地裏

????

「ふっ……。いくら炎を附加しても、ギリアン程度じゃ遊びにもならないな……」

一護達がさっきまで大虚^{メソス}と戦っていた場所の近くに1人の男がいた。

その男は言うなれば黒ずくめの男。

黒髪で黒装束の男だ。

????

「どつしたんだ？」

黒い男が何も無いはずの空間に訊ねる。

すると、黒い男の背後にもう1人の男が現れた。

????

「こんなところで何をしている・・・」

現れた男は言うなれば白づくめの男。

白髪で白装束の男だ。

????

「なあに、少し遊ぼうと思ったただけだ」

黒い男が振り返り様に言う。

???

「あまり勝手な行動を取るな……。奴らと接触するには未だ早い。今は未だ」

???

「……。そうだな。だが、そう遠くはない。……“破滅の時”は、な」

そう言った2人の男の姿はいつの間にか消えていた。

その近くのビルの屋上に1人の女の姿があった。

???

「奴らが……。動き始めた……」

その正体は一護達をミッドチルダへと送り込んだ張本人、エレアだった。

ナンバーズアジト

トーレ

「どつ言つ事だ、これは」

セイン

「おつかしいなあ、ちゃんとスキャンして確認したのに」

トーレ達は回収したケースを開けたが、そこにレリックはなかった。

トーレ

「してやられたな」

トーレはそう考えた。

事実、レリックはフォワード達がちょっとしたトリックを使って隠し持っていた。

ディエチ

「でも、あの黒いのは一体何だったんだ？」

クアットロ

「私を知る訳ないでしょ!？」

トーレ

「確かに……。あんな不気味なもの、見た事がない」

その言葉に2人も頷いた。

しかし、彼女達が再びアレと遭遇する日もそう遠くはないかもしれない。

t o b e c o n t i n u e d

第19話『ナンバーズ』（後書き）

作者

「パラレルワールドバラエティ!!!!」

一護

「来たか・・・」

作者

「早速今回のゲストをお呼びしましょう！獄寺隼人さんです!!」

獄寺

「お久しぶりですっ!!!10代目!!!」

ツナ

「ご、獄寺君!?!」

獄寺

「10代目が大変な目に遭ってらっしゃると言うのにお助けできないなんて・・・申し訳ありません!!」

ツナ

「い、いや大丈夫だから!!」

獄寺

「それより・・・おい、クソ作者!!!」

作者

「!?!」

獄寺

「最近10代目のご活躍があんまり見られないんだが・・・どう言う事だ!?!」

作者

「どう言うと言われても・・・どう言う事だろう?」

獄寺

「恐れ多くも偉大なボンゴレ10代目を無下に扱うなら・・・」

ボンゴレギア
VG発動

作者

「へ?」

ツナ

「ちよ、獄寺君!？」

獄寺

「果てるおおおお!!!!」

ドドドドドオオオオン!!!!

作者

「ぎゃあああああ!!!!!!!!」

ツナ

「獄寺君、ストオオオオオッ!!!!」

一護

「・・・ハア。感想、指摘、要望、質問待ってるぜ。ああ後アンケートもよろしくな」

作者

「お助けええええ!!!!」

獄寺

「待てええええ!!!!」

第20話『少女』（前書き）

現在のアンケート投票数

? 一護&フェイト・・・8票

? ナツ&なのは・・・2票

? ツナ&はやて・・・1票

ここまで来ると後2日で逆転は難しい事と、メイン主人公が一護である事を考え、×切前ではありますが、作者の独断で?の一護&フェイトに決定しました。

?、?に投票して頂いた方、またナツファン、ツナファンの皆様、申し訳ありません。

今回はとても短いです。

では、ごきげん

第20話『少女』

【3人称side】

一護

「何で俺達が行くことになったんだ？」

シグナム

「今回の事件の後処理で主達隊長陣は手が放せないんだ」

ツナ

「だから、オレ達が？」

ナツ

「うぶ……」

ナツの様子からもわかるように、今現在4人は乗り物、厳密に言うと車に乗って聖王医療院に向かっている。

ツナ

「シグナム……あの子、どうなるの？」

あの子とは先日フオワード達が保護した少女の事だ。

シグナム

「・・・正直な話、未だ決まっていけない。何かしらの白黒がついたとしても六課、或いは教会で保護する形になると思う。尤も、養子に取ってもらえる家庭が出るのが望ましいんだがな・・・」

シグナムはそう考える。

確かに、子供にとって“家族”が、“親”が必要不可欠だ。

一護

「その子供、六課で預かる事は出来ねえのか？」

シグナム

「教会側から許可が出れば可能だが・・・どうした？」

一護

「教会にどんな人がいるか知らねえけど、六課にはエリオ達みたいな歳の近い奴がいるからな。その子供にとっても良いんじゃないかねえかと思っただ」

シグナム

「なるほど……。検討してみる価値はあるな」

その時、

ビー！ビー！

緊急通信のブザーが響き、シグナムの目の前にモニターが現れた。

シャツハ

《騎士シグナム！聖王教会のシャツハ・ヌエラです！》

通信はシャツハからだった。

シグナム

「どうされました？」

シャツハ

《すみません！こちらの不手際がありまして、検査の合間にあの子が姿を消してしまいました！》

一護・ツナ・シグナム

「「「！！！！？」」」

ナツ

「っ!?!?・・・うぷっ!」

少女が姿を消した事に3人は驚いた。

ナツも驚いてはいるが、それよりも吐き気の方が強いらしい。

シグナム

「わかりました。至急そちらに向かいます」

シャツハ

《お願いします!》

その直後、モニターが消え、通信が切れた。

そして4人は急ピッチで聖王医療院へと向かう。

聖王医療院

シャツハ

「申し訳ありません！……って、あの……そっちの3人は何が……？」

シグナムの後ろの3人を見たシャツハが訊く。

一護の顔は少し青く、ツナは口を押さえている。

ナツに至っては立つ事も困難なようで、両手を地について唸っている。

その理由のキーワードは“運転”。

緊急通信が入った事により、シグナムが滅茶苦茶な運転を繰り返したためだ。

シグナム

「気にしないで下さい。それで、状況は？」

シャツハ

「はい。特別病棟とその周辺の避難は完了しています。今のところ、飛行や転移、侵入者の反応は確認されません」

シグナム

「外部へは？」

シャツハ

「その点は大丈夫です」

シグナム

「なら手分けして探しましょう。黒崎！沢田とドラグニルを連れて
行け！」

シグナムは少し考えた後、一護に指示を出す。

一護に2人を任せたのは、一護が最も具合がマシそうだったからだ。

一護

「うっ……わかった……」

一護はまだ若干気持ち悪かったが、2人を連れて建物の外を探すことにした。

シグナム

「検査では危険反応は無かったのですね？」

シャツハ

「ええ。魔力量はそれなりに高い数値でしたが、それも普通の子供の範疇でした。ですが……」

病棟内を搜索している2人は件の少女について話していた。

しかし、その会話中にシャツハの表情が少し暗くなる。

シャツハ

「悲しい事ですが、人造生命体なのは間違いないです。どんな潜在的危険性があるかは……」

シグナム

「とにかく、早く探し出しましょう。それが先決です」

シヤッハ

「はい。では私はこちらに」

そこからは2人も分かれて探す事にした。

一護

「どうだ、ナツ？」

ツナ

「あの子の匂いわかる？」

ナツ

「慌てんなくて」

一護達はナツの鼻を頼りに少女を探そうとしていた。

ナツ

「（くんか、くんか）」

ナツは辺りを隈なく嗅ぐ。

ナツ

「！コツチだ！」

ナツは少女の匂いを嗅ぎつけ、その方へと向かう。

一護とツナもそれに続く。

ツナ

「！いた！」

匂いの方向へ走っていると、ぬいぐるみを抱えたまま彷徨う少女を見つけた。

ツナ

「よかった」

ツナが少女に駆け寄り寄りつとす。

その時、

シャツハ

「逆巻け、ヴィンデルシャフト！」

一護・ナツ・ツナ

「「「！！！！？」」「」」

自身のデバイス、『ヴィンデルシャフト』を構えたシャツハが飛び出してきた。

シャツハはそのまま戦闘態勢に入る。

ツナ

「ちよっ

！！」

ツナがそれを止めようとした時、それよりも速く動いた者がいた。

ガシッ！！！！

シャツハ

「っ！？」

一護

「何やってんだよ」

一護がヴィンデルシャフトを構えるシャツハの腕を掴む。

一護

「怯えてんだろ！」

一護が少し強い口調で言う。

一護の言葉通り、少女は尻餅をついて涙を浮かべていた。

シャツハ

「その子は人造生命体・・・危険な存在なんです!!！」

シャツハもまた、強い口調で危険性を訴える。

一護

「危険？こんな子供がか？」

シャツハ

「今は確かにただの子供です。ですが、いつその危険性を発揮するかわからないんですよ!!」

シャツハは何とか一護を説得しようと必死に訴えかける。

一護

「危険かもしれない……。そんな理由でアンタは、怖がって泣いてる子供に刃を向けんのか!？」

シャツハ

「っ!?!、しかし　　っ!?!」

一護の言葉にシャツハは一瞬揺らぐ。

シャツハが反論に出ようとするが、一護はその口に手を翳す。

一護

「こいつの事は俺に任せてくれ……」

一護は静かに言うと、少女の方へ向く。

少女

「ふえ……」

一護

「大丈夫だ……。怖がなくていい」

少女は再び怯え、涙を浮かべるが、一護の言葉でそれが少し和らいだようだ。

一護

「立てるか？」

少女

「（こくっ）」

少女は何も言わずに頷く。

そして一護の差し伸べた手を取り、立ち上がる。

一護

「ホラよ」

一護は傍に落ちていたぬいぐるみを拾い、少女に渡す。

少女

「……………」

少女は無言のままぬいぐるみを受け取る。

一護

「名前は何て言うんだ？」

少女

「……………ヴィヴィオ」

一護の問いに少女、ヴィヴィオが答える。

一護

「ヴィヴィオ、どうして逃げ出したりしたんだ？」

一護はヴィヴィオの名前を呼びながら問いかける。

ヴィヴィオ

「……………ママ、いなかった」

一護

「そうか……。よし、じゃあ一緒に探すか」

一護はヴィヴィオの頭を撫でる。

ヴィヴィオ

「……うん」

ヴィヴィオは静かに頷く。

一護

「でも先ずは勝手に外に出た事をみんなに謝るんだ。できるな？」

ヴィヴィオ

「うん」

今度は少し力強く頷く。

一護

「じゃあ行こうぜ、ヴィヴィオ」

一護が再び手を差し伸べる。

ヴィヴィオ

「うん！」

ヴィヴィオはその手を取り、嬉しそうに頷く。

その様子を見ていたナツとツナは、

ナツ

「アイツ、あんなスキルがあつたのか？」

ツナ

「・・・意外だね」

一護の面倒見の良さに驚いていた。

t o b e c o n t i n u e d

第20話『少女』（後書き）

今回もアンケート・・・と言っよりはただ単に聞きたいだけなんです、最近の読者様の感想で、“一護たちの世界から誰か来ないのか？”と言っのがありました。

作者は助っ人とかはあまり考えてなかつたのです。

何故なら呼ぼうにも多重クロスなので、各世界から1〜2人が限界ですし、誰を出すんだ？って事になるからです。

しかし、最近考えが変わつて来てまして・・・。

？誰かを助っ人に遣す

？逆に一護たちの世界へ行くストーリーを作る

？誰も出さないままラストへ

こんな感じですよ。

アンケートではなくただの意見陳述だと思ってください。

なので、必ずしもそうするとは限りませんし、読者様からもしいいアイデア等が出ればソッチにする可能性も、しない可能性もあります。

気が向いたらで構いませんので、意見をお聞かせ下さい。

長々とすみませんm() () m

次話は明日にでも投稿しようと考えております。

では、失礼しました。

次回『家族』

第21話『家族』（前書き）

今回も短いです。

しかもグダグダ……。

フェイトもなんか妙な事に……。

取りあえず、どうぞ

第21話『家族』

【3人称side】

部隊長室

なのは

「臨時査察？」

フェイト

「この機動六課に？」

はやて

「うん。地上部隊にそんな動きがあるみたいなんよ」

部隊長室でなのは・フェイト・はやての隊長達3人が話をしている。

内容は六課にかかる不審の眼についてだ。

フェイト

「地上部隊の査察は厳しいって聞くけど・・・」

はやて

「ハア、六課はただでさえツッコミ所満載の部隊やしなあ」

なのは

「今の配置やシフトが変更になっちゃったら致命的だよ？」

はやて

「うーん、何とか乗り切らな・・・」

別に話し合ってどうこうできるモノでもない。

以前から六課に対する地上部隊の評価はあまり芳しくない。

いくらはやて達隊長陣が異論を唱えても、立場的には地上部隊の方が上なので査察を回避するのはかなり難しいだろう。

なのは

「はやてちゃん・・・。これ、査察対策にも関係してくるんだけど・・・」

フェイト

「六課設立の本当の理由、そろそろ訊いてもいいかな？」

なのはとフェイトはこの際に、以前から気になっていた事をはやてに訊ねる。

はやて

「・・・そやね。まあ、ええタイミングかな？これから聖王教会本部、カリムの所に報告に行くんよ。クロノ君も来る」

フェイト

「クロノも？」

はやて

「2人共ついて来てくれるかな？そこで纏めて話すから」

なのは・フェイト

「うん」「」

3人は聖王教会へ向かう事になった。

その時、

はやて

そこに映っていたのは大泣きする1人の少女、ヴィヴィオの姿だった。

一護

《な、泣くな、ヴィヴィオ》

ナツ

《オレに任せる！ホラ、ヴィヴィオ！火の玉お手玉だ！》

ツナ・スバル・ティアナ

《《ナツ（さん）それ逆効果！！！》》

さらにヴィヴィオを宥めようとする一護、同じく宥めようとするナツ、その行動にツッコむツナ・スバル・ティアナ、その光景をオドオドしながら見ているエリオ・キャロの姿もあった。

フェイト

「え〜と、一護？何があったの？」

フェイトが一護に経緯を訊ねる。

一護

《ん？フェイトか？・・・実は・・・》

ヴィヴィオ

《やだああああ!!!!行っちゃだああああ!!!!!!!!!!》

一護の応答を遮り、ヴィヴィオが一護に泣きつく。

一護

《ちょっと席を外そうとしたただけなんだけど・・・》

フェイト

「結果そんな感じに?」

一護

《・・・ああ》

はやて

「取りあえず・・・そっち行くわ」

一護

《わかった》

モニターによる通信が切れる。

はやて

「ほんなら行こか」

なのは・フェイト

「うん」

3人は聖王教会の前に行く所ができてしまった。

フリースペース

なのは・フェイト・はやて

「うん」

なのは達は呆然としていた。

ヴィヴィオをあやすために来たのだが、既に収拾がついていたからだ。

その目線の先には、

一護

「大丈夫だ。俺はお前を置いてどっかに行ったりしねえよ」

ヴィヴィオ

「（グスツ）・・・ホント？」

一護

「ああ、本当だ。心配すんな」

ヴィヴィオの目線までしゃがみ、見事にあやす一護の姿があった。

しかしヴィヴィオは未だ不安なのか、泣き顔のままだ。

一護

「お前は俺を困らせたのか？」

ヴィヴィオ

「うっん」

一護

「俺の言葉が信じられねえか？」

ヴィヴィオ

「うっん」

一護

「じゃあ俺を信じろ。お前を1人にはしない」

ヴィヴィオ

「うん」

一護はその後ヴィヴィオをあやし続けた。

ヴィヴィオもとうとう泣き止んだ。

はやて

「ほえ〜。すごいな、一護君」

はやてが一護のあやし方に感心する。

一護

「妹がいるんだ。小さい頃、よく泣いて俺に縋りついてきてたからな。自然とこう言うのに慣れたんだ」

はやて

「なるほどね〜」

はやては一護の説明で納得する。

ヴィヴィオ

「・・・？」

2人が会話していると、ヴィヴィオがはやてを見ながら首を傾げる。

一護

「ヴィヴィオ、コイツは俺の仲間のはやてだ」

はやて

「八神はやてや！よろしくな、ヴィヴィオちゃん！」

はやてはヴィヴィオに笑顔を向ける。

なのは

「高町なのはです！よろしくね、ヴィヴィオちゃん！」

フェイト

「フェイト・T・ハラオウンです。よろしくね、ヴィヴィオ」

なのはとフェイトもヴィヴィオに自己紹介する。

一護

「みんなお前の味方、お前の家族だ」

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオの・・・？」

一護

「ああ・・・」

一護はヴィヴィオの頭を撫でながら言っつ。

フェイト

「・・・／／／」

フェイトは一護とヴィヴィオを見ている。

何故かその頬が若干赤い。

フェイトの眼にはその2人が親子のように見えていた。

一護は父、ヴィヴィオは娘……………。

なら母親は？

それを想像していた。

一護

「なあ、はやて……………。コイツ六課（こく）で預かれねえか？」

はやて

「教会から許可が出れば構わへんけど……………。何でなん？」

一護

「妙に懐かれちゃったからな……………。俺が面倒見ようと思っただ」

はやて

「それはええけど・・・一人で大丈夫か？」

一護

「それを言われると、自身はねえけど・・・」

一護自身、正直一人で出来るかは不安だったりする。

ツナ

「大丈夫だよ。オレ達も手伝うか」「私が!!」「っ!?!」

ツナがフォローに入ろうとすると、それを遮って発言する者がいた。

フェイトだ。

フェイト

「わ、私が手伝うよ、一護!・・・/ / /」

フェイトが少しモジモジしながら言う。

一護

「それは嬉しいけど・・・お前、隊長業務はいいのか？」

フェイト

「うん。仕事の合間合間になるけど・・・い、一護と一緒に・・・やりたいなあって・・・／＼／」

フェイトの顔は一層赤くなり、仕草も子供のように可愛くなる。

細かく言うと、両手の人差し指を顔の前で合わせる感じ・・・。

はやて

「ほんなら一護君が保護者、フェイトちゃんが後見人って事であんなかな？」

フェイト

「うん!!--」

いつもおとなしい感じのフェイトのテンションが、この時ばかりは少し高い。

一護

「アリガトな、フェイト」

フェイト

「うん。」「っちこそ、ありがとっ……／＼／」

一護

「……は？」

フェイト

「えっ、あっ！えっと……こつちの話……／＼／」

フェイトの妙なテンションはその後も続いたとか……。

はやて

「青春やねえ。じゃあ、本題と行こか」

ツナ

「本題？」

はやてが本日の本題を切り出す。

はやて

「うん。3人にちょっとついて来てもらいたい所があるんや」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第21話『家族』（後書き）

もうすぐ“その日”なので、ちょっとペースを上げようと思っております。

その分グダグダ・・・いや、何でもありません。

取りあえず次話は明日、もしくは明後日には出したいと考えております。

では、失礼しました。

次回『予言』

第22話『予言』（前書き）

プロローグの予言をちょっと変更しました。

それだけです。

では、ごんごん

第22話『予言』

【3人称side】

現在、一護、ナツ、ツナ、なのは、フェイト、はやての6人は聖王教会へ行くためにヘリに乗っていた。

一護

「で？お前らはともかく、俺たちまで呼ばれたのは何でなんだ？」

一護がそう訊ねる。

はやて

「うーん、それは向こう着いたら話すから今は勘弁してくれへんか？」

一護

「……別にいいけど」

この件は後回しとなった。

はやて

「それにしても・・・」

はやては横目でチラッと一護の隣を見る。

そこには、

ナツ

「うぶっ・・・」

恒例の状態となっているナツがいた。

フェイト

「乗り物酔いするとは聞いてたけど・・・」

なのは

「にやははは、ここまでとは驚きだね・・・」

その状態のナツを初めて見る3人は苦笑するしかなかった。

ただ、なのはだけはそんなナツを“カワイイ”と思っていたりする。

なのは

「ナツ君、膝枕してあげるから私の隣に来る？」

ナツ

「・・・うん」

ナツはその提案に乗って、フェイトと席を替わる。

はやて

「ツナ君も膝枕したるか？（笑）」

ツナ

「オレは大丈夫だよ・・・」

はやても冗談気味に言うが、ツナは当然それを断る。

フェイト

「（一護は・・・言うだけ無駄か・・・）ハア・・・」

一護

「ん？」

フェイトも一護の方を見るが、やるだけ無駄と悟り、溜息をつく。

一護はその様子を見て首を傾げる。

聖王教会本部

数十分後、6人を乗せたヘリは聖王教会本部に到着した。

一護

「デツケーな・・・」

一護はその大きさに驚いていた。

はやて

「ナツ君とツナ君は来たことあるやんな？」

ナツ

「オウ。オレがこの世界で最初に来た場所だ」

ツナ

「オレははやてと一緒に来たっけ……」

そんな会話をしながら中へ入って行く。

中に入ると、金髪の女性が出迎えた。

なのはとフェイトはその女性に敬礼する。

なのは

「高町なのはは一等空尉であります」

フェイト

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

???

「いらつしゃい。始めまして……と言ってもナツさんと綱吉さんは一度会ってるわね。聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアと申します」

金髪の女性、カリムは一護たちに近づく。

カリム

「あなたが黒崎一護さんね？」

一護

「ああ、一護でいいぜ。よろしくな、カリムさん」

カリム

「よろしくお願ひします。ようこそ、聖王教会へ」

カリムは一護たちを奥へ案内する。

そしてある部屋に入ると、そこに1人の男性が立っていた。

彼はクロノ・ハラウン。

フェイトの義兄である。

フェイト

「久しぶり、お兄ちゃん」

クロノ

「お互いいい歳なんだから、その呼び方は止める」

フェイト

「いいじゃない、別に」

クロノ

「まったく・・・」

そんな兄妹の会話の後、クロノが一護たちの方を見る。

クロノ

「クロノ・ハラオウンだ。フェイトたちが世話になっているみたいだな」

一護

「黒崎一護だ。世話になってるのはコッチだけどな」

ナツ

「ナツ・ドラグニルだ」

ツナ

「沢田綱吉です」

一通りの挨拶を済ませ、早速話を始める。

クロノ

「六課設立の表向きな理由はロストログア、レリックの対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。知っての通り後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母で上官のリンディ・ハラウンだ。加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め、協力の約束もして頂いている」

クロノの説明にはやて以外の5人は若干の違和感を抱いていた。

たかが一部隊を設立するためにそこまで豪華な後見人が必要だろうか……。

カリム

「六課設立の本当の理由は私の能力と関係があります」

そう言ってカリムは立ち上がり、数枚の古びた紙を取り出す。

カリム

「私の能力については八神部隊長よりお聞きになったと聞きましたか……」

一護

「ああ」

以前にはやてが言っていたカリムの能力『プロフェーティン・シュリフテン予言者の著書』。

その能力は文字通り“予言”。

カリム

「私の能力は最短で半年、最長で数年先の未来を詩文形式で書き出す予言書のページを作成する事が出来ます。ただ、2つの月の魔力が上手く揃わないと発動できないため、ページの作成は年に一度しか出来ないんです」

カリムの説明はさらに続く。

カリム

「予言の中身も古代ベルカ語で、解釈によって意味が変わる事もある難解な文章。世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解積ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度。つまりあまり便利な能力ではないんです。しかし・・・」

カリムは数枚の紙の中から1枚を取り出し、みんなに見せる。

カリムはそこに書いてある予言を読み上げる。

カリム

「『古い結晶と無限の欲望が集い、交わる地。死せる王の許、聖地より彼の翼が甦る。死者たちが踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も焼け落ちる』」

なのは

「それって……」

フェイト

「まさか……」

なのはとフェイトはその予言が指し示す意味がわかった。

カリム

「……そう。ロストログアを切っ掛けに始まる管理局地上本部の壊滅、そして管理局システムの崩壊……」

告げられた予言に一護たちは啞然とする。

ナツ

「マジかよ……」

ツナ

「でも、その予言とオレたちに何の関係が……」

カリム

「それは数週間前に突然現れた新たな予言にあります」

カリムは別の1枚の紙を取り出し、そこに書いてある予言を読み上げる。

カリム

「『破滅降臨せし時、法の塔の許、魔導の理、漆黒の刃、竜の魂、覚悟の炎集い、大いなる戦の火蓋が切られる。地の深淵より邪は解き放たれ、戦火は次元を穿ち、魔は魂を砕く。滅びの光が空を覆いし時、世界は脆くも崩れ去る』」

一護・ナツ・ツナ・なのは・フェイト

「『……!!?!?!?!?!?』」

この予言を聞いた5人は驚愕する。

なのはとフェイトは予言が出た事自体は聞いていたが、その内容までは聞いていなかった。

フェイト

「漆黒の刃、竜の魂、覚悟の炎って……」

一護

「……俺たちの事だな」

ツナ

「うん……」

予言にあった“漆黒の刃”とは、一護の卍解『天鎖斬月』の事。

“竜の魂”とはナツが使う魔法『滅竜魔法』の事。

“覚悟の炎”とはツナの力『死ぬ気の炎』の事だ。

カリム

「八神部隊長からあなたたちがこの世界にやって来た理由を聞いた時、確信しました」

カリムは一護たちの方を一瞥する。

カリム

「この予言の意味は、文字通り“世界の破滅”。あなたたちがこの世界にやって来たと言う事は、破滅は既に迫って来ていると言う事。絶対に食い止めなければならぬ。管理局の壊滅も、ましてや世界の崩壊など……。そのために私たちは機動六課を設立したのです」

カリムは再び一護たちの方を向く。

カリム

「一護さん、ナツさん、綱吉さん。あなたたちは元々この世界の間ではありません。あなたたちにとって今回の戦いは利益もなく、危険で死の可能性もあるかもしれません。それでも……。私たち……。いえ、機動六課に力を貸して下さいますか？」

カリムは一護たちに問いかける。

一護

「……。俺たちは訳がわからねえままこの世界に来た。でも、この世界でコイツらと会って、戦って、ふれ合って、仲間になった。たとえ破滅の運命が来ようが、その破滅がどんなに強大だろうが……」

一護は眼を閉じ、この世界で出来た大切な仲間たちの顔を思い浮かべる。

一護

「大事なモンを護り抜く。そのために戦う。それが俺たちの意志だ」

一護は自分のゆるぎない意志を示す。

ナツとツナも同じだ。

一護

「手伝わって言われても手伝わせてもらっぜ、カリムさん」

カリム

「ありがとうございます」

カリムは一護たちに頭を下げる。

一護

「そんな訳でみんな、改めてよろしくな」

一護は自分の手を前に伸ばす。

ナツ

「燃えて来たぜ！」

ツナ

「うん。よろしく」

ナツとツナがその上に手を重ねる。

なのは

「コッチこそよろしくね！—護君！ナツ君！ツナ君！」

フェイト

「絶対に勝つよ」

はやて

「そや！みんなで力を合わせて、世界の破滅を食い止めるんや！」

なのは、フェイト、はやても手を重ねる。

ここにゆるぎない絆が生まれた。

6人はこの絆で破滅の運命を打ち破る事を誓う。

t o b e c o n t i n u e d

第22話『予言』（後書き）

現在更新ペースを上げております。

なので、本日中にもう1話出します。

その次からいよいよナンバーズと激突（予定）です。

では、失礼しました。

m (((m

次回『それぞれの考察』

第23話 『それぞれの考察』 (前書き)

と言つ訳で連続投稿です。

ど
ぞ

第23話『それぞれの考察』

【3人称side】

ナンバーズ アジト

一護たちが聖王教会で話をしていた頃、ナンバーズのアジト、正確にはジェイル・スカリエッティのアジトでは、数人の男女が会合を開いていた。

まあ、“数人の男女”と言っても男はジェイル1人のみで、それ以外は全員女だ。

その女性たちは、全12人で構成されるナンバーズ。

だが、その内3人は未だ目覚めておらず、1人は極秘任務を行っていてココにはいない。

この場にいるナンバーズは8人。

ナンバーズ1のウーノ。

ナンバーズ3のトーレ。

ナンバーズ4のクアットロ。

ナンバーズ5のチンク。

ナンバーズ6のセイン。

ナンバーズ9のノーヴェ。

ナンバーズ10のディエチ。

ナンバーズ11のウエンディ。

それにジェイル、ルーテシア、アギトの3人を加えた11人が会合を開いている。

ジェイル

「さて諸君。今日集まってもらったのは他でもない。ある者たちについて話し合うためだ。この……」

ジェイルは自分の後ろの巨大モニターに映像を映し出す。

そこには、

一護

『月牙天衝！！！！』

ナツ

『火竜の咆哮！！！！』

ツナ

『イクスバーナー
X B U R N E R！！！！』

ガジェットと戦う一護たちの姿があった。

ジェイル

「次元漂流者、黒崎一護、ナツ・ドラグニル、沢田綱吉の3人について」

そして会合に出席している内の数人が順番に話をする。

トーレ

「この黒崎一護は実際に私も対峙したが、その覇気だけで凄まじい力を感じさせるほどだった。沢田綱吉の方もタダ者ではないと思われる」

ルーテシア

「・・・ガリユーム・・・大怪我した」

セイシ

「沢田綱吉って奴は『ディープダイバー』で隠れてた私の気配をいち早く察知してたぜ」

ディエチ

「ナツ・ドラグニルは私の砲撃を生身で受け止めた。多分、Sランク以上の戦闘能力があると思う」

クアットロ

「私の『シルバーカーテン』の隠れ身を嗅ぎ分けるほどの嗅覚もあるみたい」

実際に3人と戦った者たちが順番に説明する。

ウーノ

「気になるのは彼らの能力ね・・・。3人とも魔導師ではないみた

「いだけど」

ノーヴェ

「見たことねえ能力ばっかだな」

ウエンディ

「確かに……。この世界の魔法とはちょっと違うみたいッスね」

実際に見ていない者たちが映像を見た感想を述べる。

ジェイル

「そう！魔法とは違う異質な能力！私の玩具をいとも容易く壊すその強さ！そして、君たちにそこまで言わしめるその存在！実に興味深い！！」

ジェイルがいきなり立ち上がり、叫ぶ。

その異様なテンションに付いて行ける者はいなかった。

ナンバーズは少し引き気味で、ルーテシアも首を傾げ、アギトも居眠りをしている。

セイン

「あー、ドクター？つまりこの3人を捕まえて来いって事ですか？」

セインが苦笑しつつも、手を挙げて言う。

ジェイル

「その通りだ！是非解析し、解剖し、私色に改造したい！！」

ジェイルの異様なテンションは続く。

チンク

「では次の襲撃の時、陛下と共に・・・」

今まで黙っていたチンクが口を開く。

ジェイル

「うむ！予定が変わってしまいが、是非そうして欲しい！！」

こうして漂流者3人の捕獲計画が決定された。

六課 部隊長室

聖王教会での一件から数日後、六課に陸士108部隊から正式にギンガが出向してきた。

そしてギンガを交えたフォワード vs 隊長陣の模擬戦を終えた現在、六課のメンバー全員が部隊長室に集まっている。

一護たち漂流者組も例外ではない。

一護

「俺たちに用って、何だ？」

例外ではないと言うよりも、今回は主に一護とツナに話があるようだ。

はやて

「ちよっとコレ見てくれるか？」

そう言うてはやては映像を出す。

一護・ツナ

「「!!!?!?」「」

そこには先日の事件で現れた大虚と、メノスグランデそれと戦う一護とツナの姿があった。

はやて

「事件の後処理の時に偶然映ってるのを見つけたんや。エネルギー解析等してもらったら、推定ニアSランクって出よった。単刀直入に訊くで? コレはなんや?」

はやては2人に黒い化物について訊ねる。

一護

「コイツはメノスグランデ大虚。俺の世界にいる虚ホロウって言う悪霊だ」

一同

「「「!!!?!?」「」

全員が驚いた。

以前虚ホロウについて聞いていたなのはとフェイトは、ソレがこの世界に現れた事に。

初耳の者たちは悪霊と言う単語に。

なのは

「虚ホロウってこんなに大きいの！？って言うか推定ニアSランクって・・」

なのははさらに驚く。

以前聞いた話では死神の一般業務の1つが虚退治ホロウだと言うが、その“一般業務”でニアSランクの怪物を相手にするのだから。

一護

「いや、普通の虚ホロウはもっと小せえよ。コイツはその普通の虚ホロウが合体して進化した虚ホロウの親玉みたいなモンだ」

それはそうだ。

日常茶飯事に大虚メノスが現れると言う事は、なのはたちからすれば毎日ニアSランクの化物と戦う事になる。

まさに地獄だ。

しかし、驚くのはまだ早い。

はやて

「じゃあ、コイツが一護君の世界で一番強い敵って事か？」

一護

「いや、コイツじゃねえ・・・」

一同

「「「え？」「」」

全員が一護の発言に耳を疑った。

はやて

「この大虚メノスケランデって言うのより強いんがおるんか!？」

一護

「ああ。正確に言つと、この大虚メノスの中に3つの階級があるんだ」

フェイト

「階級？」

一護

「今映ってるコイツは『下級大虚』^{ギリアン} って言ってる大虚^{メノス}の中でも最下級の奴で、人間に喩えるなら“雑兵”だ」

一同

「……っ！！！！？」

全員思考が停止した。

ニアSランクの化物が“雑兵”。

悪い冗談だ。

六課で言っなければシグナムやヴィータがニアSランクに当たる。

それが雑兵……。

本当に悪い冗談だ。

一護

「コイツらは全部同じ姿で、知能が低い上に動きが遅えからニアS
つつつてもそんなに強くねえ……。ただ、次からは違う」

全員の心中を察しながらも、一護は説明を続ける。

一護

「2つ目は『アジューカス中級大虚』。ギリアンより小さくて姿もバラバラ。でも知能が高くて戦闘能力もギリアンの数倍はある」

一同はもはや言葉も出なかった。

ニアSの数倍の戦闘能力なんて想像したくもない。

しかも、それでもまだ中級。

一護

「3つ目は『ヴァストローデ上級大虚』。コイツが多分俺の世界で一番強い虚だと思
う。姿は人間並みだけど、戦闘能力は他の2つとは次元が違う。
俺でも勝てるかどうかかわからねえ」

もはや一護の説明を聞いているのかも怪しい。

それほどに驚いている。

はやて

「・・・わかった。じゃあこの炎は？」

はやてがいち早く我を取り戻し、大虚の胸に揺らめく炎について訊ねる。

ツナ

「それはオレの世界の炎だよ」

ツナも自分が戦った大虚メソスがそれほどまでに強大な事に呆然としていたが、はやての質問に我を取り戻し、それに答える。

はやて

「ツナ君の？ほんならツナ君が使ってる炎と同じやつか？」

ツナ

「うん。でも正確に言つと違つんだ」

フェイト

「違つつて？」

ツナ

「確かにコレも死ぬ気の炎だけど、属性が違つんだ」

なのは

「属性？」

ツナが自分の世界の炎の特徴を説明し始める。

ツナ

「死ぬ気の炎には全部で7つの属性があるんだ」

はやて

「属性つて、フェイトちゃんみたいな雷とか？」

はやては自分の親友を喩えにする。

ツナ

「それも1つだね。7つの属性はそれぞれ、『大空』『嵐』『雨』『雲』『晴』『雷』『霧』だよ」

なのは

「なんか、天気みたいだね・・・」

そう、まんま天気だ。

ツナ

「7つの属性にはそれぞれ特性と独特な色があるんだ」

はやて

「特性？色？」

ツナ

「うん。『大空』は『調和』でオレンジ色、『嵐』は『分解』で赤色、『雨』は『鎮静』で青色、『晴』は『活性』で黄色、『雷』は『硬化』で緑色、『霧』は『構築』でインディゴ。で、ここに映ってる紫色の炎は『雲』、その特性は『増殖』」

はやて

「増殖・・・」

ツナの説明を受けたはやてがモニターに眼を向けると、丁度大虚^{メソス}が分裂している所が映っていた。

はやて

「・・・ありがとうな、2人共。これで話はお終いや」

モニターの映像が切れる。

話が終わった事により、みんな元の仕事に戻った。

部隊長室にははやて1人のみ。

はやて

「（一護君の世界の化物が、ツナ君の世界の能力チカラを持って現れた。この先ももしか言う敵が現れるんやとしたら、今の私たちに到底勝ち目はあらへん。対策のためにデータを整理せんと・・・）」

はやてはこの先の戦いを危惧していた。

はやて

「ハア・・・。忙しく、なりそうやな・・・」

戦いを危惧しているのは何もはやてだけに限った事ではない。

みんなそうだ。

未知の敵と世界の破滅を賭けて戦わねばならない。

この世界の事を完全に知っている訳ではない一護たちも例外ではない。

みんな戦いを恐れている。

しかし、そればかりではいけない。

世界の破滅を抜きにしても、大切な仲間たちが危険に脅かされる事に変わりはない。

ならば戦おう。

以前に一護が言っていたように、大事なモノを護り抜くために戦おう。

思いの丈は大小様々だが、芯はみな1つだった。

そして時は流れ、来るは9月。

運命の歯車は急速な廻転を見せ始める。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第23話『それぞれの考察』（後書き）

次話からいよいよ“その日”に入ります。

でも何か長くなりそう） - - ;（

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

次回『その日、機動六課（平穩篇）』

第24話『その日、機動六課（平穩篇）』（前書き）

“その日”とはありますが……

今回はタイトル通り戦闘描写はありません。

すみませんm(´`m

では、ごうざ

第24話『その日、機動六課（平穩篇）』

【3人称side】

前回の戦闘機人戦から時が流れ、9月の公開意見陳述会の時期が来た。

この陳述会は本局や各世界の代表によるミッドチルダ地上管理局の運営に関する意見交換を行うためのモノだ。

機動六課の部隊長であるはやてもそれに参加する事になり、なのはたちがその警備に当たる事となった。

前日の夜から行つたため、警備のメンバーは六課のロビーに集められた。

はやて

「明日14時からの開会に備えて現場の警備は既に始まつとる。なのは隊長、ヴィータ副隊長、リイン曹長、フォワード4名、ギンガ陸曹、一護君の9名はこれから出発。ナイトシフトで警備に当たつてもらおう」

フェイト

「みんな、ちゃんと仮眠とった？」

フォワード

「「「はい！……！」「「「

はやて

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に中入りする。それまでの間、しっかりと頼むで」

フォワード

「「「はい！……！」「「「

なのは

「それじゃあみんな、出発するからヘリポートに行くよ」

はやてたちから激励を受けた警備メンバーは、なのはの指示でヘリポートへと向かう。

ヘリポート

今から警備に出発するメンバーがヘリの前に集まっている。

しかし、ヘリポートにいるのはそれだけではなかった。

一護

「・・・ヴィヴィオ？」

一護がヘリポートの隅にフェイト、ヴィヴィオ、ナツ、ツナの姿を見つける。

一護は彼女たちの方へ駆け寄る。

一護

「何してんだよ、こんな所で」

一護はここへ来た理由を訊ねる。

フェイト

「ヴィヴィオがね、どうしても一護の見送りに行きたいって言うから・・・」

ヴィヴィオ

「(こくっ)」

フェイトの説明を肯定するようにヴィヴィオが頷く。

一護

「そうか……。ヴィヴィオ、気持ちはありがてーけどな、ここは寒いから中に戻れ」

ヴィヴィオ

「でも……」

ヴィヴィオの中では“見送りをしたい”と言つものよりも“離れたくない”と言つ気持ちの方が強い。

一護はそれを察して、ヴィヴィオの頭を撫でる。

一護

「心配すんな、ちゃんと戻って来る。言つたろ？お前を置いてどこかに行ったりしねえって」

ヴィヴィオ

「・・・ホント？」

一護

「ああ、約束だ。だからフェイトたちの言う事聞いて、おとなしく待ってる」

ヴィヴィオ

「うん！」

ヴィヴィオは何か吹っ切れたような表情になる。

一護

「フェイト、ヴィヴィオの事頼んだぜ」

フェイト

「うん。任せて」

一護

「じゃあな、行ってくるぜ！」

ヴィヴィオ

「いってらっしゃい！一護パパ！」

一護

「……オ、オウ！」

ヴィヴィオは一護の事を“一護パパ”、フェイトの事を“フェイトママ”と呼ぶ。

フェイトは元々過保護な所もあつてか、ママと呼ばれる事を喜んでいる。

同時に一護の事を考えると恥ずかしくもなってしまうようだが……

一護は“パパ”などと呼ばれる事に若干の抵抗があり、いまだに慣れない。

それでも一護はヴィヴィオの事を思い、笑顔で返す。

一護

「……お前ら、何ニヤついてんだよ」

ナツ・ツナ

「別に」

その度にナツとツナは一護をからかっている。

一護

「ったく……。お前らも、ヴィヴィオの事頼むぜ」

ナツ

「オウ！」

ツナ

「わかった！」

一護はナツとツナにも頼む。

たとえからかわれたりしても、そこは仲間。

信頼しているのだ。

フェイト

「気をつけてね……」

一護

「ああ

そう言って一護はへりに乗り込み、警備へと向かう。

へり内部

へりが飛び立ってから数分後。

へりの中ではある事が話題となっていた。

なのは

「すっかり一護君に懐いてるね、ヴィヴィオちゃん

一護

「ああ。懐いたら懐いたで、結構大変だけどな・・・」

その話題とは一護とヴィヴィオについてだった。

ヴィータ

「とか言いながらも、お前も結構楽しそうだけだな」

一護

「うっ、うっせ！」

一護はヴィータにからかわれ、若干たじろぐ。

リイン

「いっその事、一護さんの子供にしちゃえばいいんじゃないですか
！」

一護

「……………」

リインの一言が一護の表情を険しくさせた。

発言をしたリインもハツとして、後悔するよつに縮こまる。

リイン

「し、ごめんなさい……………」

そして自分の不躰な発言を詫びる。

一護

「いいんだ、別に……。あんだだけ懐かれてんだ、そう言う考えも出て来るさ」

一護は“気にするな”と言う。

一護

「でもダメなんだ。俺はこの世界の人間じゃねえ。いつか別れが来ちまう。だからちゃんと養子にもらってくれ所も探してるし、別れの覚悟も出来てる」

エリオ

「でも、一護さんはよくてもヴィヴィオは……」

一同

「……………」

全員が同じ考えだった。

ヴィヴィオの事を考えると、納得するはずがない。

事実、自分たちも一護たちと別れる事は辛い。

・・・いや、別れたくない。

“尊敬” “友情” “好意”。

根元は違えど行き着く先は同じ思いだった。

一護

「コレばかりは仕方がねえんだ。だからせめてアイツには幸せになつて欲しいんだ。幸せな家庭で、家族と一緒に幸せな生活を送つて欲しいんだ」

なのは

「・・・ホントに、それでいいの・・・？」

なのはが一護の本心を訊こうとする。

しかし、

一護

「別れるのが辛くねえって言えば嘘になる。けど、だからって俺がコツチに残る事も、アイツを連れて行く事も出来ねえんだ」

一護の心は揺るがない。

一護

「だからせめて・・・新しい家族が見つかるまでは、俺が面倒を見る。そう決めたんだ」

一同

「・・・・・・・・」

その後、ヘリが地上本部に到着するまでの間、誰一人として口を開く者はいなかった。

フェイト

「はい、じれでよじー」

フェイトは自室でヴィヴィオと共に寝るために、パジャマに着替えている。

その時、フェイトの前にモニターが現れ、通信が入る。

フェイト

「あれ？母さんから？」

相手はフェイトの義母、リンディ・ハラオウンだ。

フェイトはモニターをつける。

リンディ

『はーい 元気だった？』

フェイト

「うん。じればんは、母れと」

リンディ

『ヴィヴィオもこんばんは』

ヴィヴィオ

「こんばんは！」

フェイト

「何かあつたんですか？」

夜の挨拶を済ませ、フェイトはベッドに腰を下ろしながら用件を訊ねる。

リンディ

『ん、私も明日の陳述会に顔だそうかなって……』

フェイト

「大丈夫だと思いますよ。クロノも別任務中ですし、本局の方も特にいらっしやらないとか……」

母親とは言え、相手は上司。

フェイトの口調も礼儀正しい。

……いや、律儀と言つべきか。

リンディ

『ああ、そう？暫く振りに娘の顔も見たいし、ヴィヴィオにも会いたいんだけど……』

フエイト

「あの、母さん？私は警備任務だし、ヴィヴィオは六課でお留守番ですよ？」

リンディ

『あゝ、そっかそっか、そうよね。む、どうしたらあなたの家に行けるのかしら……？』

リンディは“こりゃ失念”と自分のおでこを叩く。

フエイト

「別に明日じゃなくても、時間が出来たらいつでも会いに来て……家庭？」

フエイトは発言の最中に、母が言った単語に引っかけた。

リンディ

『ホラ！この前一緒にヴィヴィオを紹介してくれた男の子、一護君
って言ったかしら？中々カッコいい旦那様じゃない』

その瞬間、フェイトの顔が一気に赤くなった。

フェイト

「えっ？はあ！？ちよっ、母さん！別に一護は私の夫じゃ・・・/
／／」

フェイトは母の言葉を否定しながらも、自分の言葉でさらに顔を赤
らめる。

リンディ

『あら、違うの？でも“未来の”は付くかもしれないでしょ』

フェイト

「っ！？・・・／／／」

追い討ちをかけるようなリンディの言葉に、フェイトはさらにさら
に顔を赤らめる。

ヴィヴィオ

「・・・？」

そんなフェイトの様子を、ヴィヴィオが不思議そうに見つめる。

リンディもモニター越しにフェイトを見つめる。

……いや、眺めてる。

その2つの視線がフェイトをさらにアワアワさせる。

リンディ

『(クスッ) 元気な娘の姿も見れたし、もう切るわね』

フェイト

「え、あ、うん。またね、母さん」

リンディ

「お休みなさい、フェイト、ヴィヴィオ」

フェイト

「お休み、母さん」

ヴィヴィオ

「お休みなさい」

就寝の挨拶を最後に、モニターと通信が切れた。

フェイト

「もう、母さんは……」

フェイトは疲れ果て、そのままベッドに寝転ぶ。

フェイト

「一護が私の旦那さん、か」

フェイトはそれを想像してみた。

フェイト

「っ！……／／／」

しかし長くは続かず、恥ずかしくなってすぐに止める。

フェイト

「でも……。もし、そうなら……。エヘッ……。／／／」

フェイトは再び想像し、枕を抱きしめながら微笑む。

その様子は前線部隊の隊長とは思えないほどカワイラしかった。

中央管理局 地上本部

翌日、地上本部にて公開意見陳述会が開始された。

前日から警備に当たっていたなのはと、今朝こっちに到着したフェイトは内部の警備を行っている。

その際、デバイスの持込が出来ないため、レイジングハートとバルディッシュをスバルたちに預けていた。

一護は念話が出来ないため、小型の通信機を持って辺りの警備を行っている。

歴戦の感覚を研ぎ澄まして辺りを警戒するが、おかしい感覚は確認出来ない。

一護

「あと数時間か・・・」

一護が近くの時計を見て呟く。

一護

「このまま何も起こんなけりゃいいが・・・」

陳述会の終了まであと数時間・・・。

一護は平穩無事を願った。

しかし、その願いは儚くも打ち砕かれた。

ウゝ、ウゝ、ウゝ

管理局の管制室に警報アラートが鳴り響いた。

その音は一護たちのいる外にまで響き渡った。

一護

「くそっ！」

一護は地上本部の方へと走り出す。

遂に、一護たちとナンバーズの戦いが始まった。

t o b e c o n t i n u e d

第24話『その日、機動六課（平穩篇）』（後書き）

最近アニメ『星空へ架かる橋』を観てて思った事……。

“酒井陽菜がシグナムに見える”

そこで緊急アンケートです。

あまり本編に関係ありませんが……。

題して、

『シグナムにフラグは立つのか！』

です。

当初シグナムは漂流者組ハーレムには入らない予定でしたが、感想で“共通点が多いナツがシグナムにフラグを立てて欲しい”と云うのがあった事と、先程書いた通り酒井陽菜がシグナムに見えて、シグナムがデレるところなるんだらうか？と思いましたが、考えました。

感想通りナツで行こうかとも考えたんですが……。

共通点と言うなら同じ剣（刀）を使う一護もいいかなとか思ったり・
……。

草食系のツナも面白いかも（笑）

と言う訳で、

? 一護

? ナツ

? ツナ

? フラグ不立

以上から1つ選んで投票して下さい。

期限は短めですが6月17日までで（汗）

よろしくお願ひします

m () () m

次回『その日、機動六課（襲撃篇）』

第25話『その日、機動六課（襲撃篇）』（前書き）

今回、一護が色々やっちゃいます

後、ナツとツナは今回出て来ません。

三（一）三

では、さようなら

第25話『その日、機動六課（襲撃篇）』

【3人称side】

地上本部の管理システムが何者かにハッキングされ、中にいる人たちが閉じ込められてしまい、通信も遮断されてしまった。

ジェイル・スカリエッティとナンバーズたちの仕業だ。

さらに大量のガジェットが辺りを包囲し、数人のナンバーズが地上本部に侵入した。

ティアナ

「エリオとキャロはここにいて！スバル！なのはさんたちの所に行
くわよ！」

スバル

「うん！」

スバルとティアナが預かっているデバイスを返すためになのはたちの許へと向かう。

しかし、

???

「エリアルショット!」

スバル・ティアナ

「!?!?!」

ダアアアアアン!!!

突如上空から弾丸が放たれ、地面に着弾し、砂煙が舞う。

煙が晴れると、2人のナンバーズがスバルとティアナの行く手を塞いだ。

赤い短髪の少女、ナンバーズ9のノーヴェと、同じく赤い髪を後ろで束ねている少女、ナンバーズ11のウエンディだ。

ノーヴェ

「悪いがテメエらはどこにも行けねえ……。ここで消えるからだ!」

そう言い終わると同時にノーヴェエが高速でティアナに接近し、強烈な蹴りを放つ。

ティアナ

「くっ!!」

ティアナはバリアを張ってそれをギリギリ防ぐ。

ノーヴェエ

「ちっ!!」

ノーヴェエは追撃をせず、一旦ウエンディの許まで下がる。

ティアナ

「（コイツ・・・ただの蹴りが、なんて威力なの!?!）」

ティアナはバリアでノーヴェエの蹴りを防いだが、その威力を間接的に感じ取っていた。

ティアナ

「みんな、気をつけなさいよ・・・」

スバル

「ティアもね・・・」

エリオ・キャロ

「はい」

フォワードの4人は自分たちの行く手を阻む敵と対峙した。

一護

「スバル！そっちはどうなってる！？」

一護は通信機を通してスバルと連絡を取る。

スバル

『今、2人の戦闘機人と交戦してます！』

一護

「わかった！俺はギンガと合流する！気をつけろよ！」

スバル

『わかりました！ギン姉の事、お願いします！』

スバルとの通信を切り、一護は瞬歩でギンガの許へと向かう。

一護

「くそっ！どつちだ！？」

一護はギンガの居場所がわからず、迷っていた。

その間にも襲って来るガジェットを斬っている。

その時、

ドオオオオオン！！！！

一護

「！？」

近くで爆発が起こった。

一護はその爆発の方へと向かう。

建物内部の開けた場所ではギンガが命の危機に瀕していた。

満身創痍で既に戦える状態ではない。

そんなギンガと相對するのは右目に眼帯をした銀髪の少女、ナンバ
ーズ5のチンクだ。

チンク

「これで終わりだ。『タイプゼロ・ファースト』……」

ギンガ

「くっ……」

チンクはナイフ型の固有武装『スティングガー』をギンガに向ける。

ギンガは左腕の傷を押さえながらチンクの方を見る。

その傷の奥からは人間の内部構造ではなく、精密な機械が覗いていた。

ギンガはクローン技術を利用して、機械を埋め込まれた人間。

つまりナンバーズと同じ戦闘機人なのだ。

妹であるスバルも同じく。

チンク

「お前をドクターの許に連れて行く」

チンクはそう言って複数本のステインガーを放つ。

ギンガ

「（スバル……）」

ギンガは大切な妹を思いながら死を覚悟する。

その時、

キイイイイン!!!

ギンガ

「えっ……」

チンク

「何!?!」

ギンガに向かって放たれたステインガーがすべて弾かれた。

一護

「大丈夫か、ギンガ?」

ギリギリで駆けつけた一護によって。

ギンガ

「一護……さん……」

ギンガは気が緩んだのか、一護の方に倒れこんだ。

一護

「お、おい！ギンガ・・・っ!？」

一護はギンガを受け止める。

その時、ギンガの左腕の傷が眼に入った。

一護

「これは・・・」

一護はその傷の奥に見えるモノを見て絶句した。

ギンガ

「私は・・・ただの人間じゃないんです・・・。戦闘機人なんです・・・。」

ギンガは弱々しく口を開く。

そして涙を流しながら続ける。

ギンガ

「黙ってて、ごめんなさい……。でも……。私は……」

一護

「もついい……」

一護はギンガを抱きしめた。

ギンガ

「一護……さん……？」

一護

「お前の生まれがどうだろうと関係ねえ。お前は笑えるし、泣けるし、他人を思いやる事が出来る。そいつは立派な人間だって事だ。立派な心を持った1人の人間、1人の女の子じゃねえか」

一護の言葉にギンガの心は満たされた。

ギンガ

「ありがとう……」

そしてギンガは気を失った。

一護はギンガをそつと床に寝かせると、後ろを振り返る。

チンク

「黒崎一護だな。貴様もタイプゼロ・ファーストと共に連れて行く」

チンクは再びステインガーを構える。

一護

「・・・違つ」

チンク

「違つ？何がだ」

一護

「コイツはギンガだ。タイプゼロ・ファーストなんて、物みたいに言つてんじゃねえよ！」

チンク

「（ゾクッ！！！）」

一護の放つ覇気にチンクはかつてないほどの寒気を感じた。

チンク

「（な、何だ、コレは！？）」

チンクは眼の前の男に恐怖を感じた。

一護

「行くぜ・・・」

一護は斬月を突き出し、左手を添える。

一護

「卍！！解！！！！」

瞬間、一護の霊圧が膨れ上がる。

一護

「天鎖斬月・・・」

一護は卍解してすぐに刃を構える。

一護

「来い」

チンク

「くっ!!」

チンクは再び複数本のステインガーを放つ。

チンク

「IS『ランブルデトネイター』、発d」

一護

「月牙天衝!!!!」

ダアアアアアアン!!!!!!!!!!

チンク

「っ!?!」

チンクが自身のISを発動させる前に、一護の斬撃がすべてのステインガーを叩き壊した。

チンク

「い、一撃、だと・・・!?!」

チンクのI S『ランブルデトネイター』は、触れた金属を爆発させる能力だ。

だが、爆発させる金属がなければ意味を成さない。

チンク

「くっ!!」

チンクは悟る……。

自分に勝ち目がない事を……。

しかし、

チンク

「（私は……負ける訳にはいかない!）」

再びステインガーを構える。

「もう止める。お前じゃ俺に勝てねえ・・・」

チンク

「黙れ・・・。任務を完遂するために・・・貴様に負ける訳にはい
かないんだ!!」

一護

「・・・そうか」

チンクはステインガーを放つてすぐに爆発させ、眼を眩ました隙を
ついて再びステインガーを放つて爆発させる作戦を考える。

そして、最初のステインガーを放とうとした瞬間、

シュンッ!!!

チンク

「!?!」

チンクの視界から一護の姿が消えた。

一護

「はああっ！！！」

チンク

「なっ！！」

一護は瞬歩でチンクの背後に移動し、すぐさま攻撃をしかける。

ダンッ！！！！

チンク

「くっ、そ……」

攻撃を受けたチンクはその場に倒れた。

しかし、その攻撃が峰打ちだったため、目立った外傷は見られない。

一護

「……早くみんなと合流するか」

一護はギンガの方を向く。

「ちいつー!!」

ノーヴェは弾かれた反動で後ろへ飛ぶ。

そして、殺気の籠もった瞳で一護を睨む。

ノーヴェ

「てめえ……よくもチンク姉を……。許さねえ!!」

一護

「気絶してるだけだ、外傷もねえ。それにギンガを傷つけたんだ、お互い様だろ……」

ノーヴェ

「ふざけんな!!!!」

ウエンディ

「ノーヴェ、ちょっと待って欲しいッス」

一護とノーヴェが言い合いをしていると、遅れてウエンディがやって来た。

ノーヴェ

「ウエンディ！コイツぶっ飛ばすぞ！！チンク姉の敵だ！！」

ウエンディ

「チンク姉がやられたんスカ！？つてか黒崎一護！？」

ウエンディはチンクが負けた事と、その相手が捕獲対象の一護である事に驚いた。

ノーヴェ

「いくぞ、ウエンディ！！」

ウエンディ

「オーケーツス！！」

ノーヴェとウエンディは一護を挟み撃ちにする。

しかし、

シュンツ！！！！

ノーヴェ

ノーヴェ・ウエンディ

「うわああああ……!」

一護は月牙を直接当てるのではなく、地面に当たった衝撃で2人を吹き飛ばした。

その衝撃が凄まじく、吹き飛ばされた2人は壁に激突した。

一護

「……」

一護は無言のままチンクに近づく。

ノーヴェ

「てめえ、チンク姉に何する気だ!」

ノーヴェは一護に怒鳴る。

一護

「何もしねえよ。楽な姿勢で寝かせるだけだ」

一護はチンクを抱きかかえ、ギンガの傍にそっと寝かせる。

そして今度はノーヴェエに近づく。

そしてチンクと同じように抱きかかえようとする。

ノーヴェエ

「やめろ、私に触るな……」

一護

「うるせー、テメーの意見は全部却下だ」

一護はそのままノーヴェエを抱き上げる。

ノーヴェエ

「なっ！は、放せ！！」

一護

「暴れんな、運びにくいだろ。女ならもっとおとなしくしてろ」

ノーヴェエ

「うるさい！私は戦闘機人だ！戦いのために生み出された兵器だ！

「！」

一護

「?どっからどう見ても人間の女の子だけだな……」

一護はノーヴェをジッと見つめる。

ノーヴェ

「!?!?……/ / /」

瞬間、ノーヴェの顔が赤くなった。

状況的には一護がノーヴェを抱きかかえている。

細かく言うと“お姫様だっこ”。

そしてジッと見つめられる。

そりゃ赤くなるよね……。

一護

「っ!!お前、もしかして・・・」

ノーヴェ

「っ!!・・・／／／」

一護が何かに気づいたように声を上げる。

そして、一護の口から次に出た言葉は、

一護

「お前、女じゃなくて男か？」

ドカツ!!!!

一護

「痛ってえええええ!!!!」

ノーヴェの拳が一護の顎にクリーンヒットした。

一護

「何しやがる!!!!」

ノーヴェ

「黙れ！！私のどこが男だ！！！！」

ノーヴェは思いもよらぬ一護の発言に激怒する。

ウエンディ

「アツハハハハハハ！！！！」

ノーヴェ

「笑うな！ウエンディ！！」

一連のやり取りを見ていたウエンディが吹き出し、ノーヴェがツツ
コむ。

一護

「まったく、なのはかスバルに来てもらうか・・・」

一護が救援を呼ぼうとした時、

ズウウウウン・・・・・・・・

一護・ノーヴエ・ウエンディ
「「「!!!!!!」」」

3人は凄まじい重圧を感じた。

ノーヴエ

「な、なんだよ、この感覚!？」

ウエンディ

「き、気持ち悪いッス!!」

重圧の正体がわからないノーヴエとウエンディは混乱している。

しかし、一護は違った。

一護

「嘘だろ!?!?!?!コイツは」

一護はその重圧が何かわかった。

.....いや、知っていた。

一護

「霊圧!？」

一護は感じ取った重圧、もとい霊圧が放たれる方を見る。

そこには白い装束を纏い、腰に刀を差した長髪の男が立っていた。

?????

「黒崎一護……だな？」

男は一護の名を呼ぶ。

一護

「テメエ、何モンだ……？」

一護は男に訊ねる。

?????

「ふん、わざわざ教えてやる義理もねえが、隠す意味もねえからな・
」

少しの間を空け、男が口を開く。

????

「カルマ・ソロモーネ。てめえを殺す……」

一護

「!?!」

カルマ

「男の名だ!?!」

男、カルマは一護の目の前まで一瞬で移動し、一護の喉元に手刀を突き出す。

一護

「くっ!?!」

一護はそれをギリギリで躲し、カルマから距離を取る。

一護

「おい、ノーヴェとウェンディ……だっけ?」

一護が2人を呼ぶ。

ノーヴェエ

「・・・何だ？」

一護

「ギンガたちを連れて逃げる」

ノーヴェエ

「なっ!？」

ノーヴェエは一瞬訳がわからなくなった。

何故自分に頼むのかわからなかった。

それはウエンデイも同じだった。

ノーヴェエ

「何で私たちに言うんだ・・・私たちはコイツを連れ去ろうとしたんだぞ？」

一護

「動けそつのがお前らだけだからだ」

ノーヴェ

「私たちは敵だぞ！？何で「お前らを信じる！」っ！？」

一護

「・・・頼む！」

一護はカルマから眼を逸らさずに言う。

ノーヴェ

「（“信じる”って・・・。私たちは敵なのに・・・。何で、信じられるんだ・・・？）」

一護

「早く行け！ノーヴェ！！」

ノーヴェ

「っ！ああもう、わかったよ！！」

ノーヴェは考えるのを止めてギンガとチンクを抱える。

ノーヴェ

「行くぞ、ウエンデイ！」

ウエンデイ

「わ、わかったッス！」

ノーヴェとウエンデイはその場から離れる。

一護はノーヴェとウエンデイが避難したのを横目で確認し、再び視線をカルマに戻す。

カルマ

「敵に仲間を託すとは・・・訳がわからねえな」

カルマは一護の行いを嘲る。

一護

「アイツらは確かに敵かもしれねえ。でも、仲間を、家族を思いやる心を持つてる。だから悪いやつらじゃねえよ」

一護は敗れた姉チンクのために怒る妹ノーヴェの事を思っていた。

カルマ

「思いやる心だと？あんな機械の塊に、そんなモノある訳ねえだろ！」

一護

「何・・・だと・・・？」

一護の心にある感情が生まれた。

カルマ

「アイツらは所詮戦闘機人。使える内は兵器だが、使えなくなったらタダのガラクタだ」

一護

「っ！！！！」

その瞬間一護の中に生まれた感情、怒りが爆発した。

一護はカルマに斬りかかる。

一護

「ふざけんな！！アイツらが兵器だと！？今、この時を生きてるアイツらが、ガラクタだと！？」

一護 カルマを突き飛ばす。

一護

「月牙天衝！！！」

ザアアアアン！！！！

続けて斬撃を飛ばす。

斬撃はカルマに命中し、爆発で煙が起こる。

一護

「訂正しろっ！！今の言葉！！！」

しかし、

カルマ

「ああ、訂正してやるよ……」

一護

「!?!」

煙が晴れると、そこにはほぼ無傷のカルマがいた。

カルマ

「俺に勝てたらなあ!?!」

カルマは掌を一護に向ける。

カルマ

「虚閃^{セロ}……」

一護

「しまっ

!?!」

カルマの掌から途轍もない閃光が放たれ、一護を呑み込む。

ドオオオオオオオン!?!?!?!?!

閃光が起こした爆発が、煙を起こす。

そして煙が晴れる。

カルマ

「なんだ、まだ生きてんのか？」

一護

「ハア、ハア、ハア・・・」

全身傷だらけの一護が辛うじて立っている。

カルマ

「ハッ！だが、これで終わりだ！！」

カルマは再び掌を一護に向ける。

一護

「くそっ・・・！」

カルマ

「虚閃^{セロ}！！」

巨大な閃光が再び一護を襲う。

が、

ギイイイイイイン！！！！！！

閃光が一護に当たる事はなかった。

何故なら、

ウエンディ

「くっ！何て重たい砲撃ッスか！？」

ウエンディが自身の固有武装『ライディングボード』で虚閃セロを防いでいた。

ウエンディ

「ノーヴェー！チンク姉！今ッス！！」

ノーヴェエ

「オウ！！」

チンク
「了解した！」

ウエンディの合図でノーヴェとチンクが飛び出す。

ノーヴェ
「おらああああ！！！！」

ノーヴェが固有武装『ガンナツクル』からエネルギー弾を撃つ。

カルマ
「フン！そんなモン、喰らうかよ」

カルマはそれを軽く躲す。

しかし、

チンク
「IS発動……」

カルマ
「！？」

カルマが周りを見ると、無数のステインガーが放たれていた。

チンク

「ランブルデトネイター！！！！」

ドカアアアアン！！！！

すべてのステインガーが一斉に爆発し、カルマを襲う。

カルマ

「ちっ！舐めやがって・・・！！」

爆発の煙からカルマが脱出する。

しかし逃れた先には、さらに大量のステインガーがあった。

カルマ

「くっ、そおおおお！！！！」

チンク

ギンガ

「はい。戦う事は出来ませんが、動くくらいなら出来ます」

一護

「そつか……。でもアイツら、何で……」

ギンガ

「一護さんの心が、あの子たちを変えたんです」

一護

「俺の心……？」

チンクとウエンディが一護の方を見る。

チンク

「ノーヴェエから聞いた。敵である私たちを護ろうとした事を」

ウエンディ

「だから今度は私たちの番ツスよ！」

そして最後にノーヴェエが一護の方を見る。

ノーヴエ

「それに・・・お前は私たちの事を、人間として・・・お、女の子として見てくれたからな・・・／＼／」

一護

「お前ら・・・っ!？」

一護が何かを感じ取り、その方へと眼をやる。

カルマ

「ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

チンク

「馬鹿な・・・まだ生きているのか!？」

チンクは自分の最大の攻撃を受けてなお倒れないカルマをみて驚く。

カルマ

「この、雑魚共がああああ!!!!」

カルマは腰にある剣を抜く。

カルマ

「掻き回せ！『獄爵魔人』！！」

カルマの叫びと共に霊圧が膨れ上がり、その姿を変化させる。

その姿はとても奇怪だった。

頭部が前に突き出ており、爪が異様に長く、全身が灰色の毛のようなモノで覆われている。

チンク

「くっ！もう一度行くぞ！ノーヴェ！」

ノーヴェ

「了解！！」

再びチンクとノーヴェがカルマに向かう。

しかし、

ザアアアアン！！！！

チンク・ノーヴェ
「「!!!?」」

一瞬だった。

一瞬で2人の体は斬り裂かれ、血を流しながら倒れる。

カルマ

「ハッ！ガラクタのクセに出血するのか」

カルマはその光景を笑って見ている。

ウエンディ

「ノーヴェ！チンク姉！」

ウエンディが2人に駆け寄る。

ギンガ

「ダメ！行っちゃ

」

ガンッ!!!

ウエンディ

「がっ！！！！」

カルマはウエンディを突き飛ばし、体を踏みつける。

カルマ

「ハハハハハハ！！！！！！」

カルマは同時に高笑いする。

ギンガ

「酷い・・・っ！！」

一護

「ウエンディ！！」

一護がウエンディの名を呼ぶ。

ウエンディ

「い・・・ちゅ・・・」

ウェンディも一護の名を呼ぶ。

しかしその声はあまりにも弱々しい。

一護

「(くそっ！動けよ、俺の体！！俺が護るんだ！！！！俺が、護るんだ！！！！)」

その時、

?????

《うだうだ言ってんじゃねえ！！》

一護

「！！？」

どこからともなく声が響いた。

?????

《護るだなんだって微温イ事言ってるな！とつとつとアイツをぶっ潰せ！！》

一護

「……そうだな。でも1つ間違ってるぜ」

?????

《あ?》

一護

「護るために、アイツをぶっ潰すんだ!」

一護は立ち上がった。

?????

《ハッ! やれ、一護! !》

一護は左手を顔に翳す。

カルマ

「これで、止めだ! !」

カルマは二度虚閃^{セロ}を放つ。

誰もが死を覚悟した。

1人を除いて……。

ザアアアアアン!!!

カルマ

「!?!」

突然虚閃^{セロ}が斬り裂かれた。

驚くカルマの目の前には、一護が立っていた。

その顔には不気味な仮面が付いている。

ソレは虚^{ホロウ}の仮面。

一護がこの世界で初めて『虚化^{ホロウカ}』した瞬間だった。

ギンガ

「一護……さん？」

ギンガが一護に呼びかける。

他の3人も一護の方を見ている。

そして、一護が振り返る。

ギンガ・チンク・ノーヴェ・ウエンディ
「「「「っ！！！！？」」「」「」

4人に悪寒が走った。

一護の顔に不気味な仮面があったからだ。

一護

「心配すんな、すぐに終わらせる」

一護がそう言っても4人はまだ少し怯えている。

一護

「こんな格好で言っても意味がねえかもしれないけど、言わせてく

れ

一護は4人を真っ直ぐ見て言う。

一護

「お前らは、俺が絶対に護ってやる」

ギンガ・チンク・ノーヴェ・ウエンディ

「「「「!!!!!?」「」「」

一護のその言葉で、4人の心は不思議と穏やかになった。

カルマ

「カツコつけてんじゃね

」

カルマは痺れを切らして叫ぶ。

ザアアアアアアン!!!!!!

カルマ

「!!!!!!」

しかし、その叫びが終わるのを待たずに斬撃が放たれた。

一護

「すぐに終わらせるって言っただろ？」

刹那の一撃。

たったそれだけでカルマを戦闘不能にまで追いやった。

カルマ

「くっ……そ……」

カルマはゆっくりとその場に倒れた。

一護

「約束通り、取り消してもらっぜ。コイツらをガラクタだって言った事……」

一護の言葉を聞いていたかどうかは定かではないが、以降カルマが眼を覚ます事はなかった。

一護は虚化ホロウを解き、ギンガたちの許へ戻る。

一護

「大丈夫か、お前」「一護!!」「おわっ!?!」

ノーヴェとウエンディが一護に駆け寄る。

と言っか突っ込む。

ノーヴェ

「何だよ、今のチカラ!?!」

ウエンディ

「すっごく強いツスね!!」

2人共今の一護のチカラに興味を持ったようだ。

チンク

「一護……」

一護

「あ?え〜っと……チンク、だっけ?」

チンク

「ああ」

一護

「そうか・・・何だ？っつーかお前ら退け!!」

一護はチンクと話すと同時に自分にしがみ付いている2人に退くように言う。

チンク

「私たちは自首しようと思う」

一護

「!?!」

チンク

「ドクターを裏切る事になってしまっが、私たちの事を人間として見てくれたお前に恩返しをしたい」

チンクは自分の気持ちを打ち明ける。

一護

「そうか。でも、恩返しなんていらねえよ」

チンク

「何？」

一護

「その代わり、やりたい事やれよ」

チンク

「!？」

一護

「命令だ任務だなんて関係ねえ。自分の思うままにやれ。今みたいに自分で決めてな」

一護はチンクの頭を撫でながら言う。

チンク

「う、うむ・・・／＼／」

一護の言葉に頷くチンクの顔は少し赤かった。

ノーヴェ

「……………」

すると、ノーヴェが一護に近づいて来た。

一護

「ん？どうしたノーヴ
」

ズガンッ！！！！

一護

「つゝゝゝ！！！！！！？」

ノーヴェの蹴りが一護の鳩尾に入った。

一護

「っ！テメエ……何しやがる！！」

ノーヴェ

「うっせえ、バーカ！！……／＼／」

蹴りを入れて去っていくノーヴェの顔も微かに赤かった。

ウエンディ

「だ、大丈夫ツスか、一護!？」

一護を心配したウエンディも近寄ってくる。

一護

「あ、ああ・・・何とかな。そう心配すんな、ウエンディ・・・」

一護はウエンディを心配させないように微笑む。

ウエンディ

「な、ならよかったツス・・・//」

そんな一護を見るウエンディの顔も赤くなっている。

そして、

ギンガ

「(すごいな)、一護さん。人の心をあそこまで変えちゃうなんて・・・。それに・・・)」

一護

『お前の生まれがどうだろうが関係ねえ。お前は笑えるし、泣けるし、他人を思いやる事が出来る。そいつは立派な人間だって事だ。立派な心を持った1人の人間、1人の女の子じゃねえか』

ギンガ

「・・・フフツ！・・・／＼／」

ギンガの顔もまた少し赤かった。

その後、チンクたちを助けるためにナンバーズ6のセインが、一護たちを助けるためなのは、スバル、ティアナの3人がやって来た。

セインはチンクたちの説得によって一緒に自首する事となり、なのはたちは状況の説明を受けた。

その際、ギンガを助け、且つナンバーズの4人を自首させた一護のすこさに3人は感動すると同時に、呆然ともしていた。

t o b e c o n t i n u e d

第25話『その日、機動六課（襲撃篇）』（後書き）

作者

「やっちゃんいました。虚化にフラグ4本・・・」

一護

「フラグってのはわかんねえが、アイツらを護れたんだ。悔いはねえさ」

作者

「カッコいい」

一護

「茶化すな・・・」

作者

「え、感想、指摘、要望、質問待ってます」

一護

「アンケートの方も明日まで受け付けてるぜ」

作者・一護

「よろしく(な)!!」

次回『その日、機動六課（炎上篇）』

第26話 『その日、機動六課（炎上篇）』 （前書き）

やっとツナが活躍する話書けた気がする……。

……かも？

取りあえず、どうぞ

第26話『その日、機動六課（炎上篇）』

【3人称side】

六課 ロビー

ヴィヴィオ

「パパ・・・大丈夫かな・・・？」

ナツ

「大丈夫に決まってるだろ」

ツナ

「うん。ちゃんと帰って来るって約束したでしょ？」

ヴィヴィオ

「・・・うん」

一護たちがカルマと交戦している頃、六課のロビーではナツとツナがヴィヴィオの面倒を見ていた。

その時、

ドカアアアアアン!!!!

ナツ・ツナ

「っ!!!?」

六課内に凄まじい爆音が響き渡った。

ナツ

「何だ!?!」

ツナ

「っ!!!」

ナツ

「あ、オイ、ツナ!」

ツナは爆発音の方に向かう。

ツナ

「っ!!!?」

爆発音は六課の隊舎の方からで、そこから火の手が上がっている。

ツナはシャーリーに通信を入れる。

ツナ

「シャーリー！何があったの！？」

シャーリー

《襲撃です！六課隊舎に2人のナンバーズが侵入したんです！》

ツナ

「敵襲！？」

シャーリー

《現在、シャマルさんとザフィーラが侵入者と交戦中です！》

ツナ

「わかった！オレも今から救援に行く！」

シャーリー

《お願いしますー！》

ツナは通信を切る。

そこへナツとヴィヴィオがやって来た。

ナツ

「敵か!？」

ツナ

「うん。今シャマルとザフィーラが戦ってるって……。オレは2人を助けに行くから、ナツはヴィヴィオを頼むよ!」

ナツ

「わかった!気をつけるよ」

ボウツ……

超ツナ

「ああ!」

ヴィヴィオの事をナツに任せ、ツナは超死ぬ気モードハイパーになって戦地に向かう。

六課隊舎 屋上

隊舎の屋上でシャマルとザフィーラ（人間体）が2人のナンバーズと交戦している。

茶色い短髪のボーイッシュな少女、ナンバーズ8のオットーと、同じく茶色いロングヘアーでカチューシャを付けた少女、ナンバーズ12のディードだ。

ザフィーラ

「ハア、ハア、ハア・・・」

シャマル

「強い・・・！」

シャマルとザフィーラは苦戦していた。

もはや余力も残っていない。

オットー

「これでトドめだ」

オットーはシャマルとザフィーラに腕を向ける。

オットー

「IS『レイストーム』発動」

オットーの腕から光線が撃ち出される。

シャマル

「っ!!」

シャマルは眼を閉じて敗北を覚悟する。

しかし、光線がシャマルたちに当たる事はなかった。

シャマルはそつと眼を開ける。

そこには、

超ツナ

「間に合ったか・・・」

光線を防いだツナの姿があった。

超ツナ

「遅れてすまない。後はオレがやるから、2人は下がっててくれ」

シャマル

「わかったわ。気をつけてね・・・」

ツナは2人を下からさせる。

シャマルとザフィーラは素直に従い、ツナに注意するよう促す。

ツナはそれを聞き入れ、無言のまま頷く。

そしてツナは2人の敵に視線を向ける。

デイド

「沢田綱吉……」

オットー

「ドクターが言ってた捕獲対象の1人……」

オットーとデイドはツナを観察している。

超ツナ

「1つ、訊いてもいいか……？」

オットー

「……何だ？」

超ツナ

「お前たちは何故こんな事をするんだ？」

デイド

「ドクターの命令だからです」

ツナの質問に答えたのはデイド。

その答えは至極単純なモノだった。

ナンバーズにとってドクター、つまりスカリエッティの命令のみが行動理由だ。

それ以外は何もない。

超ツナ

「・・・悲しいな」

オットー

「何・・・？」

ツナの呟いた言葉にオットーが反応する。

ディードの表情も少し歪む。

超ツナ

「誰かの命令なしでは動けない・・・。それじゃまるで操り人形だ」

ツナの言葉に2人の表情がさらに歪む。

デイド

「あなたには関係のない事です」

デイドは問答を止め、武器を構える。

超ツナ

「・・・いいだろう。来い」

ツナも戦闘態勢に入る。

デイド

「IS『ツインブレイズ』!」

デイドは固有武装『ツインブレイズ』に赤い刃を形成し、ツナに斬りかかる。

超ツナ

「!」

ツナはそれを後ろへ飛んで躲す。

そこへオットーが追撃をかける。

オットー

「レイストーム！」

オットーはツナの上を取り、先程の光線を放つ。

超ツナ

「っ！！！」

ツナはそれをさらに躲す。

オットー

「（っ！中々速いな・・・）」

デイド

「（動き回られると厄介ね・・・）」

オットー

《デイド・・・》

デイド

《何、オットー？》

オットーは作戦を考え、デイドに通信を送る。

オットー

《僕がレイストームで攪乱する。その隙に攻撃をしかけてくれ》

デイド

《わかった》

オットーは通信を切り、再びツナに迫る。

オットー

「はあっ！！」

超ツナ

「っ！？」

オットーは複数の光線を連続で放ち、ツナを攪乱する。

ツナはそれを次々と躲す。

デイド

「はああっ!!」

そして、一瞬の間を突いてデイドがツナに斬りかかる。

超ツナ

「ナッツ!!」

ナッツ

「GAO!!」

デイド

「っ!？」

突然ツナの肩に現われたナッツにデイドが一瞬怯む。

そして、ナッツの咆哮でツインブレイズの刃が石化し、デイドは攻撃を中止して後方へ下がる。

デイド

「それは何ですか・・・?」

デイドはナッツを指差して訊ねる。

超ツナ

「オレの相棒だ・・・」

ナッツ

「GAO!!」

ナッツは炎の鬣たてがみを靡かせながら吼える。

超ツナ

「行くぞ、ナッツ!!」

ナッツ

「GAO!!!!」

ツナの呼び掛けにナッツは力強く吼える。

超ツナ

カンピオ・フォルマ
「形態変化・攻撃モード!!」

ツナはナッツをカンピオ・フォルマ形態変化させ、重厚なガントレットを纏う。

超ツナ

「ミリーナ・デイ・ボンゴレ・プリーモ？世のガントレット」

オットー・デイド

「「！！？」」

オットーとデイドはナッツがガントレットに変化した事に驚愕した。
た。

それによって生じた隙をツナは見逃さなかった。

超ツナ

「バーニングアクセル！！！」

ツナは2人に向かって強烈な炎の拳を叩き込む。

オットー

「くっ！！！」

デイド

「ぎゃっ……」

オットーは間一髪でディードを引き寄せ、ツナの攻撃を躲す。

しかし、

オットー

「ぐっ!?!」

オットーの体に痛みが走った。

オットー

「(これは・・・衝撃波!?!すれ違っただけで、こんな・・・)」

さっきのツナの攻撃は威力が高いため、すれ違いざまの衝撃だけでオットーにダメージを与えた。

オットーが驚いていると、ツナが2人に急接近する。

超ツナ

「はあああっ!?!」

オットー
「しまっ
」

ツナの攻撃がヒットし、オットーは地面に落ちる。

デイド
「オットー!!」

デイドが落下したオットーを呼ぶ。

ツナはさすがにデイドの背後に回りこむ。

デイド
「っ!?!」

デイドはそれに気づいて振り返るが、ツナの攻撃は既に放たれており、デイドにヒットする。

デイド
「ぐっ!?!」

デイドもオットーと同様に落下する。

ツナは落下した2人に近づく。

超ツナ

「もう終わりだ。諦める」

オットー

「くっ!!」

ツナの言葉にオットーとディードは唇を噛む。

その時、

????

「終わったようですね・・・」

超ツナ・オットー・ディード

「!!!!!!!!!!?」

1人の女が現れ、ツナたちに声をかけた。

女は白い服に身を包み、緑色の長髪を靡かせている。

その女を見たツナの表情が険しくなる。

超ツナ

「・・・誰だ？」

????

「私はマリィ。あなたの敵ですよ」

女、マリィは不気味に微笑む。

超ツナ

「っ！」

ツナは敵と言う単語を聞いて身構える。

マリィ

「慌てないで下さい。まずは邪魔なゴミを片付けてから・・・」

マリィは人差し指をオットーとディードに向ける。

マリイ
エレットウリコ・カノン
「電撃弾」

マリイの指から4つの雷の弾丸がオットーとデイドに放たれる。

オットー・デイド

「っ！！？」

オットーとデイドは咄嗟に眼を瞑る。

しかし、自分たちの体にダメージがない。

それ所か弾丸が当たった感触がない。

2人はそつと眼を開ける。

そこには、雷の弾丸を防いだツナの姿があった。

オットー

「なっ！？」

オットーとデイドは驚きに表情が歪む。

マリー

「フツ・・・」

その光景を見たマリーは掌をツナに向ける。

マリー

エレックタウリ」・レイ
「電撃砲」

マリーの掌から雷の砲撃が放たれる。

デイド

「危ない！！」

デイドはツナの身を案じて叫ぶ。

超ツナ

モード・ディフェンザ
「防衛モード！！」

ツナは攻撃形態のガントレットを解除し、防御形態へと変化させる。

超ツナ

「『マント・デロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ』? 世のマント」

バアアアアン!!!

防御形態のマントで雷の砲撃を受け止める。

超ツナ

「くっ!」

威力が高いため少し押し戻されたが、なんとかかすべて受けきる事が出来た。

マリー

「・・・お見事」

マリーはツナに賞賛を送る。

超ツナ

「褒めても何も出ないぞ・・・」

ツナはマントを翻す。

オットー

「何故だ・・・？」

超ツナ

「ん？」

ツナの後ろにいるオットーが徐おもむに口を開く。

オットー

「何故、敵である筈の僕たちを庇った・・・？」

オットーは身を挺して庇った事の原因を訊ねる。

超ツナ

「オレの超直感が告げているんだ。“お前たちを護れ”って・・・」

ツナは敵に視線を向けたまま言う。

超ツナ

「……いや、違うな」

デイド

「何が、ですか？」

ツナの呟きにデイドが反応する。

超ツナ

「オレの心が叫んでいるんだ。“お前たちを護りたい”って……」

オットー・デイド

「……!?!?」

ツナが今度は2人の方を見て言う。

その表情はとても穏やかなモノだった。

オットー

「（何故だ……。何故そんな事を……）」

デイド

「オットー……」

オットー

「？」

オットーが考え込んでいると、ディードが話しかけた。

ディード

「彼は・・・何故私たちを護るの？」

その質問はまさにオットーが考えていた事と同じだった。

オットー

「・・・わからない。でも、不思議と一つだけ、思う事がある」

ディード

「・・・私も」

2人は自分たちを護るように立つツナを見る。

オットー・ディード

「」（この人を信じてみたい）「」

2人の心にはツナに対する小さな信頼が生まれていた。

超ツナ

「・・・それは、“雷属性の炎”だな？」

ツナはマリーを真っ直ぐ見て訊ねる。

マリー

「その通りです」

マリーはそれを肯定するし、指に嵌めているリングに緑色の炎を燈す。

と、同時に再び弾丸を生成する。

超ツナ

「!?!」

マリー

エレック・ウツリ・コ・カノン
「電撃弾!」

ツナに向かって数十個の雷の弾丸が放たれる。

ツナはそれをすべて躲し、マリーに接近する。

しかし、

超ツナ

「っ!？」

ツナは体を急停止させた。

数十個の雷の弾丸の先ではマリーが掌をツナに向けていた。

ツナはそれを超直感で感じ取り、接近を止めたのだ。

マリー

「やはりバレましたね・・・」

マリーはツナが止まった事を確認すると手を下げる

その時、

オットー

「レイストーム!!」

マリ

「!?!」

オットーがマリに向かって光線を放つ。

マリは急な事で一瞬怯むが、瞬時に光線を躲す。

しかし、躲した所へデイドが双剣で斬りかかる。

デイド

「はあああっ!!」

マリ

「くっ!!」

マリはその刃を腕で受け止める。

デイド
「っ!？」

デイドは自身の刃が生身で受け止められた事に怯んでしまう。

マリー
「はあっ!…!」

デイド
「っ!…!」

マリーはデイドの腕を掴み、ツナたちの方へと投げ飛ばす。

デイド
「くっ!」

デイドは投げられながらも体勢を立て直し、上手く着地する。

オットー
「デイド、大丈夫？」

デイド

「平気・・・」

オットーはデイドを心配して駆け寄り、デイドは心配無用と立ち上がる。

超ツナ

「お前たち・・・」

オットー

「さっき護ってもらった借りだ・・・と、言いたいが・・・」

デイド

「私たちは・・・あなたと一緒に戦いたいの・・・」

超ツナ

「・・・わかった」

3人は真っ直ぐ敵の方を見る。

マリ

「共闘するのですか・・・？そんな機械たちと・・・。護る意味があるのですか・・・？そんな人間モドキを・・・」

オットー・デイド

「「っ!!」」

マリーの放った言葉は2人の胸に突き刺さった。

元々自分たちが兵器だと理解している。

しかしマリーの言葉を苦しく思うのは、2人が僅かながらも人間でありたいと願っている事を表している。

超ツナ

「意味なんて無い・・・」

ツナの言葉に2人は一瞬身を震わせる。

護る意味が無いと言われたからだ。

しかし、ツナの真意は違う。

超ツナ

「オレがこの2人を護りたいと思った事に、意味なんて必要無い！」

ツナは“護る意味が無い”と言ったのではない。

超ツナ

「人が人を護りたいと思う気持ちに、理由なんて要らない!!」

“護りたい気持ちに理由は必要無い”と言ったのだ。

オットー・デイド

「……」

オットーとデイドは何も言わなかった。

その眼からは一筋の光が流れている。

それは紛れもなく、人間の涙だった。

マリー

「……わかりました。問答は無用、と言っ訳ですね……」

マリーは徐に服のボタンを外す。

オットーとディードはその意味がわからなかった。

しかし、ツナは違った。

超ツナ

「まさか……」

ツナの頭はエマーゲンシーで埋め尽くされた。

そして、その予感は的中する。

その確証はマリーの胸に埋め込まれた“ボックス匣”を見た事によって得られた。

マリー

「行きますよ……」

マリーは指のリングに炎を燈し、胸のボックス匣の穴から炎を注入する。

すると、マリーの姿に変化が起こった。

全身が獣毛に覆われ、2本の角を生やし、爪牙は鋭く尖り、臀部からは“雷の炎”を纏った蛇が獲物を睨んでいる。

そして、その眼光から発せられる圧はとても重い。

超ツナ

「『修羅開匣』か……」

マリー

「その通りです」

修羅開匣……。

それは匣兵器ボックスを体に埋め込む事で通常よりも遥かに高い戦闘能力を引き出す禁忌の技。

マリー

「私の体に埋め込まれた匣兵器ボックスの名は……混獣キメラ」

マリーは冷たく笑いながらその名を語る。

マリー

キメラ・ディ・フルミネ
「雷混獣・・・」

そう、その姿はまさしく獅子、山羊、蛇で構成されたギリシア神話の怪物“キメラ”そのモノだった。

超ツナ

「(っ!!)なんて炎圧だ!!)」

ツナはマリーの発する炎圧の高さに気圧される。

オットーとデイドも同様。

マリー

「やはり邪魔者から消しましょう・・・」

デイド

「っ!!...きゃああっ!!...」

マリーは一瞬でデイドの前まで移動し、その体を突き飛ばす。

オットー

「デイドー!!...っ!!」

オットーがデイドーに駆け寄る。

しかし、その行く手をセルペンテ・ディ・フルミネ雷蛇が阻む。

マリー

「...やれ」

雷蛇

「シヤアアアア!!」

マリーの命令と共に雷蛇の口から雷の砲撃が放たれる。

オットー

「ぐああああ!!」

オットーは砲撃を受けて吹き飛ばされる。

超ツナ

「ビッグバンアクセル!!」

ツナは瞬時に攻撃形態のガントレットを装備し、その拳を叩き込む。

ダアアアン!!

マリィ

「・・・その程度ですか？」

超ツナ

「!?!?ぐっ!!」

ツナの攻撃を受けてもマリィは一切動じる事なく、逆にツナに拳を入れる。

ディード

「はあああっ!!」

ディードがツナの逆側からマリィに斬りかかる。

しかし、

バリイイイイン!!!!

デイド

「っ!!!?!」

デイドの双剣はマリーに確かに当たったがその体に傷をつける事はなく、逆に刃の方が砕け散った。

オットー

「レイストーム!!」

吹き飛ばされたオットーが起き上がり、マリーに光線を放つ。

バアアアアン!!!!

光線は狙い通りマリーに命中した。

オットー

「なっ!?!」

オットーは驚愕した。

倒すまでは行かなくとも、ダメージくらいは与えられるだろうと思
っていた。

しかし、視線の先にいたのはまったくの無傷のマリーだったからだ。

マリー

「フツ……。私の体は雷の炎の特性“硬化”によって極限まで硬
くなっています。あなたたち如きの攻撃では傷などつけられません
よ……」

マリーはオットーを鼻で笑い、眼の前のデイドに視線を移す。

マリー

「では、まず1人……」

デイド

「っ……!」

マリーはデイドに掌を翳す。

その際、雷蛇もデイドの方を睨み、口を開ける。

マリイ
エレットロ・レイ・ドープル
「双雷砲！……！」

マリイの手と雷蛇から同時に雷の砲撃が放たれる。

オットー

「デイド……！」

オットーがデイドの名を呼ぶ。

その安否を確かめるように。

しかし、その応答がない。

オットー

「そんな……！」

オットーは絶望していた。

マリイ

「……じぶんとですわね」

マリーの呟きにオットーは顔を上げ、その方を見る。

超ツナ

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

デイド

「!!!」

そこには、デイドを抱きかかえ、肩で息をするツナの姿があった。

その腕からは血が滴り落ちている。

超ツナ

「ハア、ハア、間一髪と言った所か……」

デイド

「あなた……どうして……」

デイドが傷を負ってまで自分たちを護る理由を訊ねる。

超ツナ

「言った筈だ……。理由なんて無い」

ツナはデイドを下ろしながら続ける。

超ツナ

「護りたいから護った。ただそれだけだ」

ツナの表情はどこか険しく、どこか穏やかだった。

超ツナ

「後はオレに任せて、お前たちは逃げる」

ツナはシャマルたちを下がらせた時のように、今度はデイドたちに逃げると言う。

デイド

「……いやです」

超ツナ

「ん？」

デイドはツナの提案を拒否する。

デイド

「私たちも言った筈です。“あなたと一緒に戦いたい”と・・・」

デイドは再び双剣を携え、立ち上がる。

その瞳には確かな覚悟が宿っていた。

超ツナ

「・・・わかった。なら少しの間でいい、時間を稼いでくれ」

ツナはその覚悟を感じ取り、再び共闘する事を決める。

デイド

「わかりました。オットー!!」

オットー

「(コクッ)(」

デイドは時間稼ぎを引き受け、オットーに合図を送る。

オットーも意図を理解し、静かに頷く。

デイド

「はあああっ！！」

オットー

「おおおお！！！」

2人は同時にマリーに飛びかかる。

マリー

「っ！小賢しい！！！」

マリーはそれを迎え撃つ。

超ツナ

「（出来れば・・・このチカラをもう一度使う時なんて来て欲しくなかった）」

ツナは心の中で嘆いた。

超ツナ

「（でも、やるしかない！オレのために戦ってくれている“仲間”のために！）」

ツナはすぐに嘆きを、迷いを捨てた。

“ 眼の前で戦う仲間を護るために ”

ツナの中では2人は既に敵ではなく、大事な仲間となっていた。

超ツナ

「カンビオ・フォルマ 形態変化・ディスインスト・リミッターレ リミッター解除！！」

ツナは再びカンビオ・フォルマ形態変化を使う。

しかし、今までのような攻撃形態、防御形態はなく、グローブも手の部分のみのモノから肘の部分までを覆う手甲に変化している。

これがツナのボンゴレギア『大空のリングVer. X』の真の姿だ。

超ツナ

「（さて・・・どっちで行くか・・・）」

ツナは眼の前で繰り広げられている戦闘を見て静かに佇む。

超ツナ

「（考えている暇はないな・・・）」

ツナはすぐに考えるのを止め、技の構えを取る。

その構えは四角形を作るように右手の平と左手の甲を相手に向けるボンゴレ奥義の構え。

そして、構えと同時にツナの炎がノッキングのような動きを始める。

マリー

「っ!!?!?しまった!!!」

マリーがツナの行動に気づき、慌てて攻撃をしかける。

デイド

「はあああああ!!!」

デイドがそれを阻むように斬りつける。

オットー

「レイストーム!!」

オットーも後方から光線を放つ。

マリー

「ぐっ!! 邪魔をするなああああ!!」

オットー・デイド

「うわああああ!!」

マリーは炎圧を上げ、その衝撃で2人を吹き飛ばす。

しかし、

超ツナ

「準備・・・完了だ!」

マリー

「っ!!!!??」

いつの間にかツナがマリーに急接近していた。

超ツナ

「行くぞ……」

そして、マリーに向かって奥義を放つ。

超ツナ

「零地点突破・初代エディション……」
ファースト

その瞬間、ツナの両腕から途轍もない冷気が放たれた。

それによってマリーは言葉を発する間もなく氷付けとなった。

超ツナ

「命を奪う気はない……。そこで寝ている」

ツナはマリーに背を向け、オットーとデイドの許へ戻る。

オットーとデイドは呆然としていた。

一瞬にしてあの強大なチカラを持った化物を倒したのだから。

しかし、同時に疑問にも思っていた。

なぜそれほどチカラを端から使わなかったのか……？

理由はツナが自身に掛けていたリミッターにあった。

ツナのリミッターは自身のチカラをセーブするためのモノだが、“チカラを抑えるモノ”ではなく“急激な炎圧の上下を抑えるモノ”だった。

つまり、炎圧が急上昇するフルパワーのXイクスBURNERやボンゴレギアの解放、炎圧を極度のマイナス方向へ転換する零地点突破などを使用する事が出来ない訳だ。

ツナはこの事を後々説明したらしい……。

ツナ

「はあああゝ、終わったああゝ」

ツナは死ぬ気化を解き、深い溜息を吐く。

オットーとディードはその雰囲気落差に少々戸惑っていた。

ツナ

「君たちはこれからどうするの？」

オットー

「僕たちは・・・」

ディード

「自首しようと思います」

2人の心は決まっていた。

ツナ

「そっか・・・」

ツナは内心ホッとしていた。

しかし、

デイド

「あの・・・」

ツナ

「ん？」

デイドがどこか暗い表情をしていた。

デイド

「私たちは・・・人間として生きる事が出来るのでしょうか？」

デイドはそんな事を思っていた。

兵器として生まれた自分たちが人間として生きる事が出来るかどうか・・・。

オットーも同じ気持ちだった。

ツナ

「君たちは間違いに気づいた、だから自首したんでしょ？だったら大丈夫。間違いに気づけたんなら、そこからもう一度歩き出す事が

出来る。それが人間だから・・・」

ツナは優しく2人に語りかける。

デイド

「ありがとう・・・沢田さん」

オットー

「ありがとう・・・」

2人はツナに感謝する。

その瞳から涙を流しながら。

ツナ

「あのさ・・・」

オットー・デイド

「「???」

ツナ

「オレの事・・・“ツナ”って呼んでくれない?“沢田さん”なん

て他人行儀はなし。だって仲間じゃん」

ツナはそう言って手を差し伸べる。

オットー

「わかった。よろしく、ツナ」

ツナ

「こちらこそ、オットー」

2人はしっかりと握手をする。

そしてツナはデイドにも手を伸ばす。

ツナ

「よろしくね、デイド」

デイド

「よ、よろしくお願いします、ツナさん」

こちらもしっかりと握手をする。

しかし、デイドの様子はどこかたどたどしかった。

ツナはそれに気づかなかつたが、オットーは見抜いていた。

そして、ツナが治療のためにシャマルたちを呼びに行った時、オットーがデイドに話しかける。

オットー

「デイド……」

デイド

「な、何……？」

オットー

「僕は応援してるよ……」

デイド

「う、うん。頑張ってみる……／＼／」

こんなやり取りがあつた事をツナが知る由も無い。

その後ツナがシャマルと共に戻って来て2人を治療し、そのまま自首する事となった。

地上本部、機動六課の2箇所で繰り広げられた戦闘が終了し、事件は終局へと向かっていた。

しかし、更なる脅威が迫っている事をこの時は誰も知らなかった。

t o b e c o n t i n u e d

第26話『その日、機動六課（炎上篇）』（後書き）

本編でツナが言ってたリミッター解除の解号ですが、その由来は以下の通り。

デイスインスト

イタリア語で“解除”を意味する“デイスインネスト”

リミッターレ

イタリア語で“リミッター”を意味する“リミタトーレ”

言い易いようにモジりました（笑）

間違ってたらごめんなさい

m (_ _) m

敵キャラの名前の由来は、真6甲花みたく花の名前“マリーゴールド”からです。

シグナムのフラグについてのアンケートの集計が完了しました。

近いうちにその話を投稿したいと思います。

誰かはお楽しみに

次回『その日、機動六課（破滅篇）』

第27話『その日、機動六課（破滅篇）』（前書き）

か・な・り！！！！

グ・ダ・グ・ダ！！！！

・・・なんかすみません。

では、どうぞ

第27話『その日、機動六課（破滅篇）』

【3人称side】

管理局 地上本部

現在地上本部では残りのガジェットの殲滅が終わり、一護たちが束の間の休息を取っていた。

なのは

「今シャマルさんから連絡があって、ツナ君があなたたちの仲間を2人保護したって」

なのはがシャマルから連絡を受け、オットーとディードの事をチンクたちに話す。

チンク

「すまない・・・」

チンクは姉として感謝と謝罪をする。

ティアナ

「でもなんで管理局を襲うのよ」

ティアナが若干の怒りを交えた口調で訊ねる。

チンク

「それは、聖王の器を手に入れるためだ」

なのは

「聖王の器・・・？」

なのはは勿論、その他の者も聞き慣れない言葉に首を傾げる。

チンク

「お前たちが先日保護した少女の事だ・・・」

一同

「「「！！！！！！？」」「」」

全員の頭にその顔が浮かんだ。

ヴィヴィオの笑顔が。

フェイト

「……器って……どっ言っ事？」

フェイトが恐る恐る口を開く。

チンク

「その少女は……ドクターが造り出した……聖王の器だ」

フェイト

「っ！！」

フェイトはどこかでそれを感じていた。

“ただの人造生命体ではないかもしれない”と……。

しかし、信じなかった。

……いや、信じたくなかったのかもしれない。

フェイトは暫く口籠もってしまった。

一護

「……いつまで隠れてるつもりだ……?」

そんなフェイトを余所に一護が通路の一角を見て言う。

その言葉に他のみんなもその方向を見る。

そこにいたのは、

セイン

「お、お嬢様!?!」

ガリユーを連れてルーテシアだった。

一護

「何しに来たんだ?」

ルーテシア

「……あなたを捕まえに来たの」

ルーテシアはガリユーに指示を出し、一護に攻撃させる。

一護

「ちっ！」

一護は斬月を構える。

その時、

ドオオオオオン！！！！

一同

「っっ！！！！？」

大きな衝撃が起こり、ガリユーが吹き飛ばされる。

ルーテシア

「ガリユー！！！」

そしてその衝撃の中心に1人の男が立っていた。

その男はいつか一護と大虚メノスの戦いを見ていた黒尽くめの男だった。

一護

「誰だ・・・？」

男は一護の問いを聞き、静かに笑みを浮かべる。

?????

「カタストロフ『破滅』・・・」

一護

「っ!？」

?????

「そう言えばわかるか・・・？」

一護

「てめえ・・・」

一護は正解しようとして霊圧を上げる。

?????

「まあ待て、今日は戦いに来たんじゃない」

一護

「何だと……?」

男は自分の後ろにある何かを持ち上げる。

???

「コレを回収しに来たんだ」

一護

「!!!?」

男が持ったソレはさっき一護が倒した破面^{アラソカル}、カルマだった。

一護

「そいつは、お前の差し金か?」

???

「ああ。下級大虚^{ギリマン}を使うよりもいい遊びが出来るかと思ってな」

一護

「あの時の奴もお前が!?!」

一護は斬月を更に強く握り締める。

???

「だから今日は戦う気は

」

男が話していると、起き上がったガリユーが男に攻撃をしかけた。

しかし、

ドンッ!!!

ガリユー

「っ!!!」

重い音が響き、ガリユーがその場に倒れる。

???

「人が喋ってるんだ……。黙って聞け」

男がガリユーを見下げながら語る。

ルーテシア

「ガリユー！！」

ルーテシアがガリユーに駆け寄る。

???

「黙って聞けつつてんだろ・・・」

男はルーテシアに向かって闇の波動を放つ。

ルーテシア

「っ!？」

誰もが闇に合わないと思った。

しかし、

一護

「くっ!!!」

一護がルーテシアを抱きかかえ、波動を斬月で受け止める。

ルーテシア

「・・・どうして」

一護

「その質問は聞き飽きた」

一護はルーテシアを下ろし、その前に立つ。

そして真っ直ぐ男の方を見る。

???

「・・・迅いな」

男が感心していると、そこを他のみんなが取り囲んだ。

なのは

「ちょっと一緒に来てもらおうよ」

フェイト

「抵抗しても無駄です」

それぞれが武器を構え、男を見据える。

???

「フツ・・・」

パチン！

男は笑みを浮かべ、指を鳴らす。

すると男の足元に魔法陣が展開される。

???

「言っただろ？戦う気はないって・・・」

その魔法陣はどつやら転移魔法陣のようだ。

フェイト

「っ！！待て！！」

フェイトが制止をかける。

???

「一応、名乗っておくか……。俺の名はユークス……」

魔法陣が完成し、男が転移を始める。

ユークス

「『カタストロフディストウール
破滅・十滅将』の1人“まおん魔閻のユークス”だ」

男、ユークスは不気味な笑みを浮かべる。

ユークス

「また会おうぜ……。死神代行……。ああ後、置土産にも期待してな……」

その言葉を最後にユークスの姿は完全に消えた。

シャマル

「今なのはちゃんたちに連絡したわ。向こうでも何人が保護したみたい」

シャマルがなのはとの連絡の内容を話す。

オットー

「そうですか……」

デイド

「すみません……」

2人もまた姉同様に感謝と謝罪をする。

ツナ

「謝る必要なんてないよ。これからもう一度歩いて行けばいいんだから」

ツナは2人に優しく微笑む。

デイド

「!?. . . / / /」

瞬間、ディードの顔が赤くなり、それを隠すようにソツポを向く。

その様子を見たツナは戸惑い、オットーは微笑み、シャマルはディードの心の変わりように驚いていた。

その時、

バアアアアン!!!!

ツナ

「!?!」

何かが割れる音が響き、全員がその音の方を見る。

その視線の先では、零地点突破の氷が砕け、氷付けになっていたマリーを掴む男の姿があった。

その男はいつかツナと大虚メノスの戦いを見ていた白尽くめの男だった。

超ツナ

「お前は誰だ・・・？」

ツナは瞬時に死ぬ気化し、戦闘態勢を取りながら訊ねる。

????

「カタストロフディストウール破滅・十滅将の1人“きよっこう極光のエイオス”・・・それが私の名だ」

超ツナ

「!!!？」

ツナは驚きながらもしっかりとエイオスを見据えていた。

自分たちが倒すべき敵の姿を焼き付けるために。

エイオス

「ユークスの方も終わったようだな・・・」

エイオスは探査魔法のようなモノで地上本部の状況を把握している。

それを通じて向こうの片が付いた事を感じ取る。

超ツナ
「Xカノン!!」
イクス

ツナが不意を突いて高速の炎弾を放つ。

しかしエイオスは動じる事なく、炎弾に光の波動を当てて相殺する。

超ツナ
「くっ!!」

エイオス
「止めておけ・・・」

ツナが再び攻撃を仕掛けようとした時、エイオスから制止が掛かった。

エイオス
「こちらに戦意はない。それに幾らやろうと無駄な事だ」

超ツナ
「くっ!?!」

エイオスの言葉にツナは唇を噛んだ。

その単調な言葉が“自分は無力だ”と言っているように聞こえた。

エイオス

「では、失礼する・・・」

エイオスは自身の足元に転移魔法陣を展開する。

超ツナ

「!?!? 逃げる気か!?!」

ツナが制止を掛けるように叫ぶ。

エイオス

「“逃げる”？違うな・・・“退いてやる”だ」

超ツナ

「っ!?!」

瞬間、ツナたちを見えない重圧が襲う。

エイオスが放つ覇気、オーラのようなモノだ……。

エイオス

「さらばだ……ボンゴレX世よ……」
デーチモ

そう言つてエイオスの姿が完全に消えた。

ツナたちはただ漠然とそれを見ている事しか出来なかった。

ツナ

「くっ……！」

ツナは死ぬ気化が解け、片膝をつく。

エイオスがいなくなった事で緊張感が解けたようだ。

ツナ

「（あんな奴等が、敵なのか……！？）」

ツナは改めて敵の強大さを認識する。

その肩にも、拳にも、全身に自然と力が入る。

ツナは暫くそこに佇んでいた。

管理局 地上本部

なのは

「一度、六課に戻ろうか・・・」

一護

「・・・ああ」

ユークスが去り、ガジェットの増援も確認されなかったため、一護たちは六課へと帰還する事にした。

一護

「お前も一緒に来てくれるか？」

一護はルーテシアを見る。

ルーテシア

「・・・うん」

ルーテシアは頷く。

チンクたちが自首する事もあるだろうが、さっきの件で一護の事を
“信用出来る人”だと思ったようだ。

なのは

「じゃあ行くところ・・・」

なのはが指示を出し、みんながそれに沿って付いて行く。

しかし、一護はその場に佇んでいた。

フェイトがそれに気づき、一護に話しかける。

フェイト

「一護、どうしたの？」

一護

「……いや、何でもねえ……」

そう言っで一護はなのはたちの方に歩き出す。

フェイトは少し気にはなっただが追求はせず、その後を付いて行く。

一護

「（俺たちは……勝てんのか……？）」

一護はそんな事を考えていた。

ユークスの話では以前現れた雲の炎を持った下級大虚ギリアンも彼らの差し金だと言う事だった。

ある世界の怪物に、別の世界のチカラを附与する。

そんな事を可能にしてしまう程の強大な敵。

そんな奴等に自分たちが勝つ事が出来るのか……？

そんな思いが一護の頭を埋め尽くした。

一護

「……いや」

しかし、一護の頭の中はすぐに整理された。

一護

「（今までだって、勝てる保証がある戦いなんて無かったじゃねえか……）」

一護は今までの戦いを思い出す。

自分に死神のチカラを与えてくれた朽木ルキアを救うために挑んだ護廷十三隊の死神たち。

その中の阿散井恋次、更木剣八、朽木白哉たち隊長格との戦い。

捕らわれた仲間、井上織姫を取り戻すために挑んだ破面。アラソカル

その中のグリムジョー、ウルキオラたちエスパーダ十刃との戦い。

そして、死神の最大の敵、藍染惣右介との戦い。

どれも“絶対に勝てる”とはお世辞にも言えなかった。

しかし、一護は勝った。

どんな時も勝つと誓い、どんな時も仲間を護ると誓い、心折れようとも立ち上がった。

だから一護は今度も誓った。

一護

「（勝つんだ……絶対に……）」

一護はグツと拳を握った。

一護

「（護るんだ……絶対に……）」

一護は真っ直ぐ前を向いた。

護るべき仲間たちをその心に焼き付けるために……………。

一護

「……………!!」

瞬間、一護は何かを感じ取った。

ユークス

『置き土産にも期待してな……………』

ユークスが去り際に残した言葉が頭を過ぎり、その感じ取った“何か”の方へ駆け出した。

フェイト

「ど、どうしたの!?!」

一護

「悪い!先に戻っててくれ!」

一護はフェイトを振り切り、そのまま走って行ってしまった。

廃ビル 屋上

地上本部の近くに聳え立つ廃ビルの屋上。

そこに1人の少女がいた。

以前、六課のへりを撃墜しようとしていたナンバーズ10のディエチだ。

ディエチは固有武装『イノームスカノン』を構え、地上本部を狙っていた。

そこへ、1人の男がやって来た。

???

「やめろ!!--!」

デイエチ

「!?!」

この事態を感じ取り、瞬時に駆けつけたのは一護だった。

デイエチ

「お前は・・・」

一護

「間に合ったみたいだな・・・」

一護は肩に背負った斬月に手を掛ける。

一護

「俺にもツナみたいな超直感があったりしてな・・・」

一護は冗談交じりに語りながらもデイエチから視線を外さない。

デイエチ

「くっ・・・!」

デイエチはイノームスカノンを一護に向ける。

そのチャージは既に完了しており、デイエチがISを発動すれば砲撃が放たれる状態となっている。

それから暫くの間、2人はただ対峙していた。

一護としてはチンクたちの仲間であるデイエチを傷つける気はなく、デイエチとしては未知数のチカラを持つ一護を警戒して攻撃を仕掛けられないでいる。

一護

「・・・なあ」

デイエチ

「ん？」

そんな沈黙を一護が破る。

一護

「こんな事止めるよ・・・。お前の仲間はみんな自首したぞ」

デイエチ
「っ!?!」

一護の言葉に一瞬デイエチの表情が歪んだ。

姉妹たちが自ら管理局に下ったと言う事実は、彼女の心に僅かな揺らぎを与えた。

デイエチ
「くっ!?!」

デイエチはその一護の言葉を否定するかのように唇を噛む。

そしてイノームスカノンに光が集束し、砲撃の瞬間が訪れる。

デイエチ
「ISへヴィバレル、発動!?!」

デイエチの語に呼应し、イノームスカノンから砲撃が放たれる。

一護

「!?!」

ギイイイイン!!!!

デイエチ

「っ!!?!?」

一護は斬月で砲撃を受け止める。

そしてその砲撃を別方向へ弾き飛ばす。

デイエチ

「(アイツと言い、コイツと言い・・・漂流者がこんなに強いなんて・・・っ!!!)」

デイエチの心は荒れていた。

砲撃を受けきられた事もそうだが、以前砲撃を生身で受け止めたアイツ!! ナツや、今の一護のように漂流者のチカラが彼女にとって強大だと言っ事。

その単純な事実が彼女の心を掻き乱した。

そのままディエチはそこに座り込んでしまつ。

彼女の心に僅かな恐れが生まれ、腰が抜けてしまったようだ。

一護

「俺はお前を傷つける気は無えんだ。もう止めてくれ」

ディエチ

「……………」

一護の言葉にディエチは無言で返す。

一護はそんな彼女に手を差し伸べる。

一護

「一緒に来てくれ…………頼む…………」

ディエチ

「……………」

ディエチは差し伸べられた手を取る事をしなかった。

それと言うのも自分に対して向けられる一護の穏やかな表情を無言で見えていたから。

……いや、見惚れていたからだ。

ディエチ

「……／／／」

その証拠となるかどうかは定かではないが、ディエチの顔が少し赤い。

一護

「?どうした……?」

一護が自分を見つめるディエチの様子が気になり、頭に数本の疑問符を浮かべながら訊ねる。

ディエチ

「な、何でもない……／／／」

デイエチは慌てて我を取り戻し、顔を背ける。

一護

「?・・・っ!？」

一護はデイエチの行動に対してそれ以上の詮索はしなかった。

しかし一護の頭に残った疑問符は事態の急変によって掻き消された。

突然数百機のガジェット?型が2人がいる廃ビルを取り囲んだ。

一護

「何だ、いきなり!？」

デイエチ

「(おかしいな・・・援軍があるなんて聞いてないけど・・・)」

一護はその事態に少し狼狽え、デイエチの頭も軽い混乱を起こす。

“援軍がある”と言う作戦や通信が無いからである。

その時、1機のカジエツトがレーザーを放つ。

しかしその標的は、

デイエチ

「ぐああああ!!!!」

一護

「なっ!!!!?」

仲間である筈のデイエチだった。

一護はその事態に驚きが増した。

その間にもカジエツトは更なる攻撃を仕掛けようとしている。

勿論、デイエチへの追撃を……。

デイエチ

「く……っ……!!!!」

ディエチは訳がわからなかった。

自分が攻撃される意味が……。

しかしこのままでは確実にやられる。

それだけは確信していた。

何とかその状況を打破するために動こうとするが、ダメージが大き
くそれが叶わない。

そして、酷にもガジェットから再びレーザーが放たれる。

ディエチ

「くっ……!」

ディエチの両目は諦めによって固く閉ざされた。

しかし、その両目が今度は驚きによって大きく見開かれる。

それは何故か？

彼女の目の前で一護がレーザーを防いでいたからだ。

デイエチ

「ど、どうし」

デイエチがその真意を一護に訊ねようとした時、急に一護が振り返った。

驚いたデイエチは言葉は詰まらせてしまう。

一護

「もうそれは聞き飽きたんだよ。それにさっきも言っただろ？　お前を傷つける気は無え”って」

一護は“何を言ってるんだ？”と言う顔をしている。

デイエチもまた“何を言ってるんだ？”と言う顔をしているが、一護の表情が“当然”の意を表しているのに対し、彼女の表情はが表すのは“混乱”だった。

デイエチ

「傷つける気は無い」って……だからって何で庇ったりするんだ!？」

デイエチは混乱しながらも知りたかった。

一護が自分を庇った理由を。

一護

「うるせーなあ……。んなの考える方がムズカシイんだよ」

一護はウダウダ言うデイエチを一瞥し、視線をガジェットに戻す。

一護

「とにかくそこにいる。お前に攻撃なんてさせねえから……!!」

そう言いながら一護は正解し、ガジェットに攻撃を仕掛ける。

一護

「月牙天衝!!!」

ザアアアアン!!!

黒い斬撃はガジェット数機を纏めて破壊する。

しかしそれも本の一部であり、見た感じではその数が減った気はない。

その時、

???

「紫電一閃!!!」

ガジェットの群れの一角が斬り裂かれ、そこから女が廃ビルに降り立った。

シグナムだ。

シグナム

「大丈夫か、黒崎!!!」

シグナムはこの事態を知り、一護の身を案じて駆けつけたのだ。

一護

「ああ、大丈夫だ……。悪いけどコイツの事頼めるか？」

一護は自分の後ろにいるディエチをシグナムに任せる。

シグナム

「・・・わかった」

シグナムは少し躊躇ったが、すぐにそれを承諾した。

一護

「じゃあ頼んだぜ・・・」

一護は再びガジェットの方を見る。

そして左手を顔に翳す。

一護

「（あんまりチカラが残って無えが・・・行くぜ!!）」

一護は再び虚化し、天鎖斬月を構える。

シグナム

「・・・な、何だ、その姿は・・・!？」

シグナムは始めてみる一護の異様な姿について若干の恐れを抱きながら訊ねる。

ディエチもその禍々しい雰囲気体が強張っている。

一護

「説明してる暇は無えんだ・・・。後にしてくれ」

一護がシグナムたちに虚化について説明する事は無かったが、シグナムたちが追求する事も無かった。

一護

「おおおおおお!!!!!!」

一護はガジェットの群れに向かって巨大な斬撃を放つ。

渾身の力で放たれたソレは、一瞬にしてガジェットの数を数えられる程度にまで減らした。

しかし、その残り数機のガジェットの傍に魔法陣が現れ、そこから再び大量のガジェットが召喚される。

一護

「（こんな置き土産要らねえよ・・・）」

一護はこれがユークスの言っていた置き土産だと推理している。

一護は内心そんなことを考えながらも刀を振り上げる。

しかし、

一護

「くっ・・・」

一護の力が一瞬緩んだ。

それによって一護は片膝をついてしまう。

正直な話、一護は言わば“チカラを失っていた”と言うブランクがあるため、虚化のような強力なチカラを連続で使用するのとは相当な

負担が掛かる。

余力が無い状態ならば尚更の事。

シグナム

「黒崎！！！！」

シグナムが一護の異変を感じ取り、駆け寄ろうとする。

一護

「大丈夫だ！！」

シグナム

「っ！？」

一護がそれに制止を掛け、シグナムが足を止める。

一護

「俺は大丈夫だ……。そいつを護っててくれ」

シグナム

「し、しかし……！！」

一護は大丈夫だと言うが、シグナムとしてはそうは見えなかった。

その時、数機のカジエツトが動きを見せた。

シグナム

「っ！？来るぞ！！」

一護

「っ！！」

シグナムがそれに気づき、一護に危険を知らせる。

一護は咄嗟に振り返るが、カジエツトは今にもレーザーを放とうと
していた。

一護

「しまっ
」

一護の思考が一瞬停止するが、事態は一変する。

???

「火竜の・・・旋尾せんび!!!」

どこからか伸びて来た炎の鞭がそのガジェットを破壊した。

その方向には宙に浮くナツと白いワンピースの女性の姿があった。

一護

「ナツ、と・・・アンタは!!!」

その女性は一護たちをミッドチルダに送り込んだ人物、エレアだった。

ナツとエレアは一護たちの許へと降り立った。

ナツ

「よっ!!!待たせたな!!!」

エレア

「間に合ってよかったです!」

一護

「アンタ・・・どうして・・・」

一護は何故ここにエレアがいるのかわからなかった。

その訳を話したのは本人ではなくナツだった。

ナツ

「急に六課に来たんだ。そしたらお前が危ないっつーから急いで来たんだよ」

正直エレアがここにいる理由ではないが、そんなことはナツには関係なかった。

ナツ

「後はオレがやってやる」

ナツは一護の前に出てその拳に力を込める。

エレア

「待って下さい・・・」

張り切るナツに対してエレアが制止を掛ける。

ナツ

「なんだよ？」

ナツは折角張り切っていた所を邪魔されて少し苛立っている。

そしてエレアはナツに手を差し伸べ、“金色の炎”を燈す。

エレア

「これで一気にやっちゃって下さい！」

ナツ

「オウ！！！！」

ナツはその金色の炎を食べる。

するとナツの体が微かに光り始めた。

シグナム

「な、何だこの魔力は・・・！！」

シグナムはナツの魔力が上昇しているのを感じ取り、その巨大さに戦^{おの}いでいた。

^{バトルマニア}戦闘狂であるシグナムをも戦^{おの}かせる程の強大な魔力。

これがナツたち^{ドラゴンスレイヤー}滅竜魔導士が使う滅竜魔法の最終形態『ドラゴンフ
ォース』だ。

ナツ

「行くぜ!!火竜の・・・」

ナツは腹をパンパンに膨らまし、プレス攻撃に出る。

ナツ

「咆哮!!!!!!!!!!」

バアアアアアアン!!!!!!!!!!

ナツの吐き出した炎はガジェット全機を跡形も無く焼き尽くした。

一護

「ス、スゲー・・・」

一護は力が落ちていたとは言え、虚化して撃った自分の斬撃よりも強力なナツの炎を見て呆然としていた。

ナツ

「よっし!! 終わったぜ!!」

ナツが満面の笑みで振り返り、戻って来る。

エレア

「では、戻りましょう……。送っていきます」

シグナム

「あ、ああ。すまない……」

シグナムも呆気に取られており、エレアが何者かと言つのはスルーしている。

一護

「お前も来いよ」

一護はディエチの許まで歩き、手を差し伸べる。

デイエチ

「お前”じゃない、デイエチ……そう呼んで欲しい……／＼」

デイエチは頬を染めながら一護に頼む。

一護

「わかった。じゃあ行こうぜ、デイエチ」

一護はその通りにデイエチの名を呼ぶ。

そしてデイエチは差し伸べられた一護の手を取る。

すると、

デイエチ

「きゃっ!」

突然一護がデイエチを抱き上げた。

女の子の憧れ(?)……………。

通称“お姫様だっこ”で。

ディエチ

「な、ななななな……／＼／」

ディエチは顔を真っ赤に染め、わかり易いくらい慌てふためく。

一護

「まだ体痛むんだろ？俺が抱えてやるよ」

ディエチ

「で、でも……／＼／」

一護としてはただ気を使ってるだけなのだが、ディエチとしてはそんなモノではない。

一護

「遠慮すんなって……」

一護がこう言えるのはディエチの“乙女の心”と言うモノがわかっ

ていないからだ。

これを世間では“鈍感”とか“唐変木”と言う。

ディエチ

「じゃ、じゃあ・・・お願い・・・します・・・／＼／」

ディエチはとうとう折れてしまい、一護の胸に顔を埋めた。

その様子を見てニヤつく者が1人。

エレア

「いや、中々面白いな」（笑）

エレアは一護のモチっぷりと鈍感っぷりを楽しみながらも転移魔法陣を展開し、その場にいる全員を六課に転移させた。

特に言う程の事でも無いが・・・

一護のフラグ、現在6本。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第27話『その日、機動六課（破滅篇）』（後書き）

オリキャラ名及びその他の由来・・・

魔闇のユークス

ギリシア神話の夜の神“ニユクス”から

極光のエイオス

極光“オーロラ”の語源となったローマ神話の曙の女神“アウロラ”と対応するギリシア神話の女神“エオス”から

ディストウーレ

イタリア語で“破壊”“消滅”を意味する単語に共通する文字“d i s t r u”をモジったモノ

オリキャラ名の前に付いてるやつは、元ネタは、デジモンクロスウォーズのバグラフ将軍・デスジェネラルのやつです。

（参考）

火烈のドルビツクモン

月光のネオヴァンデモン

木精のザミエールモン

水虎のスプラッシュモン

金賊のオレーグモン

土神のグラビモン
日輪のアポロモン

長々とすみません。

m ((m

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

次回『その日、機動六課（終局篇）』

第28話『その日、機動六課（終局篇）』（前書き）

連・続・投・稿……！！

では、どうぞ

第28話『その日、機動六課（終局篇）』

【3人称side】

病室

管理局襲撃と言う大事件が幕を閉じ、その日付が変わって日が昇るうとしていた頃、一護たち負傷者は病院で治療を受けていた。

その間に突然ミッドチルダにやって来たエレアは、六課のメンバー、及び保護されたナンバーズたちに自己紹介をしていた。

自己紹介と言っても単に名前とかだけであって、詳しい事はまだだつたりする。

そして一護たちの治療が終わり、今は今回の戦いに参加した殆どの者が病室に（狭いか？）集まっている。

ちなみに言うと、なのは達隊長陣は事件の報告書作成等ではここにはいない。

ギンガ

「一護さん、大丈夫ですか？」

一護

「ああ、大丈夫だ。心配すんな」

チンク

「本当にすまない……。私達のために……」

デイエチ

「反省……」

チンクとデイエチは共に護ってもらった感謝と謝罪を述べる。

ノーヴェとウエンディも自責の念があるようで、無言のまま静かに俯いている。

一護

「そんな顔すんな……。それじゃあ何のために戦ったのかわかんねえよ」

チンク

「？……お前は何のために戦ったんだ？」

チンクは一護が戦った理由が気になった。

その心のどこかで“自分達のため”と言う言葉を期待していたりするが……。

一護

「……さあ？」

一同

「「「はあ？」」」

一護は“何のために戦ったのかわからない”と言ったが、それが意味するのは文字通りのモノ。

その答えにその場にいた一護に救われた者たちは素っ頓狂な声を上げる。

一護

「自分で言っといてなんだけど、わかんねえ。けど……多分、お前らを護りたかったんだと思う」

結果的には期待通りの答えが出た事により、チンクたちは頬を紅潮

させる。

オットー

「（姉様達がこんなになるなんて・・・）」

病室の一角でオットーは姉たちの一護に対する態度をマジマジと眺めていた。

オットー

「（それはコッチも同じか・・・）」

オットーが隣を見ると、そこにはディードとツナの姿が。

ディード

「・・・／／／」

ツナ

「んっどづしたの、ディードっ」

ディード

「な、何でもないです・・・／／／」

デイドがツナを見つめ、ツナがそれに気づき、デイドが顔を逸らす。

さっきからこれの繰り返し。

オットーは病室で繰り返られる2種の色恋沙汰を中立的立場から見ている。

エレア

「うふふ、思った以上に面白い（笑）」

コイツも中立的立場と言えはそれまでだが、他人の恋愛模様を見て楽しむ10代女子的感性を持っているような言動が多々ある。

以上が今の病室内の様子だ。

一護

「ちとと・・・」

徐に一護が立ち上がり、病室を出て行くこととする。

ギンガ

「一護さん、どこへ・・・？」

ギンガは一護の体を心配している事もあって、その意図、「どこへ行くのか？」を訊ねる。

一護

「エレアの事も話さなきゃならねえし、なのは達に連絡しようと思っただ。病室で電話とか使う訳にもいかねえしな・・・」

“院内通話禁止”

大体の病院はこんな感じだろうか・・・。

まあ六課の病院がどんな感じなのか一護が知る由も無いが、一般的なマナーを考えてのこの行動だ。

一護の実家も病院だしね・・・。

ギンガ

「じゃ、じゃあ私も行きます」

さっきも言った通り一護の事が心配なギンガは、それに付いて行く

うとする。

一護

「わかった。じゃあこれ……」

一護はベッドの傍に掛けてあったジャケットをギンガに渡す。

ギンガ

「あの、これは……?」

ギンガはいきなり渡されたジャケットを受け取りながら訊ねる。

一護

「外出るんだ……。寒いと思うから着とけ」

ギンガ

「あ、ど、どうも……/ / /」

一護の然りげ無い優しさにギンガの頬が紅潮する。

そしてそのまま2人は病院の外へと出て行った。

エレア

「いや、一護さんも中々どうして……。あの2人、あのままどうにかありませんかね？（笑）」

チンク・ノーヴェ・デイエチ・ウエンデイ

「コッコッ！！！！？」

エレアのマジ軽はずみな発言はとある4人の思考を存分に狂わせた。

チンク

「（い、いや、まだ！まだ、まだ大丈夫だ！！！！！！）」

ノーヴェ

「（い、一緒に行くか！？いや、何かまた蹴っ飛ばしそう……／＼）」

デイエチ

「（こ、こんな時どうすれば……／＼／）」

ウエンデイ

「（う、羨ましすぎるっス！！！！！！！！）」

4人は心の中の1人の男に対する感情によって悶え苦しんだ。

オットー

「（姉様・・・ファイト）」

オットーは心の中で小さくエールを送る。

セイン

「・・・何だコレ？」

ここまで入る隙が無かったセインの第一声・・・。

“付いて行けない”

・・・まあそんなモンだろうな。

一護とギンガはこの場にいない隊長達に連絡を取るため、病院の
庭に出て来た。

一護

「・・・ダメだ、繋がらねえ」

しかし何度掛けても肝心な連絡が取れず、既に日が昇って来ている。

ギンガ

「事後処理もありますから、それ所じゃないんだと思います」

一護

「そうか・・・。ん？あれは・・・」

通信機片手の一護の眼に飛び込んで来たのは、何故かルーテシアを
押さえているエリオとキャロの姿だった。

エリオ

「落ち着いて！フェイトさん達が必ず助けるから！」

キャロ

「だから今は休もう？」

ルーテシア

「……ダメ……母さんを助けるの」

どうやらルーテシアが母を助けに行こうとしている所を、エリオとキャロが止めているようだ。

一護

「どうしたんだ？」

エリオ

「あ、一護さん！実は……」

一護とギンガはそんな3人に近付き、エリオからその経緯を聞いた。

エリオの話聞いた一護は、ルーテシアの前でしゃがみ、その目線を合わせた。

一護

「それで、お前の母さんはどこにいるんだ？」

ルーテシア

「……ドクターのアジト……早く、助けなきゃ……」

ルーテシアの声には“焦燥”と“不安”が入り交じっていた。

一護はそれを感じ取り、そっとルーテシアの頭に手を乗せる。

一護

「大丈夫だ、お前の母さんは俺が助けてやる」

ルーテシア

「……ホント？」

ルーテシアの眼からは一筋の涙が零れていた。

一護はその涙を指で拭き取る。

一護

「ああ、絶対だ」

一護はルーテシアの頭を優しく撫でる。

ルーテシアは思わず眼を閉じた。

自分の頭を撫でるその手がとても温かく、とても心地良かったからだ。

そしてその眼を開き、一護の顔を見つめる。

ルーテシア

「一護……。お願い……。母さんを、助けて……」

一護

「任せろ！」

ルーテシアにとって、一護の言葉はとても頼もしかったと言う。

一護は死神化し、ルーテシアの母の救出に向かおうとする。

ギンガ

「一護さん、無茶ですよ！」

再三に亘って言うが、ギンガは一護の体を心配している。

本の数時間前までボロボロだったにも関わらず、再び戦いに行こうとする一護が心配で堪らなかった。

出逢ってまだ間も無いが、ギンガの中では一護はとても大きな存在となっている。

自分にとっての初恋の相手なのだから、それは心配にもなるう。

一護

「大丈夫だ、心配すんな」

今度はギンガの頭に手を乗せ、心配させまいと一護は微笑む。

ギンガ

「でも・・・／＼／」

その仕草に若干顔を赤らめながらも、ギンガは一護を引き止めようとする。

一護

「・・・わかった。じゃあ皆と相談してからにするか」

ギンガ

「は、はい！・・・／／／」

ギンガの説得の甲斐（？）も有って、一護は独断での救出を踏み止まった。

その時、一護の持つ通信機に連絡が入った。

一護

「ん？なのは達か？」

一護はその通信を受けた。

この出来事が、幕を閉じた事件を次のステップへと転ばせる切っ掛けとなるとは知らずに・・・。

t o b e c o n t i n u e d

第28話『その日、機動六課（終局篇）』（後書き）

次回『悪よりの誘い』

番外篇『シグナムの恋』（前書き）

お待たせ致しました。

遂にシグナムのフラグ話です！

少々ラブコメチックになりましたが、その分グダグダ・・・よく出来たと思います・・・ます。

多分・・・。

では、どうぞ

番外篇『シグナムの恋』

【シグナムside】

シグナム

「ハアア・・・」

突然だが、私がこんな深い溜息を吐いてしまう理由。

それは・・・

正直自分でもわからん。

ただ最近、1人の男の事が気になって仕方が無い。

気づけばその男の事を眼で追っていたり、剩おぼえその日の夢にまで出て来る始末・・・。

これは・・・

鯉？

はやて

『漢字が違うやろおおおおお!!!!』

今何故か主のツッコみが聞こえたような・・・。

いや、気の所為だろう・・・。

しかし、本当の所はどうなのだろうか・・・？

地球にいた頃に主がよく読んでいた本に今の私のような状態の女性が載っているモノもあったが・・・。

これがそうなのだろうか・・・？

主は確かそろそろ休憩の時間だったな・・・。

少し訊ねてみよう。

そう思って私は主のいる部隊長室を目指す。

部隊長室

シグナム

「失礼します」

はやて

「どうぞ〜」

私が部隊長室を訪れると、丁度主がコーヒーを飲んで休憩していた。

シグナム

「主はやて・・・少々ご相談が・・・」

はやて

「ん？」

私は今自分が悩んでいる事のすべてを主に話した。

主は私の話を聞き終えると、何故か立ち上がり、コーヒーが入ったコップ片手に陽光が差し込む窓の外を眺める。

そしてコーヒーを一口啜り、こちらを振り返って一言。

はやて

「それは・・・恋や！」

予想通りの答えが返って来た。

それはそうだ。

私がいち当たるモノを主がわからない訳が無い。

はやて

「それは立派な恋やね！うん！」

シグナム

「は、はあ・・・」

主は腕を組み、一人何かを納得されているようだが、私は少しまだ

付いて行けていない。

はやて

「・・・で？」

シグナム

「？」

はやて

「相手は誰なん？」

シグナム

「っ！？・・・／／／」

主の唐突な質問に私の頬が紅潮する。

そしてその相手の顔が浮かび、胸の鼓動が徐々に速くなって行く。

シグナム

「そ、それは・・・その・・・／／／」

私は思わず口籠もってしまう。

そんな私を見て、主は何故かニヤニヤしておられるが……。

はやて

「まあ、ええわ」

主はやれやれと言った顔で椅子に腰掛ける。

そしてコーヒーマスターをもう一口啜る。

はやて

「取りあえず、シグナムとしてはどないしたいん？」

シグナム

「私として……ですか？」

そう言えば、私はどうしたいのだ？

そこは全く考えていなかった。

兎に角この胸のモヤモヤを取り除こうと……。

それだけを考えていた。

はやて

「色々あるやろ？その人と付き合いたいか、デートしたいたか・
」

シグナム

「っ!!!・・・//」

あれこれ考えていた私の頭の中は主のその発言によって吹き飛ばされた。

後に残ったのは主の発した単語のみだった。

はやて

「他には、キスしたいとか・・・××したいとか・・・」

私の頭に更なる爆弾が投下された。

シグナム

「わ、私は、別に・・・く、黒崎とそのような関係になりたいとは

「へえ〜」っ!?!?・・・//」

はやて

「なるほどな〜、相手は一護君か〜」

シグナム

「っ!?!?!?!?・・・//」

私は“しまった”と自分の口を塞ぐが、一度発してしまった言葉を
取り消す事は不可能だった。

これが主の策略であった事は今の主の顔を見ればわかる。

とてもニヤけておられるからだ・・・。

はやて

「なあ!いつからなん?どこが好きなん?」

意中の相手が黒崎である事がバレてしまい、主からの質問攻めに遭
う。

シグナム

「……気になり始めたのは、最初に模擬戦を行った時からです……
。／／／」

私は観念して思っている事をすべて話す事にした。

シグナム

「それから黒崎と接して行く内に、段々……。決定的となったのは、ナンバーズの襲撃があつた時です……。／／／」

黒崎の事が好きなのだと理解すると、何故か次々と頭のモヤモヤが消えて行く。

シグナム

「あの時の黒崎のチカラは……。どこか恐ろしいモノでした。でも同時に、温かいモノも感じたんです……。／／／」

私は黒崎が仮面を付けた姿、虚化と言つたか？

それを思い出していた。

シグナム

「“敵を倒す”と言う思いの前に“仲間を護る”と言う思いが伝わって来たんです……。／／／」

あの事件の後、黒崎一護と言う男の経緯を聞いた時、“ああ、この男は本当に仲間を大切にしているんだな”と感じた。

仲間を護るために自らが傷つこうとも立ち止まらない。

そんな覚悟が伝わって来た。

はやて

「なるほど」。シグナムが一護君にベタ惚れっちゅーのはわかったわ」

シグナム

「べ、ベタっ……!?!」

主はやて……。

もう少し丁寧な言葉を選んで頂きたい……。

はやて

「でもなく、一護君は競争率高いで？フェイトちゃんくだんは確実やし、件の事件でギンガやナンバーズの4人も多分一護君に惚れてるやろ

からな」

それは私もわかっていた。

その6人が黒崎に好意を持っている事を……。

中でもテストロッサは随一だろう。

ヴィヴィオの事もあるし、黒崎に最も近い。

本当ならばそのまま応援してやりたい。

しかし、私も黒崎が好きだと気づいてしまった以上、このまま退きたくはない。

シグナム

「それでも……」

私は静かに呟いた。

すると主が突然、私の頭を撫でた。

シグナム

「あ、主はやて？」

はやて

「女の子なんて皆そんなモンや。友達の恋は応援してやりたい……
けど、自分も自分の恋を叶えたい。それが普通なんや」

私は主の話を黙って聞いていた。

その言葉は深く心に沁みた。

はやて

「私も応援するわ、シグナムの恋。けど“切っ掛けは自分で”やで
？」

シグナム

「……あ、ありがとうございます…！」

私は主に深く感謝し、そのまま部屋を後にした。

私は部隊長室を後にし、暫く廊下を歩いていた。

するとそこでバッタリ黒崎に出逢ってしまった。

一護

「おう、シグナムじゃねえか。どうしたんだ？」

シグナム

「いやなに、主と他愛無い世間話をしていただけだ」

もしモヤモヤが残ったままでは普通に会話する事は難しかったかも知れん。

主には本当に感謝だな。

シグナム

「どうだ、黒崎。久しぶりに私と模擬戦でもしないか？」

これが私の考えた“切っ掛け”と言うやつだ。

一護

「え、遠慮しときます・・・」

黒崎は少し狼狽えながら答える。

そんなに嫌なのか・・・？

少しシヨックだ。

シグナム

「そうか。ではまたの機会にとしよう。ではな、黒崎」

が、この男の事が好きなのだ気づけただけでもいい事だ。

シヨックではあるが、どこか清々しい。

一護

「ああ。じゃあな」

そう言って私達は別れた。

再び歩いていると、今度はテストロッサを見掛けた。

この際だ、私の気持ちを言っておくのも悪くない。

シグナム

「テストロッサ！」

フェイト

「ん？シグナム、どうしたの？」

私に呼ばれた事によってテストロッサは足を止める。

シグナム

「お前に言っておきたい事がある」

私はテストロッサの眼を真っ直ぐ見る。

当の本人は何を言われるのかと首を傾げているようだ。

シグナム

「お前は私のライバルだ！退く気も譲る気も、況して負ける気も無い！」

フェイト

「・・・え？」

シグナム

「ではな・・・」

私は言いたい事をすべて言った。

フェイト

「・・・何？」

それが伝わっているかは別の話としておこう。

テストロッサとも別れ、1人廊下を歩く私はとても清々しい気分だ。

今まで普通の生活など、況して恋愛など全く無縁のモノだった。

だが、主はやてと出会い、1人の人間として生きて行く事が出来た。

そして、黒崎と出逢い、恋と言うモノを覚えた。

私は今、生きているこの時を生涯忘れる事は無いだろう。

1人の人間として生きているこの時を・・・。

初恋に出逢ったこの人生なつかを・・・。

e n d

番外篇『シゲナムの恋』（後書き）

なんとPV150000突破!!!

勢いで始めたのにな、この小説・・・。

とても嬉しいです

次話からは本編に戻ります。

感想、指摘、要望、質問等お待ちしております！

失礼しました！

第29話『悪よりの誘い』（前書き）

特に言う事はありません。

じいじ

第29話『悪よりの誘い』

【3人称side】

病院 中庭

一護がルーテシアの母を救うための相談をするために病院の中へ戻ろうとした時、一護の持つ通信機に通信が入った。

一護

「なのは達か？」

“なのは達からの連絡”

そう思った一護はその通信を受けた。

???

《フッフッフッフ・・・初めまして、黒崎一護君・・・》

しかしその声は明らかになのは達のモノではなく、況して女性のそれですらなかった。

一護

「!?!? 誰だ、てめえ……」

一護は驚きながらも平静を保ち、通信を続ける。

???

《私はジェイル・スカリエッティ……。ナンバーズの、聖王の器の生みの親だよ》

一護

「つ!?!?」

張本人から告げられる事が腹立たしいのか、一護の表情は歪み、拳は強く握られる。

一護

「……何の用だ」

それでもギンガ達の手前、怒りを押し殺し、わざわざ直接通信を入れて来た理由を訊ねる。

スカリエッティ

《何、大した事じゃない……。そこにルーテシアはいるかい？》

一護

「……いたらどうした？」

一護はルーテシアを一瞥し、スカリエッツィに返す。

スカリエッツィ

《それなら話が早い……。その子の母親、メガーヌ・アルピーノを返して欲しければ私のアジトへ来たまえ》

一護

「……俺達を誘ってんのか？」

ルーテシアの母親・メガーヌを人質に、一護達を誘っている事は明白だった。

スカリエッツィ

《どう捉えるかは自由だよ……。ただ、1つ言うならば……。君達に興味がある》

スカリエッツィは純粹に一護達に興味があるらしい。

チンク達もそんな事を言っていた。

一護達としては迷惑極まりない話だ。

一護

「・・・アジトへの地図を寄越せ」

しかし、一護にとってそれはどうでもいい事だった。

“絶対に母親を助ける”

ルーテシアと交わした小さくも確かな約束を胸に、一護はスカリエツテイの誘いに乗る。

スカリエツテイ

《話がわかって助かるよ・・・。ルーテシアのデバイスに地図のデータを送っておく。楽しみに待っているよ》

一護

「1つだけ・・・頼みがある」

スカリエツティが通信を切ろうとした時、一護が交渉を持ち掛ける。

一護

「数時間でいい・・・時間をくれ」

一護は仲間達と作戦を練る時間を得ようとしている。

スカリエツティ

《構わないよ。でも、くれぐれも余計な事はしないように・・・》

その言葉を最後に通信は完全に切れた。

そして、アスクレピオスにアジトの地図のデータが送られて来た。

ギンガ

「一護さん、これって完全に“罠”ですよね・・・？」

一護

「ああ、早く皆に知らせねえとな・・・」

地図のデータを確認し、これを罠だと読んだ5人は病院内の皆の許へと戻った。

病室

一護達は病室に戻り、スカリエッティからの通信の件を話した。

その際、なのは達とも空間モニターを繋いでいる。

緊急事態故、マナー云々はこの際無しだ。

いや、空間モニターならマナー違反ではないか……？

ナツ

「なんて卑怯な野郎だ！」

ナツは怒りに震え、病室の壁を殴る。

ツナ

「そいつの狙いって……俺達だよね……？」

デイド

「うん。ドクターの指令に“捕獲しろ”ってあったから……」

チンク

「すまない。ドクターがすっかり気に入ってしまったようで……」

一護

「お前等が気にする事じゃ無えよ」

スカリエッティの狙いは間違い無く一護達漂流者組。

その目的は恐らく、良くて解析、悪くて解剖……最悪改造だ。

ノーヴェ

「どうすんだよ、一護」

一護

「改造なんて死んでもゴメンだ……。けど、メガー又さんを助けねえと……」

一護達からすると解析ならまだしも（それも嫌だが・・・）解剖、
況してや改造など真っ平ゴメンだ。

しかしメガーヌを助けるためにはそれを覚悟した上で行かなければ
ならない。

はやて

《けど、それやと救出に向かうのは一護君等だけって事になるな・
・。下手に多勢で行ってメガーヌさんを危険に晒す訳にはいかんし
・・。》

ツナ

「でも敵陣に罠があるのは明確だし・・・。オレ達だけで行って罠
に嵌れば終わりだ」

はやてとツナの冷静な分析は正しい。

メガーヌの安全と仕掛けられているであろう罠の事を踏まえて作戦
を立てなければならない。

ツナ

「外部からハッキングして、アジトのシステムを使用不能に出来な
いかな？」

チンク

「それは無理だ。私達の一番上の姉、ウーノ姉様のIS『フローレス・セク不可触の秘書』の情報処理能力の前では、外部は愚か内部からさえもシステムの書き換えは不可能だ」

ツナの考えた作戦は、話し合いの余地無く却下となってしまうた。

ナツ

「そんな必要無えよ。オレ達だけで行って罠に嵌らずに人質を助ける。それで問題無えだろ？」

なのは

《ナツ君、それが難しいんだよ？》

ナツが考えた作戦は言わばシンプル・イズ・ベスト。

しかし、なのはの言う通りそれが難しいのだ。

一護

「けど、それで行くしかねえな」

フェイト

《確かに……。危険だけど、作戦としては正しいよ》

はやて

《せやな……。なら一護君等が突入、私等がその援護。そう言う作戦で行こか》

話し合いの末、結局ナツのシンプル・イズ・ベストが採用される事となった。

その時、

エレア

「……。！地上本部に妙な反応があります！」

エレアが何かを感じ取り、声を上げる。

はやて

《“妙な”って何や？》

はやてがその反応について訊ねる。

エレア

「反応は3つ。2つは魔力反応、もう1つは恐らく戦闘機人かと・・・」

エレアの言葉を聞いた時、チンクが何かに気づいた。

チンク

「多分それはドゥーエ姉様だ。ドクターから極秘指令を受けていたらしい」

ナンバーズ2のドゥーエに与えられた極秘任務・・・。

それは用済みとなったレジアス中将の殺害だった。

一護

「メガーヌさんの事で手一杯なのに・・・なんとかしねえと！」

チンク

「だが難しいぞ。ドゥーエ姉様のISは『ライアーズ・マスク偽りの仮面』。その能力で変装しているだろうから、見分けるのは至難の技だ」

チンクがドゥーエの能力を説明すると、皆が黙って手立てを考えだす。

その時、

デイエチ

「そつだ、お前が行けばいい」

そう言つてデイエチが指差したのはナツだった。

ナツ

「何でオレなんだよ？」

ナツは自分が指名された理由を訊ねる。

デイエチ

「お前の“鼻”なら変装くらい見分けられるんじゃない？」

それを聞いた数名は“なるほど納得”と言つ顔をした。

確かにナツの並外れた嗅覚ならそれも可能だろう。

しかし、

ギンガ

「でもそれだと突入するのが一護さんとツナさんの2人だけに・・・

」

ギンガの言う通り、ナツが地上本部に行けばアジトへ突入するのは残りの2人。

そうすると2人の危険度が増してしまう。

ギンガだけではなく、ほとんどの者がその心配をしている。

一護

「だったら俺達がナツの分まで働きゃいいだろ？」

ツナ

「うん！」

しかし、当の本人達はそんな心配はしておらず、寧ろ^{むし}抜けた穴を埋めればいいと息巻いている。

ナツ

「わかった。じゃあオレはその本部って方に行くぜ」

はやて

《シグナムも行かせるわ。1人やと危険やから》

作戦が決定した。

一護とツナがアジトへ突入。

なのは達がその援護。

ナツとシグナムが地上本部へ。

一護

「頼んだぜ、ナツ」

ナツ

「任せとけ！そっちもしっかりな！」

ツナ

「うん！気をつけるよ」

3人は拳を合わせる。

そして早速作戦が決行される。

病院 正面玄関

地上本部へと向かうナツとシグナムは病院の正面玄関で落ち合った。

ナツ

「シグナム！」

シグナム

「悪い！遅くなった・・・って、お前は・・・？」

シグナムの視線の先にいるのは、

エレア

「どつもー！」

この作戦に関係無い筈のエレアだった。

シグナム

「何故お前がここに？」

シグナムがエレアにその真意を訊ねる。

エレア

「乗り物で行くより、私の転送魔法の方が断然早いですから！」

エレアの答えにシグナムは納得した。

以前にも地上本部から六課へと一瞬で転移させた事がある彼女ならば大丈夫だろうと判断したからだ。

後は、ナツの乗り物酔い回避とか……。

シグナム

「では、頼む！」

エレア

「わかりました。転移結界、発動！」

エレアはナツとシグナムの足元に転移魔法陣を展開する。

ナツ

「行くぜ！！」

シグナム

「ああ！」

ナツとシグナムが意気込みを叫ぶと同時に2人の姿は消え、地上本部へと転送された。

エレア

「まあ、今回はドラゴンフォース無しでも大丈夫でしょう・・・」

2人を見送ったエレアは再び病院の中へ入っていった。

その後、今度は一護達をスカリエツティのアジト近辺に転送した事でエレアの任務は終了。

こうして、メガーヌ救出作戦とレジアス暗殺の阻止及びドゥーエ、
他2名の確保。

2つの作戦が同時に決行された。

T o b e c o n t i n u e d

第29話『悪よりの誘い』（後書き）

実は来週からテストなんですが・・・

なぐんで更新してんのかな、俺・・・。

まあ一応テスト前でもテスト中でも更新して行きますが、勉強もしなければならぬので若干短めとなります。

何卒、ご理解とご容赦の程を・・・。

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

次回『騎士の願い』

第30話『騎士の願い』（前書き）

タイトルは天道さんの小説のまんまです……。

て言つか地の文が……もはや、説明文に……。

グダグダですが……どうぞ

第30話『騎士の願い』

【3人称side】

管理局 地上本部

地上本部の総司令官・レジアスはある男と対峙していた。

男の名はゼスト・グランガイツ。

ルーテシアと行動を共にしていた彼だが、実は元管理局の人間だった。

しかし、8年前のとある事件の際に一度死亡しており、スカリエツティによって蘇生された。

そして、その事件の真相を確かめるべく、当時の親友であったレジアスの許へ来ていた。

ゼスト

「レジアス、8年前・・・俺と、俺の部下達を殺害したのはお前の指示か・・・？」

レジマス

「ゼスト……」

ゼストの問いにレジマスは少し口籠もる。

???

「……………」

この場にいるのはゼストとレジマスだけではない。

もう2人の女性がいる。

1人はレジマスの娘であるオーリス・ゲイズ。

そしてもう1人、さっきから何かを窺っている女性……。

ナンバーズ2のドワーエだ。

ドワーエ

「（そろそろ潮時かしら……）」

ドゥーエはその殺気を抑え、レジアスを殺害するために、右手の固
有武装『ピアッシングネイル』を発動しようとしていた。

その時、

バリイイイイン！！！！

ドゥーエ

「！！！！？」

突然、何者かが窓を突き破って部屋に入ってきた。

エリアによって地上本部へと転送されたナツとシグナムだ。

レジアス

「何事だ！！！」

オーリス

「あなた達は機動六課の！！！」

ゼスト

「あの時の騎士か……！」

その部屋にいた全員が突然の出来事に驚く。

ナツ

「……！……！……！」

ナツは突入と同時にドゥーエの変装を見破り、炎の刃で斬り掛かる。

ギイイーン！！

ドゥーエはその斬撃を、瞬時に発動させたピアッシングネイルで受け止める。

ドゥーエ

「まさか、私の偽りの仮面ライアーズ・マスクが見破られるなんて……」

ドゥーエの姿が一瞬揺らぎ、姿が変わる。

顔は勿論、ピンク色の髪から霞んだ金髪になり、管理局の制服からナンバーズの戦闘服になった。

ドゥーエはこの能力で変装し、管理局で諜報活動を行っていた。

ドゥーエ

「はあっ！！」

ドゥーエはナツを押し返す。

ナツは飛ばされはしたが、体勢を崩す事無く着地する。

ドゥーエ

「あなた・・・何者？」

ナツ

「オレは妖精フェアリーテイルの尻尾のナツだ！！」

ナツは右手の炎の刃を消す。

ドゥーエ

「フェアリーテイル？何ソレ？まあいいわ・・・先ずはアナタから殺してあげる」

ドゥーエはピアッシングネイルの爪を舌で舐める。

その姿は妖艶で不気味だった。

ナツ

「やれるモンならやってみろ!!」

ドゥーエ

「生意気なボウヤ!!」

2人は互いに走り出した。

ナツ

「火竜の・・・さいが碎牙!!」

ナツは爪による斬撃をドゥーエに浴びせる。

ちなみに斬撃の威力だけならば“炎刃”よりも“碎牙”の方が上だ。

ドゥーエ

「くっ!!」

ドゥーエはそれを間一髪で躲し、ナツの背後に回りこんで攻撃を仕掛ける。

ドゥーエ

「もらった!!!」

ドゥーエは勝利を確信した。

しかし、

シグナム

「私を忘れてもらっては困る……」

シグナムはさらにドゥーエの背後に回りこみ、カートリッジをロードしたレヴァンティンを構える。

シグナム

「紫電一閃!!!」

シグナムの炎を纏った斬撃は、ピアッシングネイルを粉々に破壊した。

ドゥーエ

「しまった!!」

ドゥーエは自分の武器が破壊された事にたじろぐ。

ナツ

「火竜の鉤爪!!!!」

ドゥーエ

「があっ!!!!」

そこへナツの炎を纏った回し蹴りが叩き込まれ、ドゥーエは吹き飛ばされる。

ドゥーエ

「くっ……どうして、私の居場所が……?」

ドゥーエは薄れ行く意識の中、ナツに自分の居場所がわかった理由を訊ねる。

ナツ

「どつでもいいだろ？そんなモン・・・」

ドゥーエ

「フフツ・・・ホントに、生意気な、ボウヤ・・・」

そのままドゥーエは気絶してしまった。

シグナムがその手を拘束し、ドゥーエの逮捕に成功した。

レジアス

「何だ、貴様等！許可無く窓から突入するとは、無礼にも程があるだろっ！！」

レジアスはナツシグナムに怒鳴る。

ナツはそんなレジアスを睨み返した。

ナツ

「うるせーよ、オッサン・・・。てめえが昔やった事も、裏でコソコソやってた事もバレバレなんだよ・・・」

ナツはそう言ってレジアスに詰め寄る。

ゼスト

「やはり・・・そうだったのか・・・」

ナツの告げた事実にはゼストは拳を強く握る。

ナツ

「シグナム、行くぞ・・・」

シグナム

「・・・ああ」

ナツとシグナムはドゥーエを連れて部屋の外に出た。

部屋の外ではアギトが待機しており、部屋から出て来たナツとシグナムに詰め寄った。

アギト

「オイ！何があったんだよ！？・・・っってお前は機動六課の騎士！？」

アギトは慌てた様子で2人に訊ねる。

ついでにシグナムを見て驚く。

・・・今更？

シグナム

「お前は確か・・・アギト、だったか・・・？」

シグナムはシグナムでアギトの名前がうる覚えな様子だ。

まあ正解だけど・・・。

アギト

「ダンナは・・・ダンナは無事なのか！？」

アギトはダンナ・・・ゼストの身を案じて慌てふためく。

シグナム

「心配無い。今は中でレジアス中将と話をしている」

アギト

「そう、なのか・・・？よかつた〜・・・」

シグナムの言葉を聞いて、アギトは安心したようだ。

アギト

「・・・所で、お前誰だ？」

アギトはナツの方を見て言う。

ナツ

「お前こそなんだよ」

ナツもアギトの存在が不思議（リインは慣れたけど・・・）なよう
で、質問を返す。

アギト

「テメエ、アタシの質問に答える！」

アギトが今にもナツに襲い掛かろうとしている所を、なんとかシグ
ナムが止めに入った。

数分後、話し合いが終わったのか、部屋からゼストが出て来た。

アギト

「ダンナー!!」

アギトはゼストの無事が確認でき、明るい表情となった。

ゼスト

「待たせたな、アギト」

ゼストはアギトに軽い謝罪を述べ、ナツとシグナムの方を向く。

ゼスト

「2人には感謝せねばならないな、ありがとう。良ければ名前を訊かせてくれないか？」

ゼストは2人に感謝すると共に、名前を訊ねる。

ナツ

「ナツ・ドラグニルだ」

シグナム

「私はシグナム」

ゼスト

「ナツ、シグナム、2人に頼みがある」

ナツ・シグナム

「頼み・・・??」

2人は“何だろうか？”と首を傾げる。

ゼスト

「1つはシグナム、アギトのロードになってはくれないか？」

アギト

「な、何言ってるんだよ、ダンナ!?!」

アギトはまさかそんな事を言われるとは思っていなかったらしく、狼狽える。

ゼスト

「アギトの能力と一番相性がいいのはお前だ。頼む……」

ゼストはシグナムに頭を下げる。

シグナム

「……承知した。騎士としてその頼み、引き受ける」

シグナムはゼストの申し入れを受け入れる。

アギト

「ま、待ってくれよダンナ！アタシは……」

アギトは当然ながら異論を唱えるが、ゼストがアギトの頭に手を乗せ、アギトを落ち着かせる。

ゼスト

「アギト、お前は俺と一緒にいても不幸になるだけだ。だから、シグナムと一緒に生きるんだ」

アギト

「ダンナ……」

アギトはまだどこか得心がいかなかったが、ゼストの思いが本気だと悟り、それ以上何も言わなかった。

ゼスト

「もう1つはナツ、俺と戦ってはくれないだろうか……？」

ゼストはナツとの対戦を希望した。

ナツ

「アンタ、死ぬつもりなのか？」

ナツはゼストの真意を察した。

ゼスト

「俺の命は残り少ない……。ならば騎士として、美しく最後を飾りたい……」

ナツ

「ふざけんな!!」

ナツはゼストの頼みをつつ撥ねた。

そしてゼストの胸座を強く掴む。

ナツ

「オレは騎士道精神なんざ知ったこつちやねえが、今アンタが諦めて潔く死ぬのが正しいとは思わねえ!!」

ナツはそのままゼストに怒鳴り続ける。

ナツ

「アンタはそれで良かったとしても、アンタを大切に思ってる奴等はどうなんだ!? そいつ等の事も考えろ!!」

ゼストはただ呆然とナツの言葉を聞いている。

そして、ナツは掴んでいたゼストの胸座を放し、ゼストを睨む。

ナツ

「どうしても戦いてえんなら、生き続ける決意をしてからにしろ。どうしても死にてえんなら、天命を全うしてからにしろ」

ゼストはナツの言葉を聞いている内に苦笑してしまった。

ゼスト

「フツ・・・まさかこんな若造に説教されるとは・・・」

その時、レヴァンティンに通信が入った。

ナツ

「どうした？」

シグナム

「どうやら黒崎達がメガー又救出作戦を開始したようだ」

ゼスト

「メガー又救出？どう言う事だ？」

ゼストの質問にシグナムが答え、作戦内容を話す。

ナツ

「どつするよ、オッサン・・・？」

ナツはゼストの意志を確かめようとした。

ゼスト

「・・・その作戦に参加させてくれないか・・・？。かつての部下を、この手で救いたい！」

ナツ

「決まりだな！シグナムはドウコイツエを連れて行ってくれ」

シグナム

「わかった。私は後で合流しよう」

シグナムはナツの提案を快く引き受ける。

アギト

「アタシはお前と行く！アタシのロードに相応しい器がどうか見極めてやる！」

アギトはシグナムを見つめる。

その瞳には確かな覚悟が宿っているようだ。

シグナム

「・・・いいだろう。行くぞ！」

アギト

「オウ！」

シグナムとアギトはドゥーエを連れて六課へと戻って行った。

ナツ

「オレ達も行くぞ、ゼスト！」

ゼスト

「ああ！」

ナツとゼストはメガーヌ救出組と合流するためにスカリエツティの
アジトへ向かった。

T o b e c o n t i n u e d

第31話『決行！メガーヌ救出作戦』（前書き）

ワッオ！

我ながらグダグダ（笑）

では、どござ

第31話『決行！メガーヌ救出作戦』

【3人称side】

ルーテシアの母、メガーヌ・アルピーノの救出作戦が決行された。

作戦は以下の通り……。

内部に潜入するのは一護とツナの2人。

他のメンバーは、すぐに突入が可能で、且つ敵にバレない場所で結界を張って待機。

及びナツ、ゼストとの合流。

それに従って一護とツナが歩いていると、数機のガジェットとピンク色の長髪の女性、ナンバーズ7のセツテが2人を出迎えた。

セツテ

「あなた達が……黒崎一護、沢田綱吉ですか……？」

一護

「ああ。お前は？」

一護もツナも戦闘態勢には入っていないが、警戒を解いてもいない。

セツテ

「ナンバーズ7のセツテです……」

一護

「セツテか……。よろしくな」

ツナ

「よろしく」

セツテ

「……敵に対してその態度はおかしくありませんか？」

セツテは一護とツナの態度に疑問を抱き、そのまま訊ねる。

一護

「ん？いや、チンク達もそうだけど、どっからどう見ても人間の女の子だから……」

ツナ

「どうも・・・ね・・・」

一護達の警戒はセツテではなく、飽くまで罠とガジェットに向けられたモノだった。

セツテ

「・・・冗談は止めて下さい。私達は戦闘機人・・・戦つたために生まれた兵器です」

セツテはそう言って1人先に行ってしまう。

一護

「・・・やり辛いな」

ツナ

「うん・・・」

2人もセツテの後を付いて行く。

暫く歩くと、アジトの入口が見えて来た。

その中に入ると、暫く薄暗い廊下が続き、その先の開けた場所にスカリエツティはいた。

そこにはご丁寧に椅子とテーブル、さらにはティーセットとお菓子が並べられている。

スカリエツティ

「ようこそ、黒崎一護君、沢田綱吉君」

ツナ

「お前がジェイル・スカリエツティか？」

一護

「こんな物を用意して、何のつもりだ？」

2人の頭の中には幾つかの疑問符が浮かんでいた。

この男がジェイル・スカリエツティ本人かどうか……。

何故もてなしのような物が用意されているのか……。

しかし、そんな事は大きな事ではない。

2人は目の前にいる男に対する警戒を強めた。

スカリエッティ

「君達と話がしたいんだ。まあ、座りたまえ」

一護とツナは言われるがままに椅子に座る。

一護

「・・・話つてのは何だ？」

一護はスカリエッティの真意を探る。

大体の予想はついているが・・・。

スカリエッティ

「単刀直入に言えば、君達のチカラを研究したい」

ツナ

「嫌だ、と言ったら・・・？」

予想通り、その真意は一護達の研究だった。

よって2人の答えも当然・・・

“拒否”

スカリエッティ

「まあ、そう言うだろうね・・・」

一護

「それより、メガーンさんを返してもらおうか・・・」

スカリエッティ

「いいだろう。トーレ」

スカリエッティに指示されたトーレが、ワンピースを着たメガーンを運んで来る。

一護とツナはソレガルーテシアの母親だとすぐにわかった。

紫色の長髪やその面影がとても似ていたからだ。

スカリエツティ

「生体ポッドに入れたままでは悪いと思ってね……。適当な服を着せてお返しするよ」

一護

「ちゃんと生きてるんだろうな……。？」

スカリエツティ

「自分で確かめてみると良い」

そう言われ、ツナがメガーヌに近付き、その生死を確認する。

ツナ

「大丈夫。ちゃんと呼吸もしてるし、脈も正常だよ」

メガーヌの生存が確認でき、2人はホッと胸を撫で下ろす。

スカリエツティ

「黒崎一護。質問だが、何故君はこの話に乗ったんだい？私はダメ元で脅してみたんだがね……。君はメガーヌ・アルピーノとは面識も何も無い……。赤の他人だろう？」

スカリエッツィは一護にわざわざアジトへとやって来た真意を訊ねた。

何故赤の他人のために自ら罠の中へ飛び込むのか……？

それも含めて黒崎一護と言う男に興味があった。

一護

「ルーテシアとの約束だからだ」

スカリエッツィ

「しかし、そのルーテシアも君にとっては他人ではないのかい？」

一護

「だから何だ？あんな小さな子供が、母親を助けてくれて泣いてたんだ……。他人とか、そんなもん関係無えんだよ」

スカリエッツィ

「……ふむ、では次の質問だ。『プロジェクトF』の産物であるフェイト・テストロツサとエリオ・モンディアルは君から見えてどうだい？」

一護

「プロジェクトF？ソレが何だ？フェイトとエリオが何だって言うんだ」

一護はスカリエッティを睨む。

スカリエッティ

「何だ、知らないのか？プロジェクトFと言うのは、元となる人間の肉体と精神の複製……。この意味がわかるかい？」

スカリエッティは冷たく笑い、2人を見据える。

ツナ

「ま、まさか……」

ツナはその言葉の意味がわかり、表情が歪む。

一護もその意味に辿り着き、その言葉を呟く。

一護

「アイツ等が……クローン人間だと!？」

スカリエツティ

「その通り。フェイト・テストロツサは事故で亡くなったアリシア・テストロツサの、エリオ・モンディアルは病死したモンディアル家の息子のクローンだよ。と言っても、最終的には親に捨てられてしまったようだがね……」

スカリエツティの語る真実を、2人はただ呆然と聞いている事しか出来なかった。

スカリエツティ

「実はプロジェクトFの基礎理論を構築したのは私でね……。私の研究の成果によって生み出された彼女達の事を、君達はどう思っているのか……。私は興味があるんだよ」

スカリエツティは一護達を混乱させたり、苦しめようとしているのではない。

興味がある。

ただそれだけだ。

スカリエツティ

「さあ、訊かせてくれ。君達は彼女達の事をどう思う？」

一護は眼を閉じ、2人の姿を思い浮かべる。

優しく微笑み、他人を思い遣る事の出来る女性を……。

いつも一生懸命で、仲間を護るために必死に戦う少年を……。

そして、

一護

「そんなもん決まってるだろ……」

一護は眼を開け、スカリエッティを真つ直ぐ見る。

一護

「2人共……俺の大事な“仲間”だ！」

一護の答えにスカリエッティは一瞬身を震わす。

そんなスカリエッティに、一護はさらに語る。

一護

「クローン人間？それがどうした。生まれが普通じゃなかったら、蔑まれなきゃならねえのか？普通じゃなかったら、変な眼で見られなきゃならねえのか？」

一護の脳裏にはフェイト達と共に、ある者の姿が浮かんでいた。

そのある者とは“コン”だ。

『モッド・ソウル改造魂魄』と呼ばれる彼は、他人の都合で生み出され、他人の都合で殺される運命にあった。

彼は言った。

コン

『こうして生まれてきたんだよ！自由に生きて、自由に死ぬ権利ぐらいあるハズじゃねえか！！』

それは彼の心の叫び……。

“命なんて他人が勝手に奪っていいモンじゃない”

それが彼の考え方だった。

たとえ“作り出された命”であろうと、それが迫害を受ける理由にはならない。

そんな彼の心を知った一護だからこそ、言える。

一護

「アイツ等は普通に笑って、普通に泣いて、普通に怒って・・・他人を思い遣れる、他人を護りたいと思える・・・。それはもう、立派な人間じゃねえのか？ スバルやギンガも、勿論ナンバーズだって・・・立派な人間だと、俺は思う」

一護の答えにツナも強く頷く。

そんな2人を、スカリエッツィは無言のまま見ている。

そして2人はスカリエッツィを一瞥し、メガアヌを連れて帰ろうとする。

しかし、

スカリエッティ

「そうは行かないな！」

ツナ

「!?!?一護、避けて!?!」

一護

「っ!?!?」

突然、スカリエッティが2人にバインドを掛けようとした。

それに気づいたツナと一護は、間一髪で拘束を免れた。

スカリエッティ

「やはり君達は興味深い!是非研究させてもらおう!?!」

スカリエッティは再び2人にバインドを掛けようとする。

一護

「ちっ!?!」

ツナ

「くっ!!」

一護とツナはそれを躲し、それぞれ戦闘態勢に入る。

スカリエッティ

「トーレ!!」

トーレ

「ライドインパルス!!」

スカリエッティの命令で、トーレは自身のIS『ライドインパルス』を発動し、超高速で一護達に攻撃を仕掛ける。

935

超ツナ

「はあっ!!」

^{ハイパー}超死ぬ気モードとなったツナがそれを食い止める。

トーレ

「(?!?)このスピードに反応したと……っ!?!」

超ツナ

「（思った以上に一撃が重い！！）」

その時、

ドオオオオン！！！！

凄まじい爆音がアジト内に轟いた。

スカリエツティ

「何だ！？」

スカリエツティは急な事態に若干の焦りを覚えた。

一護

「スカリエツティ……。悪いけど、このアジトのシステム全部壊させてもらっぜ」

スカリエツティ

「フツ……。無駄だよ。どんな破壊工作も……。ウーノの能力とアジトの防御システムの前では……」

ウーノ

《ドクター！アジトのシステムが悉く破壊されて行きます！！》

スカリエッティ

「なっ！？」

ウーノの緊急の知らせは、スカリエッティの余裕の表情を一瞬で崩壊させた。

一護達がいる場所とは別の場所。

そこではナンバーズ1のウーノがコンソールを操り、システムの破壊を防ごうとしていた。

ウーノ

「くっ！これだけ防御システムをフル稼働させても破壊を食い止められないなんて！！」

しかし、ウーノの健闘も空しく、アジトのシステムは次々と破壊されて行く。

ウーノの防衛を突破し、システムを悉く破壊して行く者……。

それは、

ナツ

「うおりゃああああー!!」

アジト内を縦横無尽に暴れ回るナツだった。

一護達が時間を稼いでいる間にナツが到着し、暴れ回る内にシステムの中枢を見つけ、今はそこを破壊している。

ナツ

「火竜の……咆哮!!」

ゴオオオオオツ!!!

灼熱の炎が全システムを焼き尽くす。

ウーノにそれを喰い止める術は無く、間もなくアジトのシステムは

完全に機能を停止した。

ウーノ

《ドクター……申し訳ありません。全システム、機能停止しました……》

ウーノは自責の念からか声に張りが無い。

スカリエッティ

「フツ……やってくれたね……。黒崎一護……」

一護

「思ったよりやりすぎたけどな……」

超ツナ

「確かにな……」

システムの物理的破壊は予定通りだが、アジトそのものまで破壊したナツの行動は多少想定外だった。

故に一護とツナは半分呆れ顔だ。

一護

「でも、これで作戦通りだ。システムを壊したらなのは達が突入を

」

ドオオオオオオン!!!!!!!!!!

一護の言葉を遮るように、アジト内に再び爆音が轟いた。

一護

「する筈なんだけど・・・」

超ツナ

「派手にやりすぎだな・・・」

今回の救出作戦の実行部隊は3つに別れている。

1つ目は一護とツナのメガークラス救出チーム。

2つ目は後で合流したナツのシステム破壊チーム。

まあチームと言っても正味ナツ1人だが……。

3つ目はシステム破壊後、停止したガジェットを殲滅するチーム。

これの担当は言わずもがな、機動六課だ。

そしてナツがシステムを破壊した今、機動六課がアジト各所で暴れていると言っ訳だ。

ナツ

「待たせたな！」

一護

「思ったより遅かったな……。そっちの奴は？」

一護はナツと一緒に来た人物、ゼストを指差す。

ナツ

「心配すんな、仲間だ」

ゼスト

「メガー又は俺が責任を持って預かる」

ゼストはメガー又を抱えた一護に近付く。

一護

「・・・ああ」

一護はメガー又をゼストに託す。

ゼスト

「随分簡単に信用してくれるのだな」

ゼストは一護が自分を一切疑わない事を意外に思い、それを訊ねる。

一護

「仲間が“仲間だ”^{ナツ}って言ってるんなら疑う事に意味は無えよ・・・

。メガー又さんの事、頼んだぜ・・・」

ゼスト

「わかった！お前達も気を付けるんだぞ！」

一護から託されたメガ―ヌを抱え、ゼストはアジトの外へと避難する。

ナツ

「さあて、それじゃあ一丁派手に行くか！」

超ツナ

「ああ！」

ナツとツナが共に炎を揺らめかせる。

一護も死神化し、その2人に並ぶ。

一護

「終わりにしようぜ、スカリエッティ・・・」

“死神”と“火竜”と“大空”が、狂気の科学者に最後の戦いを挑む。

To be continued

第31話『決行！メガーヌ救出作戦』（後書き）

作者

「パラレルワールドバラエティ！！！」

一護

「スツゲー久々な気がするんだけどよ……」

作者

「それでは早速ゲストの登場です！！！」

一護

「無視かよ……」

作者

「今回のゲストはフェイト・T・ハラオウンさんです！！！」

フェイト

「ど、どうも……」

一護

「とんだ災難だな」

フェイト

「う、うん。でも、一護と一緒にだから・・・／＼／」

一護

「ん？」

フェイト

「な、何でもないよ・・・／＼／」

一護

「??？」

作者

「いや、今回フェイトを呼んだのは他にも無く・・・。あ、一護は一回捌けといてくれる？」

一護

「あ、ああ」

作者

「では、改めて・・・」

フェイト
「何？」

作者

「ぶっちゃけ一護どつ？めっちゃライバル多いけど・・・」

フェイト

「た、確かに多いけど・・・一護を好きだって気持ちは負けないよ！・・・／／／」

作者

「ほほう」

フェイト

「だ、だから・・・いつか絶対に振り向かせてみせるよ！・・・／／」

作者

「はい！意気込みありがとう！では、一護くカムバ〜ック」

一護

「一体何だったんだ？」

フェイト

「い、いや、えっと・・・あははは・・・／／／」

一護

「?????」

作者

「フェイトが一護を振り向かせられるかどうか・・・。それは私の気持ち次第（笑）」

一護

「本当に何なんだよ・・・」

フェイト

「感想、指摘、要望、質問待ってます」

一護

「よろしくな、皆」

作者

「では、今日はこの辺で・・・」

作者・一護・フェイト

「「「失礼します!!!」」」

次回『激化!アジトの攻防』

第32話『激化！アジトの攻防』(前書き)

お待たせ致しました(？)

約10日ぶりの本編更新！

でも短いし、グダグダです…

バトルってムズカシイ…(泣)

では、どうぞ

第32話『激化！アジトの攻防』

【3人称side】

遂にスカリエッティとの決着の時が来た。

一護達とスカリエッティが対峙する。

しかし、その双方の間に割って入る者が2人……。

ナンバーズ3のトーレとナンバーズ7のセツテだ。

トーレ

「ドクター、お逃げ下さい」

セツテ

「私達が足留めをします」

スカリエッティ

「任せたよ」

スカリエツティは2人にこの場を任せ、通路の奥へ消えて行った。

一護

「待て!!」

セツテ

「行かせない」

一護がスカリエツティを追いかけようと駆け出した時、セツテがそれを阻むために固有武装『ブーメランプレード』を投げる。

一護

「ちっ!!」

一護はそれを斬月で弾き返す。

一護はそのまま斬月を構えて戦おうとするが、他の2人が前に出る事によってその構えを解く。

超ツナ

「ここはオレ達に任せて早く行け」

ナツ

「とつとと終わらせて六課に帰ろつぜ」

一護

「わかった。頼んだぜ、2人共」

一護は2人にこの場を任せ、スカリエツティを追う。

トーレ

「逃がすか！」

トーレはライドインパルスを発動させ、一護を捕らえようとする。

超ツナ

「させるか！」

しかし、それをツナが阻止し、トーレの体を突き飛ばす。

トーレ

「ぐっ！！」

セツテ

「トーレ姉様！」

セツテはトーレの身を案じ、その許へ行こうとする。

が、それをもう1人が阻む。

ナツ

「お前の相手はオレだ！」

ナツはその両手に炎を燈す。

セツテ

「邪魔を・・・するな!!！」

2組の戦闘が始まる。

ツナ vs トーレ

トーレ

「はあああっ！！！！」

超ツナ

「！！！」

ライドインパルスによる高速攻撃を繰り返すトーレに対し、ツナは超直感でその動きを読んで攻撃を躲す。

トーレ

「（コイツ、本当に人間か！？）」

トーレは、生身でライドインパルス的高速移動に付いて来るツナに、若干の“恐れ”と“焦り”を覚える。

超ツナ

「無駄だ。お前の動きは読んでいる」

ツナは軽い挑発をトーレに掛ける。

トーレ

「くっ！舐めるな！！！」

トーレは自分の中に生まれたモノを拭い去るように、また自分のチカラがツナに劣っていない事を証明するかのように、そのスピードを更に上げる。

超ツナ

「っ!!!?!」

ツナが何かを感じ、後ろを振り返る。

そこにはさっきまで目の前にいた筈のトーレがいた。

トーレ

「喰らえ!!!?!」

トーレはツナの顔に拳を叩き込む。

超ツナ

「くっ!!!?!」

しかし、ツナはその攻撃をギリギリで躲し、距離を取るためにトーレから離れる。

トーレ

「躲したか……。だがこれでわかっただろ？私のチカラが……」

トーレはツナを睨む。

しかし、ツナはその眼を見ず、静かに眼を閉じている。

トーレ

「諦めたか……」

その様子を“諦め”と受け取ったトーレはツナに近付く。

トーレ

「ならば死ね！……！」

そして、その拳を再びツナの顔目掛けて放つ。

しかし、

トーレ

「っ！！！！！！？」

トーレは自分の拳に違和感を感じた。

その違和感の正体を知るために、放とうとしていた拳を見る。

そして、トーレの眼に映ったのは、凍結した自分の拳だった。

トーレ

「何・・・だとっ！！！！」

トーレはその光景を一瞬で理解する事はできなかった。

トーレ

「一体、何をした！！」

トーレはツナを睨み、声を荒げる。

超ツナ

「さあな・・・」

トーレ

「っ!?!? 貴様ああ!?!?!」

トーレはツナの態度が気に食わず、ツナに対して怒りを見せる。

しかし、その怒りによって生じた隙を見逃すツナではない。

超ツナ

「はあああっ!?!?!」

トーレ

「っ!?!? がああっ!?!?!」

ツナは一瞬でトーレの背後に回り込み、そのまま殴り飛ばす。

トーレ

「くっ……まだだああっ!?!?!」

トーレは体勢を立て直し、凍結されていない拳を放つ。

超ツナ

「零地点突破・初代エディション……」

ファースト

トーレ

「なっ！！！！？」

ツナはその拳さえもボンゴレ奥義で凍結させた。

超ツナ

「終わりだ！」

ツナの拳の炎が一際大きくなる。

超ツナ

「X^{イクス}ブレイズ！！！！」

トーレ

「ぐあああああ！！！！！！！！」

ツナはトーレに打撃を加えると同時に、拳に纏っていた炎を放ち、トーレを吹き飛ばした。

トーレ

「がはっ！！！！」

吹き飛ばされたトーレは壁にそのまま激突した。

超ツナ

「力は抑えてある。命までは奪わない」

トーレ

「く……そ……」

それを最後にトーレは気を失った。

ナツ vs セツテ

セツテ

「はあっ!」

セツテはナツ目掛けてブーメランブレードを投げる。

ナツ

「へっ！喰らうかよ！！」

ナツはそれを躲し、セツテに接近する。

セツテ

「どうですかね・・・？」

ナツ

「ん？っ！？」

セツテの眩きによってナツの頭に生じた疑問符はすぐに消えて無くなった。

躲した筈のブーメランブレードが急激に軌道を変化させ、再びナツに向かって来たからだ。

ナツ

「うおっ！！」

ナツはそれをもう一度躲す。

だが今度は大分ギリギリだった。

ナツ

「そいつの軌道を変化させるのがお前の能力か？」

セツテ

「意外と鋭いですね……。仰る通り、私のIS『スローターアームズ』はブーメランブレードの制御、及び軌道を自由に変化させる能力です」

ナツ

「なるほどな……。だったらそいつの動きに気を付けて戦えばいいって訳だ」

セツテ

「言ってくれますね……。でも私の能力を暴いた所で、何も変わりませんよ」

ナツ

「やってみなきゃわかんねエだろ！！」

ナツはセツテに飛び掛る。

ナツ

「火竜の鉄拳!!」

ナツは炎を纏った拳をセツテに叩き込む。

しかし、セツテはそれを後ろに飛んで躲す。

そして、着地と同時にブーメランブレードを投げる。

ナツ

「喰らわねエよ!!」

ナツはさっきのようにそれを躲す。

ナツ

「もう一丁!!」

そして、セツテのISによって軌道が変化したブーメランブレードも躲す。

しかし、

ナツ

「ぐあっ！！」

ナツの体が切り裂かれた。

勿論、セツテのブーメランブレードによって。

だが、ナツはそれを躲した筈。

何故か？

セツテ

「喰らいましたね・・・」

ナツ

「てめえ、ズリイぞ！2本目とか！！」

セツテの手には2本のブーメランブレードが握られていた。

セツテ

「私が操れるブーメランブレードは何も1本ではありません」

セツテは今、自分が操ることが可能な本数のブーメランブレードを展開する。

その数は……

ナツ

「4本って……マジかよ!?!」

ナツはその数に一瞬たじろぐ。

セツテ

「行きます!?!」

セツテは4本のブーメランブレードをナツに放つ。

ナツ

「くっ!?!」

ナツも必死にそれを躲すが、4本とも不規則な動きをするため、徐々に体に傷が付いてきている。

セツテ

「これで終わりです！」

セツテは四方から同時にブーメランを向かわせる。

ナツ

「ちっ！！」

ナツがそれを躲すために上に飛び上がる。

しかし、それもセツテには予想の範疇だった。

セツテ

「（掛かった。四方から狙われれば逃げ道は上しか無い。でもブーメランブレードの軌道はまだ変えられる。そして、空中での回避は不可能）」

セツテは狙い通りブーメランブレードの軌道を変え、空中のナツを仕留めに掛かる。

セツテ

「（勝った！）」

セツテは勝利を確信した。

しかし、

ナツ

「待ってたぜ……」

セツテ

「!？」

この展開はナツにとっても予想の範疇だった。

ナツ

「待ってたんだよ……。それが1箇所集まるのをな！」

ナツが狙っていたのはブーメランプレードの破壊だった。

ナツ

「火竜の煌炎!!!」

ナツの放った火球は1箇所が集まった4本のブーメランプレードを飲み込み、破壊した。

セツテ

「しまっ

」

ナツ

「火竜の・・・特攻とっこう!!!」

セツテのセリフを遮り、ナツは足の炎のブーストで急激に加速し、そのままセツテに突進する。

セツテ

「ぐああっ!!!」

ただの突進ではあるが、炎をブーストに集中させた超加速のため、威力は“剣角”にも劣らない。

そのためセツテは衝撃で吹き飛び、そのまま気を失ってしまった。

ナツ

「ハア・・・」

ナツは溜息をつきながらツナの方も終わった事を確認する。

ナツ

「コツチは終わったぜ、一護」

ナツは黒幕を追って行った仲間到最后を任せた。

T o b e c o n t i n u e d

第32話『激化！アジトの攻防』(後書き)

次回『決着！JS事件』

第33話『決着！JS事件』（前書き）

今回でStrikers篇は終了です。

相変わらずグダグダですが……

（ - - ）
（ - - ）

取りあえず、どうぞ

第33話『決着！JS事件』

【3人称side】

一護

「待ちやがれ!!」

スカリエッティ

「やれやれ、追い詰められてしまったな」

一護は逃げようとしていたスカリエッティに追いつき、再び対峙していた。

一護

「諦めろ！もう逃がさねえぞ！」

スカリエッティ

「そうは行かないな。私には壮大な“夢”があるからね！」

一護

「夢...?」

スカリエツティ

「古代ベルカ再興……それが私の“夢”、そしてそのために邪魔な
時空管理局の壊滅だ！」

一護

「何…だと…!？」

スカリエツティの抱く野望に一護は驚愕する。

スカリエツティ

「どうだね、黒崎一護。私の夢はわかってもらえたかな？」

一護

「ふざけんな!! 誰かを傷付けてまで実現させようとする夢なんか、
俺は認めねえ!!」

スカリエツティ

「そうか…やはり、解り合う事は無いか…。ならば仕方ない!!」

スカリエツティは再び一護にバインドを掛ける。

一護

「同じ手は喰うか!!」

一護は瞬歩でそれを躲す。

そして一瞬でスカリエッツィの前まで移動し、斬月の柄でスカリエッツィを殴る。

スカリエッツィ

「ぐあつ！！」

スカリエッツィは後ろに倒れる。

一護

「わかっただろ？もう終わりだ」

スカリエッツィ

「フツ、終わり…か。君は先刻“逃がさない”と言ったが、果たしてそれは可能かな？」

一護

「何？」

スカリエッツィの言葉に一護は疑問符を浮かべる。

しかし、そこに別の疑問符が生じる。

???

「IS・シルバーカーテン！」

突然、スカリエッティの姿が消えた。

一護は一瞬たじろいだが、すぐに状況を理解した。

“ナンバーズ4のクアットロがスカリエッティを連れて逃げようとしている”と。

一護

「ちっ!!！」

一護は月牙を放とうとした時、制止の音が響いた。

???

「一護君！伏せて!!！」

一護

「っ!?!」

一護は言われるままに体を伏せる。

そして声の主・高町なのはは魔法陣を展開し、姿を消しているスカリエッティを狙う。

なのは

「デイベイイイン……バスタアアアア!?!」

五つの巨大な魔力砲が一護の頭上を通過する。

スカリエッティ・クアットロ

「っ!?!?!?!?!」

ドカアアアアアン!?!!

魔力砲は標的2人に命中し、有無を言わずその気を絶った。

一護

「……恐れ……」

その光景を見ていた一護の心に“なのはには逆らわない方がいいかも”と言う考えが蔓延った。

なのは

「一護君、大丈夫？」

一護

「あ、ああ。他の2人は？」

なのは

「ナツ君達も無事だよ。ナンバーズもあと1人」

なのはのセリフを遮り、なのはのデバイスに通信が入る。

なのは

「はやてちゃん？」

なのはは通信相手であろう人物の名を呼ぶ。

はやて

《なのはちゃん！ロツサとシスター・シャツハがウーノを捕らえた

「ミッションコンプリートや!」

カリムからの増援であるヴェロッサ・アコースとシャツハ・ヌエラが残りのナンバーズを捕らえたと言う連絡だった。

ちなみにヴェロッサ・アコースはカリムの義理の弟でもある。

はやて

《皆お疲れさん!スカリエツィ達を護送した後は他の隊に任せて私等は撤収や!》

なのは

「了解!」

一護

「やっと終わったか…」

事件が決着した事に、一護達は胸を撫で下ろす。

しかしホツとしたのも束の間、再び通信が入った。

今度はロングアーチから…。

しかも緊急通信だ。

シャーリー

《大変です！そのアジトから数千機に及ぶガジェットが街に向かってます！》

シャーリーが告げた事態に全員が度肝を抜かれた。

一護

「嘘だろ！システムはナツが全部破壊した筈だぞ！」

なのは

「多分、スカリエッティが自分達に何かがあつた時のために独立した別のシステムで稼働できるようにプログラムしてたのかも……」

なのはの予想は的を得ていた。

その予測通り、スカリエッティが緊急時用に設定していたプログラムだ。

一護

「ちっ！なのは、こいつ等の事頼む！！」

なのは

「うん！わかった！」

一護はスカリエッティの身柄を任せ、その場を去る。

そしてナツ、ツナと合流し、状況を説明した後、アジトの外へ出る。

そして上を見上げた3人は驚愕した。

空が無かったからだ…。

正確には空を覆い尽くす程のガジェットの群れを見たのだ。

後から合流した機動六課のメンバー達も同じ様子だった。

ナツ

「マジかよ…」

超ツナ

「なんて数だ…」

3人が驚愕からその場に立ち尽くしていると、数機のガジェットがその存在をキャッチし、一斉にレーザーを放って来た。

なのは

「危ない!!」

危険を察知したなのは、フェイト、はやての3人が前に出て防御魔法を発動させようとするが、さらにその前に一護が出た。

フェイト

「一護!!」

フェイトが一護の身を案じて名を叫ぶ。

しかし、その心配は杞憂に終わる事となる。

ザアアアアン!!!

なのは・フェイト・はやて

「「「!!!?!?!?!?」」」

放たれたレーザーは一度の斬撃によって掻き消された。

仮面をつけた一護によって…。

フェイト

「…一護…?」

虚化を初めて見るのは達は、そのチカラの禍々しさに、少し戦いた。

自分達が知っている一護とは違う感じがしたから…。

しかし、次に一護が発した言葉で、その戦きは和らいだ。

一護

「大丈夫だ…すぐに終わらせる…。そんで、みんなで帰るぞ」

そう言って一護はガジェットの群れに向かおうとする。

その時、

ナツ

「オレ等を忘れんなよ！」

超ツナ

「一緒に戦うぞ！」

ナツとツナも一護に続く。

マリィとの一戦からツナはリミッターを外したままにいる。

そのため今のツナは全開と言う訳だ。

そしてナツの体も仄な光を発している。

一護

「ナツ…お前、そのチカラ…」

ナツ

「へへッ！全力でイけるぜ！」

実はもしもの時用にエリアから炎のチカラを受け取っていたのだ。

これで3人とも全力で戦える。

はやて

「チヨイ待ち!!!」

一護・ナツ・ツナ

「「「!!!?!?!?!?」」」

しかし、一護達の特攻は、はやてによって制止された。

はやて

「私等も戦う!」

フェイト

「私達だって...」

なのは

「仲間だもん!!!」

名乗りを挙げたのはなのは達だけではない。

その場にいる仲間達全員がそうだ。

一護

「ああ！行くぜ！！」

A L L

「『オオオオオ！！！！！！』」

全員がその場から散り、それぞれの準備を行う。

なのは、フェイト、はやては砲撃の魔力チャージ。

シグナムはアギトとユニゾンし、ヴィータはグラーフアイゼンをギガントフォルムにする。

スバルはウイングロードを展開し、そこからティアナと共に砲撃の準備。

キヤロは自分が従える2体の竜の内の1体・ヴォルテールを召喚し、エリオがそのサポートに入る。

一護は霊圧を、ナツは魔力を上げ、ツナはオペレーション^{イクス}Xを開始する。

そして全員の準備が整った。

はやて

「今や……！」

はやての合図と共に、上空のガジェットの群れに向かって技が放たれる。

なのは

「全力全開！スターライトブレイカー……！」

フェイト

「雷光一閃！プラズマザンバーブレイカー……！」

はやて

「響け 終焉の笛！ラグナロク……！」

シグナム

「剣閃烈火！火竜一閃……！」

ヴィータ

「轟天爆碎！ギガントシュラーク！！！」

スバル

「一撃必倒！ディバインバスター！！！」

ティアナ

「ファントムブレイザー！！！」

エリオ

「キャロ！！！」

キャロ

「うん！！ヴォルテール！大地の咆哮！！！」

超ツナ

「イクスバーナー
X B U R N E R ハイパーイクスプロージョン
超爆発！！！」

ナツ

「火竜の…咆哮！！！」

一護

「月牙天衝！！！」

放たれた11個の技は1つの閃光となり、すべてのガジェットを一瞬で呑み込み、大爆発を起こした。

そして爆発が収まり、煙が晴れると、ガジェットの群れの姿は無かった。

はやて

「シャーリー、ガジェットは？」

はやてはロンググーチに通信を入れる。

シャーリー

《ぜ、全滅です！その他の金属反応もありません！》

その言葉に全員が歓喜した。

同時に、フォワードのメンバーは腰が抜けたのか、その場に座り込んでしまった。

その後、スカリエッツィのアジトを他の隊に任せ、一護達は病院に戻った。

留置所

ガジェット殲滅から数時間後、日が傾き始めた頃、一護、ナツ、ツナの3人は管理局の留置所に来ていた。

そこにいるのは、

スカリエッツィ

「おや…こんな所へ何の用かな？」

J S事件の主犯、ジェル・スカリエッツィだ。

一護

「ちょっと交渉にな…」

スカリエツティ

「交渉？」

一護

「ああ……」

交渉スタート。

一護

「お前…俺達に協力する気は無えか？」

スカリエツティ

「…どう言う事だい？」

ナツ

「そのまんまだ…。協力するか、しねえのか…どっちだよ」

スカリエツティ

「私が言っているのは“何故…犯罪者であり、命を冒涇するような研究を行っていた私に協力を求めるのか”と言う事だ」

ツナ

「それは…あなたが、そんなに悪い人に見えないから…」

スカリエッティ

「!?!」

ツナの言葉に、スカリエッティが一瞬眼を見開く。

ツナ

「あなたの眼を見てると…とてもそんな気がしないんだ」

スカリエッティはツナの言葉を黙って聞いていた。

そしてフツと笑い、

スカリエッティ

「それでは根拠にはならないよ……」

ツナの言葉を否定する。

一護

「それだけじゃねえよ……」

スカリエツティ

「何…?」

一護

「チンク達が…ナンバーズ全員が、お前を信頼してるように感じる。ただ生みの親とか、そんな感じじゃねえ…。それに……」

一護は少し間を空ける。

一護

「お前も…アイツ等の事をただの機械とか、そんな風に思っ
てないんじゃないのか?」

スカリエツティ

「っ!?!」

スカリエツティの眼が一層見開かれる。

そして、暫くの沈黙の後、

スカリエツティ

「…仮に…君達や、彼女達が私の協力を望んだとして…機動六課、特にフェイト・テストロツサはそれを許すのかい?」

一護達は一瞬息を呑んだ。

フェイトは、間接的とは言え、自分の母親の人生を狂わせたスカリエツィを許さないかも知れない。

それでも、

一護

「フェイトはきっとわかってくれる…。俺はフェイトを信じる」

“ただの身勝手な希望だと言う事はわかっている”

“ただの押し付けだと言う事もわかっている”

一護の心に浮かんだ思いだ。

しかし、そんな一護が発した言葉には、一片の迷いも無かった。

一護

「だから…頼む！」

一護は静かに頭を下げる。

ナツとツナも同じく……。

スカリエッティ

「……………」

スカリエッティはそれを無言のままに見ていた。

しかし、その表情には微かだが驚きが見える。

そして、

スカリエッティ

「フツ……。君達はずくづく面白い存在だ……。いいだろう……。協力はしよう。だが、条件がある」

スカリエッティの言葉に、3人は揃って嫌な予感が頭を過ぎる。

スカリエッティ

「君達を研究して」「断る!!!」「…随分早い返答だね」

一護

「当たり前だ！」

3人は断固拒否の姿勢を貫く。

スカリエツティ

「まあいい…。一緒にいれば研究のチャンスは幾らでもあるだろうからね」

スカリエツティはあくまで3人を研究する気である。

ナツ

「コイツに頼むの間違いじゃねえのか？」

ツナ

「…否定はしないよ…」

3人はこの事に少し後悔したとか…。

その後、一護達3人と保護されたナンバーズの申し出により、スカリエッティは司法取引を受け、管理局に協力する形となった。

その際、予想通りの反発があったが、一護達の説得により、それもすぐに収まった。

フェイトについては、以外にもすんなりとスカリエッティを受け入れた。

それは、

フェイト

『スカリエッティを許す事はできないよ。けど、私は一護を信じてるから…』

だ、そうだ。

こうして、後に『JS事件』と呼ばれる大事件の幕が閉じた。

そして……

物語は新たなステップへと移行する。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第33話『決着！JS事件』（後書き）

最後の方が一番グダグダだったかな？

なんか勢いで書いた感が否めない……

（ - - ; ）

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

次回『少女の告白』

第34話『少女の告白』（前書き）

今回、ちょっと新キャラが出ます。

ホントにちょっとですが……。

では、ごんごん

第34話『少女の告白』

【3人称side】

とある空間

どこかに存在する暗い部屋……。

静寂に包まれた部屋の中、円卓のテーブルの前に5人の男女がいる。

その5人が何かを話している。

???

「……集まりが悪いな」

最初に言葉を発したのは、ツナの前に現れた破滅のメンバー、エイオスだ。
カタストロフ

エイオス

「他の奴等はどこだ…？」

???

「知らねえよ……」

エイオスの問いに答えたのは、一護の前に現れた破滅のメンバー、カタストロフユークスだ。

???

「どうでもいいけどさ、そろそろ始めない？」

次に言葉を発したのは、小柄な藍色の髪の少女。

???

「そうですね…。そろそろ召集を掛けた理由を教えてくださいたいのですが……」

続いて細身で深緑色の髪の女性。

???

「……………」

その2人の後ろで、長身で金髪の男が無言のまま眼を瞑っている。

エイオス

「……いいだろう、残りは放って置く事にする」

そして5人はテーブルを囲むように座り、話を始めた。

ユークス

「で、話つてのは何だ？」

エイオス

「ああ。どうやら機動六課とスカリエツティが手を組んだようだ」

ALL

「！！！！！！」

エイオスの言葉に、場の空気が変わる。

???

「ジェイル・スカリエツティ……。確かに、彼の頭脳は我々を脅かす可能性ががありますね……。それが機動六課、況して黒崎一護達と手を組んだとなると尚更……」

ユークス

「何だ？ビビッてるのか？」

ユークスは深緑色の髪的女性を挑発するかのような態度を取る。

???

「危険性を示唆しただけです。そういった言動は控えて下さい」

女性はそれを軽く流す。

???

「ぶぶっ、怒られてる〜」(笑)

その様子を見て、藍色の髪の少女が笑う。

???

「…つるさいぞ…」

金髪の男がそれを注意する。

???

「ええ〜、いいじゃん別に」

少女もまた、それを軽く流す。

???

「フン……」

男は、それに呆れたのか再び眼を瞑る。

エイオス

「静かにしろ……」

4人の会話が本来の話題とは関係ない方向へと向かっていったため、見かねたエイオスが話題を元に戻す。

エイオス

「それと、あの女も機動六課にいるらしい」

ユークス

「なるほど……黒崎一護達を連れてきたのはアイツか……。主の仇つてやつか？」

ユークスは不気味な笑みを浮かべる。

???

「それで、我々はどうするのですか？」

深緑色の髪の女性が、今後の動きをエイオスに訊ねる。

エイオス

「何もしない……」

ALL

「「「!!!」」」

エイオス

「これは対策の話ではなく、ただの報告だ。故に、この件に対して何かをする必要は無い」

そして、エイオスは立ち上がる。

エイオス

「他の奴にもこの事を伝えておいてくれ」

エイオスはそのまま部屋を出て行った。

それに続いて、他のメンバーも部屋を後にする。

しかし、ただ1人、ユークスは部屋に残っていた。

ユークス

「フツ……悪いが、俺は勝手にやらせてもらっぜ……」

そして、ユークスも部屋から消える。

六課 ロビー

一護

「どっしたんだ？急に呼び出して……」

一護達はエレアに“話がある”とロビーに集められていた。

“達”とは一護、ナツ、ツナの3人。

なのは達機動六課の主要メンバー全員。

スカリエツティ、以下ナンバーズ12名とルーテシア、ゼスト、ア
ギト。

カタストロフ
破滅に対抗するためのメンバー全員が集められている。

エレア

「そろそろ、私の事をちゃんと話しておこうと思ひまして……」

ALL

「「「!!!」」」

エレアが自分の過去を語り始める。

エレア

「実は……私は元々カタストロフ破滅のメンバーなんです」

ALL

「「「!!!!!!?」」」

エレアの告白に、一同に衝撃が走る。

はやて

「どう言っ……事なんや……？」

六課の部隊長として、衝撃を取り払い、エレアに訊ねる。

エレア

「正確には、カタストロフ破滅に潜入していたんです」

ツナ

「潜入……？」

エレア

「はい……。私は破滅を壊滅させるため、主と共に潜入していたんです。でも、それが奴等にバレて、なんとか逃げてきたんです」

一護

「まさか、お前の主は……」

エレア

「私を逃がすために……奴等に、殺されました……」

一同は予想こそしていたが、実際に聞くと中々に重い話だ。

一護

「悪い……」

エレア

「いいんです……」

エレアは“気にしないで”と首を振る。

エレア

「私は主の意志を継ぎ、カタストロフ破滅を壊滅させようと必死にもがきました。……でも、私1人の力では、到底無理な話でした。そこで、一護さん達を呼んだんです。その力を貸してもらったために……」

はやて

「でも、なんでこの世界に集めたんや……?」

エレア

カタストロフ「破滅のボスが、ミッドチルダの出身だと言っ情報があるんです」

ALL

「「「!?!?!?!?!?」「」」

一同……特に機動六課のメンバーは驚愕した。

次元世界を崩壊させようとする集団のボスがミッドチルダの出身である事に……。

そんな人物を聞いた事が無い事に……。

エレア

「これに関しては本当かどうかわかりませんが……この世界が一番に狙われている事を考えると或いは……」

エレアの言葉に一同は黙り込んでしまう。

ナツ

「なんで自分の世界を壊そうとするんだよ……?」

ナツはふと頭に浮かんだ疑問をエレアにぶつける。

エレア

「カタストロフ破滅のメンバーは、全員が世界に対して何かしらの憎しみを持つ

ているんです」

なのは

「憎しみ…?」

エレア

「愛する者を奪われた者、思わぬ不運で人生を狂わされた者、あらゆる迫害を受けた者……。さまざまの者が世界を憎み、崩壊させようとして結成されたのが破滅カタストロフなんです。そして……」

エレアな自分の後ろに空間モニターを出現させる。

エレア

「そんな破滅カタストロフの中でも特に能力の高い10人のメンバーを“十滅将ディストワール”と呼びます。私も全部知っている訳ではありませんが、伝えられる限り伝えます」

そしてモニターに5人の男女が映し出される。

全身白尽くめの男。

全身黒尽くめの男。

小柄な藍色の髪の少女。

細身で深緑色の髪の女性。

長身で金髪の男。

一護・ツナ

「「っ!」!」

一護とツナは、モニターに映る白い男と黒い男に見覚えがあった。

一護の前に現れた黒い男、ユークス。

ツナの前に現れた白い男、エイオス。

エレア

「この2人、“魔闇のユークス”と“極光のエイオス”が実質的に^{カタストロフ}破滅の指揮を執っています。でも、どんな能力を持っているかはわかりません」

そしてモニターは残りの3人をアップにする。

まずは藍色の髪の少女。

エレア

「この少女は“水禍すいかのアクエール”。こんな外見ですが、十滅将ディストウレの一角を担うほどの力を持っています。……と言ってもどんな能力を持っているかはわかりません。恐らく、水を操る能力だと思いますが……」

次に深緑色の髪の女性。

エレア

「この女性は“木精もくせいのローゼ”。彼女についても詳しくは不明ですが、植物を操る能力だと聞いています」

最後に金髪の男。

エレア

「この男は“雷迅らいじんのボルグ”。十滅将ディストウレの中でも寡黙な存在で、前の2人と同じく情報はありません。けど……」

フェイト

「“雷系の能力を使う”だね……」

エレア

「恐らく……」

同じく雷系の魔法を使うフェイトが反応する。

はやて

「二つ名が付くぐらいやから能力は間違っていないかもしれんな……」

ツナ

「でも、それは同時に、その能力の高さを示してる……」

ツナはエイオスと対峙した時の感覚を思い出していた。

一護も同じく、ユークスと対峙した時の事を……。

あの全身が強張り、心の奥底から震えを引き起こさせるような、彼等の禍々しいチカラを……。

エレア

「他の5人については、今は全くわかっていないんです……。すみません……」

エレアは大した情報を伝える事ができず、申し訳無さそうに俯く。

そんなエレアの頭を一護がそつと撫でて語る。

一護

「そんな気落ちすんなよ……。情報があっても無くても、アイツ等を倒す事に変わりは無えんだからな……」

一護はエレアに優しく語り掛ける。

その雰囲気は、まるですべてを託しても安心できるような……

必ず闇の中から救い出してくれるような……

そんな感じがしている。

そんな一護にエレアは、

エレア

「……その顔でソレは反則ですよ……／＼／」

少し頬が紅潮した。

一護

「ん？何か言ったか…？」

エレア

「フフツ、何でもありません…」

エレアは一護から離れ、再び一同の前に立つ。

エレア

「皆さん……私に、力を貸して下さい！」

エレアは一同の協力を求め、深く頭を下げる。

しかし、全員の答えは既に決まっている。

ナツ

「いまさら何言ってるんだよ…！」

ツナ

「オレ達はそのつもりでココに来たんだから！」

勿論、OKだ。

機動六課、スカリエッティ達も同じ……。

一護

「みんなお前の味方だ。必ず、カタストロフ破滅をぶっ潰す！」

一護はエレアに拳を突き出す。

エレア

「ハイ!!！」

エレアもそれに応じ、一護と拳を合わせる。

こうして、少女の告白は終わった。

結果として、一同の絆はより深まったが、それでも相手は未知なる敵。

未知なる敵は恐怖そのモノである。

しかし、ソレを乗り越える事を全員が心に誓った。

T o b e c o n t i n u e d

第34話『少女の告白』（後書き）

作者

「パラレルワールドバラエティ!!!!」

ナツ

「今日はオレだけか？」

作者

「早速ゲストの紹介です!!」

ナツ

「ゲストはいるんだな……。無視されんのはムカつくけど……」

作者

「今日のゲストは、高町なのはさんです!!!!」

なのは

「どうも、高町なのはです!!」

ナツ

「おっ、結構乗り気なんだな」

なのは

「えへへ…。ナツ君と一緒にだからね…//」

ナツ

「？……まあ一緒だけどな……」

作者

「鈍感ですな（笑）」

ナツ

「??？」

なのは

「で、私は何をすればいいのかな？」

作者

「うーんと、取りあえずナツに告白してみてくれる？」

なのは

「ふえ！？な、なんで！？…//」

作者

「いいから、いいから」

なのは

「うう〜……。ナツ君：／／／」

ナツ

「ん？なんだ…？」

なのは

「私と付き合ってください！！…：／／／」

ナツ

「？……買物とかならいつでも付き合っぜ〜」

なのは

「……ふえ？」

ナツ

「??？」

作者

「こんな感じですがどうですか？」

なのは

「……逆に燃えてきた!……//」

作者

「終了!」

ナツ

「一体なんだったんだよ……」

なのは

「にははは……。感想、指摘、要望、質問お待ちしております」

ナツ

「ドシドシ、書き込んでくれよ!」

作者

「それではこの辺で……」

作者・ナツ・なのは

「失礼します!」

次回『暫く振りの平穩』

第35話『暫く振りの平穏』（前書き）

なんか早くに眼が覚めたので投稿します。

今回は主人公3人とその他大勢の日常の一幕を書きました。

若干フラグっぽいのがあったり無かったり……。

では、どうぞ

第35話『暫く振りの平穩』

【3人称side】

エレアの告白から数日。

一護達は暫く振りの平穩を満喫していた。

と言ってもダラダラしている訳ではなく、六課の仕事を手伝ったり、フォワードの訓練に参加したり、ナンバーズの更正プログラムを手伝ったり、その合間にちょっとした修行をしたりしている。

そして事ある毎に研究目的でスカリエツティに追い回されたりもしている。

そんな日常を全員が過ごしていた。

ヴィヴィオ

「パパ〜!!」

一護

「ん?どうした、ヴィヴィオ」

冒頭で語った日常の合間、丁度休憩となっている一護の許へフェイトとヴィヴィオがやって来た。

ヴィヴィオ

「ハイ!お疲れ様!」

ヴィヴィオは持っていたジュースを一護に差し出す。

一護

「アリガトな……」

一護はそれを受け取り、一口啜る。

フェイト

「ゴメンね、色々手伝ってもらって……」

一護

「これくらいどつって事無えよ……」

一護はヴィヴィオの頭を撫でながらフェイトと会話をしている。

ヴィヴィオはとても気持ち良さそうで、フェイトもそれを微笑ましく見ている。

その光景は誰が見たとしても“とても中の良い家族に見える”という結論に至るだろう。

それに例外は無く……

ギンガ

「いいなあ……」

シグナム

「やはり、テストロッサに勝つ事が絶対条件だな……」

ギンガはフェイトに憧れているが、この件により、その憧れは強い羨望へと変わっている。

シグナムは打倒フェイトを心の中に掲げている。

これが2人の心中だ。

その他も見よう……。

偶然通り掛かったナンバーズ4人。

チンク

「(こ、これは……マズイ……。だが、いざとなると……ゆ、勇気が
…ノノノ)」

自分も一護に近付きたいが、意識すると空回りしそうだと思えるチ
ンク。

ノーヴェ

「(……なんかムカつく……)」

単純にイライラするノーヴェ。

ディエチ

「(ホントどうすねば……)」

半ば絶望（重いか？）しているディエチ。

ウエンディ

「（羨まし過ぎるっス〜！〜！）」

テンションは高いが、それに比例するように羨望の念も強いウエンディ。

一護に対する思いは1つでも、そこから広がる感情は様々だ。

そして、もう1人……

エレア

「ん〜……。なんか、モヤモヤする……」

先日の告白から一護の事を意識しているのか、心中複雑なエレア。

トータルして、取りあえず言える事は……

一護の周りは色々大変です……。

ナツ

「いくぞ、スバル……」

スバル

「はい、ナツさん……」

両者の間に漂うピリピリした空気。

ナツ

「じゃん……」

スバル

「けん……」

ナツ・スバル

「「ポン！……！」」

ナツ
グー

スバル チヨキ

ナツ

「よっしやああああ!!!!」

スバル

「負けたああああ!!!!」

ティアナ

「……何やってんの……?」

状況を説明しよう。

訓練終了後、フォワードの4人とナツは昼食を取るために食堂に来ている。

そこであれこれ食べた後、おかずが1品余ってしまい、それを巡ってナツとスバルが争っている。

ナツに好意を抱くスバルも、訓練終了後で空腹と言う事もあって譲らない。

じゃんけんで勝敗を決めた結果、ナツが勝ったと言う訳だ。

ちなみに他の3人は目の前の2人の真剣さに半ば呆れている。

説明終了。

ナツ

「うめ〜！〜！」

スバル

「うう〜……」

美味しそうにおかずを喰らうナツと、それを羨ましそうに見つめるスバル。

若干涎も垂れている。

ティアナ

「みつともないわよ、スバル」

スバル

「ううう……」

おかずを諦めきれないのか、さらに唸りを上げるスバル。

すると見兼ねたナツが、

ナツ

「ホラよ……」

スバル

「え……？」

スバルにお裾分け。

ナツ

「オレもちょっとムキになりすぎたからな……」

正直スバルの視線が痛かったからなのだが、それを言うとスバルが悪いと言ってるような気がするので、あえて言わない。

ナツ

「一緒に食べようぜー」

ナツはニカッと笑う。

スバル

「ナツさん……ありがとう……！」

ナツ

「おわっ……！」

ティアナ

「っ……！」

再び状況説明。

ナツがスバルにおかずを分ける。

スバルが喜び、勢いでナツに抱きつく。

ティアナが衝撃を受ける。

説明終了。

ナツ

「あ、あの……スバルさん……？」

スバル

「え？あー！え、えっと……す、すみません……！……／／／」

スバルは慌ててナツから飛び退く。

ナツ

「いや……ま、まあ、ちょっと驚いただけだし……」

スバル

「うううう……」

スバルは恥ずかしいのか今日一番の唸り声を上げる。

スバル

「（ああ、やっちゃったあ……）」

心中も決して穏やかではない。

しかし、

スバル

「（けど、これって“役得”だよな……／＼／＼）」

そこは意外と遅しいスバルであった。

対して、

ティアナ

「（なんでスバルばかり……）」

ティアナの心中は“火竜の炎”ならぬ“嫉妬の炎”が渦巻いていた。

そんな3人を見てエリオ、キャラロが一言。

エリオ・キャラロ

「「平和だなあ……」」

2人にはこう言うのはまだ早いようだ……。

ディード

「ツナさん、これはどこに…?」

ツナ

「ん?ああ、それはそっちに置いていて」

セイン

「なんで私がこんな事……」

オットー

「セイン姉様、ちゃんと働いて下さい」

現在、ツナ、セイン、オットー、ディードの4人は、はやての依頼で倉庫の片付けをしている。

ツナは勿論真剣にやっている。

デイドもツナと一緒に真面目にやっております、オットーも真面目にやりながら2人を眺めている。

セインはあまり乗り気ではなさそうだが……。

オットー

「大方片付きましたね……」

ツナ

「そうだね。後はオレがやるから、みんなは休んでいいよ」

セイン

「じゃあ、お言葉に甘え、セインはダメ……な、なんで……!？」

ツナ

「オットーとデイドはちゃんとやってたけど……セインはちょこちょこサボってた……?」

セイン

「ギクッ!」

実はセインは働く振りをして、度々サボっていたのだが、そこをツナに見られていたようだ。

デイド

「じゃあ何か飲み物でももらって来ますね」

オットー

「セイン姉様、何度も言いますが……ちゃんと働いて下さいよ……」

セイン

「ううう……」

オットーとデイドは飲み物をもたらって来るために、一度倉庫を離れる。

残ったツナとセインは作業の続きを始める。

セイン

「ハアア……。なんで私だけ……」

セインは文句を垂れながらも、せっせと作業を進める。

ツナもその様子を確認しながら自分の作業を進める。

セイン

「えっと、後は……アレか……」

作業も終盤に差し掛かり、上の方にある残りの荷物をセインが梯子に上って取るうとする。

ギシッ！ギシッ！

セイン

「これ危ないな……」

しかし、その梯子は随分古い物のようで、一段上る度に激しく軋む。

そして案の定……。

セイン

「っ！！！？」

梯子のバランスが崩れ、セインは足を滑らせる。

上からは荷物が落ちて来ていたりと色々とマズイ。

そんな事を思いながらもセインは地面へと真つ逆さまとなった。

セインはグツと眼を瞑る。

……が、いつまで経っても地面に落ちた衝撃や、荷物が体に当たる
感触が無い。

寧ろなにか体が宙に浮いているような感覚がある。

セインはそつと眼を開ける。

そこには、

ツナ

「もう、何やってんだよ……」

自分を受け止めるツナがいた。

セイン

「あ、ありがと……っ！……！！……！！／／／」

セインはツナにお礼を言おうとするが、途端に言葉が引っ込み、顔が真っ赤になる。

セインはツナに受け止められたのだが、その受け止め方が世間一般で言うお姫様何ちゃらで、それに追い討ちを掛けるようにツナの顔が大分近くにあったからだ。

セイン

「ちよ、お、下ろせ！……／／／」

ツナ

「あ、コラ、暴れるなよ」

ツナはセインをそっと下ろす。

ツナ

「ハア、セインも休んでいいよ……」

セイン

「あ、うん……」

ツナは1人で残りを片付け始める。

そして、セインはと言つと……

セイン

「（な、なにドキドキしてんだよ、私……／＼／＼）」

体は休めても、心は休まらないでいた。

その後、戻ってきたオットーとディードは、姉の変化を敏感に感じ取ったとか……。

こんな感じで、みんなが平穏を噛み締めている。

こんな平穏が暫く続く……のか……？

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第35話『暫く振りの平穏』（後書き）

セインのフラグは……

まあ正直無理矢理感がハンパないです。

（ - - ; ）

でもストーリーで絡めにくいし……。

すみません。

m | | m

こんな感じでもう少し幕間が続きます。

では、失礼しました。

次回『新ナカジマ4姉妹の1日』

第36話『新ナカジマ4姉妹の1日』(前書き)

連続投稿です。

それだけです。

ど
ぞ

第36話『新ナカジマ4姉妹の1日』

【3人称side】

ある日の事……。

チンク、ノーヴェ、デイエチの3人はサングラスや帽子と言った簡易変装を施し、誰かを追跡していた。

その誰かとは……

一護

「なんか視線感じねえか…？」

ウエンデイ

「気のせいじゃないっスか？」

カジュアルな服装で街を歩く一護とウエンデイだ。

何故こんな状況になっているのかと言うと、その始まりは朝の事であった。

チンク

「……………うう……。朝か……………」

六課の隊舎でチンクは眼を覚ます。

その右隣にはノーヴェ、左隣にはディエチが眠っている。

ウエンディは……………何故かない……………。

チンク

「フツ……………今までこんなにぐっすりと眠った事は無かったな……………」

チンクは両隣で眠っている妹達を一瞥し、今までの人生を振り返る。

そして、改めて幸せと言うモノを噛み締めた。

チンク

「これも父上のお陰だな……」

チンクの言う父上とは、スバル、ギンガの父親のゲンヤ・ナカジマの事だ。

実は今はゲンヤがチンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディの4人を引き取り、4人はナカジマ家の新たな娘として保護されているのだ。

チンクはその事を感謝している。

チンク

「それと……一護のお陰……」

チンクはもう1人……自分を含め、姉妹全員を救ってくれた恩人であり、自分の想い人である一護の事を思い浮かべ、感謝する。

チンク

「ん？ウエンディがいない……？」

心の中で恩人達に感謝したその数秒後、ウエンディが部屋にいない事に気づく。

チンク

「おい起きろ……」

ノーヴェ

「う、ううん……」

ディエチ

「……なに……？」

チンクは2人の妹の体を揺さ振り、眠りから覚まさせる。

チンク

「ウエンデイがいないんだが、知らないか？」

チンクは寝惚け眼の2人に、この場にはいない妹の所在を訊ねる。

ノーヴェ

「知らない……」

ノーヴェは首を横に振る。

まだ眠気があるのか、その双眸は軽く瞑られている。

デイエチ

「そう言えば……朝早く部屋から出た行ったような……」

デイエチは覚えがあるようで、その事を伝える。

チンク

「そうか……。ちょっと探してみよう」

ノーヴェ

「じゃあ私も行く」

デイエチ

「私も……」

3人はウエンディを探すために、着替えを済ませ、部屋を出る。

それから色々な人にウエンディの事を訊ねるが、どれもあやふやなモノばかりで当てにならない。

しかし、ここでとんでもない情報が3人の耳に飛び込んでくる。

同員

「3時間ほど前に黒崎さんと出掛けて行くのを見ましたよ」

チンク・ノーヴェ・ディエチ

「「「!!!」?」」」

瞬間、3人に衝撃が走る。

チンク

「ま、まさか…!?!」

ノーヴェ

「ウエンディのやつ…!?!」

ディエチ

「抜け駆け…!?!」

3人はすぐさまはやてに頼み、外出許可を貰って一護とウエンディを追いかける。

しかし、街に出ても2人を見つけれなければ意味が無い。

そこで3人は道行く人に片っ端から声を掛け、2人の特徴を伝えて
“見かけなかったか？”と訊ねる。

そして遂に、

男

「さっき向こうの大通りを歩いてたよ」

耳寄りな情報をゲットした。

その情報を頼りに大通りへと出ると、カジュアルな服装で、しかも
並んで歩く一護とウエンディの姿を見つけた。

楽しそうな（特にウエンディが…）2人の様子を見たノーヴェは……

ノーヴェ

「……よし、殺そう」

2人の殺害を企てる。

その拳はこれでもかと言つぐらゐに握り締められている。

チンク

「いや、殺す事はないだろう……」

チンクは姉として、妹と想い人が殺害される事と、妹が殺人犯になる事を阻止する。

ノーヴェ

「じゃあどうするんだよ……」

ノーヴェは沸々と湧き上がっていた殺意を押し殺し、姉に訊ねる。

チンク

「う、うむ……」

チンクはチンクで、止めたはいいが、自分も2人の接近を阻止したいと言つゝ気持ちがある。

しかし、その方法が思い浮かばずに腕組みをしたまま立ち尽くす。

その時、不意にディエチが口を開く。

デイエチ

「追跡はどうだ…？」

ノーヴェ

「追跡？」

ノーヴェは大分落ち着いてきていたが、いまだ微かな怒りが心中に渦巻いているため、デイエチの発した言葉の意味がわからなかった。

デイエチ

「未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決……」

チンク

「ふむ、一理あるな……。ではどうする…？」

デイエチ

「暫く追跡して、2人の距離を測ってから行動を起こす」

ノーヴェ

「な、なるほど……」

デイエチの説明で、ようやくノーヴェもその意図を理解する事が出来た。

チンク

「では、行くぞ！」

ノーヴェ・デイエチ

「「おお〜！！」」

こうして3人の追跡が開始され、冒頭の場面に戻る。

3人が追跡を始めてから既に小1時間が過ぎていた。

その間、ウエンディは想い人とデートをする少女と言った雰囲気だったが、一護は女友達と街へ遊びに来ていると言った雰囲気だった。

そのため、

ノーヴェ

「……なあ、これ以上は意味無いんじゃないか？」

デイエチ

「確かに……」

チンク

「そうだな……。あの様子だと急接近とかは無いだろっ」

3人は追跡に飽きてきていた。

と言うのも、一護とウェンディのコレがデートじゃないのならば、その関係を探るために追跡するよりも、自分達も交ざりたいと思っただからだ。

やはり各人想い人と2人で遊びたいと言うのはある。

しかし、同じくらい姉妹で仲良くしたいと言うのもある。

まあそうなると結果みんなで遊ぼうぜ？って事になる。

チンク

「よし、じゃあ私達も2人と合流して　　っ!？」

追跡を終了しようとした矢先、チンクの言葉が途切れる。

ノーヴェ

「どうしたんだ、チンク姉　　っ!！」

デイエチ

「?　　っ!！」

ノーヴェとデイエチは何事かと思い、チンクの視線の先を見る。

すると、2人もチンク同様に言葉が途切れた。

何故なら……

チンク・ノーヴェ・デイエチ

「「「い、いない!?!?!」「」「」

さっきまで自分達の目の前を歩いていた筈の追跡対象、一護とウエ
ンデイの姿が無かったからだ。

一護

「どうしたんだいきなり…。喫茶店に入ろうなんて……」

ウエンディ

「え、えっと…。な、なんだか急にこの店のスーパーウルトラグレ
ートデリシャスワンダフルすごいコーヒーが飲みたくなったんすよ
ー!」

一護

「どんなコーヒーだよ……」

勿論そんなコーヒーは無い。

まあそう思うかどうかは人それぞれだろうが、ここでは無い事とす
る。

ウエンディが急に喫茶店へ入ろうと言った理由はただ一つ。

ウエンディ

「(ま、まさかチンク姉達が尾行してるとは…。勢いで入っちゃったっすけど……。どうしよう……。)」

チンク達3人の尾行に気付いたのだ。

そこでそれを撒くために喫茶店へと入ったのだが、正直咄嗟の行動で別にお腹が空いている訳や喉が渴いている訳ではないので入店した意味は無い。

さらに、今思えば“別に尾行を撒く必要もなかったのでは……”と若干後悔もしている。

ウエンディ

「(で、でもやっぱり……。せつかく一護と2人っているんすから……。チンク姉、ノーヴェ、ディエチ……。今回だけは勘弁っす！。。。／＼／＼)」

しかし、そこはウエンディも立派な女の子。

みんなで仲良く遊ぶのもいいが、せつかく想い人と2人なのだからそちらを優先したくもなる。

だがまあ、後でどんな折檻を受けるハメになる事やら……。

ウエンデイがそんな事を危惧していた時、2人のテーブルに女性店員がやってくる。

しかし、注文を取らずに、ジュースの入ったグラスをテーブルに置く。

……1つだけ。

そのグラスにはストローが2本入っている。

一護とウエンデイは状況が飲み込めず、揃って女性店員の方を見る。

すると女性店員は「サービスです」と言ってニコツと微笑み、ウエンデイの耳元で……

“ 彼氏さんと仲良くね ”

と一言。

その一言でウエンデイの顔は熟れたトマト張りに赤々となり、一護は“何があったんだ？”とさらに困惑する。

その後、2人揃って暫くテーブルの上にポツンと置かれたグラスを眺める。

そして、

一護

「んじゃ、飲むか……」

ウエンデイ

「わ、ワカッタッス……」

2人はジュースを飲み始めようとするが、ウエンデイがガチガチに緊張しており、言葉もなんだかカタコトに聞こえる。

一護

「どうしたんだよ……」

その様子がおかしいのか、一護が呆れ顔でウエンデイに訊ねる。

ウエンディ

「い、一護は……は、恥ずかしくないんすか？……／＼／」

一護

「まあ、そりゃあ……恥ずかしくないって訳じゃねえけど……」

多くの女性から寄せられる好意に気付かないでいても、一護だって立派な男子。

恥ずかしくない訳じゃない。

しかし、それを理由に人の厚意を蹴るような人間でもない。

一護

「ウエンディはどつなんだよ……？」

一護は逆にウエンディに問う。

ウエンディ

「わ、私だって恥ずかしいっすよ！……／＼／」

ウエンディは勿論恥ずかしい。

好きな異性とこんな事……

ドキドキしない方がおかしい。

一護

「じゃあ順番に飲むか？」

ウエンディ

「っ！！」

一護の提案にウエンディが一瞬ビクッとする。

一護

「じゃあ、まずお前から」

ウエンディ

「い、一緒に飲むっす……！！／／／」

ウエンディは恥ずかしさを一気に取っ払い、グラスを譲ろうとする一護を止める。

一護

「お、おう……」

ウエンディ

「ううゝ……／＼／」

その後、2人は1つのグラスに入ったジュースを一緒に飲み干した。

そして、2人が店を出た時、3体の鬼がやって来た。

チンク・ノーヴェ・ディエチ

「『ウエンディイ』」

ウエンディ

「あ……」

ウエンディはその場で3人からかなりの折檻を受けた。

勝手に抜け駆けした事や自分達を撒いた事……

さらには、さっきの喫茶店での一幕も見られたようで、それはそれ

は激しい折檻だった。

一護

「ま、まあいいじゃねえか……」

一護が止めに入るが、3人にギロツと睨まれ、少したじろぐ。

しかし、このままと言つ訳にも行かないので……

一護

「仕方無えな……。ホラ……」

一護は3人に1つずつ、小さな袋を渡す。

3人は揃って頭に疑問符を浮かべ、一護を見る。

一護

「開けてみるよ」

一護に言われ、3人は袋を開ける。

その中には、

チンク

「コレは……ブレスレット……?」

同じ種類で色違いのブレスレットが入っていた。

チンクは青

ノーヴェは赤

ディエチは緑

ちなみにウエンディも同じものを付けており、色は黄色である。

一護

「さつき寄った雑貨屋で見つけて、ウエンディが気に入ったって言
うから買ったんだ。……で、丁度4色あったからお前等にもと思っ
てな……」

一護は4人をそれぞれ見る。

一護

「これからも、姉妹仲良くして欲しいって願いを込めてんだ。失くすんじゃないねえぞ……?」

一護は4人に冗談そうな感じで言う。

しかし一護の言葉に冗談は無く、チンク達にもしつかりとそれが伝わったようである。

4人共揃ってその顔には笑みが零れ、頬が紅潮していたから……。

その紅潮は恥ずかしさ等ではなく、純粹な嬉しさから来ているものである。

その後、5人は一緒に六課へと戻って行った。

六課へ戻る頃には、“ウェンディの抜け駆け騒動”はすっかり収まっていた。

しかしその後、別の問題がひっそりと顔を覗かせる事となる。

以前フェイトが一護からもらったウサギの時計。

そして、今回チンク達もらったブレスレット。

それらを羨望の眼差しで見つめるギンガ、シグナム、エレアの存在があった。

そして、いずれこの3人にも何かを贈るハメになりそうな一護の存在があった。

T o b e c o n t i n u e d

第36話『新ナカジマ4姉妹の1日』（後書き）

一護って気前いいですね（笑）

まあ自分がそうしてるんですけど……。

今回は一護達がいなくなった後のそれぞれの世界の話をしよつと思
います。

めっちゃ短めかも知れませんが……。

では、失礼します。

次回『いない世界……？』

第37話『いない世界…?』（前書き）

今回から3話に分けて一護達がいなくなった後の世界の話を行います。

まずはBLEACHの世界。

ど
ろ
ど

第37話『いない世界…?』

【3人称side】

空座町

???

「うう……お兄ちゃん……どこ行っちゃったの…?」

???

「泣くなよ……。一兄なら、きっと大丈夫だよ……」

空座町で病院を営む一軒家、黒崎家で2人の少女が悲しげな表情をしていた。

少女達の名前は遊子と夏梨。

一護の妹達だ。

一護がミッドチルダへ誘われてからこの世界では1週間が過ぎている。

つまり、一護は1週間もの間、行方不明と言う事になっている。

兄の事が大好きな2人にとってはただ事ではないだろう。

しかし、自分達が何かをした所で兄が帰ってくる事が無いとわかっているため、こうやって家で待っているしかないのだ。

遊子

「…………お父さんは…？」

夏梨

「浦原さんとこ行って…。何か情報が無いかって……………」

遊子

「そう……………」

その後、2人は共に黙ってしまい、そのまま沈黙が続いた。

所変わって場所は古びた駄菓子屋。

そこに数名の人が集まっている。

???

「浦原、何かわかったか…?」

最初に言葉を発した男は黒崎一心。

苗字からわかるように、一護の父親だ。

浦原

「いえ…。黒崎サンの魄動ははまだ確認されていません」

一心の問いに答えたのは、浦原喜助。

一番最初に一護の修行を行った人物でもある。

???

「それじゃあ、尸魂界ソウル・ソサエティの方も何もわかってないんですね……」

次に浦原に質問したのは石田雨竜。

一護の仲間であり、ライバル的存在でもある。

浦原

「ハイ……」

????

「そんな……」

????

「ム……」

浦原の答えに肩を落とした2人の男女。

女の方は井上織姫。

男の方は茶渡泰虎。

通称“チャド”

2人も一護の仲間だ。

石田

「まさか、もう死んでるって事は……」

浦原

「その可能性は極めて低いっスね」

石田は最悪の結末の予想を口にする。

しかし、浦原はそれを否定する。

その根拠は、

浦原

「もし黒崎サンが既に死亡しているなら、その魂魄はソウル・ソサエティ尸魂界に送られている筈です。仮に現世を彷徨っていたとしても、ソウル・ソサエティ尸魂界側がそれを捕捉できない筈がありません。つまり、少なくとも黒崎サンは生きてはいる……。ただ、この世界に存在していないと言う事です」

チャド

「“この世界に”と言う事は、ウエコムンド虚圏や地獄のような、現世とは別の

「「「……………」」」

こちらもまた全員黙ってしまい、そのまま沈黙が続いた。

ソウル・ソサエティ
尸魂界

死神達の世界、ソウル・ソサエティ尸魂界。

その中で死神達が住んでいる瀟霊廷の一角で数名の死神が集まっている。

???

「どうだ恋次…。兄様は一護について何か言っただか…?」

最初に言葉を発したのは朽木ルキア。

一護が最初に出会った死神で、一護に最も近い死神だ。

???

「いや…。隊長も何も知らねえらしい……」

ルキアの問いに答えたのは阿散井恋次。

ルキアの幼馴染で、護廷十三隊六番隊副隊長だ。

???

「うちの隊長も“一護はどこへ消えやがった!!”って暴れてるぜ……」

次に言葉を発したのは斑目一角。

護廷十三隊最強の戦闘部隊、十一番隊の第三席。

その傍には同じ隊の第五席、綾瀬川弓親が立っている。

???

「隊長達だけじゃねえ…。総隊長や、現世にいる黒崎の仲間達も情報が無いらしい……」

物静かに語る少年は日番谷冬獅郎。

護廷十三隊十番隊隊長で、史上最年少で隊長になった死神でもある。

その傍には同じ隊の副隊長、松本乱菊がいる。

恋次

「ったく…。どこ行きやがったんだ、一護のやつ……」

弓親

「そうかっかしても黒崎一護は見つからないよ」

乱菊

「そうよ恋次…。落ち着きなさい」

冬獅郎

「今は情報を集める事に専念した方が良いとの事だ…。頼んだぞ」

そう言って冬獅郎、乱菊、一角、弓親は去っていく。

残った恋次は、同じく残っているルキアを心配そうに見る。

ルキア

「一護……。お前は、どこにいるのだ……」

大切な仲間がいなくなった。

とても大切な仲間が……。

仮に見つかったとしても、霊圧を失っている彼には自分達が見えない。

心を通わせる事ができない。

しかし、たとえそうであっても、見つけなければならぬ。

本当に大切な、かけがえのない……

仲間なのだから……。

ソウル・リサーチ
現世と尸魂界。

2つの世界の仲間達は、ただただ一護の無事を祈るばかりだった。

T o b e c o n t i n u e d

第37話『いない世界…?』（後書き）

グダグダ感MAXです（-”- ;）

次回はFAIRY TAILの世界です。

出来るだけ早く投稿します。

次回『いない世界…?』

第38話『いない世界…?』（前書き）

出来るだけ早くとか言ってほんの数時間後に投稿する私はバカか？

しかもグダグダ（ - ” - ; ）

取りあえず、どうぞ

第38話 『いない世界…?』

【3人称side】

マグノリア

マグノリアの街中にズッシリと構える魔導士ギルド『フェアリーテイル妖精の尻尾』。

その中はとても重苦しい雰囲気支配していた。

ハッピー

「ナツう……どこ行ったんだよ……」

ギルドのテーブルの上で、ハッピーが項垂れている。

ルーシィ

「ナツがいなくなっからもう1週間……。一体どうなってるの……?」

その隣ではルーシィ……

そしてもう1人、ナツの幼馴染であるリサーナが同じ感じで沈んで

いる。

この世界でも、ナツが行方不明となつてから1週間が経っている。

当然ながら、みんな心配しているのだ。

リサーナ

「ねえグレイ、何かわかった？」

そのテーブルの傍を偶然通り掛かった男はグレイ・フルバスター。

フェアリーテイル
妖精の尻尾の一員で、氷の造形魔導士。

それが理由かはわからないが、ナツとは不仲。

それでも互いを信頼し、大切な仲間だと思っている。

だからグレイもナツの情報を集めるために必死に動いている。

しかし、

グレイ

「残念だが、なんもわかってねえ……。エルザもウエンディもガジルも……。みんな仕事先で色々訊いてるみてーだが、一切情報が無えんだ……」

リサーナ

「そっか……」

グレイも、その他の仲間達も、ナツについての情報を手に入れる事が出来ていないらしい。

グレイ

「アイツに何があったかは知らねえが、アイツに限って死んだりする筈がねえ……。だが、1週間何の音沙汰も無えなんてのは、どう考えてもオカシイ……」

ルーシイ

「うん……」

リサーナ

「そうだね……」

ハッピー

「……………」

その場は再び重苦しい空気に包まれた。

所変わってとある街。

街の市場でバーゲンか何かをやっているようで、人々はとても賑わっている。

そんな賑わいを見せる街の一角の広場。

そこに2人の人物がいる。

???

「ここでも何も得られなかったな……………」

この女性はエルザ・スカーレット。

フェアリーテイル
妖精の尻尾の一員で、剣と鎧を操る魔法を使う。

???

「ナツさん……。どこに行っちゃったんでしょう……」

この少女はウエンディ・マーベル。

同じく妖精の尻尾の一員で、天空の滅竜魔導士だ。
ドラゴンスレイヤー

???

「まさか、もう死んでるなんて事は無いわよね……」

2人以外にいるのはハッピーと同じエクシードのシャルル。

ウエンディの友達である。

ウエンディ

「シャルル!!」

シャルル

「だってアイツがいなくなってもう1週間よ!?!」

ウエンディはシャルルの言葉を否定しようとするが、流石に1週間も行方不明となればそんな考えも生まれよう。

シャルルに言われ、ウエンディは悲しげに俯いてしまう。

エルザ

「アイツはそう簡単に死ぬような男ではない」

エルザの言葉にウエンディは顔を上げる。

しかし、その表情はいまだ不安の色を示している。

エルザ

「諦めるのはまだ早い…。次の街へ行くぞ、ウエンディ、シャルル」

ウエンディ

「ハイ！」

2人と1匹は引き続き情報を集めるため、次の街へと出発した。

さらに所変わって別の街。

さっきの街とは打って変わって暗い雰囲気、ゴロツキがごろついているような感じである。

ここにも妖精の尻尾のメンバーがいる。

???

「ちっ、この街もハズレか……」

この男はガジル・レッドフォックス。

ドラゴンスレイヤー
鉄の滅竜魔導士で、元々は妖精の尻尾と敵対していた魔導士ギルド
ファンタムロード
『幽鬼の支配者』に所属していた。

フェアリーテイル
妖精の尻尾と幽鬼の支配者の対決後、1人彷徨っていたところを妖
エアリーテイル
精の尻尾のギルドマスター・マカロフに救われ、今では立派な妖精
リーテイル
の尻尾の仲間となっている。

ガジル

「ったく…。何でこう、全く情報が無えんだよ！」

ガジルも色々な街でナツの情報を集めていたが、一向に有力な情報が入ってこない。

“有力な”と言うよりも、全くと言っていいほど情報が無い。

ガジル

「サラマンダー火竜の野郎……何やってやがるんだ！」

ガジルはこう言っているが、他の仲間同様ナツの事を心配している。

これでも歴とした妖精フェアリーテイルの尻尾の仲間だからだ。

???

「そうカリカリするな…。体に毒だぞ………」

傍でガジルを宥めるのはこれまたハッピーと同じエクシードのりり
！。

ガジルの相棒^{ネコ}だ。

ガジル

「うるせえ、んな事あわかってんだよ……」

ガジルは少し溜息を吐く。

ガジル

「とにかく、次の街に行くぞ」

リリー

「ああ……」

1人と1匹もまた、情報を求めて次の街へと出発した。

さらにさらに所変わってとある森。

そこに2人の老人がいた。

???

「どつじゃ、ポーリュシカ……何かわからんか……？」

この老人はマカロフ・ドレアー。

フェアリーテイル
妖精の尻尾のギルドマスターである。

ポーリュシカ

「さあね、さっぱりだよ……」

ポーリュシカの許へナツの事を訊きに来たようだが、どつやら情報は無いらしい。

しかし、収穫もあった。

ポーリュシカ

「ただ、1つ仮説がある……」

マカロフ

「仮説……？」

ポーリュシカ

パラレルワールド

「平行世界を聞いた事があるかい？」

マカロフ

パラレルワールド

「平行世界じゃと!？」

マカロフはポーリュシカの言葉からその仮説を推測し、驚愕する。

ポーリュシカ

「そう考えれば、探知魔法にも引つ掛からない謎も解けるだろう?。」

マカロフ

「うむ、確かにそうじゃが……。」

そのままマカロフは考え込む。

マカロフ

「(仮にそうじゃとすると……わし等にはどうする事も出来ん……)」

「

幾らマカロフと云えど、パラレルワールド 平行世界へ行く魔法など使えない。

……
そう言った魔法が存在しない訳では無いが、それも神話のような話

もはや伝説となっている魔法だ。

使える者などいる筈もない。

マカロフ

「(ナツよ……。無事でおつてくれ……)」

マカロフも、他の仲間も……

ただただナツの無事を祈るばかりだった。

T o b e c o n t i n u e d

第38話『いない世界…?』（後書き）

次はREBORNの世界ですが、多分今日中には投稿出来ると思います。

……多分だけど。

次回『いない世界…?』

第39話『いない世界…?』（前書き）

本日3回目の投稿です。

なので言う事はありません。

では、さようなら

第39話『いない世界…?』

【3人称side】

並盛町

並盛町にあるツナが通う並盛高校。

その屋上にツナの仲間達が集まっている。

???

「リボーンさん！10代目はまだ見つからないんですか!!」

やや興奮気味に叫ぶのこの男は獄寺隼人。

ボンゴレ10代目“嵐”の守護者で、ツナの右腕である。

リボーン

「落ち着け、獄寺。いまボンゴレが総力を挙げてツナを探してる」

この赤ん坊はリボーン。

ツナの家庭教師^{かてきょう}で、呪われた赤ん坊、アルコバレーノの1人だ。

???

「そうだが、獄寺…。取りあえず落ち着けて」

獄寺を宥めるのは山本 武。

ボンゴレ10代目“雨”の守護者で、ツナの親友だ。

獄寺

「てめえ！10代目が心配じゃねえのか!!」

山本

「オレだってツナの事は心配だけど…。オレ達が騒いだってツナは帰ってこねえだろ…?」

山本の正論に獄寺は押し黙る。

???

「山本の言う通りだ！落ち着け、タコヘッド！」

この男は笹川了平。

ボンゴレ10代目“晴”の守護者で、所謂ボクシング馬鹿だ。

ちなみにタコヘッドとは了平が付けた獄寺のあだ名である。

獄寺

「てめえに言われたくねえんだよ、芝生頭!!」

獄寺も了平に芝生頭と言うあだ名を付けている。

???

「喧嘩するなよ」

その喧嘩を止めようとしている子供はランボ。

ボンゴレ10代目“雷”の守護者で、最年少の守護者でもある。

???

「危ないから……コッチ……」

ランボが喧嘩に巻き込まれないように呼び寄せた少女はクローム・
罽褌。

ボンゴレ10代目“霧”の守護者で、本当の守護者、六道骸の
器であった。

しかし、今では骸は自分の体で活動しているため、クロームはいつ
でも自分で行動できるようになっている。

???

「ふわあ〜……」

それらの後ろで欠伸をする男は雲雀恭弥。

ボンゴレ10代目“雲”の守護者で、ボンゴレ最強の守護者でもあ
る。

獄寺

「雲雀てめえ！こんな時になに欠伸なんかしてんだ！」

雲雀

「僕が何をしようと君に関係は無いだろうっ…?」

獄寺は雲雀の態度に激怒するが、雲雀はそれを軽く流す。

それにより、獄寺の怒りのボルテージはさらに上昇するが、次に雲雀が発した言葉で収まった。

雲雀

「それに、彼は必ず戻ってくるよ……」

ALL

「！！！！！！！！！！」

雲雀の言葉はその場にいた全員に衝撃を与えた。

と言うのも、元々雲雀は群れる事を嫌っているため、全員が“雲雀がこんな事を言うよう訳がない”と思っていたからだ。

雲雀

「彼はいつだって、君達を護るために……君達との平和な生活を護るために戦っていたんだろう？ だったら、どんな事があっても彼は戻ってくる筈さ……」

雲雀の言葉は意外にも的を得ていた。

ツナが護ってきたのはいつだって仲間達。

そして、そんな仲間達との平和な日常。

ならば必ず戻って来る。

雲雀の言葉に一同が納得した。

雲雀

「と云う訳で、僕は帰らせてもらうよ……。やらなければならぬ仕事が残っているんでね……」

そう言っつて雲雀は屋上から去って行った。

残された者達はそれを呆然と見ている。

リボン

「雲雀の言う通りだ。お前達もあんまり心配する必要は無えぞ。なんせツナはオレの生徒だからな」

リボーンの言葉にみんなはある程度安心したのか、元の日常に戻る事にした。

ツナを探すばかりではなく、ツナの帰りを待つ日常に。

全員が帰った後も、リボーンは暫く並高の屋上の手摺の上に立っていた。

リボーン

「（ツナ……。お前の仲間達は、みんなお前の帰りを待ってるぞ……）」

リボーンはツナの仲間達の顔を思い浮かべる。

幾多の戦いをツナと共に潜り抜けた守護者達。

悲しき因果を断ち切り、一番の親友となったエンマ達シモンファミリー。

その他のボンゴレの仲間達や一般人の仲間達。

リボン

「（こんだけ仲間に愛されてんだ…。死ぬ気で帰って来いよ、ツナ……）」

リボンはその後も暫く、屋上から夕日に照らされた並盛の町並みを眺めていた。

みんなが帰りを待つ“優しき大空”が命を懸けて護った町の風景を……。

T o b e c o n t i n u e d

第39話『いない世界…?』(後書き)

次回『胸騒ぎ』

第40話『胸騒ぎ』(前書き)

今回で幕間は終了です。

でもめっちゃ短いです。

今までの半分以下ですが……

取りあえず、どうぞ

第40話『胸騒ぎ』

【3人称side】

第？管理世界???

時空管理局が管理を行っている世界の1つ。

常夜の闇に包まれたこの世界を、カタストロフ破滅のメンバー、ユークスが訪れていた。

ユークス

「ここか……」

そう言っつてユークスは神殿のような建造物の前に立つ。

そしてユークスは神殿の中へと進み、さらにその地下へと降りていく。

神殿の地下深くには不気味な空間が広がっており、そこには7本の石柱が聳え立っている。

その柱は古代エジプトの建造物『オベリスク』に酷似しており、その注面には古代文字と思しきモノが無数に刻み込まれている。

ユークス

「フツ……」

ユークスが微かな笑みを浮かべ、石柱の1つに触れる。

それと同時に魔力を解放すると、それに呼応するように石柱が不気味な光を放ち始める。

そしてユークスは呪文を詠唱する。

ユークス

「深き闇に葬られし邪なる魔導よ 袂い難き憎悪を解き放ち 生なる愚者に死の鉄槌を下せ！！！」

瞬間、石柱が凄まじい光を放ち、闇によって支配されていた空間を白く染める。

光が収まり、再び空間を闇が支配すると、ユークスが触れていた石柱が忽然と姿を消した。

ユークス

「まずは1つ……」

ユークスは再び不気味な笑みを浮かべ、暫くその空間に佇んでいた。

六課

その日も六課には変わらぬ日常の光景があった。

一護、フェイト、ヴィヴィオの家族のような一幕。

その光景に和みながらも、羨望の眼差しを向けるシグナム、ギンガ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディ。

ナツ、なのは、ヴィータ、スバル、ティアナの食事の光景。

ツナ、はやて、リイン、セイン、オットー、デイードの談話の光景。

エリオ、キャロ、ルーテシア達の遊戯の光景。

スカリエッティ、シャーリー達科学者の研究の光景。

すべてが日常の光景だった。

そんな日常の中、1人の心が騒ついていた。

エレア

「（なんだろう……）」

エレアの心だ。

その騒めきは数日前からエレアの心中に渦巻いており、それが日に日に大きさを増している。

エレア

「（この胸騒ぎは……一体……）」

エレアは心の中で呟く。

しかし、エレア自身、既にその答えに辿り着いている。

エレア

「(まさか……)」

エレアが辿り着いた答えは、今の平穏な日常の光景を一瞬にして崩壊させるモノ。

出来ればあって欲しくはない。

しかし、逃げる訳にはいかない。

仲間達と共に立ち向かうと決めたから。

そして、遂に……

新たな戦いの日々が幕を開ける。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第40話『胸騒ぎ』（後書き）

次回より本格的にオリストになります。

取りあえず、次回更新は8/1（月）予定です。

あくまで予定ですが……。

オリストですが、私のストーリー構成力が低いので、かなりグダグダになりそうな感じです。

それでもなんとか頑張りますので、どうかこの小説をよろしくお願
いします。

m ((m

次回、新章『七戦鬼篇』スタート！

第41話『訪れし邪悪』（前書き）

やっつっつっつっつっつと

オリストです!!

かなりグダグダで、正直オリキャラもオリキャラではありませんが、
暖かい眼で見てやって下さいm) (m

では、ごきげん

第41話『訪れし邪悪』

【3人称side】

ナツ

「なんか降ってきそうだな

」

スバル

「そうですね。早く帰りましょう」

その日、ミッドチルダの空は黒い雲に覆われていた。

今でも雨が降ってきそうな程の曇天だった。

久しぶりの休暇でクラナガンへと来ていたナツとスバルも、天候を見て六課へ戻る事にした。

スバルとしてはナツと2人で来ていただけに少々残念だったりする。

スバル

「（せっかくジャンケンで勝ったのに

）」

スバルの言うジャンケンとは、ナツと一緒に出かけの人を決めるためのジャンケンだ。

その場면을再現すると、

なのは・ヴィータ・スバル・ティアナ

『『『ジャンケン　ポン！！！！！！』』』』

なのは　グー

ヴィータ　グー

スバル　パー

ティアナ　グー

スバル

『か　勝ったああああ！！！！』

なのは・ヴィータ・ティアナ

『『『負けたああああ！！！！？』』』

と、スバルの1人勝ちとなり、スバルのみがナツと一緒に街へ行く事になったと言う訳だ。

さて再現はここら辺で終わらせて、元の場面に戻ろう。

ナツとスバルは少し早歩きでバイクを止めてある駐車場へと向かう。

ナツは勿論、スバルも、ナツの乗り物酔いを危惧している事は言うまでも無いが、雨に打たれては堪らないので、乗り越えるべき壁に立ち向かう。

その時、2人の足が止まる。

ナツ

「どうした、スバル？」

スバル

「すみません。ちょっと通信が」

ナツはスバルが足を止めた事に気づき、同じく足を止める。

どうやらスバルのデバイスに通信が入ったようだ。

スバルはその通信を受ける。

スバル

「はい、スバル・ナカジム《スバル！》……っ！？　　なのはさん？」

自分の応答を遮って、デバイスから響く叫び声にスバルは驚き、耳鳴りが起こったのが暫く耳を塞ぐ。

そして耳鳴りが止んだ後、通信相手であろう人の名を呼ぶ。

なのは

《スバル！？ナツ君は！？》

スバル

「？　　一緒ですけど？」

なのはの口調から伝わる何やら慌てた様子に、スバルは疑問を感じながらも応答する。

なのは

《2人共!!今すぐそのエリアから逃げて!!》

スバル

「えっ？」

なのは

《いいから今すぐ逃げ

》

ドオオオオオオン!!!!!!

なのはの通信の声を遮るように、何かがナツとスバルの近くに落下し、轟音と砂煙を立てる。

シャーリー

「なのはさん、レイジングハートのメンテナンス、無事終了しました！」

なのは

「ありがとう、シャーリー」

なのははシャーリーからデバイスを受け取る。

シャーリー

「でも残念ですね。せっかく休暇が貰えたのに」

なのは

「そうだね。でも仕方ないよ。負けちゃったんだし」

なのはは“にやははは”と笑う。

しかし、残念だと言う感情がしっかりと表れている。

シャーリー

「いやあ、スバルもやりますねえ、1人勝ちなんて。これは、恋のキューピッドが味方してるのかな？そうだったらどうします？」

シャーリーは女の子らしい(?) 諭えを持ち出し、なのはに訊ねる。

なのは

「うん、取りあえず スバル諸共 O H A N A S H I I かな
?」

シャーリー

「あ、あははは」

なのはは再び“にやはは”と笑う。

しかし、今度の笑顔が表しているのは残念感ではなく

何か ドス黒い何か。

その黒い笑顔に、シャーリーは顔を引き攣らせる。

その時、

ルキノ

「大変です!!!市街地で巨大な魔力反応があります!!!!」

なのは・シャーリー

「!!!!!!!?」

市街地で魔力反応がキャッチされ、ロングアーチが揺れる。

シャーリー

「場所と推定ランクは!？」

ルキノ

「場所は首都クラナガン、推定ランクは オーバーSランク!？」

なのは

「!?!」

ルキノの言葉になのはが反応した。

ランクの高さに対してもそうだが、問題は場所の方。

そこは、自分の想い人と教え子がいる場所。

なのは

「っ!?!?!」

なのはは慌ててスバルのデバイスに通信を入れる。

スバル

《はい、スバル・ナカジム「スバル！」》…っ!? なのはさん?》

なのは

「スバル!? ナツ君は!？」

なのははスバルにナツの所在を訊ねる。

スバル

《? 一緒ですけど?》

なのは

「2人共!!!今すぐそのエリアから逃げて!!!」

スバル

《えっ?》

スバルの答えを聞いたなのはは少し安心して、端的な指示を出す。

しかし、スバルはなのはの指示を一瞬で理解する事ができなかったのか、素頓狂な声を漏らす。

なのは

「いいから今すぐ逃げ

」

ドオオオオオオン！！！！！！

なのはが再び指示を出そうとした時、けたたましい轟音が通信を遮る。

なのは

「スバル！？スバル！！」

その弾みで通信が切れたのか、スバルの声が聞こえなくなってしまった。

なのは

「っ……！！」

なのはは途端に走り出す。

シャーリー

「なのはさん!?!」

なのは

「2人を助けに行きます!?!」

なのはは現場にいる2人の救援へと向かう。

ナツ

「スバル、大丈夫か?」

スバル

「はい、なんとか」

ナツは砂煙の中、スバルの安否を確かめる。

スバルがそれに応答した事により、その確認はできた。

しかし、2人共現在の状況が理解できていない。

ナツ

「なんだ？」

ナツは状況を把握するため、辺りを見渡す。

すると、砂煙が晴れていく。

砂煙が晴れ、視界が開けると、その中心に人影があった。

ガタイがよく、くすんだ白い長髪の男がそこに立っていた。

???

「久しいな、この世界の空気は。いや、オレ達がいた頃とは少し違うか」

そう呟く男にナツが食ってかかる。

ナツ

「おいテメエ!!!何モンだ!!!」

ナツの怒声に男が振り返る。

「??？」

「」

しかし、男は一言も言葉を発しない。

ただ、

スバル

「（なに？この気持ち悪い感じ　！？）」

2人に向かって妙な圧を飛ばしている。

ナツ

「何モンだっけって言ってんだよ！！！！」

「??？」

「！！！！」

ナツは男に炎の拳を叩き込む。

男は少し後退りするが、すぐに体勢を立て直す。

???

「炎。そうか、お前達はこの時代の魔導師か」

ナツ・スバル

「「っ!!!!!!」」

瞬間、男から発せられる圧が 魔力の質が変わる。

???

「オレは運が良い。早速戦う時が訪れようとは」

そう言っつて男はナツとスバルを見据え、身を構える。

???

「来い、現代の魔導師達よ！」

ナツ

「現代だ何だっつて、ごちゃごちゃ言っつてんじゃねえ!!!」

スバル

「ナツさん!!」

ナツは再び男に飛び掛る。

ナツ

「喰らえ!火竜の鉄拳!!」

???

「フンツ!!」

ナツに対抗し、男も拳を突き出す。

2人の拳がぶつかり、衝撃波のようなものが辺りの瓦礫を吹き飛ばす。

ナツ

「っ!!火竜の鉤爪!!」

???

「ぐほっ!!」

ナツは追撃を掛け、男の脇腹に炎の蹴りを入れる。

男は衝撃で後退する。

????

「フツ、中々やるな」

ナツ

「!?!」

男はナツを見てニヤリと笑う。

まるで出来の良い玩具を見つけたかのように。

????

「今度はコツチから行くぞ!?!」

男は一瞬でナツの前まで移動する。

ナツ・スバル

「!?!?!?!」

その速度が異常なまでに速く、2人共反応できずに固まってしまっ

????

「ハアツ!!!」

ナツ

「があっ!!!」

男はナツの腹に拳を叩き込む。

スバル

「くっ!! こんのおお!!!」

スバルは男の後頭部を狙い、拳を放つ。

しかし、

スバル

「!?!? あっ!!!」

放った拳は空振り、一瞬で背後に回った男の一撃を受ける。

ナツ

「うおおおおお！！！」

ナツは炎刃を作り、男の背後から飛び掛る。

????

「がああっ！！」

ナツ

「っ！！!?」

男は素手で炎刃の鋒きつさきを掴む。

男の行動にナツは一瞬怯む。

????

「フンッ！！」

ナツ

「ぐあっ！！」

ナツが怯んでいたところへ、男が頭突きで攻撃を加える。

ナツは頭突きのダメージで少し蹠^{ひざ}跟^{もと}ける。

ナツ

「くっ!!」

ナツは体勢を立て直し、反撃に出ようとした時、

????

「ナツ君!スバル!退いて!!」

ナツ・スバル

「!!」

制止の声が掛かり、2人はそれにしたがって後方へ下がる。

そして声の主・なのはが男に砲撃を撃つ。

なのは

瞬間、男の姿がなのはの視界から消える。

なのはは辺りを見渡すが、男の姿はどこにも無い。

その時、

???

「コツチだ!」

なのは

「!!!」

なのはの耳に男の声が響く。

その方向は、

スバル

「なのはさん!!上です!!」

スバルの声に慌てて上を見るなのは。

しかし、男は既に砲撃の準備を完了させていた。

???

「ギルティ・ブラスト!!!」

男が掌に展開した魔法陣から金色の砲撃が放たれる。

なのは

「きゃあああああ!!!!!!」

ドオオオオオン!!!

なのはは砲撃を諸に喰らい、そのまま地面に叩きつけられる。

なのは

「うっ　ぐっ　」

バリアジャケットは傷だらけで、そこからは素肌が覗く。

しかし、それは肌色ではなく赤色。

真っ赤に染まるほど鮮血が流れ出ている。

その光景が砲撃の威力の高さ、なのはのダメージの重さを物語っている。

スバル

「なのはさん！！！！」

スバルの悲痛な呼びかけが響く。

しかし、なのははその呼びかけに答えられる程の余力が無い。

????

「もう終わりか？」

男が地上に降りて、なのはに近づく。

その時、

????

「なのはに近付くな！！！！」

???

「!?!」

なのはを追ってきたヴィータが、男に制止を掛ける。

ヴィータ

「アイゼン！ギガントフォーム!!」

相棒のデバイス・グラーフアイゼンを巨大化させ、男に振り下ろす。

ヴィータ

「轟天爆砕、ギガントシユラアアアク!!」

???

「ぐづっ!!!!」

ゴオオオオツ!!!!

ヴィータの一撃により、地面が割れる程の衝撃が男を襲う。

しかし、

????

「ぬあああぁっ……!!」

ヴィータ

「っ!!……?うわああぁ……!!」

男はその一撃を受け止め、さらに受け止めたグラーフアイゼンごとヴィータを投げ飛ばす。

????

「ハアアアッ……!!」

ヴィータ

「うわああああぁ……!!」

ドオオオオオン……!!

男は投げ飛ばしたヴィータに一瞬で近付き、その体に拳を叩き込み、地面に叩きつける。

ヴィータ
「ぐふっ
」

ヴィータもなのは同様大きなダメージを負い、地面に倒れ込む。

スバル

「そ、そんな　なのはさんと、ヴィータ副隊長が
」

スバルの顔が恐怖に歪む。

自分より強い仲間達が、こつも一瞬でやられるなんて　。

スバルの頭を“死”と言う単語が埋め尽くす。

しかし、もう1人は違った。

ナツ

「テメエ、よくもオレの仲間を　赦さねえ!!!」

????

「!!!」

“ 赦さない ”

男に対する恐怖よりも、仲間を傷つけられた事への怒りが大きく、
ナツの炎がメラメラと燃え滾る。

ナツ

「 火竜の 」

ナツの腕に巨大な炎の刃が形成される。

ナツ

「 剣戟！！！！！！ 」

???

「 つ！！ 」

ドオオオオオオオン！！！！！！

男に向かって振り下ろされた刃は、地面を粉々に砕く。

???

「チツ！！！」

しかし、男はそれを躲して空へと逃げる。

だが、ナツはそれも許さなかった。

ナツ

「火竜の煌炎！！！！」

ナツは間髪容れず、男に向かって火球を放つ。

????

「ぐおおおお！！！！」

男は火球に呑み込まれる。

ナツ

「へっ、どうだコノヤロー！！！！」

ナツは勝気な態度を見せる。

その姿にスバルは苦笑いすると同時に、自分の頭を埋め尽くしていた“死”と言う単語が消えて行くのがわかった。

しかし、恐怖は続く。

???

「ハア、ハア、ハア、ハア」

「

ナツ・スバル

「「!!!」?」

男はいまだ倒れていなかった。

確かにかなりのダメージを与えてはいる。

しかし、それでもまだ倒れていない。

その事実には2人の顔が再び歪む。

なのはとヴィータも辛うじて身を起こし、その光景を見ている。

???

「ハア、ハア　　フッ、今は危なかったぞ　　」

ナツ・なのは・ヴィータ・スバル

「「「（ゾクッ！！！）」「」」

男はニヤツと笑う。

攻撃を耐え切った事を誇示する笑みのようにも見えるが、男のソレは違う。

楽しんでいるのだ。

ただただ戦いを。

殺るか殺られるかのギリギリの命のやり取り。

バトルマニア
戦闘狂の極みとも取れるその雰囲気、4人は身震いをする。

???

「さあ　　もっと楽しませてくれ！！」

男が4人に歩み寄る。

さらに魔力を解放しながら。

しかし、

???

「っ!!」

突然、男が歩みを止める。

その光景に4人の頭に疑問符が生まれる。

???

「チツ、ここまでか」

男の後ろに空間の裂け目が現れる。

そして男はその空間の裂け目の中へと入って行く。

去り際に男が振り向き、

「??？」

「また楽しませてくれよ 現代の魔導師達よ」

その言葉の直後、空間の裂け目が閉じる。

4人はそれを見ている事しか出来なかった。

ナツ

「くそっ!!」

ナツはダンツと地面に拳を打ちつけ、仲間を傷つけた敵を逃がした憤りを噛み締める。

その後、他の仲間達が駆けつけ、ナツ達を救護し、六課へと戻って行った。

第？管理世界？？？

？？？

「ふう

」

ナツ達を襲った男は、ある世界に存在する神殿の地下空間へと来ていた。

そして、男の許へ別の男がやって来る。

？？？

「もう戻って来たのか？」

ユークスだ。

？？？

「ああ、やはり戦うならば全力の方が良いからな

」

ユークス

「フツ、お前らしい事だ

」

そう言ってユークスは男を通り過ぎ、6本の柱の内の1本に近付く。

ユークス

「他の奴はまだ時間が掛かる。その間は」

「??？」

「わかっている。任せておけ」

男はユークスの意図を理解し、軽く頷く。

そして、男は地上へと上がって行った。

ユークス

「ハッ、頼もしいな 封印されし7人の大魔導、『七戦鬼』が1人」

ユークスは1本の柱に触れながら呟く。

ユークス

「“獣王フェンリル”よ」

To be continued

第41話『訪れし邪悪』（後書き）

知ってる人は知っている。

獣王フェンリル

まんまアイツですが、黄金の鎧とかは着けていません。

あくまで人間体です。

性格的にはFAIRY TAILのアズマに近いかな？

まあ詳しくは後々。

ホント当にグダグダですが、何卒よろしく願いします。

感想・指摘・要望・質問お待ちしております。

次回『明かされる歴史』

第42話『明かされる歴史』(前書き)

なんと云えば良いのやら。

取りあえず、どうぞ

第42話『明かされる歴史』

【3人称side】

六課 医務室

六課の医務室では、なのは、ヴィータ、スバルの3人がベッドに眠っている。

先の戦闘で受けたダメージが大きく、かれこれ4時間はこの状態だ。

ナツは 傷の回復が早く、既にベッドから起きている。

ティアナ

「
」

医務室にはティアナもいるが、心なしか いや、明らかに雰囲気
が暗い。

ナツ

「そんなに気落ちすんなって」

そんなティアナを心配して、ナツがポンッと肩を叩く。

ティアナ

「私は最低だ」

ナツ

「？」

ティアナのふとした呟きに、ナツが首を傾げる。

ティアナ

「仲間が、親友が、こんな状態になるほど戦ってたのに、私は何もしなかった。出来なかった”んじゃないくて、”しなかった”」

ナツ

「」

ティアナは自分が仲間達の危機に気づかなかつた事を悔いていた。

ナツはそんなティアナの言葉を黙って聞いていた。

ナツ

「誰もお前が最低だなんて思ってねえよ。最低だって言うんなら、仲間を傷つけた奴を逃がしたオレの事だ」

ティアナ

「！？そ、そんな事ありません！！ナツさんは、必死に戦ったじゃないですか！！」

ナツの言葉をティアナは否定する。

仲間のために戦った人が最低な訳がない。

ティアナの言葉は明確にその意志を表していた。

ナツ

「ありがとな、ティアナ」

ティアナ

「ナツさん」

ナツは自分を庇ってくれるティアナに笑いかける。

しかし、ティアナにはその笑顔がいつもの明るいなツのモノではなく、どこか悲しげなモノに見えた。

部隊長室

そして部隊長室では、一護、ツナ、フェイト、はやてが今回の敵についての話し合いを行っていた。

はやて

「一体コイツは何なんや」

はやてはモニターに映し出される男・フェンリルを見て呟く。

フェイト

「なのは達4人がかりで取り逃がすなんて」

一護

「アイツが使ってるのってお前らと同じ魔法なのか？」

フェイト

「魔法陣の種類のにはミッド式の魔法だと思っけど 私達が使ってるのとは少し違うような気がするんだ」

現在、魔法の種類は大きく分けて3つある。

なのはやフェイトが主に使用するミッドチルダ式。

はやてやヴォルケンリッター達が主に使用する古代ベルカ式。

スバルやエリオが主に使用する近代ベルカ式。

その他にも、場合によっては様々なタイプの魔法が存在する。

そして“今回モニターの男が使用していたのはミッドチルダ式の魔法に近いが、自分達が使用しているモノとは微妙な差異が存在する”と言うのがフェイトの考察だ。

その時、

???

「失礼します」

1人の男が部隊長室に入ってきた。

「見女にも見えるこの人物は、

はやて

「ユーノ君?どないしたんや?」

無限書庫の司書長、ユーノ・スクライアだ。

ユーノ

「実は今回の襲撃者について、気になる情報があるんだ」

フエイト

「気になる情報?」

ユーノ

「うん」

そう言ってユーノは空間モニターを出し、どこかと通信を繋げる。

そこには2人の男女が映っている。

フェイト

「母さん、お兄ちゃん？」

映っているのはフェイトの家族、リンディとクロノ。

リンディ

《久しぶりで、いいのかしら？》

クロノ

《別にどうでもいいですよ、母さん》

リンディ

《そうね。早速本題に入るけど、みんなは『七戦鬼』って知ってるかしら？》

— 護達は聞きなれない単語に首を傾げる。

そんな中、フェイトが何かを思い出し、口を開く。

フエイト

「確か　大昔に封印されたって言う7人の大魔導　だったかな？」

一護

「じゃあソイツらが今回襲撃してきた奴なのか？」

はやて

「いや、それはないやろ」

フエイトの言葉を聞いた一護が自分なりの予測を立てるが、はやてがそれを否定する。

一護

「なんでだよ？」

はやて

「確かに“七戦鬼”って言うのは聞いた事あるけど　それは“神話”の世界の話なんや」

ツナ

「神話？」

フェイト

「うん。ずっと昔からミッドチルダに伝わるもので、神話って言うよりも、どっちかって言うと“御伽噺”おとぎばなしって言った方が正しいかも知れないね」

一護

「御伽噺ねえ。それってどんなやつなんだ？」

クロノ

《ユーノ、説明してやってくれ》

ユーノ

「うん」

ユーノは1冊の本を開き、語り始める。

『遙か昔、この世界に“七戦鬼”と呼ばれる7人の邪悪な魔導師達がいた。彼らはその圧倒的な力を悪用し、世界中で暴れまわっていた。そんな時、世界の人々は力を合わせ、彼らに挑んだ。そして多大な犠牲を払い、幾度にも亘る激戦の末、遂に彼らを封印する事に成功した。人々は彼らを封印した土地に神殿を建て、その地を世界から切り離し、別の世界にする事で、永遠の封印を施した』

ユーノは本を閉じ、語りを終わる。

一護

「まあ、よくあるような話だな」

ツナ

「うん」

一護とツナは自分達の世界にもある神話や民話を思い出す。

そうすると、案外どこにもある英雄伝説のようにも思える。

はやて

「せやろ？だからこのモニターの男がその魔導師達やって可能性は低いと思」それが、そうでもないんだ 「！？」

はやての言葉をユーノが遮る。

フェイト

「どつ言ひ事？」

ユーノ

「クロノ」

ユーノはクロノにバトンタッチし、クロノはそれを了承したように頷く。

クロノ

《その神話は本当にあった話だ。彼の三提督もそう仰られている》

ALL

「「「!!!?!?!?」「」

クロノが語り始めた事に全員が驚愕する。

クロノ

《三提督が幼い頃はまだ伝説の語り手がいたらしい。だが、時代と共に伝説を語る者は減り、現在では最早神話や御伽噺のようなモノとなってしまったようだ》

フェイト

「ま、まさか」

はやて

「そんな事が」

その中でもはやとフェイトは最も驚愕していた。

2人共本をよく読む方で、この伝説についての本も読んだ事がある。

しかし、まさかそれがノンフィクションだとは全く思わなかったからだ。

一護

「敵がその伝説に出て来る奴らなら、詳しい情報があるんじゃないか？」

そんな2人を余所目に、一護が話を進める。

クロノ

《ああ。一応、あるにはあるんだが》

一護

「??？」

クロノの言葉を濁したような発言に、一護のみならず、複数人が首を傾げる。

クロノ

《いや 何分、昔の話であって 情報と言っても、ユーノが持っているその本しか無いんだ》

ALL

「「「!!!!!!」」」

全員が驚愕した。

管理局の情報収集力、特に無限書庫の書物の量からして、昔の伝説についての本がたった1冊しか無い事に。

ユーノ

「敵の情報は、今から僕が話す事がすべてだと思って欲しい」

はやて

「わかった、話してくれるか？」

ユーノ

「(コクッ)」

ユーノは軽く頷き、一護達も前に立つ。

ユーノ

「7人の魔導師達にはそれぞれ二つ名のようなものがあるんだ」

フェイト

「二つ名？」

ユーノ

「戦機の王、魔鳳の王、怪蟲の王、凶蛇の王、不死の王、暴竜の王
そして、牙獣の王」

一護

「なんつーか 仰々しいな」

ツナ

「確かに」

クロノ

《その名に劣らぬ程、危険な存在だと言う事を忘れるな》

一護とツナの反応に対し、クロノが釘をさす。

ユーノ

「そして、彼らが封印されているのは『第0管理世界クロノス』と言っ世界」

フェイト

「第、 “ 0 ” ？」

フェイトは聞いた事が無い番号に首を傾げる。

はやても同じく。

リンディ

《管理局の極僅かな人間しか知らない、“最高機密管理世界”なのよ》

フェイト

「なんで母さんがそれを？」

リンディ

《私も知らなかったわ。これを教えて下さったのはミゼット提督よ》

はやて

「ミゼット提督が」

フェイトもはやてもしっかりと話を聞いているようで、その実色々な情報が頭に飛び込んできた事で軽く混乱している。

ユーノ

「なのは達を襲った男は、その特徴からして恐らく“牙獣の王”と呼ばれる七戦鬼だ」

一護

「牙獣の王」

一護はその二つ名を呟く。

頭の中には傷つく仲間達の姿が浮かぶ。

ユーノ

「これが今伝えられる情報」

クロノ

《残念だが、これ以上はまだわかっていない》

ユーノ達の説明が終わり、暫くの間、沈黙が続く。

色々な新事実が飛び出した事で、一同の頭は中々に混乱していた。

そして、そのまま何をするでもなく、話し合いは終了となった。

六課 医務室

医務室では、いまだナツとティアナがなのは達の回復を待っていた。

そこへユーノがやって来る。

ユーノ

「なのは達は、まだ？」

ティアナ

「はい」

ユーノはなのは達の状態を訊ねるが、まだ眠ったままのようで、
テ
イアナが暗い雰囲気で答える。

ユーノ

「そう。ナツさん」

ナツ

「ん？」

ユーノ

「ちょっと、話があるんですけど。いいですか？」

ユーノは「話がある」と言って、ナツを医務室から連れ出す。

ナツ

「話ってなんだよ？」

ユーノ

「話と言っか、お願いなんですけど」

ナツ

「お願い？」

ユーノ

「その　なのはの事、よろしくお願いします！！！」

ナツが首を傾げた時、途端にユーノがナツの方に向き直り、頭を下げる。

ナツ

「お、おい、どうしたんだよ！？」

ナツはユーノの行動の意味がわからず、少し慌てる。

ユーノ

「僕の話、聞いてくれますか？」

ナツ

「ああ」

ユーノの何かを覚悟したような雰囲気を感じ取り、ナツも真剣な顔つきになる。

そしてユーノは語りだした。

自分となのはの出逢いを

自分のなのはへの思いを

ユーノ

「僕はなのはの事が好きです。本当に、心の底から」

ナツはユーノの告白を黙って聞く。

ユーノ

「でも、僕じゃなのはを護れない。なのはを傍で支えてあげられない。だから、ナツさんに頼みたいんです。なのはの事を護って欲しいんです」

ナツ

「わかった」

ナツはユーノの願いを聞き入れる。

ユーノ

「ありがとう」でも 「??？」

ユーノのお礼を遮り、今度はナツが話の主導権を握る。

ナツ

「お前、勘違いしてるぜ」

ユーノ

「勘違い ですか？」

ナツ

「ああ。お前、さっき“なのはの支えになれない”とか言ってたけどな、そんな訳ねえだろ」

ユーノ

「??？」

ユーノはナツの言葉の意味がわからなかった。

“支えになれない”と言う自分の考えが勘違いとはどう言う事なのか？

そんな事を考えていた。

ナツ

「この六課にいる奴で、なのはの支えになってねえ奴なんている訳ねえだろ」

ユーノ

「!？」

ナツ

「みんながアイツを支えてる。みんながアイツに支えられてる。出来るとか出来ねーじゃねえ。ただ傍にいただけで支えになる。それが“仲間”ってモンだろ？」

それはナツの存在理由。

護るべきもの。

“仲間”

その言葉はユーノの心にとても響いたと言っ。

ユ一ノ

「そう言ってもらえると、なんだか楽になった気がします」

ユ一ノは笑顔でナツに返す。

ナツ

「んで、オレからも1つ訊きてーんだけだよ」

ユ一ノ

「なんですか？」

ナツ

「なんでオレなんだ？」

ユ一ノ

「はい？」

ナツ

「だから、なのはの事　なんでオレに頼むんだよ？」

ユ一ノ

「」

ユーノは少し頭が痛くなった。

ユーノはなのはの気持ちに気づいている。

だからナツに頼んだのだが、当の本人がこんな感じ。

ユーノ

「そ、それは　いつか、なのはから聞いて下さい」

ユーノはなのはに陰ながらエールを送った。

ナツはまだ首を傾げたままだったが、ユーノは早々にその場から立ち去った。

他人の気持ちを勝手に告げる訳にもいかないし　。

ともあれ、頼むことは頼んだ。

そう思ったユーノは、取りあえずこの件を置いておく事にした。

そんなユートの思い通り、ナツは誓った。

なのはを、この世界で出来た仲間達を護る事を。

そして数日後、平和を蹂躪する悪しき獣が、再びナツ達に牙を剥く事となる。

T o b e c o n t i n u e d

第42話『明かされる歴史』（後書き）

なんだよこのグダグダ感。

感想、指摘、要望、質問お待ちしております。

次回『襲来！牙獣の王』

第43話 『襲来！牙獣の王』 (前書き)

PV250000突破!!!

それはさて置き、今回から始まるフェンリルとの戦い。

最初に言っときます！

一護とツナは参戦しません。

上の2人に惚れている人達もです。

では、ごきげん

第43話『襲来！牙獣の王』

【3人称side】

その日、ミッドチルダの空は黒い雲に覆われていた。

それはまるであの日

新たな敵、七戦鬼がミッドチルダの地に降り立った日のような空だった。

そして空同様、状況までもが、あの日を再現する事となる。

シャーリー

「っ！？来ました！！魔力反応、オーバーSランクです！！」

レーダーに巨大な魔力反応があり、ロングアーチが揺れる。

そして、

シャーリー

「場所は　！？ろ、六課隊舎です！！」

有ろう事かその敵は直接六課へと襲撃を仕掛けて来た。

ロングアーチのモニターに襲撃者、獣王フェンリルの姿が映る。

そして、もう1人　。

フェンリル

「ここが機動六課か　」

フェンリルは小さく呟くと、六課隊舎へと真っ直ぐ歩き出す。

その時、

????

「クロスファイヤー　シュート！！！！」

フェンリル

「!!!」

ダアアアン!!

複数の魔力弾がフェンリルに向かって放たれる。

フェンリルはそれを後方へ飛んで躲し、迎撃者の方へと視線を移す。

そこには自慢の双銃を構えるティアナの姿があった。

フェンリル

「お前も機動六課の魔導師か？」

ティアナ

「スターズ03、ティアナ・ランスターよ。アンタが“牙獣の王”
って奴？」

フェンリルの問いに、ティアナは銃を下ろす事なく答え、逆にフェンリルに問い返す。

フェンリル
「フン。間違いではないが、後世では専らそう呼ばれているよ
うだな」

ティアナ
「後世？」

フェンリル
「オレの名はフェンリル “獣王フェンリル”だ」

ティアナ
「っ!!」

瞬間、フェンリルから放たれる巨大な魔力が大気を揺らす。

それにティアナは一瞬たじろぐが、退く事はなかった。

フェンリル
「ほう。この魔力を前にして戦う意思を見せるとは。現代
の魔導師と言うのは中々勇敢なモノだな」

フェンリルはティアナの様子に感心する。

ティアナ

「当たり前でしょ。私が何のためにここにいてると思ってるの？」

フェンリル

「ん？」

ティアナ

「私は仲間を傷つけたアンタを」

ティアナの銃を握る手に力が込められる。

ティアナ

「友達を傷つけたアンタを赦さない！！」

フェンリル

「！！」

ティアナ

「そのアンタを倒すために、ここにいてるんだ！！！！」

叫ぶティアナの双銃から魔力弾が放たれる。

放たれた魔力弾は真つ直ぐとフェンリルに向かい、

ダアアアアン!!!

見事に命中する。

しかし、

フェンリル

「なるほど」

ティアナ

「!？」

ティアナの視線の先には、ほぼ無傷のフェンリルが悠然と立っていた。

フェンリル

「オレ倒すと言つ心意気は本物のようだが、実力はその程度か？」

ティアナ
「くっ!!」

ティアナが次の攻撃を仕掛けようと動いた時、フェンリルがティアナに向かって走り出す。

フェンリル

「その程度ではオレには勝てん!!」

フェンリルは勢いそのままに拳をティアナに叩き込む。

ティアナ

「がはっ!!」

ティアナは殴り飛ばされ、その体が宙を舞う。

しかし、殴り飛ばされたティアナの体が霧散する。

フェンリルは自身の眼に映った現象に驚き、一瞬動きが止まる。

そして、

ティアナ

「ファントム」

フェンリル

「!？」

突然後ろから聞こえた声に振り返るが、少し遅かった。

ティアナ

「ブレイザアアアアア!!!」

フェンリル

「ぐおおおおおお!!!!!!!!」

ゼロ距離から放たれた砲撃は、一瞬でフェンリルを呑み込み、その体に視認可能な程のダメージを与える。

ティアナ

「悪いけど、手加減はしてあげないわよ!!!」

フェンリル

「ハア、ハア　幻術とは、面白い!!!」

これにより、フェンリルの戦闘狂^{バトルマニア}が発動したのか、その眼がキラリと光る。

フェンリルは拳を構え、ティアナはデバイスをダガーモードに変形させる。

フェンリル

「行くぞ!!!!」

ティアナ

「来なさいよ!!!!」

2人は今度は接近戦を開始する。

シャーリー

「防衛システム、急いで!!!!」

ロングアーチでは、フェンリルの襲撃に対して防衛システムを発動する事で、六課隊舎を護ろうとしていた。

ちなみにこの防衛システムはシャーリーとスカリエッティが共同開発したものである。

最初こそスカリエッティに対して悪いイメージを抱いていたシャーリーだったが、そこは科学者同士。

いざシステム等の開発となると、次第に意気投合したようだ。

と、今はそんな事どうでもいい。

場面は再び揺れるロングアーチへ。

ルキノ

「!?!?ア、アレ見てください!?!」

何かに気づいたルキノの言葉を聞き、その場にいた全員がモニターに視線を移す。

そこには、

シャーリー

「テイ、ティアナ!!!?」

襲撃者、フェンリルと相対するティアナの姿があった。

シャーリー

「な、何やってるの!? オーバーS相手に1人なんて、無茶すぎるわ!!!」

一応、まだ新人魔導師と言う枠組みの中に入るティアナがたった1人で戦っているのは、六課の隊長陣にも匹敵するであろうオーバーSランクを叩き出す怪物。

さらには伝説として語り継がれていた程の。

1対1での戦闘において、苦戦は必至。

況してや新人ともなれば尚更の事。

この状況を見ればこれくらいの論、誰であってもその頭に組み立てられる。

さて、説明文が長くなるのもなんなんで、さっさと元に戻そう。

場面は三度、揺れるロングアーチへ。

シャーリー

「くっ！早くはやて部隊長に

！！！」

シャーリーがはやてに報告をしようとした時、ロングアーチのモニターを見て、外へと飛び出して行く人影が眼に入った。

揺れるロングアーチを余所に、その揺れの原因となる戦闘は続いていた。

ティアナは自慢の機動力と幻術による攪乱を活かした戦闘法で、フエンリルの体に魔力の刃で切り傷をつけていく。

フエンリルもその度にティアナを殴打するが、それでもティアナは

止まらなかった。

フェンリル

「(コ、コイツは本当に女か!?)」

フェンリルはティアナの鬼気迫る程の連撃に、内心驚愕していた。

フェンリル

「(先日の奴と言い、コイツと言い。現代の魔導師はこれが普通なのか!?)」

ティアナを見ると、頭部や口からは普通に出血し、体中に痣ができている。

恐らく肋骨の数本は軽く折れているだろうし、内蔵にだってダメージがあるだろう。

しかし、ティアナはそれで止まる事も退く事もしなかった。

それだけティアナの心の中にはあるのだ。

仲間を、友達を傷つけられた怒りが

そんな時に、自分が何も出来なかった

いや、何もしなかった悔しさが

その後も数分間に亘り、拳撃と斬撃の応酬が続く。

しかし、次第にそれも終焉へと向かっていた。

フェンリル

「フン！大した女だ！だが、そろそろ限界のようだな！！」

ティアナ

「くっ！！」

フェンリルの言う通り、ティアナは最早限界だった。

休み無しに攻撃を仕掛け、その度に反撃を受け続けたため、その体にガタが来ていた。

それを表すように、ティアナの機動力がみるみる落ちていく。

そして遂に、

ティアナ

「っ!？」

途端に体の力が抜けたティアナは、その場に片膝を着いてしまう。

そこへフェンリルがゆっくりと近付いて来る。

フェンリル

「中々楽しめたぞ、ティアナ・ランスター」

フェンリルはニヤリと笑い、その手に魔法陣を展開する。

ティアナ

「ぐっ!!」

ティアナは何とか抵抗しようとするが、体に力が入らない。

フェンリル

「だが、これで終わりだ!！」

フェンリルは掌をティアナに向ける。

ティアナ

「っ!!！」

ティアナは強く眼を瞑る。

ティアナ

「(ゴメン、スバル。私、勝てなかった)」

眼を瞑ったまま、自分の無力さを噛み締める。

ティアナ

「(ゴメンなさい　なのはさん、ウィータ副隊長)」

悔しさだけが、ティアナの心を支配していた。

ティアナ

「(ゴメンなさい　ナツさん)」

ティアナの心に、光が無くなった。

フェンリル

「喰らえ！！ギルティ

」

フェンリルがティアナにトドメを刺そうとした時、

?????

「やらせるかあああああ！！！！！！！！！！」

助っ人の叫び声が響いた。

フェンリル

「ぐほああっ！！?」

助っ人の飛び蹴りが炸裂し、フェンリルの体躯を突き飛ばした。

そして、

ティアナ

「ナツさん?」

突然の事態に、ティアナは素頓狂な声で助っ人の名を呼ぶ。

ナツ

「どうした、ティア 。まだ終わってねえぞ！」

ティアナ

「わ、わかってますよ。ちょっと休憩してただけです」

ティアナは再び光を取り戻し、ナツの横に並び立つ。

フェンリル

「フン、あの時の魔導師か 」「

蹴り飛ばされたフェンリルはゆっくりと起き上がり、2人を見据える。

ナツ

「久しぶりだなア、あん時の続きやろうぜ！」

ナツはフェンリルに対して挑発を掛ける。

フェンリル

「フツ オレもそれには賛成だが、そんなハンデを背負ったままじゃあオレには勝てんぞ」

フェンリルはティアナを指差して言う。

実際問題、ティアナはかなりの　　と言っかヤバイほどの重傷だ。

幾ら戦う意志を見せていても、今回の戦闘において足手纏いになる事は目に見えている。

ティアナ自身もそれは理解している。

しかし、実際に“ハンデ”呼ばわりされるのは悔しい。

ティアナは強く唇を噛む。

ナツ

「ハンデ？笑わせんな、どう考えたってプラスだろうが」

ティアナ

「!!!」

フエンリル

「何？」

ナツ

「なんたって

頼りになる仲間だからな！」

ティアナ

「っ!!!」

“嬉しい”

そんな感情がティアナの心を埋め尽くした。

好きな人から、大切な人から頼りにされる事が、ティアナには堪らなく嬉しかった。

さっきまでの悔しさに歪んだ表情は一変

嬉しさに笑みが零れる表情となった。

そしてさらに、

????

「アタシ達はどうなんだよ、ナツ？」

ナツ達の後ろから別の声が聞こえた。

ナツ

「決まってるだろ？スツゲエ頼りになる仲間だ！」

????

「だったら、一緒に戦わせてもらいますよ！」

ナツとティアナの隣に、新たにヴィータとスバルが並び立つ。

フェンリル

「フン、怪我人が幾ら集まろうと無駄だ」

眼前に並び立つナツ達に、フェンリルは冷たく吐き捨てる。

ヴィータ

「今の内に吼えてろよ。お前はその怪我人の集まりに負けるんだからな！」

ナツ

「ヘッ！怪我人の底力、見せてやるよ！！」

強大な敵を前にしても、どんな重傷を負おうとも、4人の態度は常に勝気。

これがナツの言っていたモノ。

傍にいただけで支えになる。

“仲間”

4人は勝てるとは思っていない。

“絶対に勝つ”と思っているのだ。

そんな4人に対し、フェンリルのバトルマニア戦闘狂魂に大きな火が燈った。

フェンリル
「フハハハハハ！！！」

フェンリルの高笑いが響く。

フェンリル

「面白い！！久々に熱い戦いが楽しめそうだ！！！」

今まで以上の興奮を見せるフェンリル。

それと対峙するナツ、ヴィータ、スバル、ティアナ。

そして今、双方が激突する。

フェンリル

「来い！現代の魔導師達よ！！オレを楽しませてくれ！！！」

ナツ

「ああ、楽しませてやるよ。一生分なア！！！」

T o b e c o n t i n u e d

第43話『襲来！牙獣の王』（後書き）

最近マジで後書きで書くこと無えよ。

と言う訳で、ホントに何もありません。

あ、感想とかはお待ちしてますんで。

次回『スターズ vs 獣王』

第44話『スターズ vs 獣王』（前書き）

翌日投稿！

なんか前日も同じような時間帯だった気がする。

めっちゃ墮落してるな（-”-；）

まあ、そんな事はさて置き

今回は若干ヴィータが目立ちます。

では、どじろ

第44話『スターズ vs 獣王』

【3人称side】

ナツ

「うおおおおおお！！！！」

フェンリル

「がああああああ！！！！」

ゴオオオオオツ！！！

ナツとフェンリルの拳がぶつかり、衝撃波が起こる。

いつぞやの再現のようにも見えるこの光景。

しかし、今回は別の続きがある。

スバル

「はあああつ！！！！」

スバルが後方からフェンリルに奇襲を掛ける。

フェンリル

「チイツ！」

フェンリルはスバルの拳をもう一つの腕でガードするが、

フェンリル

「ぐっ!？」

瞬間、フェンリルは激痛に襲われ、2人から離れる。

しかし、瞬時にその激痛の正体を見破った。

フェンリル

「なるほど、“振動波”か」

フェンリルを襲った激痛の正体は、スバルが放った“振動波”。

人工的に作られた魔導師であるスバルも、チンク達同様にISを持っている。

その能力は、

スバル

「接触時に四肢の末端部から振動波を発生させ、共振現象を引き起こす事で対象を破壊する能力。それが私のIS、『振動破砕』！」

スバル曰く、“戦闘機人モード”でのみ発動できる能力で、その際には瞳の色が金色に変化するらしい。

そのスバルの双眸を見たフェンリルは、

フェンリル

「フツ、良い眼だ。戦士の眼をしている」

また1つ戦いの楽しみが増えたと言わんばかりに、笑みを浮かべる。

ヴィータ

「戦士はスバルだけじゃねえぞ……！」

フェンリル

「……！」

フェンリルがスバルと対峙していると、上からヴィータが攻撃を仕掛ける。

ヴィータ

「ギガントハンマー!!!」

ドオオオオン!!!

ヴィータの巨大な鉄槌がフェンリルを押し潰す。

しかし、

フェンリル

「ぐぬあああ!!!」

前回同様、フェンリルはその一撃を受け止める。

だが、攻撃を受け止められた筈のヴィータは何故か笑みを浮かべる。

それを不審に思ったフェンリルだが、その答えはすぐに出た。

ティアナ

「これで2回目ね」

フェンリル

「っ!!」

背中に伝わるやや熱の籠もった銃口の感触。

“マズイ”

そう思い、抵抗しようとするフェンリルだったが、ティアナの準備は既に整っていた。

ティアナ

「ファントムブレイザー!!!!」

フェンリル

「ぐああああ!!!!」

数十分前に続き、再びゼロ距離からの砲撃を受けたフェンリルは、そのまま吹き飛ばされる。

フェンリル

「ぐうう!!」

何とか地に足を着け、踏み止まるフェンリル

ナツ

「火竜の 剣角!!」

フェンリル

「ぐほおお!!?」

踏み止まれなかった。

ナツの追撃が、フェンリルを再び吹き飛ばす。

しかも、ただ吹き飛ばすのではなく、上空へ突き上げる。

ナツ

「火竜の 煌炎!!」

そこへ容赦無く火球を放ち、フェンリルを火の中へと叩き込む。

フェンリルは叫びを発する間も無く、火球に呑み込まれた。

そして、そのまま地上に落下し、煙が巻き起こる。

ナツ

「ハア、ハア　　どうだコノヤロオ!!」

ナツは目一杯魔法を使ったからなのか、少々息切れ気味に吼える。

他の3人もナツの近くに集まってきている。

その時、

ナツ・ヴィータ・スバル・ティアナ

「「「「（ゾクッ!!!!!!）」」」」

眼の前の煙の中から、視認できるほどに途轍もなく、重苦しい魔力が噴き出す。

その魔力に、4人の体が震え上がる。

そして、煙の中からその魔力を纏うフェンリルが現れる。

フェンリル

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

そのただならぬ雰囲気を見た4人は、無意識のうちに後退してしま
う。

そしてフェンリルが息も絶え絶えに口を開く。

フェンリル

「1つ 訊きたい」

4人は揃って恐怖を感じている。

しかし、どうにかしようにも体が動かない。

フェンリル

「それが お前達の全力か？」

何も出来ないまま、4人はフェンリルの問いを聞く。

ヴィータ

「ハ、ハン！ま、まだこんなモンじゃねえぜ！！」

漸く口を開いたのはヴィータ。

その答えは別段、虚言などではない。

4人は全力で戦っはいるが、チカラのすべてを出し切っている訳ではない。

多少危険ではあるが、まだまだ戦力を上げる事が可能だ。

フェンリル

「フツ、フハハハハ 安心したよ」

その言葉を聞いたフェンリルは不気味な笑みを浮かべる。

フェンリル

「それならば オレも、全力を出せる」

ナツ・ヴィータ・スバル・ティアナ
「「「「！！！！！！？」」「」」」

4人の耳に驚愕の言葉が飛び込んできた。

フェンリル

「フツ　やはり全力を出せねば、戦いに臨む意味など皆無！」

ドオオオオオオオ

瞬間、フェンリルから放たれていた魔力が金色の光を放ちながら集束し、その体躯を包み込む。

フェンリル

「やっと見せてやれる　。オレの、チカラを！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

フェンリルを包み込んでいた魔力の光が弾け、中からその姿が現れる。

その姿はあまりにも元と懸け離れていた。

双眸はより鋭く、爪牙はより獣らしく、くすんだ白い長髪は獅子の鬣のように堂々たる威光を放ち、獣のような尾が生え、神々しい黄金の鎧を纏う。

これこそがフェンリルの真の姿。

ティアナ

「な、何よ　それ　」

ティアナは恐る恐る口を開く。

その声さえも恐怖に震えているようだった。

フェンリル

「これがオレの真の姿

真のチカラ

『バイサーカー狂戦獣』だ!!』

フェンリルが放つ異様な魔力は大気を常時揺らしていた。

その重圧が4人にズツシリと押し掛かる。

そして、

フェンリル

「さあ、続きだ」

ナツ・ヴィータ・スバル・ティアナ

「……っ！！！！？」

4人は驚愕した。

突然フェンリルの姿が消え、背後から今のセリフが聞こえたからだ。

そして4人が一斉に振り返ると、そこには

誰もいなかった。

ナツ・ヴィータ・スバル・ティアナ

「……！！！！？」

あまりの状況の不明さに、4人の動きが見事に停止する。

そんな状況を解いた鍵は、

フェンリル

「どこを見ている!!」

上から聞こえてきたフェンリルの声だった。

ティアナ

「きゃあああ!!」

不意にフェンリルの蹴りを受けたティアナは、防御する事も出来ずに地面に倒れる。

ヴィータ

「テ、テメエ!!」

ヴィータがフェンリルに攻撃を仕掛けるが、フェンリルは一切動じない。

ガァァァン!!

ヴィータのハンマーがフェンリルの頭部を強く打つが、フェンリルはそれでも動じない。

フェンリル

「それが全力ではないのだろうか？」

ヴィータ

「っ!？」

フェンリル

「全力で来い!!!」

ヴィータ

「チイ!!!」

一瞬躊躇ったヴィータだったが、すぐさまそれを振り払い、全力でぶつかる決意をする。

ヴィータ

「ナツ!!!スバルとティアナを連れて下がってる!!!」

ヴィータはナツにスバルとティアナを護るように言う。

スバルはそうでもないが、ティアナは正直最早限界だ。

さっきの一撃が決定打となったようで、グッタリとなっている。

ナツ

「わかった！」

ナツはティアナを抱え、スバルと共に後方へ退く。

ヴィータはそれを横目に確認すると、視線をフェンリルに戻す。

そして、グラーフアイゼンに命じる。

ヴィータ

「アイゼン！！ツェアシュテールングスフォルム！！！」

その言葉を切っ掛けにグラーフアイゼンの形が変わり、前方にドリル、後方にブースターが付加された巨大な鉄槌になる。

フェンリル

「ほう」

冷め気味に感心しているように見えるフェンリルだが、その実中々興奮している。

フェンリル

「それは何だ？」

フェンリルはヴィータに能力の説明を求める。

ヴィータ

「アタシ達魔導師は、本来6割程度しか能力を使ってねえんだ。それ以上はヤバイからな。もしそれ以上のチカラを使い続けると魔導師も、そいつが使うデバイスも壊れちまうんだ。それを無視してチカラを使うのが“フルドライブ”っつー状態。ギガントフォルムがアタシのソレだ。その“フルドライブ”を超えた状態。使用者の命さえも削っちゃう状態を“リミットブレイク”っつーんだ。そんで」

ヴィータは様変わりした自身のデバイスを前に翳し、淡々と説明を続ける。

ヴィータ

「これがアタシの“リミットブレイク”

『グラーフアイゼン・

ツェアシュテールングスフォルム』」

ヴィータはフェンリルをまっすぐ見る

いや、睨む。

ヴィータ

「アタシの、本気だ!!」

その小さな体から放たれる威圧感はずっ達さえも身震いする程だった。

フェンリル

「フツ、スゲエな」

フェンリルは小さく呟く。

その呟きが聞こえたヴィータは、軽く溜息をつく。

ヴィータ

「つつても、コイツは元々対大型用のフォルムだからな。小型や中型にはあんまり向かねえんだ。でもまあ」

呆れ気味に語るヴィータだったが、

ヴィータ

「お前相手なら仕方ねえだろ」

次第にフェンリルを睨む瞳に殺意が籠もっていく。

フェンリル

「フツ、面白い!!」

フェンリルが構えると同時に、ヴィータは空中へ移る。

ヴィータ

「悪いけど長くやり合うつもりは無え!!」

ヴィータは既に巨大な鉄槌の頭部を、さらに巨大化させる。

ヴィータ

「一撃で終わらせる!!」

フェンリル
「！！！！」

ヴィータ

「ツェアシュテールングス　ハンマアアアアアアア！！！！」

先端のドリルの回転とブーストの加速を伴う超巨大な一撃が、標的であるフェンリル目掛けて振り下ろされる。

しかし、

フェンリル

「ぐっ！ぬああっ！があああっ！！」

辛うじてその一撃を受け止め、その状態で耐えている。

だが、ヴィータはさらに力を込める。

ヴィータ

「潰れるおおおおおおお！！！！！！！！！！」

フェンリル

スバル

「さっすがヴィータ副隊長!！」

後ろで見ていたナツとスバルも興奮している。

ティアナは無言だが、その表情から勝利を確信しているのがわかる。

しかし、

ヴィータ

「っ!？」

フェンリル

「ハア、ハア、ハア、ハア

今のは、本当に、危なかったぞ

」

フェンリルはまだ倒れていなかった。

だがそのダメージは相当なもので、息は絶え絶え、鎧はポロポロ、普通に流血している。

そんな状態でもフェンリルは倒れていない。

そして、ヴィータに近付き、

ヴィータ

「がっ!!」

跪くその体に蹴りを入れる。

蹴り飛ばされたヴィータを追い、再び蹴りを入れる。

ヴィータ

「があっ!!」

何度も

ヴィータ

「ぐうっ!!」

何度も

ヴィータ
「ぐふっ!!」

何度も

ヴィータ
「ぐあっ!!」

そして、数回の蹴りを入れた後、ヴィータを見据える。

フェンリル
「どうした　　終わりか？」

ヴィータ
「　　」

ヴィータが答える事はなかった。

“リミットブレイク”の影響と蹴撃のダメージにより、言葉を発するどころか口を開くことさえ出来ない。

フェンリル

「そうか。残念だ。」

ヴィータが最早限界だと悟ったフェンリルは、その手に自身の武器『牙獣戦斧』を出現させ、ヴィータにトドメを刺そうとする。

フェンリル

「これで、終わりだ!!」

フェンリルは横たわるヴィータに魔力を纏った戦斧を振り下ろす。

スバル

「ヴィータ副隊長おおおお!!!!!!」

ズギヤアアアアン!!!

スバルの悲痛な叫びを無視し、振り下ろされた戦斧が地面を砕く。

いや、砕いてはいなかった。

ナツ

「ぐぐぐぐぐぐぐ!!!!!!」

ヴィータに当たる寸前にナツが間に割って入り、その戦斧を受け止めていた。

フェンリル

「っ！！貴様！！」

フェンリルは一瞬のうちに出て来たナツに驚く。

ナツ

「火竜の 咆哮！！！！」

フェンリル

「っ！！？」

ゴオオオオオツ！！！！

戦斧を受け止めたままのナツの炎のブレスを、フェンリルは瞬時に後退して躲す。

ナツ

「フウ」

ナツは一息置き、ヴィータを抱えてスバルとティアナの方へ行く。

ナツ

「スバル　ヴィータも一緒に見といてくれ」

スバル

「あ　は、はい！」

呆気にとられていたスバルは、ナツの言葉で我を取り戻し、その頼みを聞き入れる。

そして、ヴィータをスバルに託したナツはフェンリルの方へと戻って行く。

スバル

「！？ひ、一人で　戦うんですか！？」

スバルはナツの行動に驚いた。

“リミットブレイク”を使用したヴィータが倒しきれなかった敵と一人で戦おうとするその行動に。

ナツ

「ちげーよ」

スバル

「え？」

ナツの眩きにスバルは素頓狂な声を上げる。

だが、そうしている間に戦斧を携えたフェンリルがこちらに向かって来ていた。

その時、

????

「デイベイイイイン

バスタアアアアアア!!!」

フェンリル

「ぐあああっ!!--」

ドドオオオオオン!!--!

ナツ達の後方から放たれた5つの砲撃が、突進して来ていたフェンリルを撃ち飛ばす。

その砲撃を放った人物は、

ナツ

「待ってたぜ　なのは！」

スターズ分隊の隊長、高町なのはだった。

スバル

「な、なのはさん……！」

スバルは眼の前に降り立つ憧れの人物の名を高らかに叫ぶ。

なのは

「スバル　2人の事、お願いね　」

スバル

「は、はい！」

なのはもまた、ヴィータとティアナの事をスバルに託し、ナツの横

に並び立つ。

ナツ

「その感じだと、バツチリみてーだな」

なのは

「うん。心配かけてゴメンね」

ナツ

「別に心配なんかしてねえよ。信じてたからな！」

なのは

「うん、ありがとう！ / / /」

なのはは若干頬を赤らめながら言う。

が、すぐさま真剣な顔つきとなり、フェンリルを見つめる。

フェンリル

「ぐうっ」

砲撃を受け、倒れていたフェンリルが起き上がり、2人と対峙する。

そんなフェンリルにナツとなのはが言い放つ。

ナツ・なのは

「「決着をつけよう(ぜ) 獣王フェンリル!」」

T o b e c o n t i n u e d

第44話『スターズ vs 獣王』（後書き）

今回はいよいよ七戦鬼最初の刺客、フェンリルとの決着です！

お楽しみに！

感想、指摘、要望、質問も随時お待ちしております！

次回『決戦！ vs フェンリル』

第45話『決戦！ vs フェンリル』（前書き）

遂に最初の敵、フェンリルとの決着が！

早速、どうぞ！

第45話『決戦！ vs フェンリル』

【3人称side】

ナツとなのは、そしてフェンリル。

対峙する双方ははまだ動かずにいた。

その様子を後方から固唾を吞んで見守るスバル。

薄らとした意識の中、同じように見守るヴィータとティアナ。

しかし、その緊迫した状況も次第に終焉へと向かっていく。

ナツ

「行くぞコラアアアアア！！！」

とうとう痺れを切らしたナツが独断専行を決行する。

ナツ

「火竜の鉄拳！！！！」

フェンリル

「ハアッ!」

フェンリルは焦る事なく、ナツの拳に自身の拳をぶつけ、攻撃を喰い止める。

ナツ

「火竜の 鉤爪!」

ナツも又それを予測していたようで、即座に追撃を掛ける。

しかし、これは以前にも仕掛けた攻撃。

フェンリルはこれも予測の範疇と言わんばかりに、ナツの攻撃を軽く往なす。

なのは

「アクセルシューター シュート!」

ナツの攻撃を往なしたフェンリルに対し、なのはは凡そ30個の魔力弾を放つ。

フェンリルはそれさえも自慢の俊敏さで躲し、空中へ移る。

しかし、

なのは

「!!!」

なのはは魔力弾をコントロールし、一斉にフェンリルに向かわせる。

フェンリル

「チイツ!!!」

フェンリルは自分に向かってくる魔力弾に対して掌を翳し、魔法陣を展開させる。

フェンリル

「ギルティ・ブラスト!!!」

ドオオオオオッ!!!

フェンリルが展開した魔法陣から放たれた金色の閃光が、なのはの魔力弾を呑み込む。

そして、金色の砲撃はそのままなのはへと向かう。

なのは

「もうその砲撃は喰らわないよ！」

なのはは足元に光の羽を展開し、その砲撃を躲す。

しかし、

なのは

「っ！？」

突如、砲撃がその軌道を急激に変化させ、空中へと逃げたなのはを追う。

フェンリル

「ハッ！オレの砲撃は何も直線だけではない！！」

なのは

「くっ!!」

なのははその砲撃を躲そうとするが、

フェンリル

「逃がさんぞ! プラスター ×^{カルト}4!!」

そのフェンリルの掛け声に反応し、砲撃が4本に分裂し、別方向から同時になのはを襲う。

なのは

「っ!!」

なのはは一瞬その身の動きを止めるが、瞬時に魔力を解放し、砲撃の包囲網からの脱出を試みる。

なのは

「はあああああっ!!!!!!」

出力全開で砲撃から脱出したなのはは、一旦地上に降りる。

フェンリル

「アレを潜り抜けただと　っ!?!?」

フェンリルはなのは行動を驚愕の眼差しで見つめる。

そして、そこへ別の驚愕が加わる。

ナツ

「滅竜奥義　」

フェンリル

「っ!?!?」

ナツ

「紅蓮爆炎刃ぐれんばくえんじん!?!?!?!?!」

フェンリル

「ぐおおおおおお!?!?!?!?!?!」

ドゴオオオオオオオン!?!?!?!?!

フェンリルがなのはに気を取られていた隙に、ナツはフェンリルのさらに上を取り、そこから強烈な一撃を叩き込む。

攻撃を諸に受けたフェンリルはそのまま地面に叩き付けられ、発生した砂煙に包まれる。

フェンリル

「ぐう!!!」

フェンリルはすぐさま砂煙から脱出するが、そこを待ち構えていたなのはが狙う。

なのは

「デイバイン バスタアアア!!!」

そして、なのはとは逆方向からはナツも、

ナツ

「火竜の 咆哮オ!!!」

フェンリル

「っ!!!」

ドガアアアアアアアアア!!!!!!!!!

なのはの直射砲とナツのプレスがフェンリルを挟んでぶつかり、大爆発を起こす。

フェンリル

「ぐうう　　！！」

フェンリルは直撃の寸前で高密度の魔力を纏い、ダメージを減らす事で敗北を免れた。

そして、少し退いたところでナツとなのはの方へ視線を移す。

その視線の先には肩で息をする2人の姿が映った。

フェンリル自身もかなり限界が近付いてきていたが、それはナツとなのはも同じのようだ。

フェンリル

「ハア、ハア、ハア、ハア

（強い！現代の魔導師はこんなにも

強いのか！？）」

フェンリルはそんな事を考えていた。

フェンリル自身、決して驕っている訳ではないが、自分の事を弱いとは思っていない。

寧ろどちらかと言えば強い方だとも思っている。

しかし、目の前に立つ2人の魔導師の力は、そんな自身の力にも匹敵する。

そう思えるほどの攻防だった。

そして、そんな強敵の前に、フェンリルは思う。

フェンリル

「ハア、ハア、ハア　そろそろ、限界か？」

フェンリルはそんな思いのもと、2人に訊く。

しかし、2人は息を切らすばかりで言葉を発しない。

フェンリル

ナツ

「変な事訊くんじゃねえよ。“勝てそう”じゃなくて“絶対勝つ”だろ？」

なのは

「うん、そうだね！絶対勝とう！！」

ナツ

「へッ！たりめーだ！！」

2人は“絶対に勝つ”と言う覚悟を胸に、軽く手と手を打ち合わせ、フェンリルをまっすぐ見据える。

フェンリル

「そう言えば、名を訊くの忘れていたな。良ければ訊かせてくれ」

ナツ

「オレはナツ・ドラグニルだ」

なのは

「高町なのはです」

フェンリル
「そうか」

フェンリルはその名を胸に刻み込む。

フェンリル
「行くぞ！！ナツ・ドラグニル、高町なのは！！！！」

フェンリルはすべての魔力を解放し、ナツとなのはが身構える。

ナツ
「滅竜奥義、“不知火型”」

なのは
「全力全開」

2人もフェンリル同様、すべての魔力をその技に籠める。

フェンリル
「奥義！！天狼獣牙特攻！！！！」

フェンリルは高密度の金色の魔力を全身に纏い、獅子奮迅の勢いで

文字通り、互いのすべてがぶつかる。

だが次第にナツの方が押され始める。

フェンリルは伝説にもなる強力な魔導師。

その意地やプライド、戦いに懸ける信念が、フェンリルの勢いにより拍車を掛けていた。

そして、勝利を確信したフェンリルは言い放つ。

フェンリル

「オレの勝ちだ！！ナツ・ドラグニル！！！！」

しかし、それはナツも同じだった。

ナツ

「 負けるかよ」

フェンリル

「？」

爆発によって生じた煙が晴れると、全身がボロボロとなったフェンリルが、息も絶え絶えに仰向けとなっていた。

フェンリル

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

ナツ

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

ナツも同じくボロボロとなりながらも、フェンリルの傍に立っている。

フェンリル

「ナツ　ドラ、グニル」

フェンリルはその口を微かに開く。

そして、今にも消えそうなきほどの細かい声で言う。　　今までのフェンリルからは想像できない程のか細い声で言う。

フェンリル

「久々に 戦いを 愉しめたぞ」

フェンリルはニヤツと笑う。

“楽しめた”ではなく“愉しめた”。

言葉にするだけでは気づく事はないだろうし、フェンリル自身も無意識だっただろう。

しかし、確実に、フェンリルの心は言っていた。

今まで以上の快楽を噛み締めていた。

そして、その言葉と微笑を最後に、フェンリルの体は砂のように崩れ落ち、再び永い眠りについた。

ナツは物静かに、それでいてどこか寂しそうに、その光景を眺めていた。

なのは
「ナツ君」

なのははそんなナツが心配になり、思わず声を掛ける。

ナツ

「アイツは、そんなに悪い奴じゃなかったのかもな」

ナツは静かに語る。

ナツ

「ただ強え奴と戦いたかっただけ。やる事は間違ってたかも知んねえけど、その心は、普通の魔導師とシグナムみたいなバトルマニアと、何1つ、変わらなかったのかもな」

なのは

「」

なのはは何も言わなかった。

言ったところでどうなる訳でもないし、何と云えばいいかわからなかった。

そんな事も思い、ナツの事がより一層心配となった。

そんなのはに、ナツはゆっくりと振り向く。

ナツ

「だから前に進もうぜ。これからもずっと アイツの分まで

」

ナツはニカッと笑う。

それは紛れも無く、いつもの笑顔。

みんなが知る、明るい笑顔。

なのはが惹かれた、ナツの笑顔だった。

はせて

「ふあぁ〜、一時はどっになるかとおもったわぁ〜

」

モニターで外の戦闘を見ていたはやては、それが無事に解決された事に安心したのか、ガツクリと腰から砕け落ちた。

フェイト

「ホントによかった」

その他のメンバーもホッと一息つく。

ツナ

「でも、正直焦ったね」

一護

「ああ、そうだな」

ツナが言う“焦った”とは、ティアナが1人で戦っていた時の一幕。

ティアナを助けに行こうとした時

ナツ

『ティアを助けるのは、オレ達だけで行かせてくれ』

ナツ、ヴィータ、スバルの突然の申し出は、当然最初はみんなが反

対した。

しかし、3人の覚悟を汲み、その申し出を承諾した。

その後、4人を助けに行こうとした時の事。

なのはも又“1人で行かせて欲しい”と言ってきた。

なのは

『大丈夫 絶対に戻ってくるから』

最終的に、なのはの覚悟を感じた一護が、それを送り出した。

フェイト

「一護が“行ってこい”って言った時はホントにびっくりしたよ」

一護

「アイツの眼を見たら、ダメだなんて言えねえだろ。俺がなのはでも、同じ事言いそうだしな。」

ALL

「「「ああ」

「「「」

一同は何となく想像できたとか。

ともあれ、みんなが無事だった。

それだけで一同の心は見事に晴れ渡った。

そんな機動六課に、新たな脅威は刻一刻と迫っていた。

T o b e c o n t i n u e d

第45話『決戦！ vs フェンリル』（後書き）

最近色々悩んでいます。

詳しくは私の活動報告『最近』と『新作小説についての意見陳述』をご覧ください。

そして是非ご意見をください。

あ、後最近めつきり数が減ったので感想とかも是非

って厚かましすぎですね。

すみません、自重します。

ではまた。

次回『宣告』

第46話『宣告』（前書き）

早起きできたので、連続4日目の投稿です。

今回はバトルはありません。

では、どござ

第46話『宣告』

【3人称side】

フェンリルとの死闘から数時間後、六課周辺では修復作業が行われている。

フェンリルと戦ったナツ、なのは、ヴィータ、スバル、ティアナは勿論医務室へ。

特にヴィータとティアナはかなり危険な状態だったため、優先的に治療が行われている。

他の六課メンバーは部隊長室にて今後の戦いについて話し合っている。

はやて

「今回の戦いで、敵がとんでもない奴らやって事はわかった」

はやての言葉にその場の空気が少し重くなった。

敵を倒したとは言え、ナツ達もかなりダメージを受けている。

さらに、「七戦鬼」と言うからには、フェンリルと同等の奴が後6体もいると言う事になる。

仮にソイツらが一度に襲ってきた場合、その勝率は極めて低いだろう。

誰しもがそんな事を考えていた時、

シャーリー

「はやて部隊長」

シャーリーが部隊長室に入ってきた。

はやて

「どないしたんや？」

シャーリー

「修復作業が終了したそうです」

はやて

「そっか、わざわざゴメンな」

シャーリー

「いえ」

どうやら六課周辺の修復作業の終了を告げに来たらしい。

シャーリーがはやてに報告していた時、ツナがひっそりと一護に近づく。

ツナ

「一護」

一護

「ん？なんだ？」

ツナ

「今すぐドアを塞いでくれ」

一護

「な、なんでだよ？」

ツナ

「頼む」

一護

「わかった」

一護ツナの真剣な眼差しから何かを感じ取り、言われた通りにドアの前へと移動する。

シャーリー

「じゃあ、もう戻りますね」

はやて

「うん、ありがとうな」

シャーリー

「では」

シャーリーははやてに「礼し、部長室を後にします。」

しかし、

シャーリー

「あの　一護さん？」

先のやり取りの通り、ドアの前に一護が立っており、部屋を出る事ができない。

フェイト

「一護？」

シグナム

「何をしているんだ？」

フェイトとシグナムも、一護の不可解な行動に首を傾げる。

シャーリー

「えっと　あの、通してもらえませんか？」

一護

「悪いな　。俺も何が何だかわかんねえけど、通す訳には行かねえらしい」

一護がシャーリーを足留めしていると、ツナが静かに近付いてきた。

その額に炎を燈して。

はやて

「ツ、ツナ君!？」

はやては何の前触れも無く、いきなり死ぬ気化したツナに驚く。

シャーリー

「ツ、ツナさん? な、何ですか?」

シャーリーはツナの雰囲気に対し怯えた態度を取る。

そして、ゆっくりとその口が開かれた。

超ツナ

「お前は 誰だ?」

ALL

「「「!!!?!?!?!?!?」」」

開口一番に放たれたその言葉が一同の耳に届いた時、その頭に大量の感嘆疑問符が生じた。

シャーリー

「や、やだな、何言ってるんですか！頭でも打ちましたか、ツナさん？」

シャーリーは満面の笑みでその言葉を返す。

しかし、ツナの表情は険しいままだった。

超ツナ

「お前は 誰だ ！！」

シャーリー

「っ!？」

先程のような疑問符のついた柔い質問ではない。

明らかな威圧感を醸し出すその雰囲気、シャーリーの額に冷や汗を生じさせる。

シャーリー

「だ、誰って

機動六課の頼れるメカニック！シャーリーことシ

ヤリオ・フィニーノじゃないですか!」

シャーリーも負けじと笑顔を作る。

しかし、その言葉通り“作り笑顔”と言うやつだ。

超ツナ

「オレの超直感が告げているんだ。お前は、シャーリーじゃない!?!」

フェイト

「えっ!?!」

はやて

「な、なんやて!?!」

ツナの言葉に部隊長室は騒然となった。

そんな中、一護とシグナムは瞬時に武器を取り、前後からシャーリーに刃を向ける。

シャーリー

「ちよ、2人共何するんですか！？私ですよ！シャーリーです！！」

シグナム

「見掛けはな。だが、沢田の超直感のチカラは知っている」

一護

「何より、ツナが嘘を言う筈がねえ！」

2人の言葉にシャーリーの表情が暗くなる。

一見仲間にそんな事を言われ、落ち込んでいるようにも見えるが。

シャーリー

「フツ　やっぱり、バレちゃいましたね」

ALL

「フツ！！！！！！！！！！」

瞬間、シャーリーの醸し出す雰囲気、重苦しいものに変化する。

一護

「てめえは 誰だ!!」

一護は威圧した態度でシャーリーに扮する人物に詰め寄る。

しかし、

一護・シグナム

「「っ!!?」」

一護とシグナムに刃を向けられていた筈のシャーリーの姿が消える。

シャーリー

「コツチだ」

ALL

「「っっ!!!!!!」」

突然、はやての背後から声が聞こえた。

はやては瞬時に飛び退き、一護達がいる部屋のドア側へ移動する。

シャーリー

「おお、素早いねえ」

シャーリーは軽く拍手を送る。

シグナム

「っ！！貴様、何者だ！！」

いかにも小馬鹿にした態度に、シグナムがキレる。

シャーリー

「フツ　じゃあ、そろそろネタバラシと行こうか」

ALL

「！！！！！！！！」

不敵に微笑むシャーリーを黒い霧が包み込んでいく。

そして、霧が晴れるとそこには、カタストロフ破滅のメンバー、ユークスが立っていた。

一護

「な！？て、てめえは！！」

ユークス

「久しぶりだな　死神代行、六課の魔導師　。で、お前は初めましてか？ボンゴレ？世^{デイチモ}」

超ツナ

「っ！！」

フェイト

「何をしに来た　。答えによつては　」

フェイトは待機状態のデバイスを構え、ユークスにその目的を訊ねる。

ユークス

「先の戦いでダメージを受けた機動六課を内部から破壊　」

ALL

「っっっ！！！！！！？」

ユークス

「　　つてのも面白そうだが、それじゃあわざわざ七戦鬼を起こし

た意味が無くなるからな」

はやて

「な！？アンタが、アイツらを！？」

ユークス

「ああ。試しに封印を解いてみたんだが　まさか、早くも1体やられるとはな　」

ユークスはヤレヤレと言った感じで首を振る。

フェイト

「っ！！何をしに来たって訊いてるんだ！！」

フェイトはとうとうバルディッシュを起動させ、ユークスに怒声を飛ばす。

ユークスは少しの間眼を瞑る。

そして、ゆっくりと眼を開く。

ユークス

「なに。これからの事を伝えに来ただけだ」

はやて

「これからの事？」

ユークス

「ああ。お前達にはこれから、俺達と3度戦ってもらおう」

ALL

「「「!!!?!?!?!?」「」」

ユークスの言葉は、簡単に理解できなかった。

いきなり“3度戦え”と言われても、それは戸惑うだろう。

一護

「どつ言つ意味だ!」

一同が戸惑つ中、一護がその意味を訊ねる。

ユークス

「これから俺達とお前達は3度の戦い、ステージに挑戦してもらおう」

超ツナ

「ステージだと？」

ユークス

「1つ目、2つ目のステージを経て、最後のステージで最終対決を行う。そして、これからお前達が戦うであろう“七戦鬼”が第1ステージと言っ訳だ」

はやて

「その次は、どうなるんや？」

はやては恐る恐る以降の展開を訊ねる。

ユークス

「気が早えな。それは1つ目のステージをクリアしてからにしてみらおうか」

フェイト

「クリアって ゲームでもしてるつもりなの!？」

“クリア”と言っ言葉に反応し、ユークスに食って掛かるフェイト。

ユークス

「ああそうだ!!」

ALL

「っっっ!!!!!!?」

突然、ユークスの声が部隊長室に響く。

ユークス

「楽しんでけ!殺し合いだって所詮ゲームだ!!俺達が次元世界を喰らい尽くす前の、ただの余興に過ぎねえんだよ!!」

ユークスが放つ強烈な殺気に一同は気圧される。

シグナム

「っ!!!ふざけるな!!」

そんな中、ユークスの言葉に怒りが湧き上がり、レヴァンティンで斬りかかる。

しかし、

スウウツ

シグナム

「っ!？」

ユークス

「フツ」

レヴァンティンの刃はユークスを斬り裂く事はなく、その体をすり抜けた。

はやて

「なんや!？」

フエイト

「まさか、思念体!？」

超ツナ

「(バカな!! 思念体の状態でアレほどの殺気が出せるだ!?)」

一同は眼の前に悠然と立っているユークスが思念体である事に

その思念体の状態で、自分達を圧倒するほどの殺気を出す事に驚愕していた。

ユークス

「今日はそれだけだ。と言う訳で、俺は帰らせてもらう。まあ、しっかりと俺達を楽しませるんだな」

その言葉と同時に、ユークスの体が霧散し始める。

全員が言いよつの無い悔しさを噛み締めながらそれを見ている。

その時、

一護

「おい」

ユークス

「ん？」

一護が静かに口を開く。

一護

「お前、さっき“次元世界を喰らい尽くす前の余興だ”って言ったよな」

ユークス

「それが、どうした？」

一護

「させねえよ」

ユークス

「何？」

一護

「世界の破壊なんてさせねえし、余興なんて悠長な事も言わせねえ！！俺達が、絶対にぶっ潰してやる！！！」

一護は毅然とした態度で言い放つ。

ユークスの放つ殺気に気圧されていた他の4人も、一護の言葉に強く頷く。

ユークス

「フツ、なら精々頑張るんだな」

軽く笑みを浮かべるユークス。

そして、

ユークス

「改めて始めよう　お前達と俺達の戦い、“破滅大戦”を」

その言葉を最後に、ユークスの体は完全に消えてしまった。

その後、六課の倉庫で眠らされていたシャーリーも無事に見つかり、
— 先ずこの件は決着となった。

そしてその夜、一護は誓った。

一護

「（破滅なんてさせねえ。仲間も世界も　全部、俺が全部護
つてみせる！）」

一護はそのまま静かに眠りについた。

第0管理世界クロノス

クロノスの神殿の地下。

ユークスはそこで、次なる七戦鬼の復活の儀式を行っていた。

ユークス

「準備は出来た。さあ、永き眠りから覚めよ！」

ゴオオオオオ

けたたましい轟音を立て、6本の内、2本の柱が光を放つ。

そして、光が収まると、そこには柱ではなく、2つの人影があった。

一方の影は機械の装甲のような物を身につけており、もう一方の影は騎士甲冑を纏い、背中に1対の翼を持っている。

ユークス

「次はお前達の番だ。行け！」

その号令を受け、2つの影はその場からいなくなった。

ユークス

「フッ、どう出る

死神代行

。フッフッフッフ

ハツハツ

ハツハツハツハツ！」

ユークスの高笑いだけが、神殿の地下空間に^{こだま}笈していた。

T o b e c o n t i n u e d

第46話『宣告』（後書き）

次は一気に2体の七戦鬼が襲って来ます。

強力なチカラを持った2体の敵に、果たして一護達はどう挑むのか！？

感想、指摘、要望、質問も随時お待ちしております！

次回『強襲！戦機之王、魔鳳之王』

第47話『強襲！戦機之王、魔鳳之王』（前書き）

とことんまでやります！

連続投稿5日目！！

では、ごんごん……！！

第47話『強襲！戦機之王、魔鳳之王』

【3人称side】

フェンリルとの死闘、そしてユークスの宣告から数日後。

機動六課は更なる敵の襲撃を警戒しながらも、いつもと変わらぬ日々を過ごしていた。

はやて

「はあく、やつ

と終わったあく！」

なのは

「はやてちゃん

なんかお年寄りみたいだよ」

リイン

「お茶入れてきま〜す」

そんな変わらぬ日々の中の一幕。

数時間に及ぶデスクワークが漸く終焉を迎えたらしく、はやてが自分のデスクに突っ伏している。

その隣ではなのはがその様子を“年寄りのようだ”と揶揄し、リインがそんなはやてのためにお茶を入れに行く。

ちなみにその他の六課隊長陣はと言つと

フェイト 別任務で外出中。

シグナム フォワードの訓練、及び自主訓練。

ヴィータ 同上。

そんな感じだ。

“そんな感じだ”とは言つたが、ヴィータ、スバル、ティアナに限っては、あまり激しい行動は禁じられている。

先の戦闘でのダメージが大きかったためだ。

なのはもそれは同じなのだが、“無理はしない”と言つので取りあえずデスクワークは許可された。

はやて

「はあ〜！幸せやわ〜」

なのは

「だからお年寄りみたいだって」

リン

「なのはさんもどうぞです〜」

リンが入れたお茶をグイッと飲み、椅子の背凭れに体を預ける。

そんな様子はまるで年寄りのよう

なのはの揶揄する通りである。

そんなはやてを見て苦笑するのはに、同じく苦笑しながらお茶を出すリン。

その時、

ウウ~~~~~!!!

なのは・はやて・リイン

「「「っ!!!」「」

突然、六課内にサイレンが鳴り響く。

はやてはすぐさま空間モニターを展開し、ロングアーチに通信を繋ぐ。

はやて

「どないしたんや!?!」

シャーリー

《六課上空に2つの魔力反応!!!共にオーバーSランク!!!》

“来た”

誰もがそう思った。

遂に次の敵がやって来た。

しかも2体も。

六課全体に緊張が走る。

六課 上空

六課の遙か上空。

そこに2つの影が佇んでいる。

???

「あれが機動六課か。時代と共に様々なモノが進歩したんだな」

一方の影が、機動六課、その他の街などを見渡して呟く。

???

「で？どうすればいいんだっただかな？」

その影はそのままもつーっの影に訊ねる。

???

「

訊ねられた影は何も答えない。

???

「 アルテマ もう少し会話をしてもらえないかな? 」

それに対し、アルテマと呼ばれる影はゆっくりと振り返る。

アルテマ

「 フルベルク 」

フルベルク

「 ん? 何かな? 」

そして、フルベルクと呼ばれる影に一言。

アルテマ

「鬱陶しい」

“鬱陶しい”

あれこれ色々言われるよりも重い一言だった。

フルベルク

「し、辛辣だね」

フルベルクはアルテマのキツイ一言に少したじろぐ。

フルベルク

「で、僕達はどつすねばいいのかな？」

しかし、すぐに平静を取り戻し、改めてアルテマに訊ねる。

アルテマ

「もう、やっている。お前も早くやれ」

フルベルク

「ああ、オーケー！」

フルベルクはアルテマの静かな言葉に同意し、不気味な魔力を放つ。

ロングアーチ

ツナ

「ナツ、ちょっと待ってよ!」

ナツ

「平気だ!こんくらい!」

ナツは敵が現れたと聞いて、すぐに出撃しようとする。

ツナは先の戦いでナツが受けたダメージを考え、出撃を止めようとする。

しかし、ナツは“もう回復した”と言ってツナの言葉を聞かない。

はやて

「ナツ君！出撃は状況をしっかりと把握してからや！」

ナツ

「ぐっ
」

ナツははやてに言い包められ、出撃を思い止まる。

はやて

「シャーリー、敵の様子は？」

シャーリー

「まだ六課上空です。動きは見せていません」

はやて

「そうか。スカリエッツィ、防衛システムは？」

スカリエッツィ

「問題無いよ。ウーノが上手くやってくれている」

はやてはシャーリーとスカリエッツィに、敵の状況、防衛システムの稼働状況を訊ねるが、いまだ大きな変化は無い。

はやて

「（敵がどんな能力を持つとうかまだわからんけど、先手を打っておくべきか）ツナ君、ナツ君、行ってくれるか？」

はやては状況的を考え、手数が多いツナとナツに出撃要請を出す。

ツナ

「勿論、大丈夫だよ」

ナツ

「へっ！またオレが叩き潰してやるぜ！」

はやて

「わかった、ほんなら頼むわ。けど、無理は禁物やで」

ナツ・ツナ

「「おう（うん）！！」「」

2人は要請を受け、外へ行くこととする。

しかし、

ナツ・ツナ

「「??？」」

突然、ドアの前で立ち止まってしまった。

はやて

「??ど、どどしたんや?」

はやては2人の様子を不審に思い、少し動揺しながら訊ねる。

ナツ

「いや、だってよ」

ツナ

「ドアが、開かないんだけど」

はやて

「え?」

ドアが開かないのだ。

それによって2人は出撃が出来ないでいた。

はやて

「シャ、シャーリー、なんで開かへんのや?」

シャーリー

「わ、わかりません。システムに異常は

っ!?!?」

スカリエッティ

「どうした

っ!?!」

六課のシステムに異常が無いかを調べようとした時、科学者2人の表情が驚愕に歪む。

はやて

「ど、どないしたんや!?!」

シャーリー

「ろ、六課のシステムが

完全にロックされています!?!」

はやて

「なっ!?!?!?」

シャーリーが告げた事態に、はやても又驚愕した。

六課のシステムを完全にロックするなど、況してやこの短時間でそんな事が

兎に角、はやての中の感情は驚愕1つに統一された。

その時、突然六課上空を映していたモニターが切れた。

そして、同時にロングアーチに謎の音が響き渡る。

アルテマ

《聞こえるか 機動六課 》

ALL

「「「っ！！！！！」」」

声の主は襲撃者の1人、アルテマだった。

アルテマ

《お前達のシステムは完全に掌握した。これで、お前達は自らを護る術を失った》

スカリエツティ

フロレス・セクレタリー

「バカな！ウーノの不可触の秘書を相手に電腦戦で勝る事など
！！」

スカリエツティはウーノの情報処理能力が負ける筈が無いと思った。

以前はナツの攻撃の前にアジトのシステムが破壊されたが、それはあくまで“破壊力”に負けたのだ。

しかし、今回の敵はウーノに対して電腦戦で勝利し、その上短時間で全システムを掌握すると言う離れ業をやって退けた。

その事実にはスカリエツティは驚愕した。

アルテマ

《あの程度で自信を持っていたのか？現代の人間は随分と驕りが過ぎるんだな》

スカリエツティ

「くっ！！」

アルテマの言葉に、スカリエッツィは唇を噛んだ。

自慢の娘の能力が敗れた事は勿論、自分の中に僅かながらも確かな驕りがあった事を否定できない事に。

ナツ

「ドアは開かねえんだな」

その時、ナツがふとそんな事を呟いた。

一同はナツが何をしようとしているのか、嫌と言うほど予想出来た。

ナツ

「だったらぶっ壊してやるよー!!」

ALL

「「「「「やっぱりいいい!!」」」」」

ナツはドアに向かって炎の拳を叩き込む。

しかし、

ギイイイイン!!!!

ナツ

「ぐっ!?!ぐああっ!?!」

ナツの攻撃は何か特殊な壁のような物に弾かれ、その衝撃でナツも同時に弾き飛ばされる。

ツナ

「ナツ!?!」

ツナは倒れこむナツに駆け寄り、その身を支える。

ナツ

「な、なんだコレ」

フルベルク

《フッフッフ、無理だよ》

ALL

「「「つ！！！！！！！」」」

今度はもう1人の襲撃者、フルベルクの声が響く。

フルベルク

《システムを掌握すると同時に、特殊な障壁を六課全体に張り巡らせた。君達が外へ出る事は不可能さ》

はやて

「な、なんでそんな事」

はやてはフルベルクに訊ねる。

自分達を倒すためなら、閉じ込める必要があるのか？

そんな事を考え、その真意を探ろうとした。

フルベルク

《フフツ、君達の無力さを痛感させ、絶望させるためだ》

ALL

「「「つ！！！！！！！？」」」

フルベルク

《僕達はまず

機動六課ではなく、街の方を襲うのさ》

はやて

「な、なんやて!!!？」

はやては勿論、そこにいる誰もが驚き、焦った。

そんな事をさせる訳にはいかない。

しかし、それを喰い止めるために外へ出る事が出来ない。

その事態に一同は途轍もない焦燥を感じた。

フルベルク

《君達はそこで僕達が街を、人々を壊す様を、指を銜えて見ている
しかないのさ》

フルベルクは言う。

とても冷たい笑みを浮かべながら。

ナツ

「そんな事させつか！！こんな障壁、すぐにぶっ壊してやる！！」

ナツは魔力を練り上げる。

しかし、そこへフルベルクがさらなる絶望を加える。

フルベルク

《いいのかい？それを壊すと、六課全部が吹き飛ぶ事になるけど？》

ナツ

「ああ！？」

ツナ

「なんだって！？」

加えられた絶望は、一同をその深淵へと引きずり込んだ。

フルベルク

《その扉に掛けられた障壁を無理に突破すると、障壁は連鎖反応を

起こし、一斉に爆発する仕掛けになっているんだ。つまり、君がその扉の障壁を壊した瞬間に、ドーン！って訳さ」

ナツ

「ぐっ

」

ツナ

「そんな

」

一同は言いよぶの無い いや、最早言葉が出ないほどの絶望に襲われた。

このような状況を“痛し痒し”と言うが、そんなレベルではない。

どう足掻こうと全滅する。

動かねば街が、動けば自分達が、それぞれ文字通り滅びる事となる。

“選べない”

誰も、どうする事も出来ない。

アルテマ

《 喋り過ぎだ フルベルク 》

フルベルク

《ゴメンゴメン。どうも僕は興奮すると饒舌になってしまう》

アルテマ

《 まあいい。取りあえず、モニターだけは映してあげるよ》

フルベルク

《僕達が街を襲う光景を、その眼にしつかりと焼き付ける事だね》

一同は最早この会話を聞いてはいないだろう。

何の反応もないまま、モニターが復活する。

そしてモニターに映る2体の七戦鬼は街へ向かう。

はやて

「（あかん あかんあかんあかんあかん 。街が、みんなが
っ……っ……）」

はやての心が暗闇に閉ざされようとした時、1つの光明が差した。

はやての肩をポンと叩く手の感触。

振り向くと、ツナの顔があった。

はやて

「ツナ 君？」

ツナ

「諦めるのは、まだだ」

ツナの顔も当然険しい。

しかし、どこか凜とした表情をしていた。

ツナ

「まだ、希望はある！」

ツナの視線の先にはロングアーチのモニター。

そして、はやてもそれに釣られてモニターを見る。

そこには、確かな希望が映っていた。

街へ向かって移動するアルテマとフルベルクの2体の七戦鬼。

しかし、その進攻は突然喰い止められる事となった。

???

「トライデントスマッシュャー!!!」

アルテマ・フルベルク

「っつ!!!」

前方から放たれた雷の砲撃を躲し、その砲撃手を探す。

そして、数十メートル先に六課の希望、フェイト・T・ハラオウン

の姿を見つけた。

フェイト

「ここから先は通さない!!」

フェイトはバルディッシュを構え、臨戦態勢に入る。

アルテマ

「機動六課の魔導師は全員閉じ込めたんじゃないのか？」

フルベルク

「うーん どうやら、障壁を張った時には中にいなかったみたいだね」

フルベルクは陽気に、それでいて冷静に分析し、答えを出す。

冒頭の方でも語った通り、フェイトは別任務で六課を離れていたのだ。

アルテマ

「とんだミスだな」

フルベルク

「ハハッ、まあいいじゃないか。所詮は1人、すぐに終わるさ」

フルベルクがフェイトと戦おうとした時、もう1人の希望が現れる。

???

「月牙天衝！！！」

フルベルク

「っ！！？」

ザアアアアン！！！！

後方から放たれた黒い斬撃がフルベルクを襲う。

フルベルクは間一髪斬撃を躲し、その斬撃が飛んで来た方向を見る。

そこには斬魄刀を構える卍解姿の黒崎一護がいた。

一護も又、フェイトの別任務を手伝うために六課を離れていたのだ。

フルベルク

「今の、魔法じゃないね　それにその漆黒の刃　。君が黒崎一護か？」

フルベルクは一護を見据え、静かに、そして淡々と語る。

フルベルク

「フツ、良いね　良い斬撃だ　。これは久しぶりに腕が鳴るよ」

フルベルクはその右手に剣を持ち、一護と対峙する。

フルベルク

「さあ、君と僕　どちらの刃が優れているか　勝負だ!!」

そして翼を広げ、一護に斬り掛かる。

一護

「っ!!」

ギイイイン!!

一護も同時に天鎖斬月を振り、2つの刃が交わる。

アルテマ

「まったく」

アルテマはそんなフルベルクの様子に半ば呆れた感じになるが、自分も参戦しようとして2人に近付く。

その時、

フェイト

「はあああっ！！！」

アルテマ

「っ！！」

ガキイイイン！！

デバイスを自身の限定解除である大剣型の『ザンバーフォーム』に変形させ、アルテマに斬り掛かるフェイト。

そして、その斬撃を腕の装甲で受け止めるアルテマ。

フェイト

「お前の相手は私だ!!」

アルテマ

「くっ」

アルテマはその攻撃に多少押されるが、難無く刀身を弾く。

そしてフェイトと距離を取り、再び対峙する。

一護

「チイツ!!」

一護もフルベルクの剣を弾き返し、同時に距離を取る。

そして天鎖斬月を構え、フルベルクと対峙する。

フェイト

「ここから先は行かせない　お前は私が」

一護

「だったら勝負してやるよ お前は俺が」

一護・フェイト

「「今ここで倒す!!!!!!」」

T o b e c o n t i n u e d

第47話『強襲！戦機之王、魔鳳之王』（後書き）

漸く一護登場ですが、次からは1対1の戦闘描写だからなあ

何だか短くなりそうな予感

（ - - ; ）

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

是非、その旨をお書き下さい！！

次回『フェイト vs 機王アルテマ』

第48話『フェイト vs 機王アルテマ』（前書き）

ダメだ

目茶苦茶グダグダだ〜

目茶苦茶無理矢理だあ〜

色々と凄い事になってしまいました

（ - - ; ）

取りあえず、どうぞ

第48話 『フェイト vs 機王アルテマ』

【3人称side】

首都クラナガンから南方に数百メートル進んだ所の上空。

そこでフェイトとアルテマは対峙していた。

アルテマ

「フン」

フェイト

「っ！！逃がさない！！」

しかし、アルテマの方が対峙を放棄し、その場所から逃げるように離れる。

フェイトは“逃がすまい”とそれを追いかける。

そして、元の場所からさらに数百メートル進んだ所で、アルテマが移動を止めた。

アルテマ

「逃がさない」と言ったな。僕は逃げたんじゃない 離
れたんだ」

アルテマはフェイトの方に向き直り、移動の理由を語る。

その時、徐にアルテマの背部に装備された装備が離れ、宙に展開される。

それはなのと同じ形態の4基のレーザービットだった。

アルテマ

「あそこじゃ、あの2人が邪魔で本気が出せないからね」

フェイト

「!」

4基のビットからそれぞれレーザーが放たれる。

が、フェイトはそれを順々に躲けて行き、大剣を構えてアルテマに迫る。

そして、構えた大剣を勢いよく振り上げ、

フェイト

「はああああっ！！！」

そのまま振り下ろす。

しかし、

ギイイイイン！！！！

何かが大剣を受け止め、同時にフェイトの動きも止めた。

その何かとは、

フェイト

「っ！！電磁シールド！？」

アルテマの背部に展開された特殊な電磁シールドだった。

アルテマ

「この電磁シールドは、敵の攻撃を防ぐだけでなく、直接攻撃を仕掛けてきた敵を絡め取り、その動きを封じる事が出来るんだよ」

アルテマは後ろを振り返る事無く、ただ淡々とシールドの説明を語る。

アルテマ

「そして」

ガシャンッ!!

アルテマの体の側部の装備が外れる。

アルテマ

「僕が操るレーザービットは 4基ではない！」

フェイト

「っ!!」

新たに展開された4基のビットがフェイトにレーザーを放つ。

フェイトは一旦バルディッシュを元の形態に戻し、ビットの発射口の直線上から離脱する。

しかし、既に展開されていた4基のビットが再びフェイトを狙い、さらに新たに展開された4基のビットもすぐにフェイトへと照準を合わせる。

合計8基のビットがフェイトに向かって一斉にレーザーを放つ。

フェイト

「くっ!」

だが、フェイトも負けてはいない。

仮にも六課最速の名を冠するフェイトだ。

多少無茶でもあったが、すべてのレーザーを躲し、再びアルテマと対峙する。

アルテマ

「中々やるね」

アルテマはフェイトに賞賛の言葉を掛ける。

しかし、フェイトにはただ見下されているようにしか感じなかった。

そんなフェイトはアルテマに対してある疑問が浮かんでいた。

フェイト

「（コイツ、大昔の魔導師にしては 戦い方が近代的過ぎる）」

六課の防衛システムを突破し、且つほぼすべてのシステムをロックした行為。

そして、今のビットの展開、デバイスを絡め取る特殊なシールド、レーザーの攻撃。

どれも

アルテマ

「遙か昔の技術で可能な事なのか ” そんな事を考えている顔だね ”」

フェイト

「っ!!!?」

フェイトは自分の考えが読まれた事に驚愕する。

アルテマ

「その答えは、君達の方が詳しいんじゃないか?」古代遺物管理部機動六課」

フェイト

「何?」

アルテマ

「君達は知っているだろう?過去に滅んだ超高度文明が創造したモノを」

フェイト

「(過去に滅んだ超高度文明)っ!!!ま、まさか!」

フェイトはアルテマの言葉を鍵に、記憶の扉を開けた。

そして、見つけ出したその答えは

フェイト

「ロストロギア?!?!」

アルテマ

「そうだ！僕は遙か昔、現代よりもさらに発達した文明によって生み出された、世界最古の“人造魔導師”！！君達の言う、ロストロギアそのモノなのさ！！！」

フェイトはさらに驚愕した。

そして同時に、ある感情が湧き上がってきた。

“恐怖”

今、自分の目の前に、ロストロギアがいる。

自分が、それと戦っている。

それ1つで世界1つを破壊できる程危険な存在と相対している。

突然突きつけられた真実は、フェイトの中に生まれた恐怖を加速的に増大させる。

フェイト

「（どうしよう、どうしよう、どうしよう）」

あまりにも突然、あまりにも衝撃的で、フェイトの思考が停止寸前まで追い込まれた時、

ドオオオオオツ！！！！

フェイト

「っ！！」

遠くの方から何か大きな力を溢れているのを感じた。

その感じは、

フェイト

「一護？」

別の場所でもう一人の七戦鬼、フルベルクと戦っている一護が放つ

霊圧だった。

その霊圧を感じ、フェイトの心は静まり返った。

フェイト

「（ そうだ　一護だって、必死で戦ってるんだ　。それなのに　私がこんな事でどうするんだ！）」

フェイトは静まり返った自分の心を奮い立たせ、纏わり付いていた恐怖を振り払った。

アルテマ

「 騒がしいな　。さあ、お前は どうす　　っ！！！」

アルテマは眼を疑った。

何故なら、すぐ目の前にフェイトがいたからだ。

フェイト

「 ジェットザンバアアアア！！！」

アルテマ

「くっ！！！！？」

フェイトはアルテマに向かって雷を纏った大剣を振り下ろす。

アルテマはギリギリでそれを躲すが、斬撃の威力が高く、大剣が振り下ろされた時の衝撃で、後方へ吹き飛ばされてしまう。

アルテマ

「まだ、戦うと言っのか？」

フェイト

「言った筈だ。お前は私が“ここで倒す”って！！！」

そう言い放ち、デバイスを構える。

フェイト

「バルディッシュ！ライオットブレード！！！」

その言葉を切っ掛けに、バルディッシュの形態が大剣型から片刃の長剣型に変形する。

これがフェイトのフルドライブ状態の武器『ライオットブレード』

である。

フェイト

「行くぞ!!」

フェイトは長剣を構え、アルテマに斬り掛かる。

アルテマ

「くっ!!」

アルテマは腕の装甲でそれを防ぐ。

が、

アルテマ

「っ!!!??」

受け止めた瞬間、装甲に傷が付き、全身を貫いたような電撃の痛みが襲う。

アルテマ

「（僕の装甲に傷を!?!それに、あれは 高圧電流か!?!）」

アルテマはフェイトの長剣の能力を一瞬で見破った。

そして、一度フェイトから距離を取り、自身の腕に電磁ソードを展開して応戦する。

フェイト

「はあああっ!!」

アルテマ

「おおおおっ!!」

ガキイイイイン!!!

刃と刃が交わり、そのまま力が拮抗する。

そして、再びフェイトの長剣がアルテマの電磁ソードへと電流を流し始めた。

アルテマ

「フン！高圧電流を流しているようだが、無駄だ!!この電磁ソードは電気を吸収して　　っ!?!」

アルテマは電磁ソードの能力で電流を吸収し、ダメージを回避しようとしたが、その電流の威力も量も、アルテマの予想の遙か上を行った。

フェイト

「はああああっ！！！！！」

バリイイイイン！！！！

電磁ソードは電流を吸収し切れず、刀身が碎け散ってしまった。

フェイト

「はああっ！！！」

ザアアアアン！！！！

アルテマ

「がはっ！！！！！」

フェイトはすぐさま刃を翻し、薙ぎ払うようにアルテマの体を斬り裂いた。

アルテマは血を流しながら、息も絶え絶えに後退する。

アルテマ

「ハア、ハア、ハア、ハア」

フェイト

「ハア、ハア、ハア、ハア」

息切れはフェイトも同じだった。

全力の連続攻撃は早くもフェイトの体に負担を掛け始めていた。

アルテマ

「ハア、ハア　くそっ！まさか、貴様ら如きに、これを使う事になるうとは」

その言葉にフェイトは耳を疑った。

今の言葉を聞くと、まるでまだ力が上げられるような言い方だ。

自分もまだ力を上げる事は出来るが、正直あまり使いたくはない。

しかし、無情にもアルテマは真の力を解放した。

その瞬間、周りに展開されていた8基のレーザービットがアルテマの許へと集まり、形を変えてその体に装備されていく。

アルテマ

「これが僕の真の力、『インフィニット・ウルス』だ!!」

全身が機械の装甲で包まれたその姿はまるで、人型のガジェットのようだった。

フェイトは自分の中の警戒レベルを一気に上げ、眼の前に佇むアルテマを見据える。

アルテマ

「行くぞ!!」

フェイト

「っ!!」

アルテマは背部に装備されたビットをブースターにして、フェイトに急接近する。

フェイトは向かってくるアルテマ目掛けて長剣を横薙ぎに振るう。

アルテマ

「そんなものが効くとも思っているのか!!」

アルテマはその斬撃を右手の強化装甲で防ぎ、左手に展開したビームサーベルでフェイトに斬り掛かる。

フェイト

「くっ!!」

フェイトはギリギリでその斬撃を躲すが、直後にアルテマの両肩に装備されたビットからレーザーが放たれた。

フェイト

「きゃああああ!!」

レーザーを至近距離で諸に喰らったフェイトはバランスを崩し、地上へと落下する。

しかし、落下の最中に何とか持ち直し、再び上空へ戻る。

アルテマ

「ほう。今のを喰らってまだ戦えるとは 大した奴だ。だが、そろそろ限界だな」

フェイト

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

アルテマの言う通り、最早フェイトは限界間近だった。

“フルドライブ”の長時間使用による負荷とレーザーによるダメージ。

それらがフェイトの体を蝕んでいた。

フェイト

「まだだ」

アルテマ

「ん？」

フェイト

「まだだあああ！！！」

フェイトは力を振り絞り、握り締めた長剣でアルテマに斬り掛かった。

ギィィィィン！！！！

フェイトの刃は確かにアルテマに届いた。

しかし、ただ届いただけであって、その機体を斬り裂く事はなかった。

フェイト

「そんな」

絶望するフェイトを見て、アルテマが呟く。

アルテマ

「終わりだ」

【フェイトside】

フェイト

「う、うん」

私はふと眼を覚ました。

フェイト

「私、何してたんだろう。確か。そうだ、アルテマと戦って
て。それで」

私は今の状況を把握するために、辺りを見渡した。

すると、そこはさっきまでアルテマと戦っていたミッドの空ではな
かった。

私のいる場所。それは、

フェイト

「ここは。機動六課？」

六課の隊舎だった。

そして隊舎の前には、私の大切なものがあつた。

親友のなのは、はやて、ヴィータ、シグナム

教え子のスバル、ティアナ、エリオ、キヤロ

他にもギンガ、ナツ、ツナ

そして、ヴィヴィオ。

みんな私の大切な

一護

「みんなお前の仲間だ」

フェイト

「!!!」

振り返ると、私の後ろに一護が立っていた。

一護

「お前も、俺達の大切な仲間だ」

そうか、これだ。

私の護りたかったものは、これだったんだ。

世界の破滅とか、次元の崩壊とか

色々な事がありすぎて、自分が何を護りたかったのか、忘れ掛けた。

一護の言葉で、それに気づいた。

私が護りたかったのは仲間だ

友達だ！

家族だ！！

そのために私は、戦うんだ!!!

【3人称side】

アルテマはフェイトを倒し、一護とフルベルクの許へ戻ろうとしていた。

その時、

アルテマ

「!!!!!!?」

アルテマの眼に、衝撃的な光景が飛び込んできた。

ふと地上を見ると、そこにか傷だらけになりながらも、デバイスを杖代わりにして立つフェイトの姿があった。

アルテマ

「ば、馬鹿な！？アレを喰らって　まだ、生きていたと！？」

アルテマが驚愕している間にも、フェイトの意識は次第にハッキリとしてきた。

フェイト

「私は、負けない」

アルテマ

「何？」

フェイト

「私は負けない！仲間を、友達を、家族を、大切なものを護るために！！お前を倒す！！！！」

フェイトは力強く叫び、デバイスに命じる。

フェイト

「バルディッシュ！！ライオットザンバー・スティングー！！！！」

フェイトの叫びに呼応し、バルディッシュは2本の長剣形態へと変形する。

仲間を護るための最後の力

フェイトのリミットブレイク、二刀流の武器『ライオットザンバー・ステインガー』だ。

アルテマ

「くっ！ならばもう一度！！今度は跡形も無く消し飛ばしてやる！！！！」

アルテマは再び巨大なレーザービットを展開し、最大のレーザー砲を放とうとしていた。

フェイト

「！！！！」

フェイトも2本の長剣を構える。

そして、

アルテマ

「消えるオ！！フェイト・テストロッサア！！！！！！」

さっきよりも巨大なレーザー砲が放たれ、

フェイト

「負けるものかああああ！！！！」

フェイトの双剣と激突する。

ゴオオオオオオツ！！！！！！！！

最初、2つの力は拮抗していたが、徐々にフェイトが押され始め、後退していく。

しかし、フェイトは諦めず、残った力のすべてを注ぎ込む。

フェイト

「（お願い！もう少し、もう少しでいい！！私に力を、敵を倒す力を貸して！！！！）」

フェイトは誰かに助けを求めている訳ではない。

自分の相棒であるバルディッシュに

何より、自分自身に

“絶対に勝つ”と叫んでいるのだ。

その時、

フェイト

「!!!」

アルテマ

「なっ!?!」

戦況に変化が訪れた。

ぶつかり合う2つの力が、再び拮抗し始めたのだ。

その理由は、

フェイト

「こ、これは

」

フェイトの体に纏わり付く、何か黒いオーラのようなものが原因だった。

始めは戸惑ったが、その正体が何なのか

フェイトにはすぐにわかった。

フェイト

「これ 一護の」

黒いオーラの正体

それは、別の場所で戦っている一護が放ち、そのまま空气中を漂っていた霊圧だった。

フェイト

「一護 ありがとう ！！」

フェイトは一護の霊圧を纏い、双剣に残るすべての魔力を籠める。

その内の1つの戦いに決着がついた。

フェイト vs 機王アルテマ

勝者、フェイト。

T o b e c o n t i n u e d

第48話『フェイト』vs『機王アルテマ』（後書き）

色々どうしましょ？

ホントに

それはそうと、この小説とは関係ないんですが、先日新作小説『魔法少女リリカルなのはStrikers』神となりし光龍』を投稿致しました。

『破滅大戦』と平行してやって行きますので、どうぞそちらもよろしくお願いします

m () m

感想、指摘、要望、質問お待ちしております。

次回『一護』vs『鳳王フルベルク』

第49話『一護 vs 鳳王フルベルク』(前書き)

何がしたいんだろう 俺

取りあえず、どうぞ

第49話『一護 vs 鳳王フルベルク』

【3人称side】

フルベルク

「うーん、動きやすくなったかな？君はどうだい？黒崎一護」

一護

「知らねえよ」

フェイトとアルテマが離れ、より広くなった空に、一護とフルベルクは立っていた。

フルベルク

「つれないなあ。もう少し僕と喋ろっよ」

一護

「話す事なんて無えよ」

フルベルクはもつと世間話(?)がしたいようだが、一護はあまり相手にしていない。

フルベルク

「君はどうして戦うんだい？」

一護

「てめえには関係ねえだろ」

フルベルク

「君はどうして力を手に入れたんだい？」

一護

「だから関係ねえだろ」

フルベルク

「君はどんな食べ物が好きなんだい？」

一護

「明太子とチョコレート　って、もっと関係ねえだろ！！」

フルベルク

「その割には結構普通に答えるんだね　」

あまりにもしつこいフルベルクの問答に呆れ、一護はうつかり答えてしまう。

フルベルク

「ふう ま、いいや 。さて、御ふざけはこの辺にして、そろそろ手合わせ願おうか」

フルベルクは一護との会話を締め、愛剣『フェニックスブレード』を構える。

一護

「やり辛いな」

少々振り回されながらも、一護は天鎖斬月を構え、フルベルクを見据える。

そして、

フルベルク

「それじゃ 始めよう!」

一護

「!?!」

両者が同時に動き、共に刃を振るう。

キイイイイン!!!

交わった刃は、甲高い金属音を響かせる。

フルベルク

「良い剣圧だね。惚れ惚れするよ」

一護

「てめえに褒められても嬉しくねえ なっ!!!」

フルベルク

「うおっ!?!」

一護はフルベルクを剣ごと押し返し、そこへさらに追撃を掛ける。

一護

「月牙 天衝!!!」

フルベルクに向かって放たれた斬撃は、しっかりと標的を狙っている。

しかし、

フルベルク

「フツ はああっ!!」

ザアアアアン!!

フルベルクは慌てる様子も見せず、横薙ぎに剣を振るい、斬撃を打ち消す。

一護

「ちっ!!」

一護はもう一度月牙を放とうとするが、

フルベルク

「フフツ」

一護

「っ!!」

突然、一護の目の前にフルベルクが現れ、その剣を振り上げた。

フルベルク

「はあっ！！」

一護

「くっ！！」

振り下ろされた斬撃を間一髪で躲した一護は、瞬時にフルベルクから距離を取った。

一護

「月牙　天衝！！！」

そして再び月牙を放つ。

しかし、それと同時にフルベルクも斬撃を放つ。

フルベルク

「メギド・フレイム！！！」

両者の間で、漆黒の斬撃と紅蓮の斬撃がぶつかる。

ダアアアアアン！！！！！！

2つの斬撃の激突により、爆発が起こる。

そして、爆発によって発生した煙が広がり、一護とフルベルクをも呑み込む。

フルベルク

「ケホッ、ケホッ ああ、ちょっと吸い込んだじゃったよ。

さて、君はどうか？黒崎 つ！！！」

先に黒煙から脱出したフルベルクは、煙を吸い込んでしまった愚痴を零しながら一護に対して喋り掛ける。

そして、ふと上を向いた瞬間、言葉が詰まった。

同じく煙から脱出した、仮面を付けた一護が斬り掛かってきたのだ。

一護

「おおおおおっ！！！！！！」

フルベルク

「くっ！！！」

放たれた斬撃をなんとか受け止めるフルベルクだったが、一護はその斬撃が消えるのを待たずに、フルベルクの背後へと回り込み、その背中に刃を当てる。

フルベルク

「（っ！！迅

）」

一護

「月牙天衝

」

ザアアアアアアン！！！！！！

その思考さえも遮られ、フルベルクは前後からの斬撃に呑み込まれた。

一護

「悪イけど 手合わせとか、真剣勝負とか、そんな悠長な事は言わねえ。全力で叩き潰す！！！」

「純粹に殺り合うのも悪くないなア」

一護

「っ!!」

一護に不気味に歪んだ笑みを向ける。

フルベルク

「じゃあ、改めて始めよう　殺し合いをオ!!」

フルベルクは開始宣言とほぼ同時に、剣を構えて一護に飛び掛る。

そして、勢いそのままに斬撃を仕掛ける。

一護

「ちっ!!」

一護は向かって左へ飛んで斬撃を躲し、そのまま反撃を仕掛けようとした。

しかし、

フルベルク

「コロナ・ストーム！！！！」

一護

「ぐっ！！？」

フルベルクの右翼が淡い紅色の光を放ち、そこから炎の竜巻が発生し、一護を吹き飛ばす。

フルベルク

「コロナ・ブラスト！！！！」

さらにフルベルクは剣の鋒に火球を生成し、吹き飛ばした一護に放つ。

一護

「ちっ！！」

シュンッ！！

一護は瞬歩でそれを躲し、再びフルベルクの後ろを取る。

フルベルク

「ハッ、バレバレだよ！黒崎一護！！」

一護

「っ！？」

今まさに刃を振り上げ、敵に斬り掛かろうとしていた一護は、フルベルクのその言葉で一瞬動きを止めてしまった。

フルベルク

「コロナ・ハリケーン！！！」

一護

「っ！！！」

フルベルクを中心に突風が吹き荒び、巨大な炎の竜巻となって一護を上空へと吹き飛ばした。

フルベルク

「フッ」

一護

「っ!!」

巻き起こる炎の竜巻の中からフルベルクが飛び出し、一護の上をとる。

フルベルク

「はあっ!!」

一護

「ぐああっ!!」

ドオオオオン!!!!

そして、勢いよく降下して一護に体当たりし、その体を地上へと突き落とす。

一護

「ぐ　　くっ　　」

仰向けで地面に突っ伏す一護。

しかし、フルベルクはそんな一護にも容赦はせず、追撃を掛ける。

フルベルク

「コロナ・テンペスト!!!」

ドオオオオン!!!

一護

「がはあっ!!!」

フルベルクの放った巨大な火球は、一護を押し潰し、辺りを焼き尽くした。

地上一帯が燃え広がる光景を、フルベルクは上空で悠然と眺めていた。

フルベルク

「フツフツフ　どうした、黒崎一護　もう終わりかい？」

フルベルクは燃え盛る地上を見下ろしながら、対戦者の安否を確認するため、その名を呼んでみる。

一護

「月牙」

フルベルク

「っ!!!?!」

呼びかけの応答は、地上ではなく、背後から聞こえた。

一護

「天衝!!!!!!」

ザアアアアン!!!

声に反応して咄嗟に振り返るが、斬撃を回避する事は出来なかった。

フルベルク

「くうっ!!!ハア、ハア、ハア、ハア」

何とか斬撃を受け切ったフルベルクだったが、息が乱れ始めた。

一護

「ハア、ハア、ハア、ハア」

一護も又、息絶え絶えだった。

さっきの攻撃のダメージで仮面は既に消えてしまっている。

両者共にダメージや疲労が蓄積してきていた。

一護

「ハア、ハア さっき、訊いたよな」

フルベルク

「ん？」

一護

「なんで戦うんだ」って。「なんで力を手に入れたんだ」って

徐に、一護が口を開き、冒頭のフルベルクの問答を取り上げた。

一護

「そんなの 1つしかねえだろ」

真っ直ぐにフルベルクを見つめ、一護はその思いを口にする。

一護

「俺は大事なものを護るために力をつけて、大事なものを護るために戦ってる。大事なものを護るために、俺はここにいるんだ！」

一護の言葉を聞くフルベルクは、その間、何かをしようとする素振りを見せず、ただ黙って佇んでいた。

一護

「だからこの戦いも 負ける訳にはいかねんだ！」

心に秘めた覚悟を語り、一護は左手を顔に翳す。

そして、黒い霊圧が一護を包み込み、それが弾けると、再び仮面を付けた一護が現れた。

一護

「来いよ、フルベルク 決着をつけようぜ」

天鎖斬月を構え、一護はフルベルクを見据える。

フルベルク

「（“大事なものを護るため”か）」

フルベルクは少々俯き気味に、心の中で呟いた。

自分が昔やった事、そして今やっている事とは無縁の言葉

でも、

フルベルク

「フツ　嫌いじゃないよ、そう言っつもの」

何故か、その心はそれを拒まなかった。

寧ろ、どこか受け入れようとしている感覚もあった。

フルベルク

「行くぞ　黒崎一護」

そして、数秒間の対峙の末、

一護

「!?!?!」

フルベルク

「!?!?!」

ギイイイイイン!!!!

再び刃を交えた。

ギイイイイイン!!!!

その後も、幾度に亘り、刃を交える2人。

ギイイイイイン!!!!

今までは打って変わり、言葉少なく斬り合う2人。

ギイイイイイン!!!!

空には両者が交える刃のぶつかる音、擦れる音、両者が発する言葉

にならない声しか無い。

ギイイイイン!!!

何かに取り付かれたかのように、両者はただただ剣戟を続ける。

しかし、次第に両者の体力が限界に近付き、戦場が空から地へと移行する。

一護の仮面にも、フルベルクの剣にも、小さな罅が入っている。

それでも、両者の剣戟はまだ続く。

ギイイイイン!!!

だが、それにも漸く終焉が訪れた。

フルベルク

「はあっ!!--!」

一護

「っ!？」

ザクッ

剣戟の刹那、一瞬の隙を突き、フルベルクの剣が一護の体を貫く。

一護の背中に見える剣の鋒から、鮮血が滴り落ちる。

フルベルク

「終わりだよ

」

フルベルクが終焉を告げ、ゆっくりと剣を引き抜こうとした時、

ガシッ!

フルベルク

「!?!」

一護の腕が、フルベルクの腕を力強く掴んだ。

一護

「ハア、ハア、ハア　　言った、筈だぜ　　俺は、負ける訳にはい
かねえって　　！！」

一護が力を入れた瞬間、その体を貫いていたフルベルクの剣が砕け
た。

フルベルク
「っ！！？」

そして、

ザアアアアアアアン！！！！！！

フルベルク
「がはっ
」

フルベルクは、左肩から右足の付け根まで斜め一線に斬り裂かれ、
そのまま後ろに倒れてしまった。

一護
「　　おい　　生きてるか？」

一護は生死を確認するため、フルベルクに呼び掛ける。

フルベルク

「何とかね」

一護

「そうかよかった」

“生存”

応答が返ってきた事により、それが確認された。

一護は安堵し、胸を撫で下ろす。

フルベルク

「君は僕を殺そうとしてたんじゃないのかい？」

そんな一護の様子に、フルベルクは疑問を抱いた。

殺し合った相手が生きていてよかったとはどう言う事か？

頭に浮かんだその疑問を、そのまま訊ねるフルベルク。

一護

「ん？まあ、確かに全力で斬り合ったけど、別に殺したかったって訳じゃねえからな」

一護とフルベルクは本気で斬り合った。

しかし、一護は殺し合いとは思っていなかった。

一護

「言っただろ？俺は大事なものを護るために戦うんだってな」

“大事なものを護るための戦い”

一護の中では、この戦いにそれ以上の意味は無かった。

フルベルク

「（なるほど）。これが、黒崎一護か」

そんな一護を見つめ、何かに納得するフルベルク。

そして、その時が来た。

フルベルク

「そろそろ

眠りにつく頃かな

」

一護

「っ！お前

」

そう呟いたフルベルクの体が砂のように崩れ始めた。

一護はそれを辛そうな表情で見つめている。

フルベルク

「何故

君がそんな顔をするんだい？」

フルベルクはまた疑問に思った。

しかし、黒崎一護と言う人間を見たフルベルクは、何となく、その答えが予想出来た。

一護

「「」言うの　後味悪いなって、思ってたな」

フルベルク

「フツ　そう言うと思ったよ」

一護の答えは、フルベルクの予想したものと同じだった。

その事実には、フルベルクは笑みを零す。

フルベルク

「もし」

一護

「？」

フルベルク

「もしこの時代に生まれて、君達と出会っていたら　僕達は、仲間になれていたかな？」

フルベルクの何気ない質問。

それでいて中々に重い質問。

それに対し一護は、

一護

「さあな」

こう返した。

フルベルク

「フツ、冷たいね。でもまあ、たとえ仲間になれなかったとしても、君達と出会えていれば、楽しめたかも知れないな」

一護のあっさりとした答えに、フルベルクは苦笑する。

そして、その体が完全に砂と化す直前、

フルベルク

「楽しかったよ 黒崎一護」

笑顔でその言葉を呟いき、再び永い眠りについた。

こうして、もう1つの戦いにも終止符が打たれた。

一護 vs 鳳王フルベルク

勝者、一護。

しかし、その勝利を一護は誇らず、どこか寂しげな表情で空を見つめていた。

T o b e c o n t i n u e d

第49話『一護 vs 鳳王フルベルク』（後書き）

オリキャラの性格が微妙だな

収集付くのかな

ハア

まあテンションが低いのはそれもありますが

遊戯王の新禁止・制限の件もあるんですけどね

ではまた

次回『怪蟲の残酷な謀略』

第50話 『怪蟲の残酷な謀略』 (前書き)

PV3000000突破!!

みなさん、まことにありがとうございます!!

これを励みに、さらに執筆を頑張ります!!

では、ごうござ

第50話 『怪蟲の残酷な謀略』

【3人称side】

アルテマとフルベルクの同時襲撃から数日経ったある日。

スカリエツィのアジトがあつた森林地帯。

夕暮れ時のその場所に、機動六課の部隊長・八神はやての姿があつた。

はやては険しい表情で、鬱蒼とした森林の中を歩いていた。

そして何故か、自身のデバイス『シュベルトクロイツ』を起動させ、バリアジャケットを纏っている。

その表情や姿からして、ただ単に歩いている訳ではないと言つのがわかる。

そんな感じで森林の中を暫く歩いていると、前方に洞窟の入り口が見えた。

スカリエッティのアジトのソレとは又違う、岩肌がゴツゴツした入り口だった。

その見掛けに副つように、洞窟内には邪気が漂っているようだ。

はやて

「待つといてな、2人共」

そう呟き、はやては洞窟の中へと入っていった。

冒頭の場面の1時間ほど前

はやては1人、部隊長室で物思いに耽っていた。

はやて

「はあ」

はやては自分に対して、少しの苛立ちにも似た感情を抱いていた。

先日の七戦鬼との戦い。

なんとか勝利を収め、甚大なる被害の回避に成功したものの、その立役者である一護とフェイトはかなりのダメージを負ってしまった。

最初に七戦鬼と戦ったスターズの4人も、今は大分回復してきているが、まだ全快と言う訳ではない。

それだけ、みんなのダメージは大きいものだった。

JS事件の時と言い、今の七戦鬼との戦いと言い

仲間達が傷つき、倒れる中、自分が何も出来ない事が

ただ見ているだけしか出来ない事が

はやてには堪らなく腹立たしく

堪らなく、悲しかった。

はやてがそんな感情を噛み締めていた時、どこからともなく、1匹の蝶が部屋の中に舞い込んできた。

はやて

「蝶？でも何でこんな所に」

何気ない簡単な疑問を抱き、はやては壁に止まっている蝶に近づく。

その時、

???

《ヒッヒッヒッヒ》

はやて

「っ!？」

突然、蝶が不気味に笑い出した。

と言つよりは、蝶を通して誰かの笑い声が聞こえるといった感じだった。

はやて

「誰や!?!」

はやてはその声の主に対して声を荒げる。

???

《私かい？私は、そうだね

“怪蟲の王” と言えばわかるかい？》

はやて

「っ!?!」

はやてはその名に覚えがあった。

以前にユーノから聞いた七戦鬼が持つ二つ名の中に、その名前があったからだ。

はやて

「七戦鬼か!?!」

???

《そうそう、その七戦鬼様だよ》

はやて

「その七戦鬼が、何の用や？」

はやては警戒しながら敵の目的を探る。

???

《なに お前を私の巢へと招待してやるつもりだと思っ
て》

はやて

「招待やて？そんな誘いに乗ると思っ取るんか？」

はやてはそれを畏だと考えた。

いや この場合、どう考えても十中八九畏だろう。

はやてはその手を喰わないつもりでいたが、

???

《乗る乗らないはお前の自由だよ けどそうになると お仲間の命
は私の自由にさせてもらうけどねえ》

はやて

「っ…？ど、どつ言つ事や…！」

相手の言葉にはやては驚き、その真意を問い質す。

???

《だから お前が誘いを断れば、“湖の騎士”と“盾の守護獣”の命は私の自由になるって言ってるのさ》

はやて

「っ…！？」

はやても心に焦りと翳りが生じた。

その名は、はやての大切な家族が持つ二つ名だったからだ。

はやて

「お前、シャマルとザフィーラをどうしたんや…！」

はやてはさらに口調を荒げ、相手を問い質す。

???

《ヒッヒッヒッヒ、まだ何もしちやいないさ。けど、お前の選
択によっては もう二度と、2人とは会えなくなるかもねえ》

はやて

「っ……!」

はやては相手に対して、底知れぬ嫌悪感と怒りが湧いた。

しかし、下手をすれば2人の命が危ない。

そう思い、はやては湧き上がった感情を押し殺した。

はやて

「 私は、どうすればええんや? 」

そして、ここは素直に相手の要求を呑む事にした。

???

《利口だねえ、流石機動六課の部隊長だ》

はやて

「くっ
」

言葉は自分褒めているが口調はその真逆、自分を見下している。

そんな相手の調子に、はやては唇を噛む。

????

《今から私の巢にお前を招待してやる。ただし、招待してやるのはあくまでお前1人だ。それを破れば わかっているね?》

はやて

「 わかった
」

“ 約束を破れば2人の命は無い”

それを暗に示す相手の言葉に、はやては従うしかなかった。

????

《ヒッヒッヒ、待ってるよ、八神はやて
》

その言葉の直後、蝶の姿が紙切れに変わり、部屋の床にヒラリと落ちた。

その紙には何かメモのようなものが書かれている。

はやてはそれを拾って見てみると、そこにはアルファベットと数字が書かれていた。

その文字から指定された場所を読み取ったはやては、その紙をグシヤツと握り潰し、ゴミ箱に投げ捨て、部屋から出て行った。

外を目指し、はやてが黙々と歩いていると、

????

「はやて?」

はやて

「っ!?!」

その姿をみたツナに呼び止められた。

ツナ

「どづしたの? 恐い顔して。どっか行くの?」

はやて

「う、うん。ちょっと聖王協会に カリムに会いに行こう思てな

」

はやてはその場凌ぎの嘘をつき、ツナに背を向ける。

ツナ

「顔色悪いけど大丈夫？オレも行こうか？」

はやて

「別にええよ。心配せんといて」

本当は一緒に来て欲しかった。

しかし、それでは約束を破る事となり、捕らわれているであろう2人の命が危ない。

はやては精一杯の笑顔を作り、ツナに言う。

はやて

「ほな、行ってくるわ！」

そのままはやては去っていった。

ツナ

「はやて」

そう呟いたツナは、はやての後姿を険しい表情で見つめていた。

1時間後、場面は冒頭へと戻る。

洞窟の入り口を見つけたはやてはその中へ入り、今はその洞窟の中を進んでいた。

洞窟内はとても薄暗く、道や壁の岩肌は粗く、そこいらに蜘蛛の巣が張られている事から、スカリエッティのアジトのような人工的なものではなく、自然のそれだと思われる。

そして数十分ほど歩き続け、奥へと進んでいくと、途中で道が途切れた。

しかし同時に、開けた場所へと出た。

壁は相変わらず岩肌が粗かったが、天井には鍾乳石のようなものが無数に生え、地面は比較的平らなものとなっている。

それはまるでどこかの闘技場のようだった。

そして、はやてが立っている場所の反対側にも通路へと続く穴があり、そこから1人の女性が現れた。

???

「ようこそ、我が巣へ」

すらっとした細身で、赤紫色の長髪の女性だった。

はやて

「お前が、七戦鬼か？」

???

「そうさ、改めて自己紹介しようか。七戦鬼の1人、“むしおう蟲王アラクネ”だ」

名乗るアラクネに対し、はやては怒りを籠めた瞳を向ける。

はやて

「シヤマルとザフィーラは、無事なんやろつな？」

そして静かに、怒りを籠めた口調で訊ねる。

アラクネ

「ヒヒツ、心配しなくてもちゃんと生きてるよ “まだ” ね」

はやて

「っ……!!」

その言葉を受け、はやての我慢は限界点を突破し、下のフィールドへと飛び降りる。

そして、アラクネに杖を向け、

はやて

「降りて来い!!!今すぐ私が倒したる!!!」

これまで抑えていた分の感情を籠めた怒声を放つ。

アラクネ

「慌てないで欲しいねえ。お前の相手は　コイツらぞー!!」

アラクネが指をパチンと鳴らすと、地中から5体の巨大な蟲が現れた。

はやて

「っ!!」

アラクネ

「そのワーム共がお前の相手さ。やれ、お前達!!」

アラクネの命令を受け、5体のワームが一斉にはやてを襲つ。

はやて

「灰白き雪の王　銀の翼を以て　眼下の大地を白銀に染めよ!!」

しかし、はやては慌てる事なく呪文を詠唱し、ワームが喰らい付く瞬間、

はやて
アイテム・デス・アイセス
「氷結の息吹!!!」

自分の周囲から強烈な冷気が放ち、5体のワームを一瞬にして凍結させた。

そして、

はやて

「はああっ!!!」

凍結した5体のワームに杖で打撃を加え、その体を粉々に砕いた。

アラクネ

「聞いた話じゃ、お前はユニゾンデバイスのリインフォースツヴァイがないと、魔法の微調整が難しいんじゃないのかい？」

アラクネは、自分が聞いていた情報との違いに疑問を抱き、それをはやてに訊ねる。

はやて

「私は、悔しかった」

アラクネ

「ん？」

はやて

「仲間が、みんなが、必死で敵と戦ってるのに。傷ついても逃げずに、倒れても立ち上がって、必死で戦ってるのに。私は、何も出来なかった。それが悔しかった。私の力は何のためにあるんや！って思った。」

はやての中から様々な感情が次々に溢れ出す。

はやて

「だからせめて、戦う日が来た時のために　自分を鍛え上げたんや！！」

先刻語った通り、はやては自分の無力さを噛み締めていた。

しかし、決して腐る事はなく、それをバネに修練を積み、力を蓄えていたのだ。

はやて

「この際、誰が相手でもええわ。」

そして、再びアラクネを強く睨む。

はやて

「今の私はめっちゃキレてるから覚悟しいや！……！」

その怒気が眼に見えそうなくらい昂るはやてを見て

アラクネ

「（ヒツヒツヒ、いい具合じゃないか）」

不気味な笑みを浮かべる。

はやては怒りのあまり、その笑みに気づく事が出来なかった。

そして、はやては知らず知らずの内に、^{アラクネ}怪蟲の残酷な謀略に、ズルズルと引きずり込まれていくのだった。

T o b e c o n t i n u e d

第50話『怪蟲の残酷な謀略』（後書き）

感想、指摘、要望、質問等お待ちしています

ではまた

次回『卑劣なる女郎、蟲王アラクネ』

第51話『卑劣なる女郎、蟲王アラクネ』（前書き）

色々と無理やりです。

取りあえず、どうぞ

第51話 『卑劣なる女郎、蟲王アラクネ』

【3人称side】

はやて

「はああっ!!!」

はやては巧みな杖術で向かって来るワームを次々と薙ぎ払っていく。

しかし、薙ぎ払った傍からアラクネが新たなワームを召喚し、再びはやてを襲う。

それを又はやてが薙ぎ払う。

もう十数分間はこの連続だ。

アラクネ

「焦れったいねえ！」

そのループに嫌気が差したのか、アラクネは新たな魔法陣を展開し、呪文を詠唱する。

詠唱と共に、はやてを囲んでいたワームが魔法陣に吸収された。

アラクネ

「妖蟲融合！キング・ワーム！」

詠唱が終わると、魔法陣から1体となった巨大なワームが現れた。

そして出現と同時にはやてに襲い掛かった。

ワーム

「グワオオオオオオ！……！」

はやて

「っ……！」

ドオオオオオン……！！

ワームははやてを押し潰

はやて

「……！」

さなかつた。

はやてはワームが襲い掛かる瞬間、空中へと回避していた。

はやて

「彼方より来たれ 宿木の枝 銀月の槍となりて 撃ち貫け！」

はやては魔法陣を展開し、即座に詠唱を完了させた。

はやて

「石化の槍、ミストルティン！」

ダアアアン！！

魔法陣から放たれた7本の光がワームに命中した。

しかし、ワームを倒すまでには至っていない。

アラクネ

「フツ、残念だねえ

」

アラクネは嘲笑の表情を浮かべる。

はやて

「どつやるな。言つたやる？ “石化の槍” って」

ピシッ！

その瞬間、はやての攻撃を受けたワームが硬直し、石となってしまった。

アラクネ

「チッ！」

アラクネは舌打ちをしながら、新たな魔法陣を展開する。

しかし、その魔法陣は今までのものより大きなものだった。

“危ないのが来る”

直感的にそう感じたはやては、騎士甲冑を纏い、身構える。

アラクネ

「唸れ 地に潜みし蟲の怪よ 魔眼に映る獲物を喰らえ！」

ゴゴゴゴゴ

詠唱が完了すると、洞窟内に地響きが轟き、魔法陣からその姿が見え始めた。

アラクネ

「出でよー！！！」

????

「グオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

大気を揺らすほどの咆哮を上げ、巨大な蜘蛛がその体軀をはやての前に晒した。

はやて

「（っ！！コイツは！？）」

虎の紋様の入った体に、2本の角を持つ巨大な蜘蛛。

はやてはソイツのその姿、その名に微かだが覚えがあった。

小さい頃、図書館で見つけた本を読んで、数日間恐くて眠れなかったのを覚えている。

それは、

“妖怪・土蜘蛛”

アラクネ

「殺れ！土蜘蛛！！」

土蜘蛛

「グオオオオオオオオ！！！！！！」

驚愕に立ち尽くしていたはやてに、土蜘蛛は8本の足で素早く迫り、前方に位置する4本の足で襲い掛かる。

はやて

「っ！！！！」

ギィィィィン！！！

はやては土蜘蛛の攻撃をシュベルトクロイツで受け止めるが、その攻撃を受け切るにははやての力はあまりにも非力だった。

はやて

「くっ！！」

土蜘蛛の力に圧倒され、そのまま押し倒されてしまうはやて。

しかし、押し倒されながらも、何とか攻撃を受け止める状態をキープしている。

土蜘蛛

「ギシャアアアアアア！！！！！！！！」

はやて

「ぐうっ！！！！」

土蜘蛛は口を大きく開き、はやてを喰らおうと顔を近づける。

開かれた口からは涎が垂れ、それがはやての顔に滴り落ちる。

はやて

「くっ！！はああああっ！！！！」

ダアアアアアン！！

はやては自分に覆い被さる土蜘蛛の腹に衝撃波を撃ち込み、その巨体を弾き飛ばす。

そして、顔に付いた涎を拭い、魔法陣を展開して詠唱を始める。

はやて

「閃け 至高神の槍 必中の光となりて 撃ち貫け！」

詠唱が完了し、砲撃の体勢に入り、その名を叫ぶ。

はやて

「グングニル！！」

展開された魔法陣から白銀の砲撃が放たれた。

それを感知した土蜘蛛はそれを躲すが、同時に砲撃の軌道も変わり、

ドオオオオオン！！！！

そのまま土蜘蛛に命中する。

はやて

「悪いけど、グングニルは自動追尾型砲撃や。威力はそこそこやけど、操らんでも当たってくれるわ」

はやては新たに習得した砲撃魔法の特性を語る。

勝利を確信し、少なからず余裕があるのだ。

しかし、

はやて

「っ！！！！」

土蜘蛛

「グオオオオオオ！！！！！！！！！！」

ドオオオオン！！！！

はやては空中に高密度の巨大な魔法球を生成し、そのまま土蜘蛛に叩きつける。

魔法球を受けた土蜘蛛は押し潰され、小さく縮こまってしまった。

土蜘蛛を倒したのだ。

はやて

「ハア、ハア、ハア

」

しかし、その代償にはやてはかなりの魔力を消費したらしく、呼吸が乱れている。

アラクネ

「まさか

土蜘蛛がやられるなんて

」

アラクネも土蜘蛛が敗れた事に多少驚いているようで、何をする訳でもなく、はやてをジッと見ていた。

はやて

「ハア、ハア　　どうや！」

はやては勝利を誇り、軽いガッツポーズを見せ、アラクネを挑発する。

しかし、

ドオオオン！！

はやて

「っ！！！」

はやての前に、新たに3体の蜘蛛が現れた。

さっきの土蜘蛛とは違い、中型で人の形に近い姿の蜘蛛だった。

アラクネ

「フツ、誇るのはソイツらを倒してからにしな！」

アラクネは新たに呼び出した3体の僕をはやてと戦わせる。

そして、はやての見えない所で不気味な笑みを浮かべていた。

そうとは知らず、はやては眼の前の3体の妖蟲と戦っている。

はやて

「くっ!!」

はやては襲い来る3体の敵に対し、衝撃波で対抗する。

すでに残り少なくなってきた魔力の温存のためだ。

しかし、そんな考えで勝てるものでもなかった。

さっきの土蜘蛛の時とは打って変わり、3体の敵は雄叫びも上げず、的確にはやての体力を奪っていく。

3体同時の連携攻撃に、はやての体力は順調に底へと向かっていた。

はやて

「くっ」

() コイツら、強い!!このまま戦っても、負ける!!!() 「

戦いの最中思ったはやては、一か八かの賭けに出た。

はやて

「奔れ 太陽神の槍 勝利を齎す閃光となれ！」

瞬時に敵と距離を取り、はやては魔法陣を展開し、即座に詠唱を完了させた。

はやて

「ブリューナク！！」

魔法陣から1本の砲撃が3体の敵に放たれ、その中央で激しく炸裂する。

3体の敵はそれを躲すため、空中へと回避するが、それこそがはやての狙いだった。

はやては砲撃が炸裂すると同時に、次の魔法発動のために詠唱を始めていた。

はやて

「殲^つくせ 破壊神の槍 滅殺の光となりて 闇を葬り去れ！」

アラクネ

「っ!!」

はやての魔法陣が今まで以上の輝きを放ち、アラクネや3体の妖蟲の眼を眩ませる。

そして、

はやて

「トリシューラ!!」

魔法陣から放たれた砲撃が3本に枝分かれし、それぞれの砲撃が空中で停止していた3体の妖蟲を撃ち、

ダアアアアアアン!!!!!!!!!!

そのまま壁に叩き付けた。

はやては今度こそ思った。

“勝った”と。

しかし、

アラクネ

「ヒッヒッヒッ

」

そんなはやての耳に、アラクネの不気味な嗤い声が響いた。

はやて

「何や？」

アラクネ

「ヒッヒッヒッヒッ

」

アラクネは嗤いを止めない。

はやて

「何が可笑しいんや!!」

はやては次第に苛立ちを募らせ、その声にもそんな感情が反映される。

その時、

?????

「うううう」

「

はやての背後から、弱々しい呻き声が聞こえた。

はやてはその声の方へと視線を移す。

はやて

「え？」

その声に振り返ったはやては、言葉を失った。

視線の先で蹲っている3体の妖蟲。

その内の2体の体が裂け、その中から人が出て来た。

その人物は

はやて

「 シヤマル？ ザフィーラ？」

はやてが助けようとしていた2人の家族だった。

はやて

「何で 2人が」

はやては混乱していた。

何故、目の前で2人が傷つき、倒れているのか

はやて

「どう言っ事や。 答えろ、アラクネえ！！これはどう言っ事や
！！！！」

はやては混乱のあまり、アラクネに対して喚き散らす。

普段は冷静で温厚なはやても、今まで怒声を放ちながらも必死に冷静さを保っていたはやても、この時ばかりは溢れる怒りを抑える事は出来なかった。

アラクネ

「見てわからないかい？」

その光景を見下しながら、再び嘲笑の笑みを浮かべる。

はやて

「よくも　よくも私の家族をオ!!!」

そんな態度にはやての怒りはさらに増幅される。

しかし、

アラクネ

「何を言ってるんだい？ソイツらを撃墜したのは　お前じゃないか」

はやて

「!!!?　なん　やと　!?!」

その一言で、はやての感情は一変する。

“怒り”から

“絶望”に。

アラクネ

「そうだろう？その2人は、お前の砲撃で撃墜されたんだ」

はやて

「っ！！そ、それはお前が仕組んだ事や

」

アラクネ

「私が呼び出した3体の妖蟲の中で、本物は1体だけだった。他の2体はその1体の能力でそっくりに擬態させた偽者だった。けど、それは見掛けだけなのさ」

はやて

「っ！！？」

はやての中で、あらゆる負の感情が加速する。

アラクネ

「発する魔力はそのまま。冷静に感じ取れば、本当に家族が大切なら、わかった筈だろうに」

はやて

「やめて
」

アラクネの言葉がはやての心を決る。

アラクネ

「お前は怒りのあまり、我を忘れて、大切な家族を撃った
」

はやて

「いや
」

その単調な言葉が容赦無く決っていく。

アラクネ

「お前は助けるためじゃなく、ただ怒りを払拭するために家族を撃
った
」

はやて

「やめて
いやあ
」

そして、

アラクネ

「これだよ！これ！！怒りに狂い、深い絶望に沈んだ人間の心程美味いものは無い！！！」

アラクネは嗤いながらその姿を変えていく。

上半身が薄い緑色となり、下半身が巨大な黒い蜘蛛ななった。

そして、完全に姿を変えたアラクネが下のフィールドに降り、蹲るはやての近付く。

はやてはいまだ絶望の淵にあり、それに気づいていない。

そして、下半身の蜘蛛の足ではやてを持ち上げる。

アラクネ

「さあ、頂くとするか」

同時に蜘蛛の口が大きく開き、はやてを口へと運ぶ。

アラクネ

「眠れ、八神はやて 永遠に」

はやての体が蜘蛛の口の中へと消えそうになった時、

ヒュンッ!!

アラクネ

「ぐああっ!!」

ドオオオン!!

何かがアラクネの体を突き飛ばし、壁に激突させた。

そして、その何かは、放り投げられたはやてを受け止め、そっと抱きかかえる。

はやては微かに眼を開き、その瞳に映った人物の名を呼ぶ。

はやて

「ツナ 君」

超ツナ

「遅れてゴメン　はやて」

ツナははやての様子に不審感を抱き、心配になって後を付けて来ていた。

しかし、その行く手を森林に潜んでいた妖蟲に阻まれ、駆けつけるのが遅れてしまったのだ。

超ツナ

「休んでいる　後は、オレがやる」

はやてをシャマルとザフィーラと共に、壁に寄り掛からせる形ですすツナ。

そして、はやてに言う。

超ツナ

「大丈夫だ　お前は何も悪くない」

その言葉を受けたはやては、静かに眼を瞑り、気を失った。

ツナはそれを見届け、視線を敵に向ける。

壁に打ち付けられ、倒れていたアラクネは、身を起こしてツナを睨む。

アラクネ

「貴様ア　よくも食事の邪魔をオ！！」

至高の食事を前に、それを邪魔された怒りを露にする。

それを見るツナも又、怒りを感じていた。

超ツナ

「ふざけるな！！何が食事だ！！」

ツナは怒りに拳を握り、アラクネを強く睨む。

超ツナ

「オレと勝負しろ！！オレはお前を絶対に赦さない！！！！」

ツナの言葉を聞いたアラクネは怒りを見せると思いきや、逆に再び

嗤い出した。

アラクネ

「あっははははは！……いいだろう！……この蟲王アラクネが、貴様も食してやろう！……」

大蜘蛛

「ギシャアアアアア！……」

アラクネは狂ったように嗤い、大蜘蛛もそれに呼応するように声を上げる。

超ツナ

「ナッツ、カンピオ・フォルマ形態変化！……」

ナッツ

「GAO！……」

対するツナはナッツを呼び出し、即座に形態変化させた。

ツナは最初から全力で戦うつもりでいる。

それだけ、眼の前の敵が赦せなかった。

そして、もう一度言い放つ。

超ツナ

「アラクネ 。 お前はオレが、この手で倒す!」

T O B E C o n t i n u e d

第51話『卑劣なる女郎、蟲王アラクネ』（後書き）

またやっつけてしまいました。

新作小説『魔法少女リリカルなのはStrikers』黑白のエクソシスト』を投稿しました。

よければ見てやってください

m (((m

3作品共、感想、指摘、要望、質問等お待ちしております。

ではまた

次回『決意のXX（ダブルイクス）』

第52話『決意のXX（ダブルイクス）』（前書き）

かなり乱雑な仕上がりかも

（ - - ; ）

取りあえず、どうぞ

第52話『決意のXX（ダブルイクス）』

【3人称side】

ミッドチルダの一角に存在する森林地帯。

超ツナ

「はあああつ！！！！」

そこの地下空間でツナとアラクネは戦っていた。

ワーム

「グオオオオオオ！！！」

いや、正確には違う。

ツナはアラクネが召喚した妖蟲・ワームと戦っているのだ。

しかし、

超ツナ

「^{イクス}Xカノン!!!」

ダアアアーン!!

ダアアアーン!!

ダアアアーン!!

ワーム程度の雑魚

所詮、ツナの敵では無かった。

ツナは宙を翔けながら次々とワームを倒していく。

しかし、アラクネの召喚蟲は尽きない。

アラクネ

「出でよ!ドラゴンフライ!!!」

アラクネが新たに展開した魔法陣から、蜻蛉の姿をした2体の怪人が出現した。

2体の蜻蛉人間は召喚されるや否や羽を開き、大きな羽音を立てながら、その姿を消した。

超ツナ

「!!!」

超高速で移動し、ツナへと攻撃しようとしている2体の怪人だったが、ツナの超直感の前では無駄な戦略だった。

超ツナ

「そこだ!!!」

ツナはその超直感で感じ取ったモノを頼りに、その方向へ^{イクス}Xカノンを放つ。

ダアアアアアン!!!

放たれた炎は見事に蜻蛉人間に命中し、その体を焼き尽くす。

アラクネ

「出でよー!デビルドージャー!!!」

超ツナ

「受け切るつもりは無い！」

ツナに防御の考えは無かった。

そして、ツナの構えた両手が、迫り来る蜈蚣の口に触れた瞬間

超ツナ

「零地点突破・初代エディション！！」
ファースト

ピシイイイ！！！！

ツナの両手から強烈な冷気が放たれ、巨大蜈蚣の体を一瞬にして凍結させた。

そして、凍結した巨大蜈蚣は、又一瞬にして粉々に砕け散った。

アラクネ

「くっ！デビルドージャーもやられるなんて」

アラクネの操る蟲達の中でも上級な存在であった土蜘蛛とデビルド
ーザー。

その2体がこつもあつさりとやられてしまった事に、アラクネは驚
愕した。

さらに、

超ツナ

「こつちだ!」

アラクネ

「!!!?」

アラクネの驚愕は続く。

デビルドーザーが砕け散る様に気を取られていた内に、ツナに背後
を取られていたからだ。

超ツナ

イクス
「Xシヨット!」

ダアアアン！！

アラクネ

「ぐっ！？うぎゃあああああ！！！！」

突然の出来事に、慌てて攻撃を躲そうとするアラクネだったが、ツナの右手から放たれた小さな炎の弾丸にその左肩を撃ち貫かれ、苦痛な叫び声を上げる。

アラクネの上げた叫び声は、地下空間全体に響き渡り、絶えず反響している。

アラクネ

「くそっ！くそっ、くそおおおおお！！！！」

撃ち貫かれた左肩を押さえ、強烈な殺気の籠もった眼でツナを睨む。

そんなアラクネの雰囲気が変わった。

いや、アラクネを取り巻く空気が変わった。

超ツナ

「っ!!」

ツナもそれを感じ取っていた。

その変化の正体は、2人の周りで果てている蟲達だった。

アラクネ

「殺す 殺す 殺す殺す殺す 殺す!!!」

ツナが倒した蟲達から出る妖気のようなものが、アラクネに集まっている。

妖気は怪しげな紫色の霧となり、アラクネの全身を包み込む。

そして、霧が晴れると、

アラクネ

「あああああああ!!!」

体が一回り大きくなり、より禍々しい姿となったアラクネが現れ、力を誇示するように高々と咆哮を上げる。

さっきまで地下空間内に飮んでいた苦痛な叫び声に変わり、今度はその咆哮が地下空間を揺らす。

超ツナ

「くっ
」

ツナは直感的に危険だと判断し、先手必勝と言わんばかりにアラクネに向かう。

超ツナ

「^{イクス}Xブレイズ!!!」

ダアアアン!!!

ツナは炎を纏った拳をアラクネの腹に叩き込んだ。

さらに、

超ツナ

「はあああ!!!」

ダアアアアン！！！！

纏っていた炎を発射し、アラクネの体を焼き尽くした

アラクネ

「ヒッヒッヒッヒッ」

超ツナ

「っ！？」

筈だった。

しかし、現実とは違っていた。

アラクネ

「効かねえんだよ！そんなモン！！」

アラクネは纏わり付く炎を振り払い、体から生えた触手でツナを攻撃する。

超ツナ

「くっ！！」

ツナは超直感と高い機動力を駆使し、その触手を順々に躲している。

7属性随一の推進力を誇る“大空”の炎を使いこなすツナにとって、
こう言った攻撃の回避はお手の物だ。

アラクネ

「逃がすか!!」

ピシューーッ!!

アラクネの半身である大蜘蛛の口から1本の糸が高速で撃ち出され、
ツナの足を捕らえた。

超ツナ

「しまった!!」

ツナは何かを感じ取り、再び移動しようとしたが、その時には既に
右足が蜘蛛の糸に絡め取られていた。

そして、超加速でそれを引き千切るうとするツナに、アラクネの触
手が迫っていた。

アラクネ
ボイズン・テントクルス
「猛毒の触手！！！！」

バシイイイツ！！！！

超ツナ

「ぐああっ！！」

ドオオオオオン！！！！

アラクネの触手攻撃を受けたツナは、地面に叩きつけられてしまっ
た。

超ツナ

「くっ　　！？ぐっ、がはっ！！」

さらに、地に片膝をついていたツナは、突然全身が焼かれるような
激痛に襲われ、思わず吐血する。

その正体は

ボイスン
“猛毒”

アラクネ

「ヒッヒッヒッ！私の触手には蜘蛛の体内で精製された猛毒が塗つてある。そのまま内側から鎔けちまいな！！」

最早何をするでもなく、勝利は決定している。

そう思い、のた打ち回るであろうツナを見ようと、アラクネが気を緩めたその瞬間、

超ツナ

「おおおおお！！！！」

アラクネ

「なっ！！！？がはあっ！！！！」

蹲っていたツナが急に立ち上がり、再びアラクネの腹に拳を叩き込む。

なっ！！！！

超ツナ

「はああ!!」

アラクネ

「ぐふうっ!!」

拳を叩き込んだ瞬間に体を反転させ、逆さまの状態からアラクネの顎を蹴り上げた。

その攻撃で少し踉跄けたアラクネだったが、辛うじて体勢を保ち、ツナを睨む。

アラクネ

「な、何故 何故動けるんだ!? 毒が効いていないのか!？」

アラクネは半信半疑のまま、眼の前の人物に問い掛ける。

その表情は、今の心情と攻撃による苦痛で歪んでいる。

超ツナ

「オレの炎の特徴は“調和”。その能力で、お前の毒の成分を限りなく無害なものに変化させたんだ」

アラクネ

「なっ！！！！」

自分の半身である蜘蛛の体内で精製された強力な猛毒がいとも簡単に無効化された。

その事実が、アラクネの表情をさらに歪める。

アラクネ

「だ、だったら、もう一度毒を「無駄だ」「っ！！」

超ツナ

「無効化したとは言え、オレの体はお前の毒を受けた。それによってオレの体内には既に毒の抗体が作られている。今度は苦しむ前に毒を無効化出来るぞ」

“ 毒は効かない ”

ツナが突きつけた事実にも、アラクネは遂に壊れた。

アラクネ

超ツナ
「X^{イクス} BURNER^{バーナー}!!!!」

ドオオオオオオン!!!!!!

ツナが構えた右手から放たれた剛炎が、アラクネを呑み込み、大爆発を起こした。

しかし、

アラクネ

「ハア、ハア、ハア、ハア

」

爆発によって発生した煙が晴れると、アラクネははまだ生きていた。

しかし、全身ボロボロで息も絶え絶え、そんな状態で仰向けに倒れている。

それこそ文字通り“死に損ない”と言う状態だった。

それを見据えるツナに、アラクネは訴え掛ける。

アラクネ

「ハア、ハア

たす、けて

くれ

」

“ 助けてくれ ”

アラクネが発した微かな言葉だ。

アラクネ

「私が 悪かった

赦して

くれ

」

“ 赦してくれ ”

反省を言葉にするアラクネ。

超ツナ

「オレも無駄な殺しはしたくない

。今ここでお前を殺さず、助

けてやってもいい

」

ツナのその言葉を聞いたアラクネは、微かな笑みを浮かべる。

しかし、

超ツナ

「その言葉が本心ならな」

アラクネ

「っ！！！！！！」

次にツナが言った言葉に、アラクネの笑みが崩れる。

超ツナ

「お前は言葉ではそう言っているが、本心はそんな事少しも考えちゃいない」

ツナは直感的に、アラクネの本心を見抜いていた。

それがわかった途端、アラクネが声を荒げる。

アラクネ

「何故だ！！何故赦してくれない！！貴様らは、ジェイル・スカリエッティを仲間に行っているくせに！！！！」

超ツナ
「!!!」

アラクネ

「同じ命を冒したスカリエッティを赦しておいて、何故私は赦されないんだ!!! こうやって反省して、謝っているのに!!! 何故だ!!!」

アラクネの憤りは理不尽なものだ。

しかし、同じ犯罪者であるスカリエッティを仲間に行っているのも事実。

アラクネはそこを突いた。

が、ツナにとって、それは取るに足らない問題だった。

超ツナ

「謝るだけなら 今のお前のように、誰にだって出来る」

アラクネ

「!!!」

超ツナ

「でも

“償い”はそう簡単に来るものじゃ無い！」

“謝る事”と“償う事”

似たような言葉だが、ツナの中では大きく違う。

超ツナ

「スカリエッティは今、必死に償おうとしている。自分の過ちを認め、自分の罪を見つめ、必死にそれと戦っている」

ツナの頭の中には、六課のために尽力するスカリエッティ達の姿があった。

超ツナ

「謝ればそれで済む　そんな事を考えているお前と一緒にするな
！！」

ツナの心には、仲間を侮辱された事への怒りが満ちていた。

そして、アラクネの怒りも又、溢れた。

そして、決着の時。

超ツナ

ダブルイクスバーナー
「XXX BURNER!!!!!!」

ツナの両手から、ナッツの顔を模した強烈な炎が撃ち出された。

アラクネ

「うぎゃあああああああ!!!!!!」

放たれた炎は巨大化したアラクネを丸々呑み込み、

ドカアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!

その体が爆発する前に、アラクネと言う存在を完全に焼き尽くし、掻き消した。

超ツナ

「ハア、ハア、ハア、ハア」

ツナはすべてのチカラを出し切り、その場に蹲る。

しかし、

ゴゴゴゴゴ

超ツナ

「っ！！！」

突然、地響きが起こり、地下空間が揺れる。

どうやら今の爆発の衝撃で崩壊し始めたようだ。

それを感じたツナは、はやて達を抱え、地下から脱出する。

その後、ギリギリで地下から脱出したツナ達は、遅れてやって来た他の六課メンバーによって保護され、六課へと戻っていった。

はやて

「う、ううん 二二は」

ツナ vs アラクネの対決から数時間後、傷ついたはやては、六課の医務室で眼を覚ました。

ツナ

「あ、はやて、気がついた？」

はやて

「ツナ 君」

はやてが眼を覚ますと、傍にいたツナが声を掛けた。

ツナははやてが起きるまで、ずっと傍で看病していたのだ。

はやて

「ツナ君 アイツは どうなったんや？」

“アイツ”とはアラクネの事である。

はやては諸々の事情をツナに訊いた後、ある事を思い出した。

はやて

「私 シャマルとザフィーラを この手で」

はやては自分の両手を見つめながら、その体を小刻みに揺らす。

自分が家族を撃つたと言う事実が、いまだはやての心を、体を、恐怖で震わせていた。

ツナ

「はやて」

そんなはやてを、ツナはそっと抱きしめた。

はやて

「！！ツ、ツナ君！？」

ツナのいきなりの行動に、はやては少し混乱する。

そして、そんなはやてに、ツナは優しく語り掛けた。

ツナ

「大丈夫　はやては何も悪くないよ」

はやて

「でも　私が2人を撃つたのは」

ツナ

「2人がさ、あの後何て言ってたかわかる？」

はやて

「？」

はやては見当が付かず、首を横に振る。

ツナ

「2人共ね、“はやては大丈夫？”って言ってたんだ」

はやて

「!？」

はやては思いも寄らぬ答えに、驚愕の表情を浮かべる。

まさか、自分達を撃った本人を心配するなんて。

ツナ

「家族ってそう言うモンだよ。いつだって、どんな時だって家族の事を思ってる。それが普通なんだ」

ツナという言葉、シャマルとザフィーラの思いに、はやてはその瞳に薄らと涙を浮かべる。

しかし、はやてはそれを堪えようとしているのか、下を俯く。

それを見たツナは、はやてに再び語りかける。

ツナ

「泣いていいよ」

はやて

「え？」

そんな不意の一言に、はやてはキョトンとした表情を見せる。

ツナ

「前にも言ったけど、はやてだって普通の女の子なんだからさ
我慢なんてしないでいいんだよ」

はやて

「で、でも」

はやてはどこかで泣いてはいけないと思っていた。

六課の部隊長として、一人の魔導師として、泣くのをずっと堪えて
いた。

だから、ツナにそう言われても、すぐに泣く事は出来なかった。

しかし、ツナはそのはやての思いもどこかで感じていた。

ツナ

「じゃあさ、今だけ泣いよう」

そう言うツナだったが、はやては今一その言葉の意味がわからな
かった。

ツナ

「今だけ泣いて　それでももし、また辛くなったら　泣きたくなったら　その時は、オレがいるから」

ツナははやてに優しく微笑み掛ける。

ツナ

「オレがずっと、はやてを護るから」

はやて

「っ!?!」

その言葉で、はやての心は“部長”のものから、一人の“少女”のものへと変わった。

はやて

「っ、っわああああああ!?!」

はやてはそのままツナの胸の中で泣いた。

泣き続けた。

ツナはそれを、優しく受け止め続けた。

その日の六課の医務室には、1人の少女の、健気で純粹な涙が溢れていた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第52話 『決意のXX（ダブルイクス）』（後書き）

これでもかなり手直ししたんですが

何が何やら

感想、指摘、要望、質問等お待ちしてます。

ではまた

次回、『魂魄消失事件』

第53話『魂魄消失事件』（前書き）

今回は若干短めかと思われます。

では、ごんぞ

第53話『魂魄消失事件』

【3人称side】

とある市街地。

夜でも比較的明るい

と言うよりは、眩しい程の光が溢れる街

所謂ネオン街。

そんな明るい街の大通りを沢山の人が行き交う中、ビルとビルの間
に位置する小さな路地裏。

そこで、とある事件が発生していた。

ドサッ

その路地裏で、1人の女性が突然、崩れ落ちるように倒れ込んでしまっ
た。

しかし、特に外傷を負っている様子は無く、苦しんでいる様子も無い。

ただ、その眼には光が宿っていない。

路地裏に差し込むネオンの光に照らされても猶、とても深い闇に鎖されていた。

まるで

魂が無くなってしまったかのように。

一護

「意識不明者が続出？」

部隊長室で、はやてから事件について聞かされる一護。

その他に、ギンガ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディの5人がいる。

はやてが捜査のために派遣しようとしているメンバーだ。

はやて

「うん。それも原因不明のな」

ウエンディ

「原因不明ってどう言う事っすか？」

ウエンディがはやてに訊ねる。

はやて

「普通、体に強い刺激を与えると、意識が無くてもある程度反応したりするんや。けど、被害者は全員、そう言う反応が一切見られへん。つまり、普通の意識不明状態じゃないって事や」

ギンガ

「と言う事は」

チンク

「何かしらの魔法や術を掛けられている、と言う訳か」

はやて

「そうや。今までこんな不可解な事件は無かった。それがこのタイミングで発生した言う事は」

一護

「七戦鬼が関係してる。って言うのか？」

はやて

「恐らくな。行ってくれるか？」

はやての推察としては、今回の事件は七戦鬼が起こしているかも知れないと言う。

不確かではあるが、強ち間違ってもいないように思える。

一護を含めた6人のメンバーは、捜査任務を了承し、日が没してから行く事となった。

それと言つのも、事件が発生している時間帯が、大体夜の22時から深夜2時の間に集中していたからである。

そして、事件発生の時間帯である22時少し前。

一護達6人は、捜査のため、夜の街へと向かった。

夜の街

その一角に位置する5、6階建てのビル。

一面がガラス張りのそのビルの屋上に、人影があった。

全身を漆黒のローブで覆い尽くし、顔の部分から不気味な赤い瞳を

覗かせるその人影は、街行く人々を見下ろしている。

そして、暫くした後、月を背にしたまま遠くを見つめ

?????

「来るか 機動六課」

と、呟いた。

声からすると、どつやら男のようだ。

ロープを纏った男の視線の先。

そこには、一護達が乗っている六課のヘリが飛行しているのが見える。

フウウ

瞬間、ビルの屋上を夜風が駆けたかと思うと、そこにいた黒い人影が消えていた。

一護達を乗せたヘリは、郊外の開けた場所に着陸した。

ヘリから降りた一護達は、着陸場所から数分間歩き、例の事件が多発しているネオン街へとやって来た。

一護

「夜だつて言うのにかなり明るいな」

ギンガ

「この辺は有名なネオン街ですからね。今くらいの時間帯はいつもこんな感じですよ」

ノーヴェ

「幾らなんでも明るすぎじゃねえか？」

ウェンディ

「でもあんまり暗いのも嫌じゃないっすか？」

デイエチ

「別にどつちでもいいんじゃない？」

チンク

「お前達 遊びに来たんじゃないぞ！」

6人はそれぞれ思う事を口にする。

それによってチンクに怒られたノーヴェ、デイエチ、ウエンディは縮こまり、一護とギンガは苦笑しながらそれを見ている。

そんなこんなでチンクの説教は数分間続いていたが、見兼ねた一護がそれを切り上げさせ、6人は捜査へと乗り出した。

一護とギンガ、チンクとデイエチ、ノーヴェとウエンディの3組に別れ、別々に聞き込みや不審人物の捜査を行っていた時

それは、ノーヴェ・ウエンディ組の前に現れた。

ノーヴェ
「ん？」

ウエンディ

「ノーヴェ？ どうしたんスか？」

ネオン街の西側の表通りを中心に聞き込み等を行っていたノーヴェとウエンディ。

しかし、その表通りから通じる比較的暗めの路地を見つめ、ノーヴェが立ち止まった。

それに気づいたウエンディも同じように路地の方を覗き込み、ノーヴェに訊ねる。

ノーヴェ

「いや 見間違いかも知れないんだけどさ 。さっきそこに、

変なヤツいなかったか？」

ウエンディ

「変なヤツっすか？」

ノーヴェは路地の向こうを指差して言い、ウエンディもその方向を眼を凝らして見る。

しかし、

ウエンディ

「誰もいないみたいっすけど」

ウエンディの眼には、“変なヤツ”は映らなかった。

ノーヴェ

「うーん、おかしいなあ。やっぱり見間違いかなあ」

ウエンディの答えを受け、ノーヴェは見間違いと考えた。

そして、再び捜査に戻ろうとした時

ノーヴェ・ウエンディ

「「！！！！！！？」」

2人は自分達の眼がおかしくなったのかと思った。

何故なら

さっきまで表通りを行き交っていた人々が

1人としていなくなっていたからだ。

ノーヴェ

「な！？ どうなってんだ！？」

ウエンディ

「ひ、人が、消えてるっス！！」

2人は混乱するままに、辺りを見渡す。

しかし、何処を見ようと、何度見ようと、人っ子1人いない。

空を見上げると、月や星さえも無く、限りなく漆黒の闇が広がっていた。

その所為か、辺りはネオンの光があるにも関わらず、どこか薄暗い。

ノーヴェ

「っ！！ ウエンディ！ チンク姉達に連絡を」

ウエンディ

「やってるっスよ！！ けど、何でか繋がらないんスよ！！」

ノーヴェが他のメンバーに連絡を取るようウエンディに指示すると、それを遮る感じにウエンディが通信が出来ないと訴える。

その時

フウウ

ノーヴェ・ウエンディ

「（ゾクッ！！！！）」「

不意に夜風が駆け抜け、2人の髪を微かに靡かせる。

別にその風が冷たかった訳では無かったが、2人は背筋が凍るような悪寒を感じた。

そして、その悪寒の原因なるものが、2人の目の前に現れた。

ノーヴェ・ウエンディ

「っっ!!!!!?!?!?!」

2人は思わず身構える。

眼前にいる、漆黒のローブを纏った男に対して。

ノーヴェ

「何だお前!!」

ノーヴェが男に対して怒声を放つ。

?????

「」

しかし、男は一切の反応を見せない。

その雰囲気、余計に2人の恐怖心を掻き立てた。

ノーヴェ

「くっ！ 答える！！ お前は誰だ！！！」

そそり立つ恐怖心を何とか払拭し、ノーヴェは再び男に向かって怒声を放つ。

しかし、又しても男は無反応。

遂に、ノーヴェはキレた。

ノーヴェ

「っ！！ 答えるつつつてんだろ！！！」

相手が丸腰だったので、今まで攻撃を躊躇っていたが、ここまで来ると最早関係無い。

そもそも、事件の捜査に来ているのだから、不審人物相手に遠慮は

無用。

そう思い、ノーヴェは拳を振り上げ、男に殴り掛かる。

が、

スッ

ノーヴェ・ウエンディ

「っっ！！！！？」

突然、2人の視界から男が消えた。

その直後、背後から不気味な気配を感じ、即座に振り向いた瞬間

ザアアアアン！！

ノーヴェ

「なっ！！？」

ウエンディ
「ぐっ!!」

2人の体が、男の持つ大鎌によって斬り裂かれた。

その瞬間、男の姿は消え、街には人が行き交い、空には月や星が輝いていた。

まるで、今までの事がすべて夢だったように、普段と何も変わっていない

かのように思われた。

その時

ドサッ

行き交う人々の中、ノーヴェとウエンディが突然、崩れ落ちるように倒れ込んでしまった。

しかし、特に外傷を負っている様子は無く、苦しんでいる様子も無い。

ただ、その眼には光が宿っていない。

四方八方から眩いネオンの光が差し、とても深い闇に鎖されていた。

まるで

魂が無くなってしまったかのように。

行き交う人々が倒れた2人を心配し、その近くに集まる。

その様子を、近くの建物の屋根から見下ろす人影があった。

漆黒のローブを纏った男だった。

そして、男は暫くその様子を見下ろした後

???

「先ずは 2人」

と、眩いた。

フウウ

瞬間、夜風が屋根の上を駆けたかと思うと、そこに男の姿は無かつた。

T O B E C o n t i n u e d

第53話『魂魄消失事件』（後書き）

色々つまあご都合的に今回のメンバーとなりました。

すみません。

感想・指摘・要望・質問等お待ちしております。

ではまた

次回『魂を司る者』

第54話『魂を司る者』（前書き）

新たな七戦鬼との戦いが勃発。

では、どうぞ

第54話『魂を司る者』

【3人称side】

深夜のネオン街で事件が発生した。

まるで魂が無くなってしまったかのように、意識を失ってしまう被害者が続出する事件。

そして、今回の被害者は

事件の捜査へとやって来ていたノーヴェとウエンディだった。

2人と連絡が取れなくなった事を不審に思ったチンクとデイエチが一護・ギンガと合流し、その場所へと向かった時には、既にノーヴェとウエンディは倒れていた。

駆けつけた一護達は、ノーヴェとウエンディを一度六課へと戻すため、ヴァイスにヘリを出してもらい、2人を運んでもらった。

チンク

「くっ！！ 一体、誰が2人を！！」

ディエチ

「姉様」

チンクは姉として、妹達を意識不明の状態へと陥れた犯人に、強烈な怒りと殺意が湧いた。

そんな姉の様子を、心配そうな表情で見つめるディエチ。

一護

「落ち着けよ、チンク。ディエチも心配してんぞ」

チンク

「うっ　　すまない、ディエチ」

ディエチ

「うっん」

激昂寸前だったチンクは、一護に宥められ、なんとか冷静さを取り戻す。

その様子に、ディエチの心配そうな表情は一転、安堵の表情となる。

ギンガ

「どうしますか？ 一護さん」

一護

「どうするも何も、犯人を捜す他無えだろ」

チンク

「そうだな。まだこの辺りにいるかも知れないし」

一護

「ああ。それじゃあ、もう一度二手に別れて捜そう。けど、何かあったらすぐに連絡しろよ」

デイエチ

「わかった」

4人は話し合いの結果、再び、一護・ギンガ、チンク・デイエチの2組に別れて捜査を再開する事にした。

しかし、この4人の中から再び被害者が出る事になることは、この時、誰も知る由も無かった。

チンク

「どうだ？　　デイエチ　　。怪しいヤツはいたか？」

デイエチ

「ううん　　。特には　　」

現在、チンクとデイエチは、建物の上から、ネオン街を行き交う人々を見渡し、その中から怪しいヤツを捜そうとしていた。

しかし、何処を見ても、誰を見ても、怪しそうと言えば怪しそうだし、そうでないと言えばそうでない。

完全に手詰まりだった。

チンク

「くそっ！　せめて犯人がどんなヤツかさえわかれば　　！！」

唯一犯人を見たであろう2人の妹達はいない。

チンクは唇を噛み、少しずつ苛立ちを募らせていった。

その時

ディエチ

「っ！！？」

チンク

「ど、どうした！？」

数キロ先の大通りを見ていたディエチが急に立ち上がり、その行動に驚いたチンクが訊ねる。

ディエチ

「今　あの大通りにいた黒いローブの男　こつちを見た」

チンク

「何！？」

チンクも慌ててその方向を見るが、通常の肉眼で見る事はまず不可能だ。

ナンバーズの眼に搭載されている光学ズーム能力でも無い限り、数キロ先にいる自分達が見える筈も無い。

しかし、ディエチは確かに眼が合ったと言う。

チンクは思った。

もしそれが本当なら

チンク

「(その男が、犯人か!?)」

と。

その考えに至った直後

???

「察しの通りだ」

チンク・ディエチ

「「!!!!!!」」

背後からそんな声が聞こえた。

2人が振り向くと、そこには、さっきディエチが見たと言つ黒いロ
ーブの男が立っていた。

チンク

「貴様、何者だ!!!」

チンクはステインガーを構えながら、男に訊ねる。

ディエチも又、銃型の新武装『イノームスショット』を構えている。

接近戦や速攻戦にも対応出来るように、シャーリーとスカリエツテ
イが、イノームスカノンをベースに、ティアナのクロスミラージュ
を参考にしながら作った新兵器だ。

????

「フッフッフ　私は　そうだな　“魂を司る者”　と
でも名乗っておこう」

チンク

「魂だと!?　まさか、被害者が全員意識不明なのは　」

???

「そうだ　私が、魂を刈ったのだ」

チンク・デイエチ

「「っ! ! ! ! !」」

2人は背筋が凍った。

魂を刈る魔法など聞いたことが無い。

しかし、現にそういった事態が起きている。

チンク

「（コイツが、2人を　）」

だが、チンクの中ではそんなもの、どうでも良かった。

その心から溢れ出す思い。

それは

“大切な妹達の仇”

一護に宥められ、収まったかに思えた怒りが、胸の奥に燻っていた怒りが、再び、そして一気に爆発した。

チンク

「うおおおおおお!!!!!!」

2つのスティンガーを振り翳し、男へと飛び掛るチンク。

ディエチ

「姉様! 待って!」

ディエチが制止を掛けるが、チンクの耳には届いていない。

チンク

「はああっ！！！！」

????

「フツ」

ガキイイイイン！！！！

チンクは両手のステインガーで同時に斬り掛かるが、男の持っている大鎌の刃がそれを良しとしない。

????

「あまり、熱くならん方がいい」

チンク

「黙れ！！ よくもノーヴェとウエンディを！！ 赦さんぞ！！」

チンクは怒りの形相を見せ、男を睨む。

デイエチ

「姉様！」

チンク
「ああ！」

デイエチの合図を受け、チンクは男との鏝迫り合いを放棄し、後方へと下がる。

チンク・デイエチ

「ハイパーIS、発動！！」

???

「！！！！」

チンク

「サンダーデトネーション！！！！」

デイエチ

「ボルトティックシュート！！！！」

ドカアアアアアン！！！！

チンクが四方から放ったスティンガーが爆雷を起こし、デイエチの銃から雷の弾丸が発射され、大爆発を起こす。

七戦鬼との戦いに備え、新たに強化されたIS、“ハイパーIS”。

それぞれの元の能力に、属性攻撃を付加させる新能力。

仮に、敵と対峙する事になった場合を想定し、予め考えておいた作戦。

“中距離からの同時攻撃”

それが見事に炸裂した

???

「クツクツクツ

」

チンク・デイエチ

「「!!!!!!」」

かに思えた。

???

「少々 驚いたぞ

」

爆発によって生じた煙が晴れると、男はまだ倒れていなかった。

しかし、ノーダメージと言う訳でもない。

大鎌を持つ右腕からは血が滴り落ち、纏っていたローブも吹き飛んでいる。

その容姿が2人の眼に映った瞬間

チンク・ディエチ

「（ゾクッ！！！！）」

2人の体を強烈な寒気が駆け抜けた。

その男の容姿は、普通の人の形なりとは懸け離れていた。

体表が灰色で、全身が骨張っており、顔は“人”と言うよりも、寧ろ“骸骨”に近く、瞳は燃えるような真紅色をしていた。

????

「よもやこの姿を再び世に晒す日が来ようとは 眠りについた時は思いも寄らなんだ」

男 いや、最早人外とでも言うべき眼の前の存在に、チンクとデイエチは少し後退する。

???

「この際だ 真名も晒す事としよう」

チンク・デイエチ

「っつ！！！！」

人外の真紅の瞳が2人を捉える。

その瞬間、2人の後退は止まった。

いや、止められた。

自分達を射抜く不気味な眼光を受け、体が無意識のうちに動作を放棄してしまった。

そんな2人に近付きながら、人外は語る。

?????

「我が名は“不死の王”

“死王^{しおう}リッチー”だ

」

【一護 side】

捜査を再開してから1時間弱。

結局、何も情報は得られなかった。

ギンガ

「一護さん!」

一護

「おう、どうだった?」

ギンガ

「ダメですね。完全に手詰まりです」

チンク達と別れた後、ギンガとも二手に別れて色々訊いて回ったが、さっきも言った通り、結局情報は無し。

ギンガの言う通り、完全に手詰まりだ。

ギンガ

「ただ」

一護

「ただ？」

ギンガ

「チンク達と連絡が取れないんです」

一護

「？」

変だな。

俺は「何かあったら連絡しろ」って言った。

確かに何も無かったら連絡はしねえかも知れねえが、こっちからの連絡を無視する筈は無え。

って事は

“何か連絡が取れない状況に陥った？”

そんな考えが脳裏を過ぎった瞬間

一護

「っ！！！」

ギンガ

「？ 一護さん？」

“何か”を感じた。

禍々しい程の“何か”を。

コイツは

一護

「霊圧!？」

ギンガ

「え!？」

何で霊圧が

いや、それより 何か違う

俺の世界の霊圧とは、何か

一護

「くっ!?!」

ギンガ

「あ! 一護さん!?!」

考えてる暇は無え！

取りあえず、この霊庄の正体を確かめるのが先だ！

俺はギンガと一緒に、霊庄を感じた方へと駆け出した。

【3人称side】

チンク

「ハア、ハア、ハア、ハア

」

デイエチ

「ハア、ハア、ハア、ハア

」

リッチー

「ほう　中々粘るではないか」

チンクとデイエチが、リッチーと戦い始めて数十分

チンク・デイエチ

「（コイツ　強い！！）」

2人共、そう感じていた。

チンクとデイエチも、かなり修練を積んで、連携も高めていたつもりだったが、それが全く通用しないのである。

チンク

「（これが、七戦鬼の実力か！？）」

七戦鬼の　リッチーの実力は、明らかに2人よりも上だった。

2人共、それを身に沁みる程感じていた。

リッチー

「だが、そろそろ私も疲れた」

そう言ってリッチーが大鎌を構え、2人の方へと迫る。

リッチー

「貴様らの魂　私が貰い受ける！！」

リッチーが大鎌を振り上げ、2人に斬り掛かる。

ディエチ

「っ！！」

ディエチは咄嗟に眼を瞑ってしまう。

が、

ガキイイイイン！！！！

チンク

「くっ！！！！」

その斬撃を、チンクがスティングァーで受け止めた。

デイエチ

「姉様!？」

デイエチは瞑っていた眼を開き、その光景に驚く。

そして

チンク

「逃げる!! デイエチ!!」

デイエチ

「なっ!？」

チンクはデイエチを逃がすため、リッチーの攻撃を受け止めたのだ。

チンク

「ここは私が食い止める! お前は、一護達を呼んで来い!!」

デイエチ

「でも!!」

チンク

「いいから行け！！ 姉を信じる！！」

チンクがここまで怒鳴るのも珍しい。

基本的に妹達には優しく、面倒見も良い。

だからこそデイエチも感じていた。

チンクもかなり切羽詰っているのだと。

だからこそ

デイエチ

「姉様を置いて行くなんて、出来ない！！」

チンク

「デイエチ」

チンクを見捨てるような真似は、出来なかった。

信じていない訳ではない。

ただ、それ以上に、恐かった。

ノーヴェとウエンディのように、チンクまでもが、魂を取られてしまうのではないか

ディエチの心に、そんな思いが渦巻いていた。

リッチー

「フツ　心配するな　」

そんな姉妹愛を眺めていたリッチーが、徐に左手を翳す。

リッチー

シャドウ・シツクル
「黒影の鎌」

ザザザアアアアン!!!!

チンク

「ぐっ!?　ぐああああ!?!」

突然、チンクの影から複数の黒い鎌が出現し、その体を斬り刻んだ。

デイエチ

「姉様！！」

デイエチが悲痛な声で叫ぶ。

しかし、その声が姉チンクに届いたとしても

リッチー

「2人共 仲良く逝かせてやる」

死神リッチーに届く事は無かった。

そして、リッチーは再び手に持つ大鎌を振り上げる。

デイエチ

「（助けて）」

デイエチは願った。

デイエチ
「助けて
」

声に出して、助けを求めた。

デイエチ
「助けて
一護
っ！！！！！！」

デイエチは叫んだ

そして、願いは、通じた。
。

ガキイイイイイイン！！！！！！

リッチー
「何！！？」

チンクに向かって振り下ろされた大鎌は、止められた。

チンク
「一護
？」

死神代行

一護

「悪い　遅くなっちゃまったな　」

黒崎一護によつて　。

一護はチンクを抱きかかえたまま、リッチーの斬撃を受け止めている。

一護

「っ！！」

リッチー

「！！！？」

受け止めていた大鎌を押し退けた一護は、チンクをディエチの許へと運ぶ。

ディエチの傍にはギンガもいた。

一護

「ギンガ、2人を頼めるか？」

ギンガ

「わかりました！」

一護は2人をギンガに託すと、リッチーの方へと向き直る。

リッチー

「黒崎一護 何故お前がここにいる？
魂域ソウル・ドームによって外界とは隔
離している筈だが」

一護

「ああ。その仰々しい結界が張ってあった所為で、来るのが遅れち
まったけどな」

一護は斬月を肩に担ぎ、愚痴を零す。

一護

「でもまあ、お前のその気持ち悪い霊圧は、ハッキリと感じれたぜ」

リッチー

「なるほど やり過ぎてしまったと言いつ訳か」

リッチーは軽く笑みを零す。

しかし、その顔が顔だけに、その軽い笑みさえも不気味だった。

リッチー

「お前は最後の獲物のつもりだったんだがな」

そう言って、リッチーは再び大鎌を構える。

一護

「ああそつだ、俺が最後の獲物だ そんで」

一護は担いでいた斬月を前に突き出し

一護

「勝つのは 俺だ!!」

左手を添える。

一護

「卍!!! 解!!!!」

ドオオオオツ!!!!

赤黒い霊圧が膨れ上がり、その中から卍解の死覇装を纏った一護が現れた。

一護

「天鎖斬月」

リッチー

「ほう　それが貴様のチカラか」

リッチーは一護の姿を見て、どこか感心したような言葉を吐く。

そして、一護はそんなリッチーに漆黒の刃を向ける。

一護

「手加減は、しねえ!!!」

死神　VS　死神

“魂を護る者”と“魂を刈る者”

その戦いが始まった。

T
O
B
E
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第54話『魂を司る者』（後書き）

護る死神 VS 刈る死神

何となく書きたかった話です。

あ、ついでにオリ設定の説明を

【イノーマスショット】

イノーマスカノンの銃型版。

【ハイパーIS】

ISの強化版。基本的に属性付加能力。

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、『魂の死闘！ VS 死王リッチー』

第55話『魂の死闘！ vs 死王リッチー』

【3人称side】

草木も眠る丑三つ時。

それでも眠る事の無いミッドのネオン街。

しかし、そこは今、暗闇に鎖されていた。

その闇の中

一護

「おおおおお！！！！」

リッチー

「はあっ！！！」

ガキイイイイン！！！！

死神代行・黒崎一護は、七戦鬼の1人・死王リッチーと刃を交えて

いた。

一護

「月牙天衝！！！」

リッチー

「黒月の鎌！！！」

ドカアアアアン！！！！

両者が放った斬撃は、ぶつかった瞬間に爆発を起こして消える。

威力が拮抗しているため、相殺されているのだ。

リッチー

「フツ　やはり、やるな　黒崎一護　実に刈り甲斐があると
言うモノだ　」

一護

「　言ってる　」

リッチー

「ならば　これはどうかな？」

一護

「？　っ！？」

リッチーが手を翳すと、一護の影から無数の鎌が出現した。

一護

「チッ！　月牙天衝！！！！」

ザアアアアン！！！！

一護は一撃ですべての鎌を薙ぎ払ったが、1つだけ、払えていない鎌があった。

リッチー

「御魂削り」

ザアアアン！！！！

一護

「ぐっ！！！！」

リッチーの大鎌の斬撃を受けた一護は、蹠踵けながらもリッチーから離れる。

そして、リッチーから眼を逸らさないまま、斬魄刀を構える。

一護

「てめえのその鎌　斬られたら魂を取られるんじゃないのか？」

リッチー

「この『冥府の大鎌』には2つの能力がある。1つは、相手の魂に直接ダメージを与える能力。もう1つは、生体から魂を刈り取る能力だ。そして、貴様の体は今では霊体　言わば魂そのものの状態。つまり、貴様相手では、これはただの“やけに良く斬れる大鎌”に過ぎん」

リッチーは手に持つ大鎌を一護に見せながら語る。

一護

「なるほどな」

一護はなんとなく納得した。

リッチー

「さて 続きと、行こうか」

一護

「!!!」

リッチーが再び手を翳すのを見て、一護は身構える。

瞬間、両者の周りに風が吹き始めた。

リッチー

ウィンド・サイス
「疾風の鎌」

ザアアン!

一護

「ぐっ!!!」

ザアアン!

一護
「ぐう」

ザアアン！

一護
「ぐああっ！！」

辺りの風が突然一護に襲い掛かり、その体を次々に斬り裂いた。

リッチー
「炎魔の鎌！！」

風の鎌の攻撃に続き、リッチーは炎を纏った大鎌振り翳し、一護に追撃を掛ける。

一護
「くっ！！」

ガキイイイイン！！！！

一護は炎の鎌をギリギリで受け止める。

そして、受け止めた鎌を押し返し、そのまま月牙を

リッチー

「（月牙天衝か）」

一護

「おおおおお！！！！」

リッチー

「何！？」

斬魄刀に纏ったまま、リッチーに斬り掛かる。

ガキイイイイン！！！！

リッチー

「くっ！！！！」

今度はリッチーが一護の斬撃を受け止める。

が

一護

「月牙天衝！」

リッチー

「っ！！！！」

ザアアアアン！！！！

一護は刀身に纏わせていた斬撃を放ち、リッチーを斬り裂いた。

リッチー

「くっ！ 小癩な！」

リッチーは一護から距離を取ろうと離れるが、一護はそれを良しとしない。

一護

「月牙」

リッチー

「!!!?」

突然背後から声が聞こえ、リッチーが振り返ると、仮面を付けた護が再び斬撃を

一護

「天衝!!!」

放った。

ザアアアアン!!!

チンク

「よし!」

ギンガ

「やった!」

ギャラリーからも歓喜の声が上がる。

しかし

リッチー

「クツクツクツ

」

一護

「!?!」

リッチー

「やるじゃないか

」

リッチーはいまだそこにいた。

上半身のみで 。

一護

「なっ!?!」

ギンガ・チンク・ディエチ

「「「ひいっ!?!?!?!」」」

その姿に一護は驚愕し、ギャラリーは悲鳴を上げる。

一護

「なんだよ それ」

リッチー

「クツクツクツ」

リッチーが不気味に笑う。

すると、リッチーの体から黒い霧のようなものが発生し、その霧が徐々に下半身を形作っていく。

リッチー

「私は “不死の王” なんだよ」

一護

「（ゾクッ！！！！）」

リッチーの不気味な笑みに、一護は自分の心の奥底に恐怖が生まれるのがわかった。

一護

「くっ」

刀を握る腕にも自然と力が籠もる。

そして、ジツとリッチーを見据えていた

リッチー

「どこを見ている？」

一護

「っ！！！！」

筈だった。

しかし、突然背後からその言葉が聞こえた。

慌てて振り返る一護だったが、そこには

一護

「！！！！？」

誰もいなかった。

リッチー

「雷霆の鎌」

ザアアアアン！！！！

一護

「ぐっ！！！！」

背後から斬りつけられた一護は、蹠踵けながらもその方へと身を翻し、反撃に出ようとす。

が

一護

「っ！！！？」

自分の体が思うように動かない。

何か、雷霆に撃たれ、全身が麻痺しているような

一護はそんな感覚に襲われた。

そんな一護に、リッチーは容赦無く追撃を掛ける。

リッチー

「斬魂無葬！！！！」

ザアアアアアン！！！！！！

一護

「かはっ

」

斬撃を受けた一護は、鮮血を散らしながら地面に墜ちていく。

一護

「ぐっ

っ

」

地面に墜ちた一護は、その場に倒れ伏したまま、宙に浮くリッチーを睨む。

その手にはいまだ刀が握られており、“戦う”と言つ意志が見て取れる。

リッチー

「ほう　今を受けて猶ソレとは　。　貴様の魄動は余程強いのだな　」

リッチーは地面に伏した一護を見据えながら、その胸中を語る。

リッチー

「だが　」

ギンガ

「おおおおお！！！」

リッチー

「！！！！？」

ギイイイイイン！！！！

一護を見下ろしていたリッチーに、ギンガが突然殴り掛かった。

リッチーは咄嗟に鎌でその攻撃を防ぎ、ギンガを押し返す。

ギンガ
「っ!!」

押し返されたギンガは一護の許に着地し、一護を庇う形で立つ。

一護
「ギンガ!!」

一護はギンガの身を案じて叫ぶ。

それを感じたのか、ギンガは振り返り様に笑顔で言う。

ギンガ
「大丈夫です。私も戦いたいです。私も、一護さんを護りたいんです」

一護
「ギンガ」

ギンガ
「チンク、ディエチ 一護さんをお願いね」

チンク

「わかった」

デイエチ

「気をつけて」

今度はギンガが一護の事をチンクとデイエチに託し、リッチーに立ち向かう。

ウイングロードを展開し、その上に立って、リッチーと対峙する。

リッチー

「美しき絆だな」

ギンガ

「どうも」

リッチー

「だが、貴様の戦闘スタイルは“近接格闘”。生憎と私は格闘には不向きだな。残念だが、付き合ってはやれんぞ」

リッチーは大鎌を構えながら言う。

すると、ギンガはクスツと笑みを浮かべ

ギンガ

「だったら、格闘以外で 否が応でも付き合ってもらいます!!」

と言い放つ。

そして、ギンガが前に手を翳すと、空中に魔法陣が展開され、そこから刀身が剥き出しになった1本の日本刀が現れた。

ギンガはそれを手に取り、リッチーに鋒を向ける。

リッチー

「なんだ それは ?」

ギンガ

「これが私の新しい力 長刀型の新武装『紫星^{しせいげつか}月花』です 。
そして」

ギンガは徐に刀を振り上げ、魔力を籠める。

そして

ギンガ

「はあああ……！」

リッチー

「っ……！！……！」

ザアアアアア……！！

勢いよく振り降ろされた刀身から、浅紫色の斬撃が放たれる。

リッチー

「（これは……！ 黒崎一護の……）」

ギンガ

「これが私の “月牙天衝” です……！」

ギンガの新たな力。

それは一護の力を参考にしたものである。

天鎖斬月をイメージして作られたと思われる、濃い紫黒色をした野太刀程の刀身で、鍔の部分に紫色の宝石が埋め込まれており、浅紫色の柄糸が結われた長刀型の固有武装『紫星月花』。

ちなみに、これはシャーリーが自身の設計を元にスカリエッティと共同開発した物である。

ギンガ

「勝負だ！ 死王リッチー!!!」

ギンガは紫星月花を手に、リッチーに挑む。

リッチー

「クツクツクツ 面白い！ ならば黒崎一護の代わりに、貴様の魂を刈らせてもらおう!!!」

リッチーは不気味に笑い、大鎌を構える。

リッチー

「行くぞ!!!」

ギンガ

「はあああ!!」

ガキイイイイン!!!!

ギンガの刃とリッチーの刃が交わる。

ギンガ

「月牙天衝!!!!」

リッチー

「黒月の鎌!!!!」

ドカアアアアン!!!!

いつしかのデジャブユのまじりにぶつかり合う二つの斬撃。

しかし

リッチー

「なるほど」

リッチーは何かに気づいていた。

リッチー

「どうやら 同じ“月牙天衝”でも、本物のソレには劣るようだ
な」

ギンガ

「!!!」

リッチーの言う通り、ギンガの斬撃の威力は一護のソレには劣っていた。

一護の“月牙天衝”は、一護の分身でもある斬魄刀の“斬月”が本来持つ能力。

後から追加されたギンガのソレとはかなり、そして決定的に違う。

しかし

ギンガ

「わかってますよ そんな事」

ギンガにとってそれは承知の事実だった。

ギンガ

「その代わり

私の能力は、月牙天衝だけじゃありません」

リッチー

「何？」

ギンガ

「なんなら1つ

見せて挙げましょうか？」

そう言ってギンガは紫星月花を低く構える。

そして

ギンガ

「瞬間」

ザアアン！！

リッチー

「なっ！！？」

刹那、ギンガがリッチーの背後に立ったかと思うと、突然リッチーの左腕が斬り落とされた。

リッチー

「ぐっ　　貴様、一体何を!!!」

リッチーは大鎌を持った右腕で、斬られた左腕の斬り口を押さえながら、ギンガに訊ねる。

ギンガ

「対象物に高密度の特殊な魔力エネルギーを纏わせ、それを増幅、圧縮する事でブーストを掛け、その対象物の能力を補助、強化する

。それが私のIS　　『まりよくそつてん魔力装纏』です」

ギンガが手に入れたもう一つの新能力『魔力装纏』。

正確に言えばIS　　先天固有技能では無いのだが、スカリエツテイが自身の発案の許、シャーリーと共同開発したため、IS扱いとなっている。

ギンガ

「例えば、今の瞬間移動みたいな動きは、『ブリッツキヤリバー』」

を補助して機動力を強化したものです」

紫星月花に魔力を纏わせれば、その能力で増幅、圧縮された魔力による月牙天衝を放つ。

ブリッツキヤリバーに魔力を纏わせれば、その能力でブーストを掛けて機動力を上昇させる。

と、言う訳だ。

リッチー

「フン！　それがどうした！　この程度の傷　　！！」

リッチーは真紅色の眼をカツと見開き、斬り落とされた左腕を再生させる。

その光景を見ていた一護が、ある答えに行き着いた。

さっきはいきなりの事で気付かなかった。

長い間戦ってなかった事で忘れてたいた。

自分の世界で戦った強敵達的能力

一護

「超速再生か!？」

リッチー

「その通りだ」

一護の言葉が聞こえたのか、リッチーが言う。

リッチー

「幾ら迅かろうと、倒せねば無意味だ」

リッチーは体を全快にして、再び大鎌を構える。

ギンガ

「だったら さらに迅く、さらに強く斬ればいいだけです」

ギンガも又、紫星月花を構える。

リッチー

「やってみるがいい！！　ギンガ・ナカジマ！！！」

ギンガ

「言われなくとも！！」

ギンガは紫星月花を構えたまま、ウインググロードを駆ける。

ギンガ

「十字月閃！！！」

そのまま一気にリッチーまで近付き、その体を一瞬で十字に斬り付けた。

しかし

リッチー

「無意味だと言っている！！」

ギンガ

「！！！」

リッチーはすぐさま傷を再生させ、大鎌を振り上げる。

リッチー

「氷結の鎌!!」

ギンガ

「くっ!!」

ギイイイイン!!!

ギンガは咄嗟に左手のリボルバーナックルに魔力を纏わせ、リッチーの斬撃を受け止める。

リッチー

「クツクツクツ

それで防いだつもりか？」

ギンガ

「? どう言う　　っ!!!!」

突然、左腕に違和感を感じたギンガ。

その違和感の正体は

ギンガ
「!?!? 腕が、凍って !?!?」

斬撃を喰い止めた左手のリボルバーナックルが凍結していた。

リッチー
「言っただろう? “氷結”と 」

ギンガ
「くっ 」

ギンガは唇を噛んだ。

が

ギンガ
「なんてね 」

リッチー
「何 ?」

ギンガはクスツと悪戯な笑みを浮かべる。

そして、凍結した左手のリボルバーナックルに魔力を籠め

ギンガ

「ナックルバンカー！！！」

ダアアアアン！！！！

リッチー

「ぐほおっ！！？」

圧縮したソレを解放して氷を弾き飛ばす。

と同時に、増幅した魔力を纏った拳をリッチーに叩き込んだ。

ギンガ

「うおおおおお！！！！」

リッチー

「！！！！！！？」

ギンガは紫星月花を振り翳し、リッチーに追撃を掛ける。

ギンガ

「月花氷刃！！！」

ザアアアアン！！！！

リッチー

「がああっ！！！！」

ギンガの刃がリッチーを一閃する。

リッチー

「ぐっ　だが　この程度　すぐに再生を　！！！！」

ふとリッチーは斬られた体を見る。

すると、その傷が治る所か、完全に凍結しており、再生が不可能となっていた。

ギンガのISもチンク達同様“ハイパーIS”として強化され、属

性付加能力が備わっている。

ギンガは斬撃に“氷”の属性を付加し、リッチーを斬り付けると同時に、再生が出来ないように、傷口を凍結させていたのだ。

しかし、リッチーがそれを知る由も無い。

“何をした!?”

そう言おうとリッチーがギンガの方へと視線を移すと、その眼に不敵な笑みを浮かべたギンガが映った。

ギンガ

「言いましたよね? “氷刃”って」

リッチー

「っ!?!?!?!」

言葉は途端に引っ込んだ。

それと同時に、何かが外れたように、リッチーから魔力が噴き出した。

リッチー

「図に乗るなよ！ 小娘がア！！」

すると、リッチーの影から無数の巨大な鎌が出現した。

リッチー

「消える！！
ネクロ・デスサイズ死神の大鎌！！！！」

ドカアアアアアン！！！！！！

巨大な鎌達がギンガに向けて一斉に振り下ろされた。

傍から見れば、誰もがギンガがマズイ状態だと思っ。

しかし

ギンガ

「ぐっ　くうっ　」

ギンガは耐えていた。

頭上に魔法陣のシールドを展開し、そのシールドに魔力を付加して
防御力を高め、攻撃を防いでいた。

しかし、すべてを防ぎ切っている訳では無いようで、その体中から
血が流れている。

リッチー

「ほう　まだ生きているか　。　だが、攻撃はまだ終わっていな
いぞー！」

リッチーの影から再び巨大な鎌が現れる。

リッチー

「終わりだ！！　ギンガ・ナカジマあ！！！！」

リッチーが叫んだ時、ギンガはある光景を見て、呟いた。

ギンガ

「ハア、ハア　結局　私は、護られちゃうんだ　」

ギンガの眼に映った光景

それは

一護

「月牙」

リッチー

「っ！！！！？」

一護

「天衝！！！！」

ザアアアアン！！！！

リッチーに斬撃を放つ、一護の姿だった。

リッチー

「ハア、ハア、ハア、ハア」

斬撃を受けたリッチーは倒れはしなかったものの、かなりのダメージを負っている。

リッチー

「残念だな！ ただの斬撃では 私は倒せんぞ！！」

リッチーは一護に叫ぶ。

しかし、かなり余裕が無いのか、冷静さを失って来ている。

一護

「超速再生か？ そんなモン意味無えよ」

リッチー

「何イ？」

一護

「再生するってんなら その前にぶっ潰せばいいだけの話だ」

リッチー

「フン！ やれるものならやって やってやるぞー！！」

「！！？」

突然自分の言葉が遮られたリッチー。

デイエチ

「ギガデストロイヤー!!!」

ウイングロードの上でイノームスカノンを構えていたデイエチが、
圧縮したエネルギー弾を放つ。

リッチー

「くっ
」

ダアアアアアアアアアア!!!

リッチー

「ぐああああつ!!!」

エネルギー弾はリッチーに直撃し、炸裂する。

その衝撃で、リッチーは下半身に続き、左半身をも失った。

リッチー

「(くっ! マズイ! ここは一旦退いて、再生に専念しなければ
)」

リッチーはそう考え、撤退を試みる。

しかし、それが叶う事は無かった。

リッチー

「っ！！！！！！」

リッチーが気付いた時には、上には仮面を付けた一護、下には紫星
月花を構えたギンガがいた。

一護

「終わりだ！！」

ギンガ

「死王リッチー！！」

一護は霊力を、ギンガは魔力を、それぞれの刃に籠める。

そして、放つ。

一護・ギンガ

「「月牙天衝！！！！！！」」

六課 医務室

リッチーとの死闘から数時間後、一護達は六課の医務室で治療を受けると同時に、ベッドに眠るノーヴェとウエンデイを見ていた。

ノーヴェ

「う、ううん」

ウエンデイ

「あ、あれ 私達」

その時、2人が眼を覚まし、体を起こす。

それを見ていたチンクが

ノーヴェ

「ち、チンク姉？」

ウエンデイ

「ど、どうしたんスか？」

チンク

「!!! お前達い!!!」

ノーヴェ・ウエンディ

「!!!?!?!」

涙を流しながら、2人に抱きついた。

チンク

「よかった 本当に、よかった」

その後ろでは、ディエチも同じように涙を流していた。

そんな様子に、2人は大いに戸惑っていた。

ギンガ

「よかったですね」

一護

「ああ」

一護とギンガは、離れた所でその光景を眺めていた。

一護

「にしても、お前の新しい武器が天鎖斬月をイメージした刀つてのは驚いたな」

ギンガ

「そうですか？」

一護

「だつてお前“近接格闘”だろ？ それに、なんでわざわざ俺のを参考にしたんだ？ 魔法の剣なら、フェイトとかシグナムとかの方がよかつたんじゃ」

ギンガ

「そ、それは その / / /」

一護

「??？」

“お揃いがよかつた”

そんなギンガの心の中の話が、その口からでる事は無かつた。

結果、一護の疑問が解決される事は無かったが、別に気にもしなかったと言っ。

T
O
B
E
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第55話『魂の死闘！ vs 死王リッチー』（後書き）

オリジナルの説明を

【紫星月花】

天鎖斬月をイメージして作られたギンガの新武装。刀身は紫黒色、鍔は金色で紫色の宝石が埋め込まれており、柄の部分には浅紫色の柄糸が結われている。ギンガのIS発動時の特殊な魔力に耐えられる作りとなっている。

【魔力装纏】

ギンガのIS。後付の能力だが、ISに分類される。対象物に高密度の特殊な魔力エネルギーを纏わせ、それを増幅、圧縮してブーストを掛け、その対象物の能力を補助、強化する。主に肉体の一部、ブリッツキヤリバー、紫星月花、防御魔法に魔力エネルギーを纏わせて強化する。訓練次第では、他者に使用する事も可能。ただし、酷使は禁物。

いかかでしょう？

無理矢理感もありますが、これでよろしくお願いします。

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、『暴竜来襲!』

第56話『暴竜来襲!』(前書き)

短いです。

ただそれだけです。

では、ごんご

第56話『暴竜来襲!』

【3人称side】

それは、突然の出来事だった。

ドオオオオオオン!!!!!!!!!!

突然　　本当に突然、六課の隊舎の前に、何かが落ちた。

落下の際に生じた煙の中から、何かが現れた。

???

「ここが　機動六課か　」

煙の中から現れた何かは、六課の隊舎を見つめ、小さく呟いた。

六課 部隊長室

現在、部隊長室には一護、ナツ、ツナ、なのは、フェイト、はやての6人がいる。

そんな中、シャーリーから通信が入った。

シャーリー

《こちらロングアーチ！ 隊舎前に巨大な魔力反応を確認！ モニターに出します！》

そう言つて、シャーリーは部隊長室のモニターに外の映像を映す。

そこには、濃いめの青い短髪で、側頭部から2本の黒い角を生やした目付きの悪い長身の男が映っていた。

はやて

「なんや、コイツ!？」

???

「俺の名は“竜王りゆうおうファフニール”!」

はやて

「コイツ いきなり、なんや!」

いきなり 本当いきなり、男は自らの名を高らかに叫んだ。

そして

ファフニール

「貴様らに10分間の猶予をくれてやる! その間に 俺に平伏
すか、俺に殺されたいか 精々選えらびな!」

そして、ファフニールに猶予を与えられてから、かれこれ5分

ナツ

「くそっ！！ あのヤロオ 何が“選べ”だ！！ ふざけやがって！！」

なのは

「ナツ君、落ち着いて」

一護

「でもどうすんだ？ 戦うにしても、フェイト達は」

フェイト

「うん。今は、戦えない」

はやて

「そっちな」

なのは達には、戦う手段が無かった。

熾烈を極める七戦鬼との戦いのため、度々デバイスのメンテナンスを行われていたのだが、まさかこんなに早く次の襲撃があるうとは思いにも寄らず、すべてのデバイスがタイミング悪くメンテナンス中なのだ。

フェイト

「どっする？ はやて」

はやて

「ううん」

フェイトの問いに、はやては腕を組み、頭を悩ませた。

その時

ツナ

「ねえ」

ALL

「「「???」」」

徐にツナが口を開き

ツナ

「オレに 行かせてくれないかな？」

不意にそんな事を言い出した。

はやて

「ツナ君1人ですか!？」

はやてはツナの申し出に驚いた。

薄々予感はしていたが、実際に言われるとやはり驚く。

さらこ

ナツ

「オレも行くぜ! ツナ!」

ナツが掌と拳を打ち合わせ、ニヤツと笑みをを浮かべる。

なのは

「ナツ君」

そんなナツを、なのはは心配そうな眼で見つめる。

しかし、同時に思っていた

“止める事は出来ない”

と。

一護

「待てよ！ だったら俺も」

フェイト

「ダメ！ 一護は昨日戦ったばかりでしょ！？」

“2人が戦うなら俺も”

そう思った一護だったが、連続での戦闘は無茶だと判断したフェイトがそれを止める。

そのやり取りを見ていたはやては、手を口元に当てて考えた。

はやて

「（確かに 現時点で七戦鬼と真面に戦えるんは、ツナ君とナツ君の2人だけ）」

一護は全快では無く、魔導師達のデバイスはメンテナンス中。

ナンバーズの中で七戦鬼に対抗出来るのは、能力を“ハイパーI S”に強化した者のみだが、今の所それに該当するのは、チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディの4人のみ。

勿論、この4人は一護同様、全快では無い。

結果、はやての考えはそれに至った。

そして

はやて

「信じて ええんか？」

はやては2人をジッと見つめる。

ナツ

「へッ！ 当然だろ？」

ツナ

「大丈夫。心配しなくていいよ」

2人は答える。

その時、はやてには、2人のその瞳の奥に、揺ぎ無い覚悟が見えた
と言う。

はやて

「わかった

ほんなら、頼んだで！」

ナツ

「おう!!」

ツナ

「うん!!」

隊舎の前。

そこに1人の男・竜王ファフニールが腕を組み、仁王立ちで立っている。

そこへ

ファフニール

「ん？」

新たに2人の男がやって来て、ファフニールと対峙する形で立ち止まった。

ナツ・ドラグニールと、沢田綱吉の2人だった。

ファフニール

「ちょうど10分か。それで？ 答えは決まったか？」

ファフニールは腕組みと仁王立ちの体勢を崩さぬまま、2人に訊ねる。

いや、「訊ねる」などと言つたら柔らかさは無い。

その雰囲気から放たれる威圧感が言っている。

“答える”と。

ツナ

「ああ。決まった」

ツナがファフニールの問いに対し、静かに答えた瞬間

ナツ

「火竜の 咆哮!!!」

ファフニール

「!!!」

ゴオオオオオツ!!!

ナツの口から放たれた火炎が、ファフニールを呑み込む。

ファフニール
「チッ！」

ファフニールはすぐさま空中へ飛び、火炎から脱出する。

そこへ

超ツナ
「X^{イクス}ブレイズ！！！！」

ファフニール
「ぐっ！！！」

ドオオオン！！

そのさらに上の位置から、ハイパー化したツナが炎の拳を叩き込み、ファフニールを地面に落とす。

ナツ・超ツナ
「「これが 答えだ！！！！！」」

ナツとツナは高らかに答えた。

その直後

ゴオオオオオオツ!!!!!!!!!!

ナツ

「な、なんだ!?!」

超ツナ

「これは 竜巻!?!」

突然、2人を取り囲むように、巨大な竜巻が発生した。

ファフニール

「お前ら ナツ・ドラグニールと沢田綱吉か」

ナツ・超ツナ

「!!!!!!!!!!」

竜巻の中にはもう1人、ファフニールもいた。

ナツ

「オイ、てめえ!! なんだよこれ!!」

ファフニール

「何 ただのリング バトルフィールドだ」

超ツナ

「なんだと!？」

ファフニール

「聞いてるぜ 。お前ら、“滅竜魔法” つつードラゴンの魔法と、“大空の炎” つつー能力を使うんだろ？」

ナツ

「それがなんだってんだよ!!」

ファフニール

「ハッ! 何かって? 笑わせんじゃねえ!!」

ナツ・超ツナ

「!!!!!!!!」

ファフニール

「来いよ！！ 本当の竜の力がどんなモンか 本当の大空の支配者が誰か てめえらにハッキリ教えてやる！！！！」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第56話『暴竜来襲!』（後書き）

容姿のイメージとしては、『神羅万象』の『ベルゼビユート』を参考にしてください。

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、『大空&火竜』vs『竜王ファフニール』

第57話『大空&火竜 vs 竜王ファフニール』（前書き）

前回はちょっと短めでしたが、今回は少し長めです。

後書きにちょっとアンケートがあるのでよければ

では、ごんごん

第57話『大空&火竜 vs 竜王ファフニール』

【3人称side】

六課隊舎の前に吹き荒れる巨大な竜巻。

その中にナツとツナ

そしてもう1人

6人目の七戦鬼、竜王ファフニールがいる。

その3人が、戦っているのだ。

ナツ

「火竜の 煌炎!!!」

超ツナ

「Xカノン!!!」

ナツとツナから同時に炎が放たれる。

しかし

ファフニール

「フン！！」

ゴオオオオツ！！！！

ファフニールが手を振り翳すと、その周囲に突風が吹き荒れ、それが障壁となつて炎が掻き消されてしまう。

ナツ

「くそっ！！ またかよ！？」

“ またかよ ”

先のような攻防は既に数回行われており、ナツが苛立ちを抑えられなくなっている。

超ツナ

「（何故だ？ 何故攻めて来ない？）」

竜巻に閉じ込められてから十数分。

攻撃しているのはナツやツナ側の方で、ファフニールは防御しかしていない。

ツナが不審に思っていると

ファフニール

「ハッ！ やっぱりな！」

ナツ・超ツナ

「！！！！！！？」

ファフニールが口を開いた。

ナツ

「何が“やっぱり”なんだよ！！！」

超ツナ

「どつと言つ意味だ！」

ファフニール

「どうもごうも無えよ！ やっぱりテメエらは“弱え”つつッてんだよ！！！」

ナツ・超ツナ

「「っ！！！！？」」

ファフニール

「そんなモンが“竜”の力か！？ そんなモンが“大空”の力か！？」

そう語るファフニールの周りに、荒々しい風が吹き始める。

ファフニール

「笑わせんな！！！」

そう言い放った瞬間、ファフニールの周囲に吹いていた風が、2人に向かって放たれる。

ナツ

「うおっ！？」

超ツナ

「ぐっ!!」

2人は吹き飛ばされぬよう、必死に堪えている。

そこへ

ファフニール

「エア・ブラスト!!!」

ナツ・超ツナ

「ぐああああ!!!」

ファフニールが空気の塊を放ち、2人を弾き飛ばす。

ナツ

「チィ! 火竜の鉄拳!!!」

超ツナ

「X^{イクス}ブレイズ!!!」

2人は弾き飛ばされながらも、体勢を立て直す。

そして、ナツは右側から、ツナは左側から、それぞれ炎の拳を叩き込む。

しかし

ファフニール

「無駄だア！！！」

ゴオオオオオツ！！！！

ナツ

「ぐあっ！！！」

超ツナ

「くっ！！！」

ファフニールは自分を中心に竜巻を発生させ、2人を弾き飛ばす。

ファフニール

「チッ」

竜巻の中、ファフニールは思っていた。

ファフニール

「（このままヤンのもうゼえな。とつとと潰すか）」

“ 本当の竜を、本当の大空を教えてやる ”

戦闘前にそう言ったが、最早それがどうでもいい程に、2人の弱さに呆れていた。

そして、自分を包んでいた竜巻を解除する。

2人にトドメを刺すために。

ファフニールが竜巻を解除すると、その視線の先に、弾き飛ばした2人が立っていた。

その瞳にはいまだ闘志が宿っている。

ファフニール

「悪いがテメエらはダメだ。 “ 竜 ” だの “ 大空 ” だのって前に、弱過ぎる。」

ファフニール
「何!!!?」

かに思われた。

が、ナツは風の障壁を突破し

ドゴオッ!!!!!!

ファフニール
「ぐっ!?!」

ファフニールに炎の拳を叩き込んだ。

さらに

超ツナ
「X_{イクス}」

ファフニール

「っ!!!?!」

超ツナ

「ブレイズ!!!」

ドゴオン!!!

ファフニール

「ぐはっ!!!」

ファフニールがナツに気を取られている隙に、ツナはその背後に回り込み、同じく炎の拳を叩き込んだ。

そして、同時に掌から炎を撃ち出し、ファフニールを弾き飛ばす。

ファフニール

「ぐう」

弾き飛ばされたファフニールは、蹠跟けながらも、自分に攻撃を加えた2人を見据える。

そして、同時に驚愕していた。

ファフニール

「（どうなってんだ!? アイツらの攻撃の威力が上がってやがる
!!!）」

ファフニールの驚愕はそこにあつた。

つい先刻までの攻防時より、2人の攻撃力が上がっていたのだ。

ナツ

「おおおおお!!!!」

超ツナ

「はああああ!!!!」

ファフニール

「チイツ!!!!」

驚愕の内にいたファフニールに2人は追撃を掛ける。

ファフニールは攻撃を防ぐため、再び風の障壁を発生させる。

しかし

ドゴオオオツ！！！！

ファフニール

「がああっ！！！！」

障壁を突き破った2人の拳が、再びファフニールに届き、殴り飛ばした。

ファフニール

「（この感じ）」

攻撃を受けた瞬間、ファフニールは何かを感じ取り、思考を張り巡らした。

そして

ファフニール

「（　　！！　ま、まさか　　！！）」

思考の末、ある1つの答えに辿り着いた。

2人の攻撃力が上がった答えに。

ファフニール

「(コ、コイツら　　!!)」

その答えは

ナツ

「火竜の　　」

超ツナ

「X イクス BURNER バーナー　　」

ファフニール

「(互いに互いの炎を力に加えたのか!!?)」

ナツ

「超咆哮!!!」

超ツナ

ツナ

「え？ オレの炎を？」

ナツ

「おう！ 喰わせてくんねーか？」

不意に、ナツがそんな事を言った。

ツナ

「なんでまた？」

ツナとしては、別に食べさせるのはよかった。

(以前の模擬戦の時に食べられてるし)

しかし、その理由がちょっと気になった。

ナツ

「前に模擬戦でお前の炎食べた事があったろ？」

ツナ
「うん」

ナツ

「けど、あん時は本気じゃなかったんだろ？」

ツナ

「うん、まあ、そうだけど」

ナツ

「だったら、本気の時のお前の炎を食べればもっと強くなれんじやねーか、って思ったんだよ」

ツナ

「なるほどね」

ツナは「そうかそうか」と頷く。

ナツも「そうだろそうだろ」と頷く。

そして、ツナは考えた。

確かに“ ナツの言う事は一理あるかも知れない”と。

これから先も、残りの七戦鬼や、ユークスやエイオスらディストウォール十滅将と言った強敵と戦うのだから、強くなれるに越した事はない。

ツナ

「あ!」

色々と考えていると、ふと、ある事を思いついた。

ツナ

「じゃあさ、ナツの炎もオレに出来ない?」

ナツ

「ん? どう言う事だ? お前も炎喰うのか?」

ツナ

「いや そう言う訳じゃないけど」

ナツの言葉にガクツとなるツナ。

そして、その言葉をやんわりと否定し、話を元に戻す。

ツナ
「オレの技の中に“相手の炎を吸収して自分の炎に転換する”って
のがあるんだ」

ナツ
「そんなのがあんのか？　ズリーだろ、それ」

ツナ
「いや、それならナツだって　ってそうじゃなくて！」

ちよこちよこ話の腰を折るナツ。

ツナはそれにツッコミを入れると同時に、再び話を元に戻す。

ツナ
「んん！　だから、ナツの炎をオレが吸収して、オレの炎をナツに
食べさせる　簡単に言えば、お互いの炎を交換するって感じかな
？　どうっ？」

ナツ
「おお！！　なんか面白そうだな、それ！！」

ツナの提案に、かなりノリノリになるナツ。

ツナ

「じゃあ今度試してみよっか！」

ナツ

「おう！」

ナツ

「ツナ！」

自分の対面にいるツナの許へ近づくナツ。

ナツ

「大成功みたいだな！！！」

超ツナ

「ああ」

ナツもツナ同様、作戦の成功を実感していた。

リミッターを外した状態で練られた、高純度の“大空”の炎を食べたナツ。

火の滅竜魔法の炎を吸収し、自身の炎エネルギーへと転換させたツナ。

どちらも文字通り“パワーUP”の結果となった。

その結果は2人の様子からも見て取れる。

ナツが体に纏う炎は淡い橙色の光を放ち、ツナの額と拳に燈る炎はいつもより荒々しく燃えている。

超ツナ

「これなら十分アイツとも戦える」

そう言ってツナは爆発によって生じた煙の方を見る。

そこにはさっき説明した通り、爆発によって生じた煙が渦巻いている。

いや、正確にはそれだけではない。

煙と共に、“途轍もない魔力”が渦巻いているのが、2人にもわかった。

それを放っているのは

ファフニール

「なるほどな。ちょっとはマシになったってか？」

勿論、ファフニールだ。

ファフニール

「だが、俺だってこんなモンじゃねえ!!」

ナツ・超ツナ

「「っ！！！！！？」」

そんな叫びと共に、ファフニールは自身の魔力に包まれる。

バアアアアン！！！！

そして、魔力が弾けると、その中から、黄金の鎧を纏い、一対の竜翼を生やしたファフニールが姿を現した。

ファフニール

「行くぞ！！！！」

ナツ・超ツナ

「「来い！！！！！！」」

双方が再び激突する。

ファフニール

「暴風拳！！！！」

ナツ

「火竜の鉄拳！！！！」

ゴオオオン！！！！

ナツの炎を纏った拳と、ファフニールの風を纏った拳がぶつかり、派手に火花を散らす。

ナツ

「チツ！」

数秒間火花を散らした後、ナツはファフニールから距離を取るように離れた。

超ツナ

「^{イクス}Xブレイズ！！！！」

その瞬間、ファフニールの後方から、ツナが攻撃を仕掛ける。

ファフニール

「おおおおおお！！！！」

ゴオオオン！！！！

が、ファフニールは今度は逆の拳で技を放ち、ツナの拳にぶつ
ける。

互いの拳がぶつかり、再び派手に火花が散る。

ナツ

「火竜の 煌炎！！！」

そこへ、ファフニールから距離を取ったナツが、ツナとは反対側か
ら巨大な火球を放つ。

しかし

ファフニール

「サンダー・トルネード！！！」

ドカアアアアーン！！！！

ファフニールは、ツナの攻撃を喰い止めているのとは逆の掌から雷
を伴った竜巻を放ち、火球を掻き消した。

さらに

ファフニール

「レイン・ストーム！！！！」

ゴオオオオオツ！！！！

ナツ・超ツナ

「ぐああああっ！！！！！！」

上空から水を伴った竜巻を発生させ、2人を地面に叩きつける。

しかし、叩きつけられたままで終わる2人ではなかった。

ナツ

「火竜の 咆哮！！！！」

超ツナ

「X^{イクス}プラスト！！！！」

ナツの口から火のブレスが、ツナの掌から火球が放たれる。

2つの炎がファフニールに届く

ファフニール

「ブリザード・ハリケーン！！！」

ドカアアアアン！！！！

事はなかった。

ファフニールが冷気を伴った竜巻を放ち、強烈な熱気と冷気が激突する結果となった。

その温度の落差が激しく、爆発による煙と、蒸気の煙が、両者の視界を遮る。

ナツ

「うっ！？ 何も見えねえ！！！」

超ツナ

「落ち着け！！ ナツ！！！」

視界を遮られて慌てるナツと、それを宥めるツナ。

しかし

ナツ・超ツナ

「くっ!!!」

瞬間、その2人の表情が強張った。

気づいたのだ。

ナツは嗅覚で、ツナは直感で

ファフニール

「隙だらけだ!!!」

自分達のすぐ眼の前に、ファフニールがいる事に
。

超ツナ

「くっ!!!」

ナツ

「うおっ!?!」

ツナはナツのマフラーを引っ張り、ファフニールから距離を取ろうとする。

が

ファフニール

「遅え!!!!」

逃げる事は叶わず、2人の足元に魔法陣が展開される。

ファフニール

「ギガ・ディザスター!!!!!!」

ゴオオオオオオツ!!!!!!

ナツ・超ツナ

「ぐああああああ!!!!!!」

展開された魔法陣から強烈で巨大な竜巻が発生し、中に取り込んだ

2人を擦じ伏せた。

ナツ

「うう

」

超ツナ

「くっ

」

竜巻が消えると、その場に倒れた2人の姿が現れた。

ファフニール

「チッ！ まだ生きてやがんのか

」

2人の姿を見たファフニールが呟く。

ファフニール

「だが、その様子じゃあ、もう戦えねえようだな

」

ファフニールはトドメを刺すために、ナツに近づく。

そして、自身の右腕に竜巻を纏い、それをナツに突き立てる。

ファフニール
「終わりだ」

その眩きの直後、ファフニールの右腕がナツに突き刺さる

ガシッ！！

ファフニール
「！！！！？」

事はなかった。

ナツ
「“終わり”だと？」

ナツがファフニールの腕を掴んでいた。

ナツ
「ぶざけてんじゃねえぞ、コラ」

ファフニール

「っ！！！！？」

ファフニールは一瞬、ナツの放つ雰囲気、気圧されてしまった。

ナツ

「まだ終わってねえぞコノヤロオオオオ！！！！」

ドカツ！！！！

ファフニール

「ぐはっ！！！！」

ナツはファフニールの腕を掴んだまま立ち上がり、その腹に炎の拳を叩き込んだ。

さらに

超ツナ

「X^{イクス}ショット！！！！」

ズキャン！！！！

ファフニール
「ぐっ!!!?」

片膝を着いた状態のツナの放った炎が、ファフニールの肩を撃ち抜いた。

超ツナ

「オレも まだ終わっていない」

2人の闘志は^{ほのお}いまだ消えていなかった。

ファフニール

「チイツ!!! だったら コイツでぶっ潰してやらア!!!!」

それを見たファフニールは、自身の最大の技をぶつけるべく、魔力を練り、周囲に突風を吹かせる。

それに対し

超ツナ

「ナツ」

ナツ
「ん？」

超ツナ
「オレ達もそろそろ限界だ。次で決めるぞ！」

ナツ
「おう！！」

超ツナ
「オペレーション
ダブルイクス
XX！！！」

ナツ
「滅竜奥義 改！！！」

ツナは両手を前に出す構えを取り、ナツは最大限に魔力を解放する。

そして、激突の時

ファフニール
「ルドラ・サイクロン！！！！！」

ファフニールの周囲を吹いていた風が竜の形を成し、2人に襲い掛かる。

ナツ

「ぐれんこうりゅうが紅蓮煌竜牙！！！！！！」

超ツナ

「ダブルイクスXXXバーナーBURNERハイバードラゴンフォース超爆竜！！！！！！」

対し、ナツの両腕から放たれた炎と、ツナの両手から撃ち出された炎も、共に竜の顔を模したものとなり、風の竜を迎え撃つ。

ドオオオオオオオツ！！！！！！

放たれた3つの竜を模した技が激突し、まるで生きている本物の竜のように、互いの身に喰らいつく。

双方の力は見事に拮抗していた。

一方が押したかと思うと、もう一方が押し返す。

一方が強く喰らいついたかと思うと、もう一方も強く喰らいつく。

ファフニール

「おおおおおお……！！！！！！」

ナツ・超ツナ

「「おおおおおお……！！！！！！！！！！」」

技を放つ本人達も、さらに力を籠める。

ファフニール

「クソっ！！ この俺が！！ テメエら如きに！！ 負けてたまるかアアア……！！」

ファフニールの叫びに呼応するように、風の竜が2体の炎の竜を急激に押し始めた。

しかし

ナツ

「オレ達だって

同じなんだよ

……！！」

超ツナ

「仲間を、大切なものを護るために　　!!!」

ナツ・超ツナ

「負けるかアアアア!!!」

ドオオオオオオツ!!!!

ファフニール

「な!!　馬鹿な!!?」

ファフニールは驚愕に硬直した。

さっきまで押していた筈の自分の風の竜が、2体の炎の竜に飲み込まれたからだ。

竜

「グオオオオオオ!!!!!!!」

その勢いのままに、今度はファフニールに向かい、その顎を大きく開く。

そして

ドオオオオオオツ！！！！

ファフニール

「ぐおおおおお！！！！！！！！！！」

ファフニールをその口へと誘った。

しかし

ファフニール

「くっ！！　ぐう！！　ぐああっ！！　がああああ！！！！」

2体の竜に喰らわれながらも、ファフニールはいまだ倒れなかった。

最大限の防御を展開し、その牙を防いでいる。

ナツ・超ツナ

「くっ

」

どちらの勝利かは、一目瞭然だった。

ナツ

「オオオオオオオ！！ オレ達の勝ちだアアアア！！！」

ツナ

「ハハッ、元気だなあ、ナツは」

ナツは勝利の雄叫びを上げ、ツナはその元気に苦笑する。

しかし、その直後

ドサッ

2人揃って気絶してしまった。

六課 医務室

ファフニールとの激闘後、気絶したナツとツナの2人は、医務室へと運ばれた。

そして、現在。

なのは

「
」

医務室には、気絶してベッドで眠っている2人と、それを看病するなのはの姿があった。

シャマルが用事で出ているため、なのはが任されたのである。

なのは

「ナツ君
」

なのははさつきからナツの顔ばかり見ている。

別にツナの事が嫌いとか、どうでもいいとか言う訳ではないが、やっぱり好きな人の看病をしてあげたいと言うのが乙女心なのだろう。

なのは

「 / / / 」

しかし、看病していると言う割りには、心配そうな表情をするでもなく、寧ろ顔が少し赤い。

そんなこんな説明していると、なのはが自分の顔をナツの顔に近づけ

チュッ

その頬に唇をつけた。

なのは

「 お疲れ様、ナツ君 / / / 」

なのはなりの労いなのだろうか ?

なのは
「 / / / 」

その行為の後、なのはの顔は一層赤くなり、やった後で恥ずかしくなったのか、医務室を飛び出していった。

て言うか、看病任されたんじゃないの？

このシッコミは無しの方向で。

そして、なのはが出て行った後、医務室には気絶したナツとツナだけ

???

「ふう〜」

ではなかった。

ベッドの傍のカーテンの影から、ある人物が現れた。

その人物とは

???

「なのはちゃんが入って来た時はビックリして隠れてもったけど
まさか、あんなシーンに遭遇するとは」

口調でもわかる通り、はやてである。

はやてもツナの看病をしていたのだが、なのはが来た事にビックリ
して、その拍子に隠れてしまったのだ。

まあ、隠れる必要はなかったのだが、何故か隠れてしまい、その上、
あの雰囲気で行く事が出来なくなってしまったと言う訳だ。

はやて

「それにしてもなのはちゃん　ナツ君が寝てるとは言え、大胆や
な　　／／／」

感心したように言うはやての顔は少し赤い。

そして、チラッとツナの顔を見る。

考える事は同じ　。

リイン

「は、ははは、はいですう！！！！」

その時はやての形相は、まるで真の悪魔のようだった。（リイン談）

この後、リインは色々と仕事を押し付けられたとかないとか。

第0管理世界クロノス

ユークス

「まさか ファフニールをも降すとは」

クロノスの神殿の地下空間。

カタストロフ
破滅のメンバー、ユークスは呟いた。

ユークス

「どつやら コイツを起こさなきゃならねえよつだな」

そう言って、ユークスは神殿の地下に聳え立つ最後の石柱に触れる。

そして、その石柱に魔力を籠め、封印を解く。

すると、石柱は不気味な光を放ち、地下空間を怪しく照らす。

ドオオオオオツ!!!

その光の中、大きな地響きが鳴り渡った。

そして、光と地響きが収まると、石柱が姿を消し、その場所に人影が現れた。

暗闇でも神々しく煌く黄金の鎧を纏った大男だった。

ユークス

「さあ 行け！」

ユークスが命令を下すと、その大男の眼に光が燈る。

そして、むくつと立ち上がり、地上へと向かって歩き出す。

大男が去った後、ユークスがボソツと呟いた。

ユークス

「すべてを殲滅しろ “最凶の七戦鬼”よ」

T o B e C o n t i n u e d

第57話『大空&火竜 vs 竜王ファフニール』（後書き）

グダグダ感が否めない（ - - ）

特に最後の方の医務室の辺り

まあそれはさておき、アンケートです！

七戦鬼篇もいよいよ佳境！

そこで、新章までの幕間でやる話についてアンケートを取りたいと思います。

以下から1つお選びください。

？キャラ同士の絡み

【内容】

単純にキャラ同士の絡みを描く日常モノ

【不安点】

特に大きな展開がない

? 主人公達の過去篇

【内容】

主人公3人の元の世界での戦いを見せる。

【不安点】

それぞれ長く、しかも3人いるので、かなり内容が薄くなったり、端折ったりしそう。

? 番外篇ギャグコメディ

【内容】

よくBLEACHのアニメとかで、繋ぎや特番の時にあるアレ

【不安点】

ギャグが上手く書けるかどうか。

以上3つです。

期限は9/30(金)までとします。

よろしくお願いします！

次回、『出現！最凶の七戦鬼』

第58話『出現！最凶の七戦鬼』（前書き）

テストが終了したので、更新再開です！！

テスト勉強の合間の気分転換等で書いていたものなので、多少荒いですが（汗）

では、ごんぞ

第58話『出現！最凶の七戦鬼』

【3人称side】

ファフニールとの激闘から数日　。

一同は残る最後の七戦鬼との戦いに備え、休息を取っていた。

体力、魔力を全快にし、武器の調整を済ませ、いつ、如何なる場合であつても、全員が全員戦える状態で日々を過ごしている。

しかし、この数日間、敵側の　七戦鬼や破滅カラストロフの動きが一切感じられない。

まるで嵐の前の静けさと言わんばかりに　。

そして、そんな静けさの中、その時は突然訪れた

部屋を出た後は、そのプロセス通り、隊舎内をぶらぶらしてから外へと向かう。

一護

「（随分暗いな）」

隊舎内を散策する一護は、窓を見ながらそんな事を思っていた。

5時過ぎ 幾ら夜明け頃の時間帯だと言っても、そろそろ明るくなってくる頃だ。

しかし、隊舎の中には照明等の明かりがあるが、外には光が無い。

そのため、内と外に明暗の差が生じ、窓に自分の姿が映り、外がよく見えない。

一護

「（それに）」

もう一つ、一護には気掛かりな事があった。

それは、

一護

「(なんで、誰もいねんだ)」

六課の局員達。

いつもなら、一護は既に数人の局員を見かけている筈だった。

い…つ…も…な…ら…。

しかし、この日は未だに誰も見かけていない。

いや、誰…か…が…い…る…気…配…が…し…な…い…。

一護

「」

一護は妙な胸騒ぎを覚え、少し早歩きで隊舎の外へと向かう。

そして、一護が外へと足を踏み出した時、

一護

「なっ！！？」

衝撃は、訪れた。

一護

「な　なんだよ　これ　！？」

外へ出た一護の眼に映ったのは、六課隊舎の外の風景ではなく、一面の砂漠と常闇の空だった。

一護

「　一体　何が　」

一護は衝撃で混乱しながらも、事態をみんなに伝えるため、再び隊舎の中へと入っていった。

部隊長室

はやて

「 とうなつとるんや 一体 」

部隊長室に集まっている一護、ナツ、ツナ、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、エレアの9人。

そして、宙に展開された空間モニターに映し出される外の光景を見ながら、はやてが呟く。

はやては勿論、モニターを見ている全員が、状況を飲み込む事が出来なかった。

しかし、それは“外”の状況に限る事ではなく、“内”の状況にも

言える事であった。

一護が異変に気付き、それをみんなに知らせようとして六課中を駆け回ったが、どういう訳か、今この場にいる一護を合わせた9人以外、誰1人として六課隊舎に人はいなかった。

普通の局員達だけでなく、フォワードの4人も　ギンガもリインもシヤマルもザフィーラも　スカリエツティもナンバーズもゼストもアギトも

誰もおらず、まったくの　“無人”だった。

ヴィータ

「一体、何がどうなってんだよ!!!」

シグナム

「落ち着け、ヴィータ!」

興奮するヴィータを宥めようとするシグナムだったが、

ヴィータ

「落ち着ける訳ねえだろ!!!　こんな状況で!!!」

ヴィータの興奮は冷めない。

しかし、

はやて

「ヴィータ

こんな状況やからこそ、落ち着かなアカン

」

ヴィータ

「うっ

」

静かに発せられたはやての言葉で、ヴィータの興奮は収まった。

ツナ

「でも、どうするの？ はやて

」

ナツ

「“落ち着け”つつつても、状況がわからねえ事に変わりは無えぞ

」

はやて

「

2人の言葉を受け、はやては腕を組んで思考に入る。

シグナム

「主はやて」

はやて

「ん？」

思考するはやてに、シグナムが何かを申し出る。

シグナム

「私とヴィータの2人で、外の調査に向かいます」

はやて

「！」

シグナムの申し出は、外部の調査の申請だった。

それを受けたはやての眼が、一瞬見開かれる。

フェイト

「でも、2人でなんて」

なのは

「無茶だよ！」

なのはとフェイトがそれを止めるような言葉を発する。

現在の状況的には、右も左も上も下もわからない　　言ってしまう
ば何一つわかっていない状況だった。

そんな状況の中、その調査をたった2人で行うのは些か無茶・無謀
となのは達は考えたのだ。

一護

「だったら俺も行くぜ　　。コイツらの言う通り、2人だけっての
は」

一護もなのは達に賛同し、シグナム達に「自分も一緒に」と言うが、

ヴィータ

「見縊んなよ、一護」

シグナム

「私達だけで十分だ」

当の2人はそれを断る。

一護

「だけど ツー!!」

それでも猶食い下がろうとする一護だったが、突然その言葉を引っ込めた。

シグナムが一護の顔に手を翳し、その言葉を遮った。

シグナム

「それに、お前には主やテストタロツサ達を護っていて欲しい」

一護

「シグナム」

2人の決意は固く、一同の顔はその決意を前に、少しながら曇った。

その時、

エレア

「だったら私が一緒に行きます」

不意に、エレアが言った。

しかし、幾ら調査員が一人増えても、一同の顔から不安の色が消える事はなかった。

そんな雰囲気を感じたエレアが笑みを浮かべ、

エレア

「別に大丈夫ですよ、そんな顔しなくても。何かわかればすぐに連絡しますし、万が一危なくなったら“転移魔法”ですぐに戻って来ますから！」

右手の人差し指をピンと立てながら言った。

はやて

「わかった。ほんなら、お願いするわ。一護君もそれでええな？」

一護

「ああ。頼んだぜ、エレア」

エレア

「フフン！ 任せてください！」

ヴィータ

「そっちも、はやて達の事、頼んだぞ」

ナツ

「任せとけ！」

ツナ

「わかった」

シグナム

「テストロッサ達も、主の事を頼む」

なのは

「うん」

フェイト

「シグナム達も、気を付けてね」

シグナム

「ああ」

エレア

「それじゃあ」

ヴィータ

「行ってくるぜ！」

その会話から数分後、シグナム、ヴィータ、エレアの3人は、外部への調査へと向かった。

シグナム達が六課を出ようとしていた頃、そこから数百メートル離れた場所に1人の男が立っていた。

黄金の鎧を纏い、背に2本の大剣を携えた大男だった。

???

「
」

その男は、ジッと唯一点にのみ視線を向けている。

その視線の先は丁度、六課の隊舎がある方向だった。

男はその方向を暫く凝視した後、スッと眼を閉じ、踵を返して、そのまま反対方向へと歩みだした。

男の歩み行く先には、砂上に聳え立つ荘厳な神殿があった。

外部の調査を始めてから数十分。

六課の隊舎があつた位置から数キロ離れた地点に、シグナム、ヴィータ、エレアの3人はいた。

ヴィータ

「見渡す限り、砂漠、砂漠、砂漠　だな　」

シグナム

「ああ　。以前にも“砂漠の世界”には訪れた事があるが、ここはさらに広いようだな　」

ヴィータもシグナムも、限りなく広がる砂漠に内心嘆息しながらも、自分達が今いる世界についての推測を立てていた。

エレア

「一応“空間探査”を掛けてみましたが、何処も彼処も同じ砂漠です　ね　」

エレアも自身の魔法を使って空間を一気に把握しようとしたが、この世界はどうかやら何処まで行っても一面の砂漠のようだ。

シグナム

「つまり」

エレア

「ええ。私達が調べるべきなのは」

ヴィータ

「この中だって事だな」

そう言つて3人は視線を上へと向ける。

その視線の先には、荘厳な神殿が聳え立っていた。

シグナム

「入るぞ」

ヴィータ

「おう！」

エレア

「はい」

3人はその神殿の中へと入っていく。

ヴィータ

「随分暗えな」

神殿の中に光は無く、僅か数歩先の足元が辛うじて見えるか見えな
いかという程、視界が悪かった。

シグナム

「奥の方へ行ってみよう」

しかし、“視界が悪い”というのが調査を断念する理由にはならな
い。

3人はさらなる調査のため、黝然ゆうぜんと闇に包まれた神殿の奥へと歩み
を進めた。

その時、

ザッ

シグナム・ヴィータ・エレア
「「ツ！！！？」」

不審な物音が耳に入り、3人は歩みを止め、身を構える。

シグナム
「（なんだ　？）」

レヴァンティンを構えながら、物音の正体を探るシグナム。

物音だけでは気の所為という場合も考えられるが、それだけではない、何か　途轍もなく不穏な何かを、シグナムは感じ取っていた。

そして、

ザアアアン！！

ヴィータ
「ぐっ！？」

エレア

「くっ!?!」

その予感ほ、的中した。

人の体が斬り裂かれるような音と共に、ヴィータとエレアが苦痛な声を上げて倒れる。

シグナム

「ヴィータ! エレア!」

シグナムは倒れた2人に呼び掛けるが、応答が帰って来ない。

シグナム

「くっ!?! (何か、いる!?!)」

レヴァンティンを構えたまま、シグナムは2人を襲った敵を探る。

シグナム

「(何処だ!? 何処にいるんだ!?!)」

シグナムは気を張りながら、視線を右へ左へと動かす。

その時、

ザスッ

シグナム

「!?!」

瞬間、シグナムは自分の胸の辺りに、鈍い痛みと妙な違和感を覚えた。

シグナムが視線を自分の胸へと落とすと、

シグナム

「ッ!?!?!?!」

大剣のモノと思しき刃が、胸を貫いていた。

その事態に驚愕しながらも、シグナムはその剣を握る者へと視線を移す。

そこには、黄金の鎧を纏った大男の姿があった。

???

「* * *」

男が小さく何かを呟く。

その瞬間、

シグナム

「ッ!? ぐっ!」

シグナムは自分の体の異変を感じた。

力が入らない

いや、力が抜けていく。

シグナム

「ぐっ！！　ぐああああ！！」

まるで、刃を通して何かを吸い取られているかのように。

シグナム

「くっ　い　ち、護　」

ドサッ

か細い声で呟いた後、シグナムは倒れてしまった。

????

「残るは　6人　」

男も再び小さく呟く。

しかし、その呟きを聞く者はいなかった

部隊長室

A L L

「 「 「

「 「 「

部隊長室には、外部の調査へと向かったシゲナム、ヴィータ、エレアの3人を除く6人がいる。

しかし、一同の表情は心なしか暗い。

それというのも、

はやて

「 遅い 幾らなんでも、遅すぎる

「

先述した通り、シグナム、ヴィータ、エレアの3人は外部の調査へと赴いているのだが、3人が六課を後にしたのは既に数時間前の事。

その間に3人からの連絡は “ 0 ” 。

そして、未だに無い。

一同の心に1つのフレーズが過ぎる。

“ 何かが起こった ”

その時、

ドオオオオオン！！！！

A L L

「「「！！！！！！！！！！」」」

隊舎の外で爆音が轟いた。

はやて

「な、なんや！？」

はやては驚愕の声を上げ、空間モニターを展開し、それに外の状況を映し出す。

しかし、モニターに映るのは砂煙ばかりで、一向に状況がわからない。

すると、

ナツ

「ううう

だあああッ！！ 焦れっつてえなァ！！」

ツナ

「ちよ！？ ナツ！？」

ナツ
「おおおおッ！！！！」

砂煙ばかりの画面に痺れを切らしたナツが、叫びながら部隊長室を飛び出していった。

一護

「あの馬鹿ッ！！！」

なのは

「ナツ君！！！」

それに釣られるようにして、他の5人も隊舎の外へと向かった。

6人が隊舎の外へと出ると、未だに砂煙が巻き起こっていた。

フェイト

「くっ！ 何も見えない ツ！！」

それによつて視界が遮られ、6人は外へと出た今でも状況をすぐに理解できないでいた。

ナツ

「チッ！ 火竜の 咆哮！！！」

ゴオオオオツ！！！！

又も痺れを切らしたナツが砂煙に向かって火のプレスを放ち、それを吹き飛ばす。

そして、砂煙が吹き飛んだその先には、

????

「よオ 久しぶりだな」

A L L

「「「ツ!!!!!!!!!!」」」

1人の男が立っていた。

その人物は、

一護

「てめえは ユークス!!」

ディストウレ
十滅将の1人、ユークスだった。

ツナ

「な、なんでお前がここに!?!」

ユークス

「何故か だつて? 俺がお前らをこの世界に飛ばしたからだ」

はやて

「なんやて!?!?!」

ユークスの明かした事実にも、一同は驚愕した。

誰にも悟られず、一夜にして六課を隊舎ごとと転移させるという所業に。

なのは

「ここは、何処なの？」

ユークス

「ここは“第0管理世界クロノス” 七戦鬼が封印されていた世界だ」

フェイト

「ここが クロノス」

ユークス

「まあ、今となつては最早封印場所じゃねえかな」

ALL

「「「

「「「

一同はユークスの淡々とした言葉を聞きながらも、一瞬たりとも警戒を解かなかった。

ユークス

「今は」

そんな一同に対し、ユークスは再び言葉を発した。

ユークス

「お前らの“処刑場”だ」

ALL

「ッッッ！！！！！！」

その瞬間、一同は一気に臨戦態勢に入った。

ユークス

「慌てるな。俺はただの“傍観者”だ」

ユークス

「そいつが、お前らを処刑する処刑人にして“最凶の七戦鬼”

」

ユークスが一息置く。

ユークス

「蛇王^{じやまう}ニーズホッグだ」

T
o
B
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第58話『出現！最凶の七戦鬼』（後書き）

現在のアンケートの集計は

? 4票 ? 5票 ? 5票

（リア友票含む）

です。

汗）
?と?が同率なので、このまま行くと幕間がかなり長くなりそう）

アンケートの投票は10/20（木）まで受け付けております！

みなさん！是非ご投票ください！！

感想・指摘・意見・質問等もお待ちしてます！

P.S.

活動報告の方にも書きましたが、これからは3作品とも完全不定期

更新となります。

ただ一言

すみませんでしたm() () m

ではまた

次回、 『 VS 蛇王ニーズホッグ 』

第59話『 V S 蛇王ニーズホッグ』（前書き）

みなさん

大変、大変長らくお待たせ致しました。

やっと書き上がりました。

約3週間とかどんだけ

それでは、どうぞ

第59話『 vs 蛇王ニーズホッグ』

【3人称side】

ツナ

「蛇王 ニーズホッグ」

何とも無く、ツナがその名を声に出した。

眼の前に佇む人物 最凶の七戦鬼 の名を 。

その瞬間、

ツナ

「っ!?!」

ツナの顔が驚愕に染まる。

突然、自分の体が眼の前の男が持つ大剣によって斬り裂かれる

ツナ

「っ　　！！」

という感覚に襲われた。

超ツナ

「（なんだ、今は　　）」

その拍子にツナは死ぬ気化し、その感覚の正体に気付いた。

超ツナ

「（まさか　　“殺気”　　！？）」

それは、ニーズホッグがツナに向けて放った鋭い“殺気”だった。

超ツナ

「（一瞬、本当に斬られたと思った　　。なんて殺気だ　　！！）」

ニーズホッグの殺気に気圧されながらも、その双眸は明確に眼前の敵を捉えている。

一護たち他の5人も同様　　。

そして、対峙した双方のうち、

ニーズホッグ

「サイレント」

先に動いたのは、ニーズホッグだった。

ニーズホッグは小さく呟くと同時に一歩、足を踏み出す。

それに対し、六人は警戒心を高め、身を構える。

しかし、その高められた警戒心は一瞬にして崩れ落ちる事となった。

ALL

「っっっ！！！！！！」

僅か2、3秒前まで目の前にいた敵の姿が、一瞬にして見え失せた。

この事態に6人の警戒心は揺らぎ、それが強い動揺へと変化したのだ。

そして、この6人の中で最も早く警戒心がいた。 いや、危機感を得た者

ナツ

「っ！！？　なのは！！　危ねえっ！！」

なのは

「え？」

ナツが逸早く何かを察知し、それをなのはに伝える。

しかし、急なナツの呼び掛けに反応し切れなかったなのはは一瞬、その動きを停止させてしまう。

ナツ

「っ！！」

ナツは自分の頭を埋め尽くす“緊急信号”エマージェンシーを受け、なのはの許へと駆け出す。

なのはの許へ着くや否や、その身を抱きかかえ、

なのは

「きゃっ！」

そのまま横へと飛ぶ。

ドオオオオオン！！！！

その直後、さつきまでなのはが立っていた場所に1本の太剣が振り下ろされ、衝撃で砂煙が舞い上がり、轟音が響き渡る。

勿論、ニーズホッグの攻撃である。

ナツ

「チッ！ 火竜の 鉤爪！！！」

ナツは抱えていたなのはを下ろし、その体勢からニーズホッグに向かって炎を纏った回し蹴りを放つ。

しかし、ニーズホッグはそれを右腕でガードし、力を込めて押し返す。

ナツ
「っ!!」

ニーズホッグに攻撃を押し返されたナツは、なのはを連れて後方へ下がり、ニーズホッグから距離を取った。

一護
「月牙」

フェイト
「ハーケン」

ナツが離れた事を受け、今度は一護とフェイトが空中から攻撃を仕掛ける。

一護
「天衝!!!!」

フェイト
「セイバー!!!!」

ドカアアアアン!!!!

ほぼ同時に放たれた漆黒の斬撃と雷電の斬撃は、一点　　ニーズホ
ツグの許　　で合流し、爆発を起こす。

しかし、

一護・フェイト

「っっ!!?」

爆発した場所にニーズホツグの姿は無く、

超ツナ

「っっ!!　はやて!!　後ろだ!!」

はやて

「!!」

いつの間にかはやての背後に回り込んでいた。

それに気付いたツナがはやてに危険を訴え掛ける。

ツナの訴えを受け、はやては咄嗟に前方へと飛ぶ。

ドオオオオオン！！！

直後、なのはの時同様に大剣が振り下ろされ、再び轟音と共に砂塵が舞い上がる。

はやて

「いつの間に　！？」

はやては大剣を振り下ろした人物　ニーズホッグ　を見据えて
呟く。

超ツナ

「（コイツ　気配が読めない　！？）」

ツナも又、ニーズホッグに対して驚愕の念を抱いていた。

先ほどののを襲った時といい、今といい　ニーズホッグの動作の気配が読めないのである。

ツナの持つ“超直感”の能力を持ってしても　。

はやて

「ツナ君　もしかして」

超ツナ

「ああ、アイツの動きがほとんど読めない。恐らく、動作の際の気配を消すのがアイツの能力なんだろう」

ツナはニーズホッグの能力を、“自分の気配を消す能力”と推測する。

はやてもツナの様子から薄々感付いていたようだ。

はやて

「中々厄介やな。どうする？　ツナ君」

超ツナ

「完全に気配が消せてるって訳じゃない。攻撃の際、僅かだが“殺気”が出る。それに、特殊な移動法を使ってるって訳でもなさそうだ。はやて」

ツナはそこまで考え、それによって思いついた作戦をはやてに伝える。

ツナの作戦を聞いたはやては頷き、それを他の4人にも伝える。

はやてが作戦を伝え終わった直後、戦況が動いた。

超ツナ

「!!!」

ツナは何かを感じ取り、即座に反転して炎を纏った拳打を放つ。

ガキイイイン!!!

ツナが突き出した拳と、ニーズホッグの振り下ろした大剣がぶつかり、火花を散らす。

ニーズホッグ

「ほう。どうやら、貴様は私の気配を読めるようだな」

何やら感心したように言うニーズホッグ。

ニーズホッグ

「いや、読まれているのは殺気か」

超ツナ

「殺気を受けるなんて事は、日常茶飯事だったものでな
！！」

ツナは言うと同時に拳に力を込め、大剣を押し返す。

押し返されたニーズホッグはそのまま後方へと下がる。

超ツナ

「それにその口振りだと、やはりお前の能力は“自分の気配を消す”
”と言ったモノで正解のようだな
」

ツナはニーズホッグの言葉から自分の推測が的を得ていた事を確信する。

ニーズホッグ

「フツ 仮にそうだとしても、私の能力を見抜いた所で、貴様ら
に勝機が訪れた事にはならんぞ？」

超ツナ

「わかっているさ。だから
」

ツナはスツと左の掌をやや後ろに向ける。

ニーズホッグ

「？」

ニーズホッグはそれを訝しげに見据えている。

超ツナ

「今から勝機^{それ}を、手に入れる　　！！！」

ツナは言葉を紡ぐと同時に、後ろに向けていた掌から炎を噴出し、それによる推進力でニーズホッグに飛び掛る。

対するニーズホッグは、別段、狼狽や吃驚と言った感情を見せず、

ガキイイイン！！！！

悠然と構えた大剣でツナの拳打を受け止める。

ニーズホッグ

「惜しい　　」

超ツナ

「どうかかな？」

ニーズホッグ

「何？」

ツナは拳打を放っていた右手と、炎を噴出していた左手をニーズホッグの足元に付ける。

超ツナ

「ファースト零地点突破・初代エディション」

ニーズホッグ

「!!!」

瞬間、ツナの両手から炎ではなく、強烈な冷気が放たれる。

超ツナ

「カテーナ・デル・ギアツチャーレ氷結の桎梏!!!」

ピシィィィッ! ! ! !

ニーズホッグ

「これは　!!!」

ツナの技名の呼称と共に一気に噴出した冷気がニーズホッグの体軀を駆け巡り、その四肢を凍結させた。

凍結された四肢は、さながら“氷の手桎足枷”と言った感じだった。

まさしく“桎梏”。

超ツナ

「今だ!!!」

ニーズホッグの動きを封じたツナは、瞬時にその場を離れ、強く叫ぶ。

その叫びに呼応するように、他の5人がニーズホッグに攻撃を仕掛ける。

ナツ

「火竜の煌炎!!!」

なのは

「エクセリオンバスター！！！！」

ドカアアアン！！！！

まず放たれたのはナツの火球となのはの砲撃。

一護

「月牙天衝！！！！」

フェイト

「トライデントスマッシュャー！！！！」

ドカアアアアアン！！！！

次に放たれたのは一護の斬撃とフェイトの砲撃。

はやて

「来よ 白銀の風 天より注ぐ矢羽となれ！ フレーズヴェルグ！！！！」

ドドドドドカアアアアン！！！！

最後にはやてが展開した魔法陣から5本の砲撃が放たれ、大爆発を起す。

技を放った5人とツナが合流し、爆発によって生じた黒煙を見据えながら立っている。

一護

「やったのか？」

フェイト

「わからない。けど、幾ら七戦鬼でもアレを全部受けたら」

はやて

「そやな。私らも結構全力やったし」

そんな言葉を交わす6人。

しかし、

ゴオオオオオオ

ナツ

「な、なんだ、コレ!？」

なのは

「コレは “魔力”!？」

突然、爆発によって生じた黒煙の中から途轍もない魔力が発せられ、それが大気を揺らす。

それを放っているのは、

二ーズホッグ

「フン、大した魔導師共だ」

2本の大剣を構えた二ーズホッグだ。

6人は強大な魔力を受けたためか、微かに身震いし、表情は驚愕―色に染まっている。

しかし、身震いや驚愕の要因はそれだけではない。

超ツナ

「馬鹿な アレだけの攻撃を受けて まったくの無傷だと
？」

そう ツナの零地点突破によって四肢を凍結され、一護たち5人の高威力の攻撃を連続して受けたにも関わらず、ニーズホッグの体はまったくの無傷だったのだ。

その現実が、対峙する6人に僅かな恐れを抱かせた。

ユークス

「愚かだな」

その光景を少し離れた位置から傍観していたユークスは、まるで6人に語り掛けるかのように独り言を呟く。

ユークス

「これまで散々お前たちを苦しめて来た七戦鬼。その中で“最凶”の名を冠する奴だぜ？ 能力が“気配を消す”なんてちんけなモノ1つな訳ねえだろ」

ユークスは嘲笑の意を込めたような口調で淡々と言葉を紡ぐ。

ユークス

「ニーズホッグが操る2本の大剣 右の剣『オロチ』、左の剣『ナーガ』。ニーズホッグの分身たる2本の大剣の能力こそが、奴の真骨頂だ」

ユークスが再び戦場に視線を移す。

その視線の先では、ニーズホッグが左手に持つ剣、『ナーガ』を振るおうとしていた。

ニーズホッグ

「フンッ!!」

ドオオオオオオン!!!!!!!!!!

一護・ナツ・ツナ

「「「うああああ!!!!」」」

なのは・フェイト・はやて

「「「きゃああああ!!!!」」」

翳された大剣が力強く振るわれた瞬間、刃先から途轍もない魔力が

放たれ、凄まじい轟音と共に6人は吹き飛ばされてしまった。

その距離、およそ十数メートル。

たった一度、ただただ剣を振るっただけ

それだけでの事だ。

ニーズホッグ

「我が分身 左の剣『ナーガ』は、その刃に受けた敵の技を吸収し、威力を増幅して撃ち出す。我から距離を取って攻めている限り、貴様らの攻撃は効かんよ」

フェイト

「そんな ！！」

はやて

「な、なんて能力や ！！」

敵を恐れて踏み込めないでいる限り、6人に勝ち目は無い

要約すればこう言う事だ。

しかし、それを物ともしない者が約1名。

ナツ

「離れてダメだってんなら、直接殴りやいいだけの話だろオツ！！」

楽観的な考えではあるが、あながち間違ったものでもない。

ナツ

「おおおおお！！！！」

ナツは声を荒げながら、真っ直ぐニーズホッグに向かう。

ナツ

「火竜の 鉄拳！！！！」

ニーズホッグ

「！！！！」

ガキイイイン！！！！

先刻のツナの時のように、ニーズホッグはナツが放った炎の拳打を『ナーガ』で受け止める。

ニーズホッグ
「フッ」

ナツ
「何が可笑しんだよ　！！」

ナツの拳打を受け止めながら、何やら不敵な笑みを零すニーズホッグ。

その直後、

ゴオオオッ！！

ニーズホッグの持つもう一本の剣　『オロチ』の刃が紅蓮の炎を纏った。

ナツ
「っ！！」

ナツはそれに気づき、咄嗟にニーズホッグから離れる。

そして、

ニーズホッグ

「紫電　一閃！！！」

ザアアアアン！！！

ニーズホッグから離れたナツの顔の数ミリ前を、炎の斬撃が通過した。

しかし、攻撃を躲したナツに、ニーズホッグは追撃を掛ける。

ニーズホッグ

「シュワルベフリーゲン！！」

ダアアアアン！！！

ナツ

「ぐあああっ！！！」

二ズホツグが撃ち出した八発の魔力を帯びた鉄球に被弾し、ナツは痛楚な声を上げながら後方へ飛ばされる。

なのは

「ナツ君!!!」

なのはがナツの許へと駆け寄る。

フェイト

「今のって、シグナムとヴィータの技!？」

はやて

「な、なんで、コイツが2人の技を!？」

フェイトとはやては驚愕した。

いや、2人だけではない。

一護も、ナツも、ツナも、なのはも。

その場にいる誰もが吃驚した。

今し方ニーズホッグが放った2種類の技は、数時間前に消息を絶った自分たちの仲間の技だからだ。

一護

「なんでお前がシグナムとヴィータの技を使えるんだ!!」

一護が口調を荒げてニーズホッグに問い質す。

ニーズホッグ

「答える必要は無

」もう一本の剣の能力さ

」

」フン

」

一護の問いに答えたのは問い質されたニーズホッグ本人ではなく、少し離れた位置で傍観していたユークスだった。

一護

「“剣の能力”だと？」

一護が訝しげにユークスの吐いた言葉をなぞる。

ユークス

「ああ。そいつの持つもう1本の剣　右の剣『オロチ』は、斬った相手の魔力、能力を自分のものとして略奪するチカラがあるのさ」

ALL

「っっっ！！！！！！！」

ニーズホッグ

「　饒舌はあまり感心できる事ではないぞ　」

ユークス

「フツ　奴らは今“おまえ最凶”に挑んでるんだ　。　言つなれば“ハ
ンディキャップ”ってやつだ　」

ニーズホッグ

「フン　」

ニーズホッグの持つ新たな能力が明かされた。

しかし、フェイトは敵の新たな能力ではなく、ユークスの並べた言葉の中の1つに引っ掛かった。

フェイト

「　斬った敵”って、どう言う事　？」

その言葉と先刻の攻防が指し示すのは1つの事実。

フェイト

「2人に シグナムとヴィータに何をしたの！？」

ニーズホッグが消息不明の2人の技を使用したと言う事は

ニーズホッグが斬った相手の能力を奪う事ができると言う事は

その剣で2人を斬った と言う事だ。

その事実にも、フェイトの心はあつという間に昂った。

フェイト

「っ！！ 貴様ア！！ 2人をどこへやった！！！」

フェイトの激声がニーズホッグに飛ぶ。

その時、

ユークス
「こっさ」

パチンツ！

ユークスが指を鳴らすと、その周りに表面がゴツゴツした数十本の黒い氷柱のような物が現れた。

A L L

「っっっ！！！！！！」

その中には、消息を絶っていた3人　シグナム、ヴィータ、エレアが閉じ込められていた。

3人だけではない。

フォワードの4人やギンガ、シャマル、ザフィーラ、ナンバーズ

消息不明だったほとんどの人員が、氷柱の中に閉じ込められていた。

はやて

「みんな」

はやてが小さく呟く。

その声はあまりにも弱々しく、今にも消えてしまいそうなほどだった。

仲間たちが閉じ込められた氷柱を見た瞬間、全員の動きが停止した。

その様子に気付いたユークスが、不気味な笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

ユークス

「心配するな。これは人質なんてモノじゃない。お前らが勝てばちゃんと解放するさ。まあ、ずっとこのまんまだと、どうなっちゃうかはわかんねえがな」

フェイト

「っ……!!……!!」

その言葉に、フェイトがキレた。

フェイト

「ぶざけるなアアアア！！！」

フェイトはデバイスを長剣型の『ライオットブレード』に変形させ、ユークスに斬り掛かる。

フェイト

「はあああああっ！！！！」

ユークス

「フツ」

ギイイイイン！！！！

フェイト

「っ！！！！？」

フェイトの渾身の斬撃は、ユークスが張った黒い障壁によつていとも簡単に防がれてしまった。

ユークス

「戦いの前に言ったよな？ 『俺はただの“傍観者”だ』って
。傍観者かんきやくに危害を加えるとは、最低のゲームプレイヤーだな

「!!」

ドン!

フェイト

「きゃっ!!」

ユークスは翳した掌から衝撃波のようなものを放ち、フェイト押し返した。

ユークス

「レッドカード。お前は“退場”だ」

ザスッ

フェイト

「っ!!!?!」

直後、フェイトは自分の胸の辺りに鈍い痛みと違和感を覚えた。

見ると、大剣のモノと思しき刃が、胸を貫いていた。

そして、

ニーズホッグ

「貴様の能力^{チカラ}、貰い受ける」

ニーズホッグの能力が、フェイトに牙を剥いた。

フェイト

「くっ！！ ああああああ！！！！」

フェイトの胸を貫く刃が仄かに光を放つと、途端にフェイトが苦しみ出す。

一護

「フェイト！！！！」

なのは

「フェイトちゃん！！！！」

一護となのはがフェイトに呼び掛ける。

その声に反応し、フェイトが2人の方を見て、

フェイト

「――護　　なのは――」

ドサッ

そう呟いた後、静かに倒れてしまった。

ユークス

「ダークフリーズ――」

ユークスが倒れたフェイトの場所に魔法陣を展開し、技を発動する。

直後、倒れていたフェイトは、シグナムたちと同様に、黒い氷柱に閉じ込められてしまった。

はやて

「っ！！　お前エ！！」

なのは

「フェイトちゃんを　みんなを返せ！！」

なのははやてがその光景を目の当たりにし、感情を昂らせながら、仲間たちを閉じ込めた張本人の許へと駆ける。

超ツナ

「行くな！ はやて！」

ナツ

「なのはア！！！」

ナツとツナが2人に呼び掛けるが、

ザアアアアン！！！！

なのは

「くっ！！！」

はやて

「ぐう！！！」

既に遅かった。

ユークス

「今のは立派な抗議行為だ。よって、お前らも同じくレッドカード “退場” だ。」

先刻と同じように、まるでプロセスを踏むように、ニーズホッグが2人を斬り裂き、ユークスが黒い氷柱に閉じ込める。

一護

「なのは フェイト はやて。」

一護が眼の前で囚われた3人の名を呼ぶ。

しかし、当然の事ながら、その声に3人が呼応する事は無かった

ニーズホッグ

「残るは 3人。」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

第59話『 vs 蛇王ニーズホッグ』（後書き）

遅くなりましたが、アンケートの集計が完了致しました。

結果は、??の同率です！

どうでしょうか？

予定としては、今の最後の七戦鬼との戦い終了 過去篇 ギャグ
新章

と考えております。

次回もなるべく早く投稿できるように頑張ります。

でも最悪

そうなってしまった場合はすみません。

でも、精一杯努力します！

感想等が来ると励みになるのでよろしければ (汗)

と言う事で、感想・指摘・意見・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、『烈火の紅い月』

第60話『烈火の紅い月』（前書き）

最初に言っておきます。

今回の話、超無理矢理展開です。

あしからずm（（m

では、ごうござん

第60話『烈火の紅い月』

【3人称side】

ニーズホッグ

「残るは 3人」

2本の大剣を構えながら呟くニーズホッグ。

その背後には黒い氷柱に閉じ込められた仲間たちの姿。

その光景を目の当たりにし、一護たちの心は震えていた。

しかし、その震えは“恐怖”から来るものではなく、

一護

「っ!?!」

“怒り”

そんな感情から来るものであった。

それを体現するかのよう、一護の刀を握る手に一層力が込められる。

しかし、“怒り”で我を忘れて敵に突撃するような愚行に走るほど、冷静さを失ってもいなかった。

ユークスは言った。

ユークス

『お前らが勝てばちゃんと解放するさ』

と。

その言葉が本当かどうかと言う確証は無い。

ただ、ユークスは以前『この戦いはゲームだ』とも言っていたし、自分が決めたルールを犯したフェイトたちに対して『レッドカード“退場”』などとも言っていた。

察するに、ユークスが戦いをゲームだと考えている限り、囚われている仲間たちに直接危害を加えられる事は無いだろう。

そして恐らく、自分たちが勝てば、本当に仲間を解放してもらえ
かも知れない。

そこまで考えての結論は1つ

“ 眼の前の敵を倒す ”

それだけだ。

敵は強大、それでも勝たねばならない。

そのためには、“ 怒り ” で冷静さを欠いてはならない。

そのためには、“ 怒り ” で我を忘れてはならない。

故に、一護はいきなり斬り掛かるような蛮行には出なかった。

同じ結論に至ったツナも同様。

しかし、

ナツ

「っ！！！！」

ナツは、我慢ならなかった。

ナツ

「てめえええええっ！！！！！！！」

ナツは声高に吼えながらニーズホッグに飛び掛る。

ナツ

「火竜の鉄拳！！！」

そして、飛び掛る勢いそのままに炎の拳を叩き込む。

ニーズホッグ

「フン」

ガンッ！！

しかし、そんな直情的な攻撃が通じる訳もなく、ニーズホッグは構えた剣でナツの拳打を受け止める。

ナツ

「っ！！ 火竜の鉤爪！！！」

ガンツ！！

ナツ

「翼撃！！！」

ガンツ！！

ナツ

「碎牙！！！」

ガンツ！！

ナツ

「劍角！！！」

ガンッ！！！！

ナツは連続して炎の打撃を浴びせ続ける。

しかし、その度にニーズホッグの剣に阻まれ、ダメージを与えられないでいた。

ナツ

「クソっ！！ 火竜の 煌炎！！！！！」

ナツは攻撃が通じない事にイライラを募らせながら、さらなる攻撃のため、両手を合わせて巨大な火球を放つ。

しかし、

一護

「っ！？ おい！！ ナツ！！！」

それは端から見てもわかるほど、明らかな愚行だった。

ニーズホッグ

「アブゾーブ」

ナツの放った火球は二ーズホッグにダメージを与えるどころか、待ち構えたように翳された大剣 『ナーガ』に吸収されてしまった。

ナツ

「っ！！！」

それを見たナツは焦燥を感じるが、既に手遅れだった。

二ーズホッグ

「リバーズ」

ドオオオオオン！！！！

ナツ

「ぐああああ！！！」

『ナーガ』から強烈な白い閃光が放たれ、ナツは吹き飛ばされる。

超ツナ

「ナツ！！！」

ツナがナツの許へ駆け寄る。

ナツ

「ぐっ　くっそオ、あのヤロウ　絶対に赦さねえ　！！！」

超ツナ

「少し落ち着け！」

ナツ

「落ち着ける訳ねえだろ！！！」

激昂するナツを宥めようとするツナだったが、今のナツには無駄な行為だった。

ナツ

「なのはたちが、仲間がやられたんだぞ！！　落ち着ける訳　」
「だからこそだ！！！！　っ！！！」

さらにヒートアップするナツの言葉を遮り、ツナも声を荒げる。

超ツナ

「^イまだみんな死んだって訳じゃない。みんなを助けるために、^アニ―

ズホッグを倒すんだ。けど、そのためにはただ“怒り”をぶつけるだけじゃダメだ。わかるだろ　？」

ナツ

「　ああ、そうだな」

ツナの説得により、ナツは冷静さを取り戻した。

ニーズホッグ

「フン　冷静になったところで無駄な事だ。この2本の剣の能力がある限り、貴様らの行動は少なからず制限される。」

超ツナ

「ぐっ　（確かに、そうだ　）」

ニーズホッグの言葉にツナは唇を噛み、内心でそれを肯定する。

超ツナ

「（『ナーガ』がある限り、一護の月牙も、ナツのブレスも、オレの？　BURNERも　迂闊に撃てば吸収されるのがオチ　。かと言ってなんの策も無しにアイツに近付けば、『オロチ』の斬撃を受けて能力を奪われる　！！）」

ツナは様々なケースを脳内でシミュレーションする。

だが、どんなに考えても思いつくのは最悪の結末ばかり。

ニースホッグ

「幾ら思考を巡らせようと、それも無駄な事。お前たちの命運はここで。」

ニースホッグがそこまで言葉を紡いだ瞬間、

一護

「月牙」

ニースホッグ

「っ!？」

背後から仮面を付けた一護が奇襲を掛けた。

今までとは一転、若干焦りながら『ナーガ』を構えようとするニースホッグだったが、

一護

「天衝！！！！」

ザアアアアン！！！！

間に合わず、一護の斬撃を諸に受けた。

ニーズホッグ

「ぐっ
」

斬撃を受けたニーズホッグは少し蹠跟めきながら後退する。

一護

「悪いな。コッチは悠長に構えてるだけの余裕は無えんだ」

一護はニーズホッグを見据え、刀を構えながら言う。

ニーズホッグ

「フン、生意気な小僧だ
」

ニーズホッグは体勢を立て直し、一護を睨む。

ニーズホッグ

「先人の語りは聞いておいた方が身のためだぞ？」

一護

「なんだよ、お前 『饒舌は感心しない』とか言つといて、随分と喋るじゃねえか 。そんなんじゃ、敵に足元掬われるぜ ？ さっきみたいにな」

一護がそう言った瞬間、

ナツ

「紅蓮」

超ツナ

「ビッグバン」

ニーズホッグ

「っ！！！」

ニーズホッグが一護の方へ向き直った瞬間、今度はナツとツナが背後から攻撃を仕掛けた。

ナツ

「爆炎刃！！！！」

超ツナ

「アクセル！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

ニーズホッグ

「ぐおおおお！！！！」

一護の時同様、防御や回避が間に合わず、ニーズホッグは諸に2人の攻撃を受け、文字通り殴り飛ばされる。

ナツ

「へッ！ どうだ、このヤロウ！！」

ナツは勝ち誇ったポーズ 軽いガッツポーズ を取りながら言う。

一護

「調子に乗ってあんま無茶すんなよ ？」

そんなナツに一護から忠告が入る。

ナツ

「わアってるよ」

一護

「そうか」

超ツナ

「っ!!! 構えろ!!! 来るぞ!!!」

そんな2人のやり取りを後ろから見ていたツナが何かを感じ取り、
2人に呼び掛ける。

その直後、

二丁ズホツグ

「月牙」

一護

「っ!!!?!?」

ニーズホッグ
「天衝！！！」

ニーズホッグの剣から浅紫色の斬撃が放たれた。

一護

「くっ！ 月牙 天衝！！！」

ザアアアアン！！！！

ニーズホッグの斬撃に対し、一護も赤黒い斬撃を放ち、相殺させる。

ナツ

「今のつて、一護とおんなじ技か？」

一護

「いや、違う。今は ギンガの“月牙天衝”だ！」

超ツナ

「やっぱり、アイツは“オレたち以外のみんなの技が使える”と見て間違いなさそうだな」

一護

「ああ」

コークスが仲間たち全員を捕らえていた事から薄々予想していたが、今の攻防でニーズホッグが放った“ギンガの月牙天衝”を見てそれが確信に変わった。

ナツ

「今度はコツチの番だ!!」

話を終わらせ、ナツは右腕を掲げ、その手に炎の刃を形成する。

形成された刃はどんどん巨大化し、優に3、4メートルは超えた時、

ナツ

「行くぞ！ 火竜の 剣戟!!!!」

その刃をニーズホッグ目掛けて振り下ろす。

一護

「（お、おいおい！ そんな単純な攻撃が通じんのかよ!?!）」

超ツナ

「(なんだ ? 何か変な感じがする)」

一護は内心ナツの単純な攻撃に驚き、ツナは二ーズホッグに対して妙な違和感を覚えていた。

そうこう考えている間にも、ナツの巨大な炎の刃は二ーズホッグを襲おうとしている。

しかし、二ーズホッグは特に何か抵抗のようなものを見せる訳でもなく、そのまま斬撃を受けた。

その瞬間、

サアア

一護・ナツ・超ツナ

「「「っ！！！！？」」」

攻撃を受けた二ーズホッグの体が、突然霧散してしまった。

3人はこの奇妙な現象に覚えがあった。

ナツ

「っ！！ ティアナの幻術か！？」

ニーズホッグが使用したのは“ティアナの幻術魔法”だった。

超ツナ

「（どこだ！？）」

さっきまで自分の眼に映っていたニーズホッグが幻覚だとわかった瞬間、ツナは周囲を警戒しながらニーズホッグの気配を探す。

そして、

超ツナ

「っ！！ 後ろか！！」

自分の背後にニーズホッグツレの気配を感じた。

ツナは瞬時に身を反転させてニーズホッグを迎撃しようとする。

だが、

ニーズホツグ

「縛れ、鋼の軛はがねくびき!!」

一護・ナツ・超ツナ

「「「つ!!!?」」」

突如地面から数十メートルにもおよぶ拘束条が出現し、3人の体を貫いた。

超ツナ

「なっ!?!? コレは!!」

その瞬間、3人は身動きが取れなくなってしまった。

3人は知らなかったが、コレも囚われている仲間の技 “ザファイ
ーラの拘束魔法” である。

ニーズホツグ

「轟天爆砕」

3人を拘束した直後、ニーズホツグは『オロチ』を高々と掲げ、その刃に魔力を纏わせる。

ニーズホツグ

「ギガントシユラーク!!!」

掲げた大剣を勢いよく振り下ろし、ツナを押し潰しに掛かる。

超ツナ

「ぐっ

」

身動きが取れないツナは一瞬大ダメージを覚悟したが、

ナツ

「おおおお!!! 火竜の 炎壁イ!!!」

ガアアアアン!!!

拘束糸を力づくで突破したナツがツナを庇うようにして前に飛び出し、炎の壁を作り出してニーズホツグの打撃攻撃を受け止める。

これでダメージは回避できたかのように思われた。

が、

ニーズホッグ

「おおおおおおお！……！！！」

ナツ

「ぐっ …！！」

ニーズホッグは打撃の手を緩めるどころか、さらに力を込めて来る。

そして、

ニーズホッグ

「はああああっ！！！！！」

ナツ

「ぐっ …ぐああああ！！！」

ついに炎の壁が破られ、ナツは後方へ吹き飛ばされる。

超ツナ
「ナツ!!」

ツナはナツの身を案じて名を呼ぶが、この時、不覚にもツナは一瞬
気を緩めてしまった。

ニーズホツグ
「フン、隙だらけだ !!!」

超ツナ
「っ!!!??」

ニーズホツグ
「テートリヒシユラーク!!」

ドゴオオオオツ!!!!

超ツナ
「ぐふうっ!!!!」

大剣による“ヴィータの魔力付加の打撃”を受け、ツナはナツの許
まで吹き飛ばされる。

超ツナ

「くっ かはっ ぐう、うっ」

しかし、2人は一護の叫びに応答する事ができない。

超至近距離から、桁違いの魔力を込められた極太砲撃を諸に喰らったのだ。

当たり前である。

そんな2人に対し、ニースホッグはさらなる追撃を掛けようとしているのか、重い足取りで歩みを進める。

一護

「っ！！ 止める！！ ニースホッグ！！ そいつらに近付くんじやねえ！！！！」

一護は必死に訴えるが、ニースホッグの歩みは止まらない。

一護

「くそっ！！ くっそお！！くっそおっ！！（仲間がピンチだつてのに、なんで俺は捕まってんだよ！！ なんで動かねえんだよ！！）」

一護はひたすら心の中で吼える。

一護

「あの時だってそうだった！ 今戦えんのは俺だけなんだ！！」

一護の言う“あの時”とは、ミッドチルダで初めて虚化した日の事。

あの時も仲間たちはみんな倒れ、敵と戦えるのは一護だけだった。

その時の気持ちと今の気持ちがリンクする。

一護

「（動けよ、俺！ 俺が護るんだ！！ 俺が、護るんだ！！）」

一護の双眸に、より一層闘志の炎が滾る。

それを見る者がいた。

超ツナ

「（アレが　一護の覚悟か　）」

倒れているツナ、そしてナツだった。

ツナは一護の眼の奥に宿る確かな覚悟を見た。

そして、ほんの少しナツとアイコンタクトを取り、

超ツナ

「（決まり　だな　）」

ある事を決めた。

その間にも歩みを進めていたニースホッグが、ついに2人の許へと到達した。

ニースホッグ

「貴様らの能力^{チカラ}、貰い受ける　」

ニースホッグは『ナーガ』を構え、ナツとツナの体を貫こうとする。

しかし、

ナツ

「へッ

てめえに取られるなんざア

」

超ツナ

「真っ平ゴメンだ

！！」

ニーズホッグが2人に刃を突き刺す前に、ナツとツナは同時に炎を放った。

いまだ拘束条に囚われている一護に向かって。

一護

「っ！！」

ゴオオオッ！！

地を奔ってきたナツの竜の炎と、空中を飛んできたツナの大空の炎。

放たれた2つの炎が一護を呑み込む。

ニーズホッグ

「何っ!？」

ニーズホッグは2人のまさかの行動に驚愕し、少々狼狽える。

ナツ

「うっ 後は、任せたぜ 一護」

超ツナ

「お前の覚悟 見せてもらっぞ」

一護

「ああ」

2人のその言葉に応えるように、炎の中で一護は拘束糸を破壊し、その炎を身に纏う。

そして、炎が治まると、そこには一護が立っていた。

悠然と立っている一護は普段の一護とは微妙に、しかし明確に違っている。

具体的に言うと、オレンジ色の頭に赤いメッシュが入り、天鎖斬月を持つ手の袖が無くなり、その腕から天鎖斬月の刃先に架けて橙と紅蓮　2色の炎を纏っている。

今の一護は言うなれば、

フレイムクラッド
“ 炎を纏う者 ”

それだった。

ニーズホッグ

「（なんだ、コレは　。黒崎一護から途轍もない力を感じる
！！）」

ニーズホッグは眼の前に立つ人物から放たれる途方もなく巨大な力に気圧される。

その次の瞬間、

シュンッ！

ニーズホッグ

「っ！！！！？」

ニーズホッグの視界から一護の姿が消え、一瞬にして背後に回り込んだ。

死神の高等移動技術、“瞬歩”である。

一護

「っ！！！！」

ザアアアアン！！！！

ニーズホッグ

「ぐあああっ！！！！」

瞬歩から間髪入れずに一護が斬り掛かり、ニーズホッグの体を斜め一線に斬り裂いた。

ニースホッグ

「ぐう　　！！！」

ニースホッグは体にできた大きな裂傷を押さえながら僅かに後退する。

そんなニースホッグに対し、一護は天鎖斬月を振るい、炎の斬撃を飛ばす。

ニースホッグ

「馬鹿め！！　そんな攻撃、我が『ナーガ』のチカラで吸収してくれる！！」

ニースホッグは左手に持つ『ナーガ』を自分の身を庇うように構え、飛来する炎の斬撃を受ける。

斬撃を受けた『ナーガ』が炎を吸収しようとする。

だが、

一護

「っ！！！」

ザアアアアン！！！！

ニーズホツゲ

「なっ！！？」

一護は炎を吸収する『ナーガ』に向かって続けざまに炎の斬撃を放つ。

ザアアアアン！！！！

ザアアアアン！！！！

それも1度ではなく、2度3度と。

一護

「っ！！！」

ザアアアアン！！！！

そして4度目の斬撃を放ち、それを『ナーガ』が受けた瞬間、

バアアアアン!!!

連続で放たれた炎の斬撃に耐え切れなくなった『ナーガ』が粉々に砕け散った。

ニーズホッグ

「ば、馬鹿なっ!?!? 我が『ナーガ』を破壊しただと!?!?」

ニーズホッグは驚愕し、一護を凝視する。

ニーズホッグ

「(『ナーガ』の吸収の許容量を凌駕したと言っのか!?!? たった たった4度の斬撃で!?!?)」

揺らぐ事のないその事実、ニーズホッグはただただ驚愕する事しかできなかつた。

そして、

一護

「月牙」

ニーズホッグ

「っ！！！！？」

一護

「天衝　！！」

ザアアアアアアン！！！！！！！！

驚愕で動作を失ったニーズホッグに、一護は直接、紅蓮の斬撃を放った。

ユークス

「　コイツは予想外だな」

一護 vs ニーズホッグの戦場から数十メートル離れた地点。

そこからユークスは2人の戦いを見ていた。

ユークス

「ニーズホッグの能力は確かに強力だが、所詮は自分の力に相手の力を加える“足し算”の力。今の黒崎一護のように、仲間から力を託された“掛け算”の力には敵う筈もない。だが」

そこまで言葉を紡ぐと、ユークスはフツと笑みを浮かべ、

ユークス

「こう言うのがあった方が、ゲームらしくて面白れえな」

そう、静かに呟いた。

ニーズホッグ

「ハア、ハア、ハア、ハア」

「

一護から直接斬撃を受けたニーズホッグは、その場に蹲り、激しく息を乱している。

しかし、今の彼には乱れる呼吸を整える余裕も、気力も無かった。

だが、

一護

「どうした？ もう終わりかよ？」

ニーズホッグ

「っ！！ 餓鬼が！！ 舐めるなアアアア！！！！」

一護の挑発を受け、ニーズホッグは強大な魔力を放ちながら立ち上がる。

ニーズホッグ

「ウイングロード！！」

ニーズホッグは空中に“スバルの先天性魔法”を展開し、その上に乗る。

ニーズホッグ

「はあああっ！！！」

そこから大量の金属の破片を一護に向かって放つ。

ニーズホッグ

「デトネーション・レイン！！！」

ドカアアアアン！！！！

ニーズホッグは“チンクのIS”を発動させ、一護に向かって降り注ぐ金属すべてを爆発させた。

一護

「っ！！！」

一護は上空へ飛ぶ事で爆発を回避する。

しかし、

ニーズホッグ

「滅せ、雷光！！ プラズマザンバーブレイカー！！！！」

空中で回避ができない事を見越し、ニーズホッグは“フェイトの砲撃”を一護に放つ。

放たれた砲撃は一直線に一護へと向かう。

普通ならば諸に喰らって撃墜、がオチだろう。

しかし、一護は違った。

一護

「っ！！」

ザアアアアン！！！！

一護はただただ普通に天鎖斬月を横薙ぎに振るい、自分を襲う金色の砲撃をいとも簡単に掻き消した。

ニーズホッグ

「なん だと ！！？」

ニーズホッグは我が眼を疑った。

桁違いの魔力を込めた強大な砲撃が、たった1度、ただただ刀を振るっただけで相殺 いや、一護の方には実質的には被害が無いため、一方的に敗北したのである。

その事実を受け、数分前のように、ニーズホッグは驚愕で動作を失ってしまった。

そんなニーズホッグの前に、一護が降り立つ。

そして、ゆっくりと、実に重い足取りでニーズホッグの許へと歩み寄る。

ニーズホッグ

「（なんだ コレは ）」

この時、ニーズホッグは不意に覚えた 。

ニーズホッグ

「(なんだ この、感情は)」

とある感情を 。

ニーズホッグ

「(何故 我は、震えているんだ)」

その感情の正体は

震えの原因は

“恐怖”

ニーズホッグ

「う うおおおおオオオッ!!!」

恐怖に吞まれたニーズホッグは、『オロチ』を振り上げ、力任せに一護に斬り掛かった。

しかし、

ガシッ！

ニーズホッグ

「っ！！！」

一護は左手でその斬撃を難無く受け止め、

一護

「月牙天衝」

紅蓮の斬撃を放った。

ザアアアアアアン！！！！！！

ニーズホッグ

「が はっ
」

斬撃を受けたニーズホッグはそのまま地へと墜ちていく。

それと同時に展開されていたウイングロードも消え失せ、一護も地へと降りる。

一護

「ぐっ
！！」

地上に降りた瞬間、一護は片膝をついてしまった。

ナツとツナの炎を纏い、圧倒的な戦闘力を手にしたが故に、その反動もかなり激しいようだ。

力が切れているのを体現するかのようには、一護の姿は通常の正解時のモノに戻っている。

一護

「ハア、ハア、ハア やっと 終わったな
」

片膝をつき、乱れた呼吸を整えながら、一護は空を見上げる。

どこまでも暗い、『クロノス』の空を。

すべてが終末を迎えたかのように。

ナツ

「へッ スゲーぜ 一護」

超ツナ

「これで 終わり だな」

ナツとツナも、そんな一護を見ながら、事態の終末を感じていた。

しかし、

一護

「っ!!!?!」

まだ 終わってはいなかった。

ニーズホッグ

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

一護の眼に、大量に流血し、肩で息をしながらも立ち上がっている
ニーズホッグの姿が映る。

一護

「嘘 だろ ！？」

一護は間違い無く全力を出した。

出し切った。

“勝利”の感覚も、その手の中に確かにあった。

しかし、

ニーズホッグ

「舐めるなよ！！ 糞餓鬼がアアア！！！！」

まだ 終わってはいなかった。

二―ズホツグ

「あああああああああ！！！！！！」

二―ズホツグはなのはたちから奪った魔力のすべて　そして、自分の持つ魔力のすべてを解放する。

ナツ

「な、なんだよ　この魔力　！？」

超ツナ

「ぐっ　まだ　こんな力が　！！」

倒れているナツとツナはただただ驚愕し、同時に僅かな、そして確かな恐怖を抱く。

一護

「（負けるのか　俺は　）」

そして、一護も

一護

「（仲間を護るために力を取り戻したのに　！　仲間から思いを託されたのに　！！　俺は　負けちまうのかよ　！！）」

一護は自分の力の小ささを痛感し、平伏するように地面を凝視する。

天鎖斬月を握る手にも、その悔しさから力が入る。

一護

「（俺は　っ！！）」

一護がそんな感情に押し潰されようとした時、

一護

「っ！！」

時が　止まった。

一護

「これは　！！」

そして　声が出た。

一護

そして、再び時が動き出した。

一護たち3人の前では、ニーズホッグが周囲に無数の魔法陣を展開していた。

ニーズホッグ

「これで終わりだ　黒崎一護　。何もかも　！！」

一護

「　ああ、終わらせるぜ」

一護はスツと立ち上がると、天鎖斬月を低く構え、それを持つ右手に左手を添える。

一護

「見せてやるよ　」

そして、言った。

一護

「最後の月牙天衝」だ」

t o b e c o n t i n u e d

第60話『烈火の紅い月』（後書き）

いかかでしたでしょうか？

フレイムクラッドVer.

地獄篇のスカルクラッドをヒントに考えました。

戦闘描写はナツ vs ハデス、ツナ vs Dスピードをイメージして書きました。

どっちも、パワーUP 敵を圧倒、って感じでしたから（笑）

今回はいよいよ“あの技”です。

お楽しみに！

感想・指摘・意見・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、『終局の黒い月』

第61話『終局の黒い月』（前書き）

遅くなりましたあああああ！！！！！！！

約1ヶ月ぶりです（汗）

漸く、漸く【七戦鬼篇】終了の“無月”回です！

それを記念して（ なんの記念だよ！）

今回からこの小説の主人公たちの作品、3作品から名ゼリフ的なものを書いていこうかと思えます。

何故？

他の作者さんもやってるからさ（キリッ

それでは第1回目的の名ゼリフはあ コレだ！！

『…兄貴ってのが…どうして一番最初に生まれてくるか、知ってるか…？ 後から生まれてくる…弟や妹を守るためだ！！ 兄貴が妹に向かって“殺してやる”なんて…死んでも言うんじゃないよ！！』

誰もを知る、一護の名ゼリフですね。

一護がどれだけ妹たちを思ってるかがわかります。

では名ゼリフを紹介したところで、本編どうぞ！

第61話『終局の黒い月』

【一護side】

一護。

誰だ？

私だ。

斬月 いや 天鎖斬月、か？

そっだ 。 卍解状態ならば私に決まっているだろう 。

そっいや、そっだったな 。

変わらんな、お前は 。

そっか？

ああ、変わらん。相も変わらず、お前は甘い。

甘いつて。久々に話すつてのに、いきなり説教かよ

お前は甘い。だからこそ、お前は迷っている。

俺が、迷ってる？

そうだ。お前は迷っている。“最後の月牙天衝”の発動を。

っ!!

エレアあのみのことが信じられないのか？

そついうワケじゃねえよ。けど

“また何かを失うのが怖い”、か？

っ!!

お前は畏れている。それは意識とは別に、無意識的に、本能的に、能力の喪失を畏れている。どんなに仲間のことを信じようと、どんなに頭で理解しようと　お前の心は、本能は、その恐怖を捨て切れていない。

俺の　本能が　。

正直、私としては“最後の月牙天衝”を使つて欲しくはない。あの女の能力が本物だったとしても、本物「絶対とは限らない」。

。それに、前にも言つたかも知れんが、私はお前を護りたい、お前に傷ついて欲しくない、お前に無謀な戦いをして欲しくない。

。

だが、それは無意味な願いだ　。たとえ己が自身が傷つこうとも、護るべきもののために刃を振るう　。お前はそういう男だ。そんなお前だからこそ、私は、お前に我が力のすべてを貸すと誓った。

天鎖斬月　。

今、お前の背には何がある？　仲間ではないのか？　友ではないのか？　それを護るために、黒崎一護という男は、何を畏れるこ

とがある？

俺は

恐怖を捨てろ、前を見ろ、進め、決して立ち止まるな。

っ！！

退けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ！

。

戦え！ 一護！！

ああ。

【3人称side】

一護

「見せてやるよ」

天鎖斬月を低く構え、それを持つ右手にそつと左手を添え、静かに言う

一護

「最後の月牙天衝」だ」

ドオオツ ！！

その瞬間、一護を包み込むように漆黒の霊圧が溢れ出し、その場に
いるすべての者の視界から一護の姿を隠す。

ニーズホッグ

「(っ！？) なんだ ！？)」

一護と相對していたニーズホッグは、急な状況の変化に、明らかな

動揺を見せる。

ナツ

「な、何が起こってんだ　！？」

超ツナ

「わからない」

一護の身に起こった事態がわからないナツとツナも同様に　。

そして、

ドオオオ

溢れ出していた漆黒の霊圧が完全に鎮まった時、

ニーズホッグ

「　　っ！！！！？」

ナツ・超ツナ

「！！！！！！？」

その霊圧に包まれていた一護が姿を現した。

“最後の月牙天衝”となった一護が。

【ツナside】

超ツナ

「なん だ ？」

無意識的に、そう呟いていた。

最初 何が起こったのか、まったくわからなかった。

突然、一護が黒い、霊圧 だったか？

それに包まれたかと思ったら、その中から、まったく知らない奴が出て来た。

いや、知らないわけじゃない。

あれは、一護だ。

けれど、オレの眼に映った一護は、一護であって一護ではなかった。

正確には、普段の一護の姿ではなかった。

特徴的なオレンジ頭ではなく、黒い長髪

物静かなブラウンではなく、燃えるような真紅の瞳

口元から上半身にかけて、青灰色の包帯(?)を巻きつけたかのような姿

それはさっきオレとナツの炎を纏った時のような、微妙な違いじゃなく、明確な違い。。

いや、「違っている」といつよりも、むしろ「違う」。

そう思わせるほど、今の一護の姿は普段のものと懸け離れていた。

ナツ

「あれ　一護、なのか　？」

オレの隣でナツが呟く。

ナツもオレと同じのようだ。

超ツナ

「ああ　多分、一護だ　」

ナツの質疑に対するオレの応答は、自分でもわかるくらい、曖昧なものだった。

眼前にいるのは、間違い無く、一護だ。

そう思っている。

わかっている。

それでいてなお、オレの応答が曖昧だった理由は2つ。

1つは、さっきも言ったとおり、一護の容姿

もう1つは、一護が放つ いや、放っている筈の霊圧

何も感じない。

正解している時や虚の仮面をつけていた時でさえ、身震いするほど感じていたモノが、今は一切感じられない。

いや、感じる.....ことができない。

オレはそんな一護に対して、僅かな恐怖を抱いた。

しかし、それ以上に

“これでよろやくこの戦いが終わる”

そんな期待感と安心感が、オレの中にはあった。

【3人称side】

ニーズホッグ

「なんだ その姿は 。 “最後の月牙天衝”とは どういう意味だ
」

ニーズホッグは動揺を隠し切れていない態度で訊く。

一護

「 “最後の月牙天衝” 。それは、俺自身が “月牙” になることだ」

一護は真紅の双眸で二丁ズホッグを見据え、自身が発現させた能力について説く。

一護

「本来なら この技を使えば、俺は死神の力のすべてを失う」

ナツ・超ツナ

「っ！！！！！？」

一護

「“最後” ってのは、そういう意味だ」

一護の説明を聞いたナツ、ツナの2人は驚愕した。

一護が死神の力を失っていたのは、2人も知っている。

しかし、それに至るまでの詳しい経緯は知らなかった。

その“詳しい経緯”が、今、目の前で明かされている。

それ故の驚愕だった。

そして、驚愕している人物はもう一人

ニーズホッグ

「力を 失う ?」

ニーズホッグもまた、同じだった。

しかし、

ニーズホッグ

「 “捨てる身の技” ということなのか? ならば何故

」

（

驚愕と共に、ニーズホッグは一つの疑念を抱いていた。

ニーズホッグ

「 (何故 奴から何も感じないんだ ?) 」

それはツナが抱いていた疑念と同じもの

そして、かつてその姿の一護と戦った敵が抱いたものと同じだった。

しかし、

ニーズホッグ

「（先刻まで異様な圧力を放っていたというのに　一体、何故？）
」

かつての敵と違い、ニーズホッグがその理由に辿り着くことはなかった。

ニーズホッグ

「フツ　この際、どうであろうと構わん　！　どうせ貴様らは、
これで終わりなのだからア！！」

ニーズホッグがそう叫ぶと、それに呼応するように、周囲に展開された無数の巨大な魔法陣が光だした。

ナツ

「っ！！　ヤベえ、一護が　！！」

その事態を受け、ナツが一護の身を案じて声を荒げる。

超ツナ

「大丈夫だ」

ナツ

「!!!」

そんなナツに対し、ツナは静かに、こう告げた。

超ツナ

「“滅びの光”が 空を覆うことは無い」

ナツ

「 どういう、意味だよ? 」

ナツはツナの言葉の意味がわからなかった。

超ツナ

「フツ　オレにもわからない。ただ」

ツナも内心では、何故そんな言葉を述べたのか、わかっていなかった。

しかし、

超ツナ

「オレの“超直感”が告げているんだ。　“大丈夫だ”ってな

」

ツナはそう言った。

そして、ツナは目の前にいる一護へと視線を向ける。

ナツもその言葉に納得したように、そしてツナに釣られるように、一護へと視線を向けた。

二ーズホッグ

「愚かなる生者に、死の鉄槌を」

2人の視線の先で、ニーズホッグが詠唱を終え、今にも魔法を発動させようとしていた。

一護

「
」

対する一護は、その光景を沈黙を以て受けている。

そして、

ニーズホッグ

「終わりだ!!! 黒崎一護オ!!!」

ゴオオオオツ

!!!

ニーズホッグの叫びと共に、無数の魔法陣が呻りを上げながら、今まで以上の光を放ち、

ニーズホッグ

「滅せ!!! ジ・エンド・レイ 破滅の光!!!」

ドオオオオオツ

!!!!!!

二丁ズホツグの叫びと共に、無数の魔法陣から強烈な閃光が一斉に放たれた。

放たれた閃光のすべてが、寸分の狂い無く一護に向かう。

対する一護は、未だ沈黙を通していた。

右手に刀状の黒い霊圧を手にして。

そして、決着の時

一護

「無月」

!!!!!!!!!!!!

音無き音

耳ではなく、全身の感覚を奔る音

そんな音が、世界に轟いた。

その瞬間

ただただ、その瞬間

空を覆うほどの強烈な閃光は、一瞬で掻き消された。

無影にして無音

光の存在を許さない、黝然にして絶対の漆黒

慈悲という言葉を知らない斬撃が、閃光を、そしてニーズホッグを、
容赦無く押し潰した。

オオオオオオオオオ

！！！！

程無くして、世界は鼓膜を揺らすような轟音に包まれた。

同時に、漆黒の斬撃が消滅し、数キロに亘って真っ二つに割れた大地と、

ニーズホッグ

「くっ

かはっ

」

全身にかけて裂傷を負ったニーズホッグが姿を現した。

そして直後、

ニーズホッグ

「くっ

そっ

」

その生命は、静かに終焉を迎えた。

一護

「これで

やっと

」

近くでそれを見届ける一護。

そして、さらにその直後、

一護

「っ！！！」

ドサッ

力を使い果たした一護は、膝から崩れ落ち、

一護

「ぐっっっ」

そのまま倒れこんでしまった。

力を使い果たしたことを体現するかのように、倒れた一護は死神の姿ではなく、普段の姿をしていた。

超ツナ

「っ！！！」 一護！！！」

ナツ

「一護!」

ツナとナツが、倒れた一護の許へと駆ける。

ツナはすぐさま一護の生死を確認するため、その身を仰向けにする。

ナツ

「お、おい　一護、大丈夫なのか?」

超ツナ

「　ああ、心配無い　。　気絶してるだけだ　」

ナツ

「そ、そうか　よかったあ　」

ツナの言葉に、ナツから安堵の息が漏れる。

ナツ

「でも、何でいきなり倒れたんだ?」

超ツナ

「多分、さっきの技の反動だと思う。一護はあの技で死神の力を失ったって言ってたし。」

ナツの質問に対し、ツナは自分の考えを述べる。

超ツナ

「エレア的能力でそのデメリットは消せたかも知れないけど、それでもあの技は強力過ぎたんだと思う。」

ナツ

「(ゴクッ)」

ツナの言葉に、ナツは息を呑んだ。

その真偽は、先刻の光景が雄弁に物語っていたからだ。

超ツナ

「ともかく、これで戦いは終わりだ。みんなの安否を確認しよう。」

ナツ

「ああ、そうだな。」

戦いの終わりに安堵し、ツナとナツはいつの間にか周囲に倒れていた仲間たちの許へと向かった。

ツナは仲間たちの許へと駆け寄る前に、仰向けで寝かせた一護を――
警し、

超ツナ

「（ありがとう、一護）」

心の中で、感謝の意を述べた。

漸く、最初の戦いが、幕を閉じた。

とある空間

以前、^{ディストウール}十滅将の5人が会合を行っていた仄暗い空間。

そこに“闇”を司る^{ディストウール}十滅将、ユークスが静かに佇んでいた。

ニーズホッグが絶命したのを受け、なのは達を解放して戻ってきたのだ。

そして、もう1人

????

「敗北」　　だな　　」

“光”を司る^{ディストウール}十滅将、エイオスがユークスに声を掛けた。

ユークス

「ああ、“無月”の情報は得ていたが　　まさか、アレ程とは　　」

ユークスは途中で言葉を詰まらせ、舌を巻いてしまった。

エイオス

「珍しいな　お前がそこまで戦くとは」

ユークス

「まったくだ　。俺が敵に畏れを抱くなんて、いつ以来だろうな

」

ユークスはふと自分の右手に視線を落とす。

その瞳に、小刻みに震える自身の右手が映る。

ユークス

「だが」

ユークスは震える右手をグッと握り、

ユークス

「それでこそ、潰し甲斐があるってもんだ　　！！　ハハハハハハハッ！！！」

仄暗い空間には、ユークスの笑い声だけが、絶えず訝していた。

【フェイトside】

フェイト

「（　　）ここは、どこだろう?」（　　）」

私はどこか、見知らぬ地に立っていた。

知らない場所だけど、地形はわかる。

どこかの荒野だ。

いや、私が荒野にいるんじゃない。

そついう夢を見てるんだ。

前にもこういうのがあった。

確か　アルテマと戦ってた時だ。

前にも覚えがあったから、そう思えた。

私がそんなことを考えていた時、

フェイト

「　っ！！」

すこし離れた場所に、何か、巨大な力を感じた。

私は、その場所へと行ってみた。

そこには巨大なクレーターがあり、その中空で、“黒い人”と、“白い人外”が対峙していた。

そして、“白い人外”が“黒い人”に向かって、何かを叫んでいる。

しかし、

???

「馬な！！そんなががか！！間きが、この
を超えど！！そ事が」

まだ少し距離があるためか、よく聞き取れない。

もう少し近付こうとしても、何故か、無意識のうちに動きが止まっ
てしまって、近付くことができない。

ただ、

???

「無月」

“黒い人”の言葉だけは、ここからでもハッキリと聞き取ることが
できた。

！！！！！！

直後、どす黒い何かが、“白い人外”を押し潰した。

フェイト

「っ!」

その瞬間、私の意識が朦朧としてきた。

これは、現実の世界での覚醒が近付いているということだ。

結局、この場所がどこなのか、あの“白い人外”が何だったのかわからない。

ただ、“黒い人”については違った。

あれは

フェイト

「一護?」

理由も確証も無い答え。

そんなことを考えながら、私は夢の世界を旅立った

【3人称side】

フェイト

「っ!!」

戦いの終結から数時間後、六課の医務室のベッドの上で、フェイト・T・ハラオウンは眼を覚ました。

フェイト

「ここは」

「???」

「あ、フェイト、気がついた？」

フェイト

「ツナ？」

フェイトが目覚めたのに気づき、そのベッドにツナが近付く。

フェイトの意識は最初こそ朦朧としていたが、段々に鮮明になってくると、自分が置かれていた状況を思い出してきた。

フェイト

「っ！！ ツナ！！ 敵は！？ みんなは！？」

ツナ

「落ち着いて」

フェイトは興奮気味にツナに詰め寄るが、ツナがそれを上手く宥める。

ツナ

「大丈夫、みんな無事だよ」

ツナに言われ、フェイトが改めて医務室の中を見渡すと、仲間たちの姿が確かにあった。

フェイトはその事実にあ堵した。

その際のフェイトの声でその存在に気付いたのか、医務室の一隅から「フェイト気がついたのか!？」というナツの声が聞こえてくる。

そして、落ち着きを取り戻したフェイトは、改めてツナに問う。

フェイト

「ねえ、ツナ。あの後、何があったの?」

ツナ

「フェイトたちがやられた後、一護がニーズホッグを倒したんだ。その後、解放されたみんなと一緒に、ユークスの転移魔法で戻って来たんだ。どうも、ニーズホッグが倒されたら発動するように、あらかじめ仕掛けられてたみたい。」

フェイト

「一護が　　っ!」

ツナの説明を受けたフェイトが呟く。

そして同時に、あることに気付いた。

フェイト

「ねえ！！　一護は！？　一護は大丈夫なの！？」

ツナ

「落ち着いてって　」

再びフェイトは興奮気味にツナに詰め寄り、また再びツナがそれを上手く宥める。

2回も宥められたフェイトは「うう、ゴメン　」と呟きながら、小さく縮こまってしまふ。

そして、フェイトが落ち着きを取り戻したのを確認して、ツナは口を開いた。

ツナ

「一護は大丈夫だよ　。ただ、ニーズホッグを倒す時に、ちょっと力を使い過ぎたみたいだね　」

ツナは言葉を紡ぎながら、カーテンの閉められたベッドへと歩き出す。

そして、閉められているカーテンを開くと、そこにはベッドに横たわる一護の姿があった。

ツナ

「まだ、眼を覚ましてないんだ」

ツナはベッドに横たわる一護を視線を落とす。

フェイト

「一護」

フェイトが不安そうに呟く。

その時のフェイトは、一護を心配すると同時に、ツナの言う“力を使い過ぎた”というフレーズが気になった。

フェイト

「（もしかして）」

そのフレーズから何故か、夢に出てきた“黒い人”が、脳裏を過ぎった。

それから程無くして、眠っていたほとんどの者が眼を覚ました。

が、ただ1人、一護だけが、眼を覚ますことはなかった。

戦いの終結から、早2週間が過ぎ去った。

一護は、未だ目覚めない。

六課の医務室では、フェイトが付きっ切りで一護の看病をしていた。

2週間もの間、ずっと。

この2週間で六課の機能も大分回復したが、一護が目覚めていないことは、フェイトにとって一大事だった。

それ故に、仕事をなのはやはやてに任せて 2人もフェイトの気持ちを汲んで、快く引き受けた フェイトは朝も昼も夜も、ずっと一護の傍にいた。

さらに、この日はフェイトだけでなく、シグナム、ギンガ、チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディの6人と、エリオ、キャロ、ルーテシアの子供組3人もいた。

夜通し一護を看ていたためか、全員が医務室の中で仮眠を取っていた。

そして、2週間経ったこの日

フェイト

「スウ スウ スウ」

一護の傍らで寝息を立てるフェイト。

その時、

フェイト

「うん」

不意に、何かが頭に触れる感覚があった。

フェイトがふと顔を上げると、そこには

一護

「心配掛けたな、フェイト」

自分の頭をそつと撫でる、一護の姿があった。

フェイト

「一護？」

一護

「ああ」

フェイト

「一護　一護お！！……！」

一護

「おわっ！！？」

フェイトは瞬間的に、一護に抱きついた。

一護

「フェ、フェイト!?!」

フェイト

「一護お!?! 一護お!?!」

一護

「フェ、フェイト、落ち着け!?!」

一護は、泣きながら抱きついてくるフェイトを宥めようとするが、そんなことはどこ吹く風といった感じで、フェイトはさらに一護に抱きつく。

フェイト

「良かった ホントに、良かった」

一護

「あ ああ、心配掛けて悪かったな」

そんなフェイトを見て一護も諦めたのか、宥めるのを止め、そっと

フェイトの頭を撫でる。

そして、

シグナム

「一護！ 気がついたか！！」

ギンガ

「一護さん！ 良かった！！」

チンク

「一護！！」

ノーヴェ

「グスツ 心配掛けやがって！！」

ディエチ

「良かった ホントに」

ウエンディ

「ホントに心配したっスよ！！」

エリオ

「一護さん！ 眼が覚めたんですね！！」

キヤロ

「良かった！ ね！ ルーちゃん！！」

ルーテシア

「うん 。 ホントに、良かった ！！」

仮眠を取っていた6人も、その騒動で眼を覚まし、一護のベッドの周りに集まる。

一護の目覚めは、六課を沸かせた。

みんなが、涙ながらに歓喜した。

そして、最も涙を流したのは

ヴィヴィオ

「 パパ 」

一護

「ああ」

他でもない、ヴィヴィオだった。

ヴィヴィオ

「グスツ　　パパああああ！！！」

ヴィヴィオは涙ながらに、一護の胸の中へと飛び込んだ。

一護

「心配掛けて、ゴメンな　　ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ

「パパああ！！　　パパああ！！！」

数十分間、ヴィヴィオは一護の胸の中で泣き続け、一護はそんなヴィヴィオを優しく抱きしめ続けた。

数十分後、泣き疲れたのか、ヴィヴィオは深い眠りに落ちてしまった。

寝てしまったヴィヴィオをフェイトの部屋のベッドに寝かせる一護。

そんな一護に、フェイトが声を掛けた。

フェイト

「ねえ、一護」

一護

「ん？ 何だ？」

フェイト

「ちょっと 訊きたいことがあって」

フェイトが一護に訊きたかったこと

それは、あの夢の内容

フェイトは、夢で見た光景を、一護に余すところなく伝えた。

それを聞いた一護の顔が、少し強張った。

そして、

一護

「フェイト

」

フェイト

「ん？」

一護

「そのことなんだけどな

少し、待っててくんねーか？」

フェイト

「え？」

一護

「頼む

」

フェイト

「うん、わかった

。一護がそう言うなら、待ってるよ」

一護

「悪いな、フェイト」

フェイト

「ううん。じゃあ私行くね。ずっと仕事してなかったから」

一護の願いを聞き入れたフェイトは、無邪気な笑みを浮かべながら、仕事へと向かった。

そして一護も、

一護

「そうだな」

そう小さく呟いて、その場から去って行った。

一護

「ナツ！ ツナ！」

ナツ

「ん？ 一護？」

フェイトと別れた一護は、同じ漂流者2人の許へとやってきた。

ツナ

「どうかしたの？ 真剣な顔して」

ツナは一護の表情を見て、何かを感じ取った。

一護

「実は」

一護は、先刻フェイトから訊ねられたことを2人に話した。

そしてそれが、自身の過去の戦いの1つであることを。

何故フェイトがそんなものを見たのか、理由は不明だったが、一護はそれを聞いて、ある考えに至った。

一護

「それでさ アイツらに、俺たちのことを話さないか？」

ナツ・ツナ

「「!!」「」

一護

「エレアに頼んでみたら、映像も出せるって言うし どうだ？」

一護は2人に問い掛ける。

対する2人の答えは、

ツナ

「そうだね 。別に隠す必要も無いし」

ナツ

「ああ！ 見られて困るモンはねえよ！」

Yesだった。

一護

「そうか。それじゃあ明日、話そう。俺たちのことを」

そして次の日

六課のロビーに、この世界で一護たちが出逢った仲間たちのほとんどが集められた。

六課のメンバーは勿論、スカリエッティたちや、その他のメンバー

この場にこれなかった者たちの許にも、空間モニターが繋がれている。

そして、一同の前に、一護、ナツ、ツナ、エレアの4人が立つ。

はやて

「言われたとおりみんな集めて、聖王協会とか本局にもモニター繋がったけど。一体何なんや？」

はやては一堂に会した理由を訊ねた。

そして、

一護

「今から、俺たちが経験してきた戦いのことを話す」

一護たちの口から、“歴戦の軌跡”が語られる

t o b e c o n t i n u e d

第61話『終局の黒い月』（後書き）

今回で【七戦鬼篇】は終了。

そして次回から“過去篇”に入ります。

ただアンケートの時も説明したように、かなり端折ったり、執筆が長引いたりしそうですが

できるだけ頑張ります！！

が

た、多少は許してね？

最初はナツの話からになります。

もう1度

頑張ります！

感想・指摘・意見・質問等、お待ちしております！

ではまた

次回、『歴戦の軌跡（ナツ篇）』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5215r/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 破滅大戦 ~

2011年12月11日03時48分発行